
キョン子ちゃん

571レノにいさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キヨン子ちゃん

【コード】

N6456P

【作者名】

571レノいさん

【あらすじ】

キヨンの身近にある日突然登場した少女「キヨン子ちゃん」にまつわるお話。

紛らわしくて申し訳なく思うのですが、本作の「キヨン子ちゃん」はいわゆる「キヨン子」ではありません。キヨンは別人です。この点どつぞつ了承をお願いいたしたく思っています。

(本作はmixiに投稿したものの転載です。)

キョン子ちゃん1「登場」

妙に早く目が覚めてしまったある朝、顔でも洗うかと部屋を出ると、パジャマ姿の見慣れない娘と出くわした。

寝ぐせ頭の寝ぼけ娘は、俺を見るなりここのたまった。

「あ・・・キョンくん、おはよお・・・。」

この娘は登場するなり俺をその名で呼ぶというのか。

というか・・・誰だ？

俺は返答もそこそこに部屋に戻り、震える手で携帯を取り上げ・・・ええい、落ち着け！俺！・・・住所録画面を祈るような気持ちで開く・・・あった。ある。確かにある。お馴染みの名前がちゃんと載っている。朝比奈さん・・・古泉・・・ハルヒ・・・長門。朝早い、長門に電話してみる。あいつならこの時間でも大丈夫なはずだ。

3コールが鳴り終わる前に受話器が取られ、聞き慣れた静かな声が前置きなしで言った。

「あなたの懸念している事態を認識している。心配はいらない。危険性は認められない。」

それだけ言うと電話は切れた。ありがとうよ長門。

さて、状況を整理してみよう。またぞろ何かの非常識事態が勃発したことは間違いない。しかしSOS団メンバーはちゃんと揃って

いるようだし、何よりもいちばんの頼みである長門が健在だ。その長門は危険がないことを保証してくれた。あいつが保証してくれるなら、墜落しかけている飛行機に乗っていても安心できる。

なおも携帯を見ていると妙なことに気がついた。見慣れない名前がある。名字は俺と同じだが、確かに、こんな名前の人間は今まで周囲にはいなかったと断言できる。してみると、これはあの娘の名前なのだろう。試しに電話をかけ、2度ほどコールして切っておいた。

しばらくすると妹がやってきて、俺が起きているのを見て目を丸くした。

「キョんくんもう起きてたの!?めずらしー。キョん子ちゃんはもう起きてるよ!朝ご飯!」

妹はばたばたと走り去った。

・・・キョん子ちゃん?

朝食に降りていくと、件の娘が北高のセーラー服を着て髪をポニテールに結び、普通にテーブルについてトーストをかじっていた。そして俺を見るなり、

「さっきの電話。何かあったの?」

「悪い。間違えた。」

「ふうん。」

これで名前は確認できた。どうやら家族の一員らしいその娘は、感心したくなるような勢いでトーストを片付けていく。バターとマーマレードをたっぷり塗り付けた食パンの4枚目を紅茶で流し込んでしまうと、まだだいぶ早い時間だというのに、

「行ってきまーす！」

キヨン子ちゃん2

謎の新登場娘がそうぞうしく出て行ったあと、俺は30分ぐらいかけて朝食等朝の一連の準備作業を済ませ、学校に向かった。それでも普段より相当早めに学校に到着してしまったのは、いかに例の娘が早めに学校に行っているかということの実証にすぎない。

教室に入っていくと、当の娘がハルヒと話し込んでいた。ハルヒの後ろに席が一つ増えており、そこがその娘の席であるようだった。

ハルヒが俺を見てニヤニヤしながら、

「あーら、キヨン、重役出勤ね。」

まだチャイムより10分も前だぞ。

「団長と上席団員が2人揃ってるところにヒラ団員が遅れてやってきてるんだから立派に重役出勤と見做して差し支えないわ。たるんでるわよ、キヨン！今に始まったことじゃないけど。」

どつやらの娘もSOS団員であるらしい。しかも、上席団員だと？

「ハルちゃんの言うとおりだよキヨンくん！あたしと一緒に出ればいいのに、いつも寝ぼすけなんだから！」

ああ・・・、すまん。

「あら、今日はずいぶん素直じゃないキヨン。いつもはもっと不満げなのに。やっぱりねえ。可愛い妹だもんね。」

なるほど、人間関係的にはそうなるのか。双子の妹。
で、なんだと？ ハルちゃん？

それきり二人は俺を置き去りに、話の続きで盛り上がっていた。聞くともなく聞いていると、なにやらマニアックな不思議話系の会話であり、それよりも、ハルヒの繰り出すコアな話に全部普通についていつている「キヨン子」が驚きだった。・・・何者なんだこの娘は。

昼休み。ハルヒと「キヨン子」が一緒に教室を後にして行くのを見送り、俺は弁当箱を持って部室に向かった。SOS団の知恵袋にお伺いをたてねばならん。

部室の扉を開くと、長門は定位置におさまっておなじみの姿でいた。扉を閉めると、だしぬけに話を始めるのもいつものことだ。

「昨夜、涼宮ハルヒによって小規模な時空改変が実行され、あなたには双子の妹ができた。」

またハルヒか。

「そう。」

なんでまた。

「その点については、僕が説明できると思えますよ。」

唐突にニヤケ男が会話に割って入った。

いつの間に現れたんだ。お前が昼休みにここに現れるなんて珍しいじゃないか。

「思うに、涼宮さんは、話の合う友達が欲しかったのではないでしょうか。」

だからと言って無断で人の家族構成を変貌させていい理由になるとは思わんが。

「彼女は、正確には、双子の妹というよりも、あなた自身に酷似している。」

長門よ、それはどういう意味だ？ 俺が性転換したらあの娘になるというのか？

「それは、ほぼ正確な表現。」

あんまり俺に似ているように見えないが。

「遺伝情報的ではなく、精神構造、生活史、知識等の点できわめて類似している。」

わからん。あの娘の存在理由が何なのか。友達ならそこらから現れてもよさそうなものだが。

「涼宮さんは『競合』を避けようとしたのだと思いますよ。」

なんのどんな競合だ。

古泉は非難の混じったような、それでいて面白がってもいるような視線を俺に向けた。

「ほんとうにおわかりにならないんですか？」

もういい。お前は黙ってる。

「彼女は涼宮ハルヒの精神的葛藤を代表している。」

長門よ、それは……。

その瞬間にチャイムが鳴り、長門は、

「普通に振舞えばいい。」

と言い残して去った。古泉はすでに姿を消していた。どうでもいいが、弁当を食い損ねた。

キヨン子ちゃん3

今まで存在しなかった双子の妹相手にどう普通に振る舞えというのかなどというツツコミも虚しく、放課後がやってきた。SOS団の課業開始である。いつも通りハルヒに引きずられ、いつも通りでない「キヨン子」も一緒に部室に到着すると、他の3人はすでに揃っていた。朝比奈さんはメイド姿で、心なしかいつもより困惑ぎみな模様。古泉は将棋盤を前にもの思いに耽るふうである。長門はいえ、昼間出ていくのを見ていなければずっとそこにいたのではないかと思うような定位置ぶりであった。

変わったことは特に何も起こらなかった。・・・普段より明らかに人が一人多いことを除いては。それはけっこう大したことのような気がするのだが、SOS団員にとっては日常の範囲内ということのようだ。

「キヨン子」はハルヒと大層仲がいいらしく、終始ハルヒのそばにくっついており、下校時間になると二人一緒に帰っていった。

「キヨン子ちゃんと話があるから、今日は二人で帰るわ。ついて来ちゃだめよ！特にキヨン！！」

言い残してハルヒは「キヨン子」と去る。こっちにしてもそのほうが都合がいい。

4人で下校しながら、

「長門よ、昼間のはどういう意味だったんだ？」

「涼宮ハルヒは自身の心中の葛藤を処理しきれず、いわば『調停

役』として彼女を創造した。したがって、彼女が涼宮ハルヒの望む世界にとって障害となることはありえない。むしろその逆であって、彼女は涼宮ハルヒの願望充足を円滑化する任務を与えられている。彼女の行動パターンは奇妙な、また興味深いことに、」

長門は言葉を続ける。

「われわれの派遣する予定であったインターフェイス、具体的には『プロト朝倉涼子』の予定行動計画にきわめて類似している。ちなみに、容姿の面でも、また付与される予定であった任務の面でも、われわれの計画にごく近い。本来、朝倉は主流派が派遣する予定だった。直前になって急進派が権利を主張したのであるようになってしまったのであるが。しかし、あれほどまでに涼宮ハルヒの信頼をかちえたのはやはり、あなたの妹だからという理由が大きいものと判断される。われわれではああはいかなかっただろう。」

「朝倉にはぜんぜん似ていないようだが。」

「あの朝倉は名前以外のプロト案をすべて破棄してあらたに構築されたものだから。」

長門は言葉を切り、しばらく無言で歩き続けた。俺も無言となり、ひとり考えをめぐらす。ハルヒ、お前の望みはなんなんだ？

その瞬間曲がり角にさしかかり、長門はいつも通り挨拶ぬきで去っていった。

キョン子ちゃん4「ある事実」

翌日、俺は再び昼休みの部室の又シに相對した。

「余談ではあるが、」

長門がいつも通りふいに話しはじめた。

「彼女を創造するにあたり、涼宮ハルヒはあなたの遺伝情報を下敷きに構成したのであるが、彼女自身の遺伝情報も相当量混入させた。およそ半分にわたって。」

ほお。

半分がハルヒで半分は俺。

それってつまり……。

ま、待て。なんだと？

なにか今、途方もなく聞き捨てならないことを聞いてしまった気がするぞ！

「な、長門よ。」

「なに。」

「つまり、なんだ。あの、キョン子って娘は、つまり……。」

ええい、いざ口になるとややはり抵抗が勝る。

「その、なんだ、俺と、その、ハルヒの、じ、じ、じ、」

ニワトリか俺は。

我ながら取り乱して不甲斐ない。

「子供、ってことなのか、つまり？」

「その表現はほぼ完全に正確と見做して差し支えないと思われる。」

「

なんてこった……。ハルヒ、お前って奴は何て気が早いんだ。

ん？ 待てよ、気が早い？ いやいや、それじゃあまるで俺とハルヒが将来、違う違う。これは言葉のあや、表現技法としての、その、つまり、ああもう、俺は誰に言い訳してるんだ。落ち着け、落ち着け俺！

「ハルヒにあんまり似ていないようだが。」

「子供が片親にしか似ていないように見えるのはよくあること。」

長門よ、もう少し何なりとフォローしてくれよ。それじゃあトドメじゃないか。

「それにしても、ハルヒはなぜそんなことをしたんだろうなあ。

ははははは。」

うわあ、なんて不自然さだ俺。取り乱すにも程があるだろうによ。

「涼宮ハルヒの真意はの場合完全には量りかねる。可能性としては、ある程度自分に似ているほうがよいという考えがあったのではないかと思量されるが、なお不確定。」

チャイムが鳴り響き、長門は立ち去った。

また弁当を食い損ねた。

キヨン子ちゃん5

放課後。

部室に行つてみると、ハルヒとキヨン子はまだ来ていなかった。古泉が唐突に口を切る。

「まったく、あなたという人も隅に置けませんね。」

なんのこつたい。

「おや、とぼけるんですか？ 聞いてますよ。キヨン子さんがあなたと涼宮さんの……。」

「ほ、ほんとですかキヨンくん?! えっと、それは、あの、高校生で、高校生なのに、そんな、やだ、その、あの、ええと、」

朝比奈さんはあつという間に耳まで真っ赤になって、おどおどもじもじしている。いかん。なにか致命的な誤解が生じた可能性がある。真っ赤になってかすかに身じろぎしている朝比奈さんはそれはもう芸術作品的な完全無欠の愛らしさを遺憾なく発揮しており、すっかり永遠の忠誠を誓ってしまいそうになるのだが、今はそれどころではない。

「違うんですよ朝比奈さん、実はですね……。」

俺はかいつまんで事情を説明した。それにしても古泉、隅に置けないとはどういう意味だ。俺は何もしちゃいないぞ。

「うらやましいですねえ、実に。是非ともあやかりたいものです。」

「人の話を聞け。」

「あの涼宮さんがそこまであなたのことをねえ。嫉妬心を覚えますよ。正直なところ。」

だから聞けよ人の話を。あと、お前のいつもの安価なスマイルで言われても説得力全然なしだ。

「おわかりになりませんか？」

何をだ。

古泉は軽く非難を含んだような、面白がっているような、悪戯を企んでいるような、微妙なスマイルを浮かべて黙ってしまった。まあ思わせぶりはこいつの十八番なので、もう気にしないことにしておく。

「お待ちせ！」

部室のドアを勢いよく開き、すべての問題の光源が威勢良く登場だ。後に問題の焦点を引き連れて。

ハルヒとキョン子が仲良くネットサーフィンに興じているのを横目に、俺は古泉と将棋をさしていたが、古泉は珍しくゲームに身が入らない様子で、初歩的な指し間違いを繰り返したあげく、自爆同然に敗北していった。朝比奈さんはいえ、俺と目が合いそうになると顔を赤らめてさっさと目を逸らしてしまう。

・・・だから違うんですってば！

しかしハルヒ、器用な奴だとは思ってたが、同じ年の子どもとはな。器用すぎってもんだろ。まだ、・・・いやだから違うんだって。まだってというのは俺とハルヒがいつかは、なんてことじゃ全然なくて、そのつまり、ええと、だから誰に言い訳してるんだ俺は！

キヨン子ちゃん6

さて、その下校時。

今日もハルヒはキヨン子とふたりで帰っていったので、また4人での帰り道である。

俺は長門に補足説明を求めた。宇宙的文学少女は語る。

「我々は観測専任インターフェースの派遣計画にあたり、まず『涼宮ハルヒの需要』を解析することから開始した。その結果、現在『キヨン子』として存在ならびに認識されている人物とほぼ同一の容姿および行動体系をもつインターフェースの計画案が完成。その諸元は次の通り。『設定年齢16歳、性別女性、直立位における全身長1435ミリメートル、全自重・・・』、」

そこらの細かいデータは今も特にも仕方がないな。行動体系ってのは？

「涼宮ハルヒと周囲の人間との連絡役を務めること。我々の解析結果によれば、涼宮ハルヒは好んで孤立しているわけではなく、周囲との妥協を嫌うがゆえに結果としてそうなっているにすぎない。」

「涼宮さんはたいへんプライドの高いかたですからね。」

なんだ聞いてたのが無料スマイル男。いきなり割り込むなよ。あと、近すぎる。

「そういえば、涼宮さんて、中学の3年間ずっとひとりぼっちだ

「ったんですよね……。」

朝比奈さんがぼつりと呟く。

「そう、我々もあの頃はほとんど欠かさず毎晩出勤でした。現在とはまさしく、隔世の感があるといったところですよ。ところで、なぜ今、あなた方の、すなわち情報統合思念体主流派の、計画倒れに終わったインターフェースが、ここに登場することになったのでしょうか？ それも他ならぬ涼宮さんの手によって？」

俺もそれは気になる。

「解釈の余地はいくつかある。われわれの計画案が涼宮ハルヒの需要に正確に合致していた可能性。涼宮ハルヒが無意識のうちに我々の計画案を察知し、自己の要求のためにいわば『採用』した可能性。その他、前二者よりはかなり確率の低いいくつかの可能性。しかし、いまだデータ不足。未確定。」

長門はそう言ういつもの曲がり角を折れて、いつも通り挨拶なしで立ち去った。

「それじゃあ、また明日……。」

言い残して、朝比奈さんも、小さく手を振りながら、その麗しい姿を消した。……俺を見る目がまだ多少およいでいるのが気になるが。

俺的には全然麗しくないハンサム野郎はしばらく何か言いたげについてきていたようだったが、気がつくとも姿が見えなくなっていた。

キヨン子ちゃん7

翌日。

朝飯を食いに降りて行くと、キヨン子はすでに食い終わるところだった。

「キヨンくん遅い！」

開口一番それかよ。むしろお前が早すぎるんだと思うぞ。俺は。

言いながら俺は、妹でもあり、どうやら「娘」・・・しかも俺とハルヒの・・・でもあるらしい『キヨン子』を見やる。身びいきを承知で言わせてもらえば、顔の造作については「可愛い」と判定していいだろう。妹・・・もともという方の・・・にちよつと似てるかな。よく見てみると、耳の形や顔の輪郭、鼻筋、目元なんかにどことなくハルヒ的な雰囲気を感じないではないな。そうと指摘されてなければ判らない程度だけれども。

目玉焼きをのせたトーストの最後の一かけを口に放り込んでいるキヨン子の姿を見ながらそんなことを考えているとふと目が合った。その瞬間、俺はキヨン子の、どうしようもなくハルヒに似ている部分を発見した。

目の色がそっくりだ。いろんな意味でな。漆黒の瞳の色合い、星空のような輝き、射通すような真っ直ぐな視線の、まごうかたなきどこまでもハルヒ色のふたつの目。間違いなく、こいつはハルヒの血筋だ。

体つきは華奢で、体格はどちらかというスレンダー。そんな見

かけの上での差異を、この決定的な類似は補って余りある。

「行つてきまーす！」

キョン子が元気よく言い、俺は朝食のテーブルにつこうとする。しかし、キョン子はこちらをじっと見ていて、なかなか行こうとしない。どうしたキョン子？ 行くんじゃないのか？

「キョンくん、早く！」

何が？

「キョンくんも一緒に行くの！」

無茶言つな。朝食はどうするんだ？

キョン子はしょうがないなあ、などと言いつつ、マーガリンとマーマレードをたっぷり塗り付けたトーストを2枚俺に押し付け、有無を言わず俺を家から引きずり出した。なるほど、ハルヒそのままだ。

などと感心している場合ではなかった。この後、事態は思わぬ展開を見せることになる。

双子の妹と連れ立って歩く学校への道々。のどかな光景にも見えるだろう。そう、途中までは実際その通りだった。キョン子は上機嫌で、終始ニコニコ笑いながら、他愛のない話に興じていた。俺は俺で、そついやこいつは「事情」に通じているんだらうか？ ハルヒ本人に対するように、そのあたりは知られないほうがいいのかな？ などと考えていると、突如、このような問いが耳を打った。

「みくるちゃんて、未来から来たにしてはびっくり過ぎるよね」
「？」

キヨ子ちゃん8

なんだって？・・・ああ、まあ、そうかな。

「みくるちゃんて、いつもなにかあったらひとりでわたわたしを
なんだか可哀想。」

そう、だな。・・・知ってるのか。やっぱり知ってるのか？ま
さかハルヒに話したりは・・・。

「安心して。ハルちゃんには黙ってるから。」

・・・！？俺はまだ何も言っていないぞ！何も言わないうちか
ら先回りされた！

「古泉くんてさ、格好いいけど、なにか人に心を許していないよね。
やっぱり超能力者だからかな？」

そうだな、俺は・・・

「そうだよね。なんかそんな属性の問題じゃなく、個性って感じ
だよな。」

・・・またか！また先回りか！テレパスか？テレパスなの
か？いよいよあの、一般的に称せられるところの、エスパーのご
登場なのか？

「あたしはエスパーじゃないよ。テレパスでもない。」

だから、その先回りが！

「何かね、わかっちゃうっていうか、キヨソクさんの考えてることがね、前からね、わかるような気がしてたの。だからね、その自分の頭のなかのキヨソクさんの答え方のイメージっていうかな、それにあわせてみたんだけど、どうやらだいたいその通りだったみたいね。」

事実上のテレパスじゃないか、すでにそれは！

「そうかもね。」

また！・・・待て、キヨソクさん！

「なに？」

もしかして、俺以外の人間のこともそんな風にわかるのか？

「たぶん、それなりにつきあいがあれば、ね。」

あんまりそのスキルは使うな。気味悪がられるぞ。まどろっこしいかも知れないが、普通に話したほうがいい。

「そう？。」

ああ、そうとも！

「じゃあ、そうする。」

まったくなんてやつだ。ハルヒの察しの良さが特化したみたいだ。

までよ、いま考えていることも読まれてるのか？　・・・い、今、俺が何を考えていたかわかったか？

「あはは、どしたのキヨンくん必死になって。さっきもいったけど、あたしはテレパスじゃないよ。100パーセントわかるなんてわけじゃないよ。今のはわからなかったな。そうね、分かるのは、だいたい半分くらいかな。キヨンくんはね。」

半分人の心が読めたら充分すぎるくらい充分だと思うが。しかし、そうか、人の思考の類推能力に優れる、ということになるのかな。

「そうね、いちばん読みにくいのは有希ちゃんかな。イメージとしては、そうね、とても深い心をしてる。深く澄んでる。澄んでるけど深すぎてよく見えない。」

それは俺も正解な気がする。

「でも有希ちゃんて変わってる。あんなに深い心をしてるのに、キヨンくん知ってる？　すごくナイーブなんだよ。」

長門が繊細だという観察は是認するほかない。

「有希ちゃんもある意味可哀想。あんなに心が深かったら、たいていのはわかっちゃうはず。わかりたくないことまで。」

「たとえば？」

キヨン子はなぜだか俺に、一瞬非難するような目を向けた。なんだなんだ。

「誰かを、好きに、なったとき、あらかじめ、失恋、することが、

はっきり、わかってる、という感じ、かな。」

キヨシ子は、言葉を、いちいち、区切りながら、妙に、ゆっくり
と言い、それきり、学校に、着くまで、黙ってしまった。

・・・何か悪いこと言ったかな。

キヨン子ちゃん9

学校に到着して上履きに履き替えていると、キヨン子が近寄ってきた。至近距離からハルヒ色の眼差しが俺を射抜く。どうしたキヨン子？

するとキヨン子は突然俺の胸の真ん中あたりを拳骨で軽く小突き、人差し指を真っ直ぐ俺の鼻先に突きつけた。そして一言。

「キヨンくんは鈍感すぎる！」

そうか？ 確かに言うほど鋭敏な感覚をしてるわけじゃないが。

「そういうことを言ってるんじゃないの！ いい、キヨンくん。これだけは言っとしてあげる。キヨンくんさえその気になれば、『落ちる』女の子が3人は確実にいる。」

なんなんだこの爆弾発言は。しかし誰なんだろう。朝比奈さんはその中に入ってるのかな？

「残念でした。みくるちゃんが入ってません！」

また『読まれて』いるが、そこを指摘する余裕はなかった。

「誰だか知りたいだろうけど、教えてあげない！ 理由は3つ！
1！ それはあたしが教えてあげなきゃいけないことじゃないから！
2！ それはキヨンくんが自分で知るべきことだから！
3！ 教える意味がないから！ 以上！」

ちよつと待てキヨソ子。1と2はわからないでもないが、3はいくらなんでも言い過ぎじゃないのか。

「ぜんぜん！ だってキヨソくん、教えてあげても何もしないもの。3人とも、キヨソくんにとっては恋愛対象じゃなかった。恋愛対象として意識したことが、キヨソくんはほとんどなかった。でもあたしにはわかる。3人とも、キヨソくんのこと大好きなのがわかる。キヨソくんと話しているだけで、気分が浮き立っているのがわかる。いっしょにいるだけで、リラックスしているのがわかる。でもキヨソくんはそれに気がついてない。見ているあたしのほうがいらいらしてくるくらい。・・・でも、うつん・・・難しいなあ。」

何が。・・・キヨソ子は急にトーンダウンした。

「キヨソくんが普通の恋愛感覚の持ち主だったら、その子たちはきつとキヨソくんのことを好きになってないと思う。プライドの高い子たちだから・・・。普通の男の子たちみたいに、恋愛を期待して近づいてくる相手には、その子たちはうんざりさせられるだけだった。一応付き合ってみるか、最初から断るかの違いはあったけど。キヨソくんは唯一、恋愛を期待しないで彼女たちのそばにいた希有な人。キヨソくん、キヨソくんは基本的に気が優しいたちだし、せっかちでもないし、押し付けがましいところもない。見てくれもけっこういいわ。あたしが保証する。だから、彼女たちがキヨソくんに惹きつけられたのは、ある意味当然の成り行きと言ってもいいわでもね、キヨソくんは無欲すぎる。淡泊すぎるの。こうなると恋愛に対する期待のなさはかえって仇ね。淡泊さのせいでじらされて余計に燃え上がっちゃう。・・・あたしの見立てだと、3人ともすっかりキヨソくんの虜よ。ほんの少しそれらしいそぶりを見せるだけで充分。面白いくらい簡単に手の内に転がり込んでくるわ。みんな基本的には寂しがりやなの。だから余計教えられない。忘れないで。」

とてもプライドの高い子たちなのよ。誰か一人に決めなくちゃいけない。残りの二人はきつぱり振ってあげて。いつそそのほうがせいせいして、諦めもつくというものよ。・・・念のため言っとくけどね、キヨソくん、掛け持ちなんてとんでもないわよ。どんなに酷く傷つくか。考えてあげて。」

・・・そうは言われても俄かには信じられんが。俺はそんなにモテないぞ。それが掛け持ちだなんて。考えも及びつかん。

「モテないのはキヨソくんが気づいてないだけよ。」

・・・そうか？・・・そうなのか？

「みくるちゃんだってキヨソくんには好意的でしょ。同時代の人間だったら、まず間違いなく4人めの子になってるわ。」

そいつは残念至極だな。

「混ぜ返さないで！」

すまん。しかしいきなりすぎてどうも実感が無い。普通の男の子ってのはあれか、谷口みたいな。

「彼は問題外よ。あんなに露骨にギラギラしてちゃぜんぜん駄目。この場合は特にそう。下心満載で近寄ってくる連中には辟易させられてきた子たちよ。なにしろ揃ってとびきりの可愛い子ちゃんなんだから。」

キヨン子ちゃん10

そろそろ人影の目立ちだした靴箱の前を離れ、ひとまず俺達は教室に向かう。じゃあ国木田のほうか？

「変な例ばかり出してくるわね？ そうね、彼もある意味問題外と言えるわ。飄々としすぎててつかみどころがないのよ。少なくともあたしにとってはね。」

そして不意にニヤリと笑い、

「それにしてもアホの谷口はなかなか見て面白いわ。ある意味、連綿と続く、『ダメナンパ男』の系譜の正当後継者と言えるわね。はたして彼にお相手は現れるのかしら。その点実に興味深いわ。傍観するにはいいわね。直接関わる気は全然しないけど。」

キヨン子よ、そう言ってるお前は間違いなく涼宮ハルヒの系譜の正当後継者だな。舌鋒に全く情け容赦がないんだから。いくらなんでも谷口が気の毒な気がしてくるくらいだ。まあ、奴がアホな点については争う気はないのだがな。

キヨン子の言う内容は信じがたい。俺はこんな突拍子もない話でいい気になるほどヤキは回っていないつもりだ。しかし、ひとつわかったことがある。こいつの言葉には変な力強さが、妙な説得力がある。

キヨン子よ。

お前は、
いったい誰だ？

キヨ子ちゃん11

そんなことを考えていると、不意に、

「ねえ、キヨくん。」

なんだ？

「好きな人、いるでしょ。」

へは！？ おもわずマヌケな声が出てしまった。なんだなんだいきなり。．．．いないぞ。いきなりなんだ。

「ふうん．．．。嘘ね。」

なぜだ！ なぜそこで断言なんだ！ 根拠は！

「ヒント。いとこのお姉ちゃん。」

答えじゃないか！ それにそれは昔の話だ！ なんで今頃！

「昔の話だなんて言ってる場合、実は現在進行形だったりするところがけっこうあるのよね。キヨくん、キヨくんはいとこのお姉ちゃんが好きだった。でもお姉ちゃんはくだらない男と駆け落ちしてしまった。キヨくんは傷ついた。ここまでは間違いないわよね？ そしてキヨくん、キヨくんは実はその傷をまだ乗り越えてない。端的に言えば、まだお姉ちゃんに心が残っている。いつか帰ってきてくれると、心のどこかで信じてる。違うかしら？ キヨくん鈍感さの理由のひとつはそれ。」

な・・・なんだ、こいつは。言われてみれば、確かに・・・確かにそんなことを漠然と考えていた時期もあった。今日は帰ってくるんじゃないか。明日、明後日、来週、来月、来年、再来年、いつかでも俺はそんなこと、誰にも言ったことがない。それをこいつは看破した！ いとこの姉ちゃんが駆け落ちでいなくなったときにはそりゃあ寂しかった。実際心に風穴があいたような気がしたもんさ。だからこそ、誰にも言わずにいたのに！

「凶星のようね。キヨンくん。」

・・・それが真実かどうかはひとまず措くとして、なぜそうとわかる。

「別に？ 女の第六感ていつのかしら？ ふふふ。」

キヨンはじつにチャームリングに微笑んで見せたが、おれは背筋が冷えて仕方なかった。

キヨン子よ。

お前は、いつたい、誰だ。

・・・いや待て、ここは落ち着こう。そもそもこいつは誰という

ことになつてる？ 俺の双子の妹だ。当然小さい頃からいつしよにいたことだろうし、察しのいいこいつなら、これくらいの洞察はきつと朝飯前のことに違いない。それにしてもたいした奴だ。心理学者にでもなればいい。

そんなことを考えている間に教室に着いた。ハルヒはまだいない。俺とキヨ子はその席につく。と、キヨ子が身を乗り出して話しかけてきた。

「それにしても谷口の奴、可笑しいのよ。」

奴がどうかしたか。ナンパでもされたか？

「以前実際にナンパされたときは振ってやったわ。もつともあたしとは気付いてないと思うけど。ま、その話はまた今度。」

・・・見境のない野郎め。

「あたしこの間佐々木ちゃんと街中を歩いてたんだけど。」

なに？ なんだと？ 佐々木と知り合いなのか？ それもいつしよに出歩くような。

「いかにもナンパな野郎が近寄って来たと思ってたらそれが谷口のアホでね。」

谷口・・・相手は選べ。キヨ子はお前にはどうにもできないし、佐々木はお前なんかには高嶺の花過ぎる。

「奴ときたら佐々木ちゃんしか目に入っていないのよ。佐々木ちゃ

ん困ってたからあたし言っつてやったの。『谷口くん、ご精勤ね。』
つて。そしたらはじめてあたしに気がついてね、ポカンとしてたの。
たたみかけてやったわ。『紹介するわ。キヨソンの親友の佐々木
ちゃん。』そしたら佐々木ちゃんものつてきて、『はじめまして谷
口くん。キヨソンの親友の佐々木です。』谷口の奴、『あ、ども、は
じめまして。』とかしどろもどろに言っつて、突然全力疾走で走り去
っつていったわ。『ちくしょー！ なんであいつばかり！』つて叫
びながら。たぶん、あれ、心の叫びが口からダダ漏れになつてるの
に気付いてないわね。佐々木ちゃん心配してたわよ。キヨソんに
悪い影響をあたえないか気がかりだ、つて。」

今度会つたら、谷口に影響されるほどヤキは回つてないとでも伝
えといてくれ。

「わかった。伝えとくわ。」

そういやこの前の月曜日だったっけか、谷口の奴が妙にヒネた目
をしながら『いいよなあ、キヨソンは！』とか言っつてたのはそういう
ことだったか。その時には軽く流しといたが。

キヨ子ちゃん12

待てよ、考えてみれば、キヨ子が佐々木と知り合いでも不思議でもなんでもない。まがりなりにもSOS団の一員だからな。ああ、それにしてもややこしいな。こんがらがりそうだ。

「ねえキヨくん、・・・ごめんね、古傷に触って。でも、あたし、キヨくんの気持ち、わかるよ。」

今度はなんだ？

「好きだったお姉ちゃんに去られてこのかた、キヨくんは女の人を好きになつたらまた、自分から去っていくのじゃないかと恐れてる。もうあんな思いはごめんだと思ってる。まったく根拠のない恐れだとまでは言わないわ。でもね、キヨくん、もうそろそろ潮時じゃないかな。」

なにか返答しようとして口を開きかけた瞬間、

「おつはよー！ 今日二人とも早いじゃない！ 特にキヨン！ 団長であるこのあたしより先に来るとは感心ね！ それは団員その1としての自覚が芽生えてきたということ、とてもよいことだわ！」

朝の早くから元気潑刺なわれらの団長様のご登場だ。この活力はどこから来るんだろう。この無限のエネルギーを人類のために平和利用できないものか。

などとやくたいもないことを考えているうちにハルヒはキヨ子

といつもの会話を始め、俺は置いてきぼりをくった。しかしキヨンの指摘はいちいち俺のいちばん痛いところをついてくる。

潮時か。潮時ね。確かにそうかも知れない。あれからもう何年経つ？ そろそろ思い切る頃合いだろうな。・・・さすがにすぐには無理だろうが。

そのうちに、予鈴が鳴り、本鈴が1日の始まりを告げ、担任岡部が登場していつもの挨拶ののち、学級委員の司会を求めた。本日は限はLHRである。知ったこっちゃねえやと思っていると、後ろから誰か来たと思った刹那、襟首をむんずと掴まれて有無を言わさず引き摺られ、教卓までそのまま連行された。だ、誰だ！ 何だいたい！ こら！ 離せ！

くすくす笑いのなか教卓の前に立たされると、キヨンの声が耳を打つ。

「だめだよキヨンくん！ ぼんやりしてちゃ！ 学級委員なんだから！」

へえ、学級委員。学級委員ね。誰が。・・・俺か？ ひよっとしてもしなくても、それは俺のことなのか？ 待て待て。そんな覚えはないぞ！

くすくす笑いはそのうちに爆笑に変わり、俺はじつに決まり悪い気分のままその場に立ち尽くす。そんな俺の横では、笑い声が収まるのを待って、キヨ子が議事進行を始める。手慣れたものだ。朝倉の手腕を思い出す。ことによると、朝倉より達者かもしれない。

後で聞いたところによると、こういうことだったらしい。つまり、

朝倉がいなくなった当時、女子の委員を改選する必要が生じた。キヨンのやつはなんとそれに立候補し、対立候補なしでそのまま信任され、その勢いをかって緊急動議を提起。その内容は男子の委員の改選であり、あまつさえこいつは選挙でなく、自分の指名で選出すると宣った、らしい。そんな横車があるかと思われようが、ああ、なんたること！生徒、担任、前任の男子委員にいたるまでただ一人の反対もなくこの強引強硬独裁きわまりない提案が了承され、そして俺が指名されたわけだった。・・・俺を除く満場一致の同意つきで。再現するとこんな風だったらしい・・・

「・・・異論ないわね！じゃあ指名します！キヨンくん！・・・反対意見は？キヨンくん以外のなら聞くわ！・・・ないわね？ないわね！では賛成の人！拍手しなさい！拍手っ！」

ばらばらとした拍手がやがて盛大に。

「そういうわけだから！キヨンくん！よろしくね！」

・・・ヒドイ話だ。まったくヒドイ話だ！民主主義は死んだ！

ちなみに、この話はその昼休み、弁当をつつきながら谷口が、

「それにしても傑作だったよなあ。キヨンが学級委員になったときのこと！」

などというセリフを端緒に、頼みもしないのに最初から最後までべらべらとくつちゃべつてくれたものだ。いい気分はもとよりしなかったが、状況が理解できたことは収穫だった。

ま、なんだ、ご苦労、谷口。

ついでながら、キョン子は谷口的に『A』評価だったらしいが、このエピソードの際『Aプラス』に昇格したらしい。・・・長門よりも高評価を得ているのは俺的には納得しがたいのだが。

キヨン子ちゃん13

谷口というのも思えば変わった野郎だ。成功確率がほとんどゼロのナンパに飽きもせず身をやつしているんだから。

奴のナンパ話を聞くにはコツがいる。もともとまともな耳を傾ける価値なんぞ皆無な話だが、自慢げなその口調、雑誌の記事を鵜呑みにしたと思しき半可通の中途半端な知識、個人的偏見と意味不明な独断、いい調子の雄弁と無意味な一般論がその浮ついた無内容な駄弁をさらに鼻持ちならないものにしてしまっている。しかし、その欠陥をすべて分離し、願望に歪められた希望的観測に基づくと思われるあからさまな誇張をこっさり差し引きすると、あとに残るのは、いわゆる『釣果』が連日「ボウズ」であるという事実だ。どんなにうまくいったところで、お茶なんか奢らされたあげく体よく振られるというもはやルーチンというべきパターンが定着しているらしい。

で、あとでキヨン子と話したところが、

「キヨン子よ、おまえさっき『あたしとは気付いてない』とか言ってたがどういうことだ？」

「変わってると思うかも知れないけどね、あたし変装して出かけるのが趣味のひとつなのよ。」

確かに変わってるな。

「あたしと気がつく人間が1人もいなければあたしの勝ち。」

なんのどういふ勝負だ。趣味の悪い。

「そのときに奴のナンパにあったわけ。そのときはね、えっとね、三つ編みの二つお下げ、銀縁の伊達眼鏡、眉は太めに描いて・・・」

他にもごまごまと変装要素を付け加えた結果、谷口を騙しおおせるほどの変装に成功した、らしい。で、ランチにイタリアンを奢らせて、うまいことかわして逃げたそうである。・・・意外にちゃっかりしてるな。兄として、おまえの行く末が少し心配だ。

「イタリアンたって二千元かそこらよ。」

高校生にしては高価な昼食だと思うがな。

「あんなアホに多少なりとも時間を割いて付き合ってたんだからそれくらいいいじゃない。でもあれは近年稀にみる成功した変装だったわ。」

たぶん奴は久しぶりにうまくいって目が眩んでたことだろうから、そのぶん割り引きして考えたほうがいいと思うぞ。

「それはそうね。なんせアホだもんね。」

谷口・・・。哀れなやつ。

「でもアホなりにハルちゃんと付き合ってたんだから、大したもんだわ。」

・・・付き合ってたのか？ 初耳だ。奴はハルヒのことを話に聞いただけだと思ってたが。

「奴が自分でそう言ってたからでしょ。そんなもの嘘に決まってるわ。考えてみて。あれほどの可愛い子が、告白ひとつで付き合ってくれるのよ。事実上期間限定とはいえ。奴が参戦しない理由がないわ。それに、5分で振られたというのは奴じゃないわね。」

なぜ。

「奴にだってプライドがあるから、そんな恥ずかしい記録更新してたらその話に触れるはずがないもの。意外に、2週間のレコードホルダーは奴かも知れないわね。ハルちゃんが奴のことをことさらにアホアホいうのも、アホと2週間続いた自分自身を許せない面があるのかも。」

じゃあ奴はなぜそのことに触れないんだ？ 自慢しそうなもんだが。

「自慢のネタにはならないわ。結局は振られてるわけだしね。それに奴はなんせモテたいのよ。ハルちゃんはある通り風変わりな子だから、その仲間に思われるとモテが目減りするとも思ってるんじゃないかしら。でも、心ひそかに、プライドの源泉にはなっていないそうね。一種の『じゃじゃ馬ならし』としての自信ね。」

キヨ子ちゃん14

「たぶんね、こういうことだと思うのよ。いい？ 谷口のやつはね、アホでナンパだけど、それ以外は拍子抜けするくらい普通なのよ。だから、結局ハルちゃんについていけないかった。ハルちゃんはハルちゃん、谷口ではあまりにも普通過ぎた。で、お互いにお見限りで事実上の円満解消。そんなところだと思うのね。」

ほほう。．．．ありえないとまではいえぬ。確証に欠けるのが難だな。

その日は特に何事もなく、いつも通り頭に入らない授業が終わり、掃除当番が終わり、SOS団執務も特に異常なし、ハルヒはネット、長門は読書、朝比奈さんは麗しのメイド姿でダージリントイーを淹れ、俺と古泉はカードゲームをして毎度お馴染み俺のボロ勝ち、とまことにいつも通りすぎるほどにいつも通り。ただ、キヨ子のやつだけが、いつものようにハルヒのそばについていないで、歩き回ってはハルヒと俺を除く3人と何かしら、それぞれ別々に、低い声で話しているだけがイレギュラーといえればイレギュラーではあった。でも、俺はその時にはそんなことあまり気にしていなかった。人間そんな気分のこともあるだろうな、と。

翌日発生した事態を前もって知っていたら、とてもそんなに安穩とはしていられなかったと思うが、神ならぬ身の知る由もなく。

今思い返せば、たしかに前兆はあった。その帰り道の途中、古泉

は馴れ馴れしい態度で俺の肩に手を置き・・・ここまではいつも通り・・・不意にこんなセリフを吐いた。

「あなたの妹さんは実にたいした人ですね。」

どう考えてもいつも通りでない言葉を、妙な印象を受けるイントネーションで述べ、スマイル野郎は立ち去った。

朝比奈さんもなにか心配げな様子で、挨拶なしで去っていった。
・・・いつもなら可愛らしく微笑みながら小さく手を振ってくれるのだが。

長門は変化ないように見えたが、こいつはどんな異常事態が発生しても普段と変わらないので判断のつけようがない。

キヨン子ちゃん15

翌朝。

今日はキヨン子は先に行ってしまい、一人で坂道をうんざりしながら登っていると、軽薄な野郎に肩を叩かれた。

「ようー！」

「ああ。」

ちようどいい。この機会に、質問をぶつけてみる。

「なあ谷口、おまえハルヒと2週間続いたって本当か？」

「そ、その話、どこで聞いた！」

ハイ、大正解。

そこからの奴の話は、キヨン子の推測に一致していた。ハルヒはしばらくは普通の外出にもつきあっていたらしいが、そのうち、あの突拍子もないハルヒ節が炸裂しはじめ、散々に振り回されたあげく、ついにある日キレて去っていったが、追いかける気力ももうなかったこと、結局ほとんど会話が成立しなかった、常に仏頂面なので非常に困った、などと奴はしゃべり散らした。そして、涼宮といっしょにできるのはお前だけだ、と言い、あまつさえこうまでぬかした。靴箱のところだ。

「お前ら、もうそろそろ付き合ったらどうだ？　つーか、ホントに付き合ってるのか？」

俺が一言も返さずにその場を立ち去ったのは言うまでもない。

階段を登っていると、古泉とキヨン子の風変わりなツーショットが降りてくるのに出くわした。キヨン子は低い声で古泉に何事か話

しており、古泉は黙ってそれに耳を傾けているふうだったが、しかし。

「よう、古泉。」

「あ、おはようございます。」

「キヨンくん、やっと来たんだね。」

「おう。ところで古泉、顔色がえらく悪いぞ。大丈夫か。」

「ああ、やはりわかりますか。お恥ずかしい。・・・申し訳ありませんが、いささか気分が優れませんので、今日のところは失礼させていただきます。涼宮さんにも、よろしくお伝え下さい。それでは。」

そう言い残すと、返事を待たずにそそくさと立ち去った。

このとき、もつと深く考えておくべきだったのかも知れない。

そこにキヨン子がいたこと。

そして、古泉が、まるでキヨン子から逃げるような急ぎぶりだったことを。

しかし、思考する時間はなかった。古泉が姿を消すのと同時に予鈴が鳴り、全速力で教室に帰らねばならず、教室に帰るとHRの司会をしなけりやならず、そうしているうちに、細かい気がかりなどはきれいに流れてしまった。

さて、その放課後。

ハルヒが掃除当番のうえ進路指導面談の順番にあたっており、今日は当分現れないな、などと思いつながら部室に入っていくと、なにやら異様な雰囲気を感じた。・・・見たところ異常はないが。長門が読書して、朝比奈さんはキヨン子と、・・・なにやらキヨン子が低い声で話し、朝比奈さんが黙って聞いていて、・・・朝比奈さん

？ なんてことだ。異様な雰囲気は朝比奈さんから発している。俺に今見えているのは朝比奈さんの後ろ姿だ。お馴染みのメイド姿で、
・・・肌から血の気がひいている。耳も、うなじも真っ青だ。

「朝比奈さん！ 大丈夫ですか？」

朝比奈さんはふらふらと立ち上がった。押しつけられたパイプ椅子が倒れて騒々しい音を立てたが、そんなことには気づいてもない様子だった。なにか聞き取れないことを口の中でつぶやき、やおら片手にやかんを、もう一方の手で俺の袖口をつかみ、部屋を出て早足で、やがて走り出し、しまいには全力疾走で、廊下を突っ走り、階段を駆け下りてゆく。そんなに急いじゃ危ないです！

何度か足を滑らせ、つまずき、踏み外し、そしてついに足をもつれさせて、朝比奈さんはもうすぐ一階のフロア、という位置で転倒した。俺はとつさに朝比奈さんの体の下に自分の体を滑り込ませた。しばらく後、「どしん」というよりはむしろ「びしゃっ！」という感じで、俺は朝比奈さんを受け止めたまま、床に背中から着地した。とつさに頭を浮かせたので、後頭部を強打することは免れた。背中が全体的にひりひりするが、骨が折れた様子などはない。なによりも、朝比奈さんを無事に守れたのだから、背中痛みなんぞなにほどのことがあるうか。

キヨン子ちゃん16

さて、その朝比奈さんは、俺の体の上でしばらく突っ伏したままだった。人が見たらえらいことになりそうな格好だ。当然体が密着したままなので、暖かくて柔らかく、いい匂いがして、ことに例のたわわな感触がことさらヤバイ。もはや本格的にダメになりそうだし、しかし、このたびも間一髪、朝比奈さんの声が俺を我に返らせた。

「……ごめん……なさい、キヨンくん……。」

バラ色の妄想が全て吹っ飛ぶような声だった。乾ききった喉から、ひどく怯えた声が絞り出されてくる。

「朝比奈さん！ 大丈夫ですか?!」

朝比奈さんは答えず、よろよろと起き上がった。

「……未来と……連絡を……。」

そう言う俺に背を向ける。どんな表情をしているのかは見えなかった。だが、その方がよかった気はなんとなくする。

ややあつて朝比奈さんは3度、深く息をついた。そして、くたたくという感じで、階段に腰をおろした。その顔には安堵の表情が浮かび、血色が戻りつつある。呼吸が落ち着くと朝比奈さんは口を開いた。まだ少々うわずっているが、普段の可愛らしいお声に戻ってきていらっしやる。

「キヨンくん、ごめんなさい、取り乱して。見苦しいところを見

せちやいました。・・・痛くないですか？ほんとにごめんなさい。

「朝比奈さんは悪くないですよ。キョンジのやつが悪いに決まっています。兄貴として、ひとつガツンと、」

「いいえ、それはだめ、キョンくん。私のために腹を立ててるのはわかるし、それはとても嬉しいの。だから、もうそれで充分。このことについては、もう何も言わずにおいて。私は大丈夫だから。お願いキョンくん。私に免じて。」

「・・・朝比奈さんがそう言うならそれでもいいですが。・・・何があつたんですか？」

「・・・ええと、その、うまく言えないけれど、・・・禁則事項が、ええと、禁則事項の、その、禁則事項・・・。」

さっぱりわからないが、だいたいわかったぞ。

「キョンジのやつが、未来的事項のあれこれを言い当てたりしたんですか？ひょっとして。」

「・・・すごい、キョンくん。どうしてわかったんですか？」

「朝比奈さんがあんなに取り乱すといったら、それくらいですから。」

「さすがに、キョンジさんのお兄さんですね。」

そう言う朝比奈さんはくすくすと笑った。もうすっかり元に戻りつつある様子だ。

朝比奈さんはもうしばらく未来と連絡をとるということだった。

込み入った事項の連絡で、時間がかかるということだったので、俺は先に部屋に戻っていることにした。そこいらに放り投げられて転がっていたやかんを洗って水を入れ、そいつを持って部屋に入っていくと、長門はおらず、キョンジはひとり、所在なげにパイプ椅子

に座っていた。俺はまずやかんを火にかけ、キヨ子のはぼ正面に座った。

「ちよつと調子に乗りすぎちゃったわ。」

だしぬけにキヨ子が言った。

「あんなにショックを受けるだなんて思わなかった。」

「お前の洞察は実際大したもんだが、配慮が足りなさすぎるぞ。」

「そうね。悪いことしちゃったわ。みくるちゃん、大丈夫だった？」

「未来と連絡をとって、どうにか立ち直ったみたいだ。」

「そう。どっちにしてもあとで謝っておかなきゃ。」

「そうだな。あと、古泉にもだな。」

「そうね。彼にも。」

「いったい何を言ったんだ？」

「ちよつとね。推測の結果を披露してみたのよ。ほんのほのめかし程度にね。それがかえって悪かったのかも知れないわ。彼にはね。」

「というと？」

「彼、深読みが趣味なのよ。だから、ほのめかされる程度だとかえって深読みで身動きとれなくなっちゃうの。」

「ほう？」

「ちなみに、陰謀や謀略を起案するのも趣味。」

「なぜそうとわかる？」

「ボードゲーム趣味からよ。あれなら、目に見える形で謀略が楽しめるわ。でも、彼の謀略には常に致命的欠陥があるの。」

「欠陥とは？」

「そういう謀略を成就させようと思うなら、正確な情勢判断は欠

かせないわ。それができてないことは、彼の常敗ぶりからわかる。ついでにその原因もね。」

俺は座り直した。なんだか興味深い話になってきたぞ。

「所見を承ろうじゃないか。キヨン子先生。」

キヨン子は机に肘をつき、顔の前で手を組んで、鼻から下が隠れるような姿勢をとった。おりから差し込む真つ赤な夕暮れのあかりに照らされて、キヨン子はなぜだかしばらく黙っていたが、やがてゆっくりと切り出した。

「彼、情勢判断するとき、自分の願望を混ぜてるのよ。それも無意識に。」

キヨン子ちゃん17

「話がそれるようだけどね、キヨンくん、彼、以前有希ちゃんを分析して、『宇宙人をやめつつある』ってニュアンスで話してたわよね。」

「そーいやそんなこと言ってたな。」

「これがね、彼一流の偏った情勢判断の典型なのよ。有希ちゃんに宇宙人をやめてただの女の子になってほしい。これが彼の願望。もっとも彼個人の願望というよりは『機関』の一部の願望と言ったほうがいいかも知れないわ。彼の観察眼は状況をよく捉えてる。でも、その先が如何にも短絡的なの。」

「なんで『機関』は長門に宇宙人でなくなつて欲しいんだ？」

「『機関』にとつていわゆるTFEIたちは不安定要因だからよ。彼ら独自の目的にしか関心を示さないし、説得も買収も威嚇も効果がないし、能力が絶大過ぎる。あと、ハルちゃんについての解釈に根本的な、妥協不可能な相違がある。」

「そうは言つても、長門が能力の一部を封印し始めてるのはお前も知つてるだろう。俺もそれで納得してたし、長門は寧ろそうなたほうがいいと思つてたんだが。」

「違うわ、キヨンくん。」

キヨン子は不意に顔の前で組んでいた手をほどき、妙な具合に空中を滑らせた。思わず俺はそれを目で追う。今のはなんだ？

「逆なの。有希ちゃんは宇宙人である自分自身を受容しようとしているの。自分の手に負えない能力を事実上放棄することで、『身の丈に合った宇宙人』になろうとしているのよ。いい、キヨンくん。ハルちゃんがああハルちゃんである限り、どんな予想外の事件が起こるかも知れない。ハルちゃんを、その周りの人たちを守るために

は、有希ちゃんは宇宙人でなければならぬの。」

「おい、でもそれじゃ、長門があまりに気の毒じゃないか。」

キヨンはふっと黙った。数秒間、何か言いあぐねているような沈黙があった。ややあつて、キヨンはゆっくり口を開いた。

「ねえキヨくん、有希ちゃんを傷つける人がもしいたら、どうする？」

「いきなりだな。そんなもの決まってる。ぶん殴らずにはおかない。」

「ハルちゃんはどうするかしら？」

「もちろんハルヒもそんな奴のことは決して許さないに違いない。大乱闘パーティー開始だ。ハルヒのほうが激昂しそうだけだな。一番槍とトドメは自分がやらなきゃ気が済まないだろう。」

キヨンは微笑んで、思いがけない言葉を吐いた。

「じゃあキヨくん、キヨくんは自分で自分を殴らなきゃいけないわ。」

キヨン子ちゃん18

・・・なんだって？ キヨン子よ、それはどういう意味だ。まるで俺が長門を傷つけたことがあるみたいじゃないか。それはあんまりだぞ。俺はそんな覚えはない。もしそんなことがあったとしたら、俺は自分で自分を許せん。

「でもね、キヨンくん、実際そういうことはあったのよ。12月18日の事件を覚えてるでしょ？」

「あれは長門の仕返しだったとでも言いたいのか。長門はそんな奴じゃない。」

「話が飛び過ぎよ、キヨンくん。初めから説明するから、聞いて。」

聞こうじゃないか。しかしな、いくら俺でも、こればかりはな。ちよつとでも納得いかなかったら承知しないぞ。

「じゃあねキヨンくん、あの事件の原因を知ってる？」

「長門のエラーだろう。」

「なぜそれを知ってるの？」

「長門が自分でそう言った。」

「確証は？」

「そんなものはない。いいかげんにしないか。長門が嘘を言うはずがない。特に俺には。」

キヨン子はしばらく黙った。おそろしく真面目な表情で黙った。その表情は、なぜだか俺を圧倒した。

「キヨンくんはひとつ、大事なことを忘れてるわ。」

「なんだ。」

「有希ちゃんね、女の子なのよ。」

それがどうした、と言いかけて、俺は言葉が口から出なかった。この感覚はなんだ。全身から血の気がひいていくのが自分でもわかる。長門は女の子。長門は女の子。これは決定的要因だ。決定的要因だったのだ。俺は今の今まで、まるつきりそれを、よりにもよってまさにそれを、完全に度外視していた。俺の今の顔色は、朝の古泉やさっきの朝比奈さんに劣らない、ひどいものになっていることだろう。怠惰と、無策と、依存心が、その報いを受ける日が、ついに来たのだ。俺自身が顔色をなくす順番がやってきた。古泉も、朝比奈さんも、いわばからかわれただけとも言える。しかし、俺はこれから、長門の代理人、いわば検事であるキヨン子から、罪状告発を受けようとしている。俺はこの先をもう聞きたくない。しかし、俺は聞かねばならない。俺自身の過ちと向き合うために。

「キヨン子。」

自分の声ながら、ぞっとするほどかすれた声が喉の奥から漏れてくる。

「始めてくれ。俺の、腐ったカボチャみたいな鈍い頭にも解るよ
うに、すべてを解き明かしてくれ。」

「よくぞ言ったわキヨンくん。では、よく聞いて。2度は言わな
いわ。」

言われるまでもない。全身を耳にして聞くさ。

「さて、キヨンくん、さっきも言ったようにね、有希ちゃんは女
の子なのよ。優しい嘘くらいはつくわ。好きな男の子を悲しませた

くないとあつてはなおさらのこと。」

好きな男の子、だと？

「あなたよ、キョンくん。前に言った3人のうち、一人は有希ちゃん。」

俺は一言もない。俺は知っていたはずだ。知っていなければならなかったはずだ。

「あの一連の事件はね、有希ちゃんの自己実現を目指した戦い。平たく言えば、彼女は恋するキョンくと寄り添って生きていきたいと願った。だから、世界を改造した。不安定要因をすべて排除し、ライバルは別の学校に移し、そして自分は、宇宙人であることをやめた。宇宙的属性をすべてかなぐり捨てた。」

待ってくれ。それじゃ、

「そう。エラーなんかじゃないわキョンくん。彼女は恋の確信犯。そして、あの世界の有希ちゃんのか弱い姿は、いわば彼女の本質。本来の彼女自身。正体と言ってもいいかも知れないわ。強大な力を行使するためには、心もまた、強大でなければいけない。でなければ心が腐ってしまうわ。でも、彼女の場合心が強すぎて、ただでさえ淡い感情表現が封じられてしまうの。それがあの、宇宙人としての有希ちゃんの姿。」

俺は打ちひしがれるしかない。まさか、そんな。そして言わずもがなの問いが口から転がり落ちる。

「なぜ、長門は俺なんかを好きになっただ？ ほかにいい男は

いくらもいるだろうに。」

自分の声が虚ろに響く。こんな問いの答えなど、はじめからわかっているはずなのだ。案にたがわず、明快な解答が打てば響くように返ってきた。

「その問いに答えるのは、誰にとっても不可能よ、キヨンくん。恋に理由はいらないわ。」

わからないことはまだある。

「どうぞ、キヨンくん。」

「なぜ、長門は俺を変えてしまわなかったんだ。なぜ、逃げ道を残したんだ。」

キヨン子は黙った。しばらく黙っていた。俺はうなだれていた頭をあげた。キヨン子が怒っているのではないかと思ったのだ。だが違った。キヨン子は、泣いていた。肩を細かく震わせながら、ぽろぽろと涙を零していた。

「すまん。……鈍感のバカ兄貴が、情けない思いをさせて本当にすまん。」

キヨン子ちゃん19

キヨン子は慌ててかぶりを振り、涙を拭いた。

「違うのキヨンくん、そうじゃないの。キヨンくんの疑問はもつともだわ。・・・有希ちゃんね、キヨンくんが大好きなのよ。大好きで大好きで、大好きすぎて、心に手を触れることができなかったの。逃げ道を残したのも同じ理由。キヨンくんが大好きだからこそ、キヨンくんの望む通りにしてほしかったの。彼女はね、キヨンくんに恋のフェアプレイを挑んだのよ。・・・そして敗けた。」

俺は叫びだしたい。なぜだ。なぜそんなにも長門は自分を不利な条件に追いこむんだ。

「言ったでしょ、キヨンくん。キヨンくんのごことが大好きだからいいえ、むしろ・・・愛しているから。自分がどんなに不運に見舞われようと、愛する人に幸せになってほしい。それが彼女の愛。確かにね、選択は容易なことではなかったはずよ。彼女が世界の改造を敢行するまでの数ヶ月、どんなに悩み苦しみぬいたか。キヨンくんも一緒に変革に巻き込んで、最初から自分の恋人だったことにしてしまいたい、そんな思いもあったはず。それにね、明らかにその方が楽なのよ。キヨンくんも知ってる通りよ。彼女には造作もないこと。それをあえて彼女は思いとどまった。そして・・・キヨンくんは逃げ道を見つけだし、彼女の思惑は崩れ去った。彼女、相当こたえたはずよ。つまりそれはね、『わたしの好きな男の子は、本当のわたしを好きになってはくれなかった』、ということの意味するのだから。」

・・・もう、俺は誰にも顔向けができない。俺はなんという男だ。

なんとという鈍感、いや、もはや残忍とでも言ったほうがよさそうだ。お願いだ。誰か、俺を地の底に埋めてくれ。

「それはとりもなおさず、好きな人と添い遂げることができない彼女自身の運命を決定してしまうことにもなるわけ。ハルちゃんがあの手ちゃんのままである限り、彼女も宇宙人でいなければならぬ。彼女がいなければ、とっくの昔にSOS団は空中分解、キヨンくんに至ってはお墓の下よ。・・・そして宇宙人である限り、キヨンの恋人にはなれない。その地位には、すでに似つかわしい人があるから。それだけでなく、宇宙人としての彼女の任務は観測・観測対象に対する中立。これは観測者の要件のひとつ。そしてもう一つ。重要な事実。彼女は、今もキヨンくんが大好き。彼女の夢、つましく恋に生きる日々が、今のキヨンのせいで幻となってしまっても、彼女はキヨンを嫌いにはなれなかった。・・・だから彼女は決心したの。愛する人を守ることに全力を尽くそう、つて。恋する男の子と結ばれないことを覚悟のうえで、しかもほかの女の子とくっついてしまうのを承知したうえで、なお好きな男の子とその未来の家族を、一身をかけて守り抜こうと、彼女は決意しているのよ。それが彼女の愛。彼女の生き様なの。」

長門よ。長門よ。お前はそれでいいのか。それはあまりに切ないじゃないか。辛すぎるじゃないか。

「でも、なにもかも知りすぎてしまうことには耐えられない。ゆえに、彼女は未来を自分には見えないようにしてしまったの。未来を見透かして、『好きな人と永遠に結ばれることのない自分自身の姿』を確認してしまうのは、恋する乙女にとってこれほど残酷に苦しいことはないものだもの。おそらく、かつて彼女はそれで酷く苦しんだのよ。世界改造敢行の原因のひとつというわけ。だから、未来を不可知なものにしてしまって、『ひよっとしたら』という、希

望を残しておくことにしたの。淡い陽炎のような希望でも、まったくなくなもないよりは千倍も万倍もましなものだから。そして、彼女はひとり、自問するのよ。『待ち続ける私に、奇跡は降りかかるのだろうか』とね。」

長門よ、・・・長門よ！

「だからあたしはね、キョンくん、彼女の優しさと、決意と、勇敢さを思うと、つい、涙がでてくるのよ。彼女はね、キョンくんを守るためなら、いつ何時であろうとも、躊躇なく、自分自身を犠牲にするわ。なにが敵であろうとも、自分がかなわない相手であろうと、キョンくんのために、戦って、戦って、戦い抜いて、最後の力まで出し尽くす。それが、長門有希という少女。・・・かなわぬ恋に生き、とどかぬ愛ゆえに戦う、現代の戦乙女。」

・・・朝倉のときのようにか。

「そうね。特にあのときはね。大好きな男の子が、自分の仲間に見殺されかかっているのよ。恋する乙女の熱い血が、激怒に沸きかえらない理由が、なにかあるかしら?」

長門・・・。

キヨン子ちゃん20

「有希ちゃんがキヨンくんに嘘をついた理由、わかる？ 彼女はね、キヨンくんが悲しんだり、辛い思いをしているのは見たくないのよ。どんな理由であつても。．．．そう、どんな理由であつても。」

．．．俺は．．．俺は、．．．そんな愛を受ける資格がない。応えられる自信もない。．．．俺は．．．どうしたらいい．．．。

「．．．ごめんね、キヨンくん。」

キヨン子は声のトーンを急に落とした。

俺は首をがっくりうなだれたまま動けずにいた。

「．．．話すべきじゃなかったかも知れないわ。有希ちゃんが気を遣った理由もわかる。キヨンくんがそんなに落ち込むなんて。あたしはキヨンくんが言うとおり、配慮が足りなさすぎるみたい。」

「．．．いや、キヨン子よ。よく話してくれた。ついでに聞いていいか。俺はこれからどうすればいい？」

「なにもしなくていいわ。あたしね、有希ちゃんと相談したうえでこの話をしたの。有希ちゃんはね、ある約束を必ず果たすことを条件に、話すことを特に許してくれたの。そして、その約束を果たす時が到来したわ。」

俺の対面で、キヨン子は静かに立ち上がり、身を乗り出して、俺

の目の前に手を突き出した。俺は虚脱感におおわれて、ぼんやりしているだけだった。仮に朝倉が突然現れて、俺を再び殺そうとしても、おれは刺されるがままになったことだろう。

「さあ、キヨンくん！ 悲しい夢は、これでおしまい！」

言うなりキヨンは、指を高らかに一度鳴らした・・・ぱちっ！

ふと気がつくと、俺は机に突っ伏していた。どうやら眠っていたようだ。頬が冷たいので触ってみると濡れていた・・・俺は泣いたのか？ 正面にはキヨ子が座っている。手を顔の前で組み合わせ、顔の下半分を隠すようにして。

「ああ、キヨン子・・・俺は眠っていたのか？」

「人が話してる途中に眠っちゃうとはずいぶんじゃない？ でも、仕方ないのかもね。キヨンくん、多分疲れてるのね。眠ったまま泣いてたわよ。」

「みつともないところを見せちまってすまん・・・何の話だったかな。」

「ええとね、そうそう、古泉君がなぜゲームに弱いのか、だったわね。どうってことない話よ。彼、先手を打つことに集中しすぎるあまり、次の手はおろそかになってしまってるの。『策士、策に溺れっぱなし』ってな感じかしらね。あと、過程を楽しむ傾向が強すぎて、勝敗を大して気にしてない点も見逃せないわ。そうね、それから・・・」

なぜだろう。もっと大事な話をしていたような気がするんだが。

どうにもぼんやりとして思い出せない。あるいは、本当に夢の記憶だろうか。その時、静かにドアが開いて、長門が入ってきた。俺を見、キヨン子を見、もう一度俺を見、そしてキヨン子に視線を止めた。キヨン子は微かに頭を動かした。どんな意思表示とも判別のつきかねる動きだったが、それでコミュニケーションは成立したようだった。長門は普段通りの椅子に収まって、普段通りの読書人形と化した。その普段通りぶりに、俺はなぜだか、ひどく安心させられた。ふと見ると、キヨン子も長門を見つめていた。俺たち兄妹は、しばらくの間、長門の姿を眺めていた。それは、奇妙に心安らぐ時間だった。

キヨン子ちゃん21

夕まぐれの赤い光の中、長門は静かに読書が続けていた。その決まりきった姿は、あたかも一幅の絵を思わせた。俺にはその素養がないが、画家にせよ、音楽家にせよ、詩人にせよ、この光景からは何らかの着想を得られることだろう。ふいに、キヨン子の声がこのやくたいもない思考を途切れさせた。まるで独り言のように、キヨン子は呟いた。

「超人的な力を使いこなすためには超人的な心が必要。そして、その超人的な心から発する愛も勇気も、また超人的なものにならないを得ないのだけ。」

なんのことはよくわからなかったが、なぜだか俺は、この言葉に深く納得していた。キヨン子は長門から目をそらし、俺の方に向き直った。目を忙しくしばたかせている。それはまるで、泣きだすのを我慢しているようにも見えた。と、その時、部屋が急に明るくなった。ドアのところ朝比奈さんがいて、電灯のスイッチに手をかけていた。

「あ、あの、ごめんなさい、暗いかと思って……。」

「朝比奈さん、もう大丈夫なんですか？」

「え……、はい。大丈夫です。ありがとう、キヨンくん。」

キヨン子が立ち上がって、朝比奈さんのそばに行く。

「ごめんなさい、みくるちゃん。驚かせて。」

「あ、いえ、いいんです。でも、びっくりさせられたことは確かです。あたしのことですから、ついに機密漏洩事故を起こしたかと

思って、焦っちゃいました。」

「本当にごめんなさい。もう二度とあんなことはしないわ。」

キヨンは右手を差し出す。朝比奈さんはその手を握り返した。

「わかりました。・・・これからもよろしくお願いしますね。」

さて、朝比奈さんによれば、「キヨ子」の登場によって非常に珍しい状況が発生しているが、それ自体は特に心配するようなことではない、とのことだった。『今回に限り、事情に通じている人間限定で、通信文の一部の開示を許可する』という但し書きがついていたということだったので、せつかくなので内容を教えてもらった・・・『極めて低い可能性をもってその発生を指摘できる時間進行線路への進路が開通中。当該線路は終端において既定計画線路に合流の見込み。執務上の反則、禁則事項侵犯、機密漏洩事故等は認められない。現任務を継続せよ。』・・・なんとというか、長門流の修辞法だな。

「えらくいかめしい通信ですね。」

「以前は普通の言葉で通信してたんですが、担当の人が代わってからそんなふうになっちゃいました。」

朝比奈さん（大）なんだろうな、たぶん。正体を悟られないようにしようとするなら、なるほど、公文書の引き写しみたいな通信文になるのも仕方ないんだろうな。もう少しやりようがある気がしないでもないが。

しばらくするとハルヒがやってきて、なにやら不満そうにキヨ

子と何事が話していたが、そのうちに二人して先に帰ってしまった。俺たちももうやる事がなかったのだが、なんとなく居残っていた。と、ドアが開いて、見覚えのあるような女生徒が姿を現した。キヨ子か、と思ったがそうではなかった。非常によく似ていたが、別人であることは確かだった。その目があの見間違えようのないハルヒ色ではなく、普通の濃い茶色だったから。

「面談なんて面倒くさいよなあ。高校卒業した後のことなんか考えてないっつーの。なあ、キヨン。」

はい、別人確定。

「まったくつまんねー話ばかりじゃがってからに。んなこたわかってるっつーの。」

そして俺に向かって手を突き出し、

「キヨン悪い、百円貸してくれ。」

なんでお前に百円貸さねばならんのか、などと思いつつも、俺は財布を引っ張り出し、百円玉をその女生徒の手のひらに押しつけた。

「サンキユ。んじゃコーヒー買ってくる。」

女生徒が姿を消すなり、俺は窓際の人物を見やる。解答が打てば響くように返ってくる。

「三つ子の姉にあたる。」

・・・なんだかすでに理解できてしまったぞ。我が家の新ファミリー登場ってわけだ。俺は三つ子の真ん中というわけらしい。ハルヒよ、世界をどう盛り上げたいのか知らんが、他人ん家の家族を無闇に増やすのは止めて欲しいもんだ。生活費もばかにならんぞ、まったくの話。

「しかしずいぶんフランクな奴だな。思わず百円貸してしまったじゃないか。」

啞然としていた朝比奈さんが口をはさむ。

「あの、長門さん、今のあの子は、なぜ、今、現れたんでしょうか？」

ありがとう朝比奈さん。俺の発するべき言葉はむしろそっちだった。どうも家族が突如増えるなどという事態にさえも、耐性ができつつある自分自身がなんだか空恐ろしい。

キヨン子ちゃん22

「推測の域を出ないものではあるが、」

宇宙娘は語る。

「現在『キヨン子』と称される個体が心理的に鋭敏過ぎるため、その先鋭なキャラクターのもたらす影響力を緩和することをおもな任務としているのではないかと思われる。」

「それじゃあなにか。ハルヒは、自分自身で創造したキャラクターの性格設定をきちんできてないっていうのか？」

「見かけ上はそう。しかし、『キヨン子』なるキャラクターには、不確定要素が存在している。われわれとしても、解析活動を未だ継続中。」

長門の統合思念体一派が解析に苦勞しているとは相当なもんだな。

「現在判明している事実を報告する。『キヨン子』と『謎の女生徒（仮称）』の間には、遺伝子レベルにおいて、二卵性双生児程度の相似が見られる。」

「今の子ども『半分ハルヒ』ってことか。」

「そう。」

そこまで話したところで、当の本人が缶コーヒー片手に、菓子パンをかじりながら現れた。

「……どしたのみんな。あたしの顔になにかついてる？」

期せずして集中した3人の視線を浴びて、キョトンとした声が答える。普通なら「いや、特になにも」とか言いながら目を逸らすのがセオリーなんだろうが、

「口の横にクリームがついてるぞ。」

「ああ、ごめんごめん。」

言うなり口の周りをぺろぺろと舐めまわし、

「とれた？」

ときたもんだ。

とれてはいるがな・・・兄貴としてその振る舞いを小一時間問い詰めたくなつたのは、俺の心が狭いせいだろうか。

そんなことを考えているうちに、菓子パンを平らげ、缶コーヒーをがぶ飲みしてしまうと、実にも上機嫌な様子でそこいらの椅子に腰掛け、カバンから雑誌を引っ張り出して読み始めた。・・・さあ困った。なにか言ってやりたいが、なんと呼んだものか。と、その瞬間、部室のドアがノックされた。

「はあい。どうぞ。」

メイド稼業が板についている朝比奈さんが反射的に答える。現れたのはクラスの女生徒だった。

「キョコ。あんたやっぱりここにいたのね。あんた今日日直でしょ。日誌はどうしたの、日誌は。早く出しなさいよ。先生怒ってるわよ。」

「やべえ。完全に忘れてた。まだ何一つ書いてすらいねえよ。」

そう言つとカバンから今度は日誌を引つ張り出し、頬杖ついた非常にやる気なさげな態度で何事か・・・日付、天候、HRの議題、伝達事項、欠席等・・・記入し、

「日誌出してくらあ。」

言い残して出て行ってしまった。

さて、これで名前、というかあだ名はわかった。「キヨコ」か。ややくしいな。

しばらくしてキヨコは無然として戻って来ると唐突に言った。

「出すのが遅いつてよ。」

「確かにこの時間じゃ遅いな。」

「あと、字が汚いつて。」

「そうか。気をつけたほうがいいな。」

「だってよ、人間忘れることなんかしょっちゅうじゃねえか。字が汚いのも当然よ。こちらもともと書く気全然ねえんだから。そう思うだろ？ キヨン。」

などと逆ギレししか思えない台詞をほざいた。しかし何故だろう。いろいろ間違つてるのはわかるが、こうまで間違い倒しているとなんだかどうでもよくなってくる。あと、その乱暴な言葉遣いにも一言言つてやろうかとも思わないでもなかったのだが、結局俺は、

「ああ、まあ、それも言つかない・・・。」

などとお茶を濁すことができただけだった。

「だろ？」

キヨコはまさしく二カっ、という感じに笑い、簡単に機嫌を直してしまった。

「キヨコさん、お茶、どうぞ。キョンくんも」

「ありがとうございます、朝比奈さん。」

「おう。サンキュー、みくるん。」

朝比奈さんがお茶を淹れてくださる。・・・それにしてもな、一応仮にも先輩なんだから、タメ口+あだ名ってのは正直どうかと思う。

キヨ子ちゃん23

しばらくすると下校時間を告げる放送があり、俺たちは4人連れ立って学校を後にした。キヨコは始終上機嫌で、いろいろと他愛のない話をしていた。意外にも、朝比奈さんが楽しそうにしているのが印象的だった。ハルヒと話しているときにはいつも若干困惑気味なのだが、長門もどことなくリラックスしているように見受けられたが、これは純粹に俺が受けた印象の問題で、確証はない。キヨコは俺にもしばしば話を振ってきた。この会話のキャッチボールは意外ほど楽しいものだった。やがていつもの曲がり角にさしかかり、朝比奈さんはいつもより元気よく微笑みながら去り、長門までが珍しく、こちらを一瞬振り向いて、微かに小首を傾げて見せた。長門流の会釈である。キヨコそれに答えて、

「バイ、ユキリン！ また明日！」

・・・長門をあだ名で呼ぶ奴は正直初めて見た。立ち去る長門がその瞬間僅かにつんのめったように見えたのは、長門流のジョークだったのか、どうか。

家に帰りつくと、制服姿にエプロンなどつけて夕飯の支度を手伝っていたキヨ子に帰りが遅いとお小言をくらった。しかしあまり真剣な調子ではなく、「とりあえず言うだけ言っとくから」という感じだった。

翌朝。

しまった！！

ついにやってしまった！ 寝る前に目覚ましのセットを忘れるなどというベタな失敗を、とうとうしてかしてしまった！ 時計は普段なら家を出て5分ばかり経った時刻を指している。ギリギリに着するよう家を出ている人間にはわかるだろうが、これはもはやデッドラインに抵触しているとみて間違いない。電光石火で着替え、階下に降りると、なんと呆れたことに、キヨコの奴がまだいた。呑気に食パンなんかかじっていていやる。

「おい、キヨコ！ 出なくていいのか？」

「あ、もうこんな時間か。んじゃ、行きますか。」

という訳で俺は、今キヨコを後ろに乗せて、できる限り全速力で学校への道を辿っている。もう北高の制服姿は見かけない。やつちまった感が漂う。自転車置き場にチャリを突っ込み、なるべく急ぎ足で登り坂をゆく。幸いにも、坂の半ばあたりで、最後部集団ともいうべき連中に追いつくことができた。安心とまではいかないが、多少の余裕はできた。

「やれやれ・・・遅刻はせずに済みそうだ。」

「やるじゃん、キヨン。」

「そういえば、あの妹の奴はどうした？ 頼まなくともたたき起こしに来るのに。」

「遠足だとかで朝早く出てったよ。」

そうか、俺はつい妹を頼っていたのかも知れんな。気をつけないと。

「で、決心はついたのか？」

キヨコが突然問いを発した。

「なんの？」

「決まってるあ。ハルちゃんとはいつから付き合っ気なんだ？」

なんだ、こいつまで俺をからかうのか、と思って振り向くと、邪気の一片もない満面の笑みが輝いている。何故か、この笑顔に向かって否定的な意見を述べることはためらわれた。

「・・・さあ、どうしようか、な。」

またもや、俺はお茶を濁した。

「あんまり待たせちゃかわいそうだよ。」

その時、不意に最後部集団の一人が走り出した。それにつられて、集団の全員が一斉に走り始める。無論俺もだ。校門が見えてきた。予鈴が鳴り出した。ヤバい。最後の力を振り絞る。校門へ飛び込む。セーフ。荒い息をつきながら見回すと、キヨコの姿がない。振り向くと、あるうことが奴はテレテレと歩いてきて、

「おはよーございまーす。・・・アウトですかね？」

と、遅刻監視当番の教師に話し掛けるなどという、大胆不敵な真似をやったのけているところだった。

「またお前か。・・・もういい。行ってよし。」

キヨ子ちゃん24

「どーもー。」

俺は一種の尊敬の念を抱かざるを得ない。こいつは大物か。大バカ者か。どっちにしても並でない。

「あれで大丈夫なのかお前。」

「最近、デッドラインは予鈴じゃないんだよね。・・・ほら、来た。」

来た？

見ると、お下げに銀縁眼鏡の顔色の良くない女子が一人、息も絶え絶えという雰囲気在校門を入って来た。教師連は彼女が入って来ると校門を閉めて引き上げて行った。何者だ、あの子は。

「さあ？ よくは知らない。でも、あの子が、事実上のデッドラインなのは間違いない。あの子より早く来さえすれば大丈夫。」

そういうことはもっと早く言って欲しいもんだ。

一日は滞りなく終わって今はもう放課後。SOS団の面々が一堂に会している。いまや7名となっているため、この部屋もだいぶ手狭な感じだ。いつも通りの時間を過ごしていると、突如、ドアが勢いよく開けられ、どこかで見たとような女子が入ってきた。他の人間には目もくれず、まっすぐキヨ子のところに行き、開口一番こう

言った。

「キヨン子さん、決心はついた？」

キヨン子が答える。

「入部の話なら申し訳ないんですけど……」

「なに？ 断るっていうの？ あなた小学校から中学までずっと演劇部だったわよね？ なんで高校じゃ演劇やらないのよ？」

「前も言った通り、あたしはSOS団の……」

「そんなことはどうでもいいわ！」

「おい、ちよつと待てよ。」

俺は話に割り込んだ。どうもこの人は言うことが一方的だ。

「何かしら？」

「見たところクラブの勧誘のようだが、そんな強引じゃいけないんじゃないのか。」

「あんたに何がわかるの？ 逸材がむざむざ埋まってしまうのを看過しろって言うの？」

ここまで話して俺は思い当たった。この人は朝見かけた子だ。顔色がだいぶ良くなっているのでわからなかった。

「逸材？」

「あなた知らないの？ この子がどんなに舞台上で映えるか知らないっていうの？ ……ねえキヨン子さん、あなたの舞台、見せてもらったわ。中二の夏の夏の公演をね！ なによあなた！ あんなに舞台の上で輝けるのに、演劇をやらなかったっていうの？ 役者をもつやらないっていうの？ ふざけないでよ！ あなたが役者をやらなく

て、誰が役者をやるっていうのよ！ いい、あなたが演劇部に入らないっていうのなら、あたし、演劇部を解散するわ！ 演劇はあたしの生き甲斐なのよ！ 演劇ができなくなっちゃったら、あたし、発狂するわ！ だからね、キョン子さん！ あたしが発狂したら、あなたのせいよ！ だからね、あなた、演劇部に入りなさい！」

・・・ここに無茶苦茶言ってる人がいるぞ！ さて、この世の無茶苦茶の頭目はというと・・・ハルヒもさすがに意表を突かれたらしく、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている。珍しいものを見たもんだ。

他の団員達も、あまりの熱意に押されたのか呆然のていだ。顔を紅潮させ、目を爛々と輝かせて力説する姿には、論旨はどうあれ、鬼気迫るものがあつた。その時、開けっ放しだったドアのところに誰かが来て言った。

「部長、そろそろ。」

部長と呼ばれたその子は振り返り、

「今行くわ。・・・キョン子さん、また来るわ！」

そして一步、二歩歩き、突然倒れてしまった。あつ、と思った瞬間、戸口にいた子とあと二人、部室に入って来ると倒れてしまった部長を抱きかかえ、

「すみません、説明はあとで！」

と言い残し、全面的に置いてきぼりのSOS団のめんめんをよそに、そそくさと立ち去ってしまった。

言うまでもなく、長門はこの一連の騒動の埒外におり、一度として本から顔を上げなかった。

「今の子、演劇部長よね。」

「知ってるのか、ハルヒ。」

「演劇部に仮入部してた時にね。線の細い、体の弱そうな子、って印象だったわ。あんなに情熱的には見えなかったけれど。」

キヨン子ちゃん25

「お前なら演劇部で、あの部長に見出されそうなもんだけだな。キヨン子みたいに。」

「・・・あたしどうもお芝居って肌に合わないのよ。小学校の、あれは何年の頃だったかしら、体育館でなにかのお芝居を見たのよね。それがものすごくつまらなくてね。それ以来よ。一応全部の部活に顔を出してはみようと思ってたから、一応行っってはみたんだけど・・・。」

なるほどな。それと、俺は個人的に、演劇というシステムがハルヒに合っていないような気がする。基本的に集団作業だからな。独走するとぶち壊した。ま、ハルヒのことだから、その気になりさえすれば立派にやってのけるだろうけれども。

そこへ、さっき声をかけた女子が戻って来て、演劇部副部长です、と自己紹介した。

「部長がご迷惑おかけしてごめんなさい。あの通りの人で、言っても聞かないもので・・・。見ての通り、体がとても弱いんですが、演劇のためとなると頑として無理をしまくるので、ごらんの通りの有様で・・・それにしても最近、部長の線が切れる・・・あ、これはあたしたちが部長が倒れたり、気絶したりしたときのことを指して言ってる言葉なんですけど・・・あの、そういうことがこのところだんだん増えてきて、心配なんです。なるべく目を離さないようにはしてるんですけど・・・。」

そつえば、やけに手馴れた搬送ぶりだった。

「で、その、あのね、キヨン子さん。部長はあなたに惚れ込んでるんです。役者としてのあなたに。尊敬もしています。ファンでもあります。反面、嫉妬しているし、ある意味憎んでもいます。」

「知ってるわ。」

キヨン子が答える。

「だから演劇部に入部するのは正直気が進まないのよ。むき出しの情念や感情はどれも苦手だわ。」

「わかります。それは解るんです。ただ・・・あの、キヨン子さん、あなた、確か、催眠術が得意でしたよね。」

「あら？　なぜ知ってるの？」

「私も中二の夏公演を見ました。ほら、あの、こっくりさんマニアのいじめっ子とその手下相手に催眠術で戦う場面。本当に催眠術使ってみましたよね。驚きました。」

「そう・・・実を言つとね、あんまりその話広めないで欲しいのね。あの後になるんだけど、一度かけたまま解けなくなったことがあってね、たいへんな騒動になって、あたしいろんな人に怒られまくったのね。それ以来、確実なサポートがある時以外、催眠術は封印することにしたのよ。」

「あ、そうだったんですか・・・。部長がですね、催眠術を使った劇の構想を、」

「だめ。だめ。悪いけど、それだけは絶対お断り。」

「そうですね・・・。あ、そうだ、部長、多分またこちらにお邪魔しますんで、キヨン子さん、」

副部長はキヨン子と携帯番号を交換して帰っていった。そのすぐ後から、キヨコも出ていった。

「情報集めてくらあ。」

と言が残して。

ハルヒはといえば、キヨソ子の催眠術に興味をもったようで、なにができるのかしきりに聞いていた。キヨソ子によれば、眠らせる、筋肉を硬直状態にする、抑制を解いて話しにくいことを喋らせる、思い出せないことを思い出させる、その反対に記憶を封印する、など、一通りできるということだった。テキストを読みながら独学で習得したということだった。たいした奴だ。こいつのスキルは底なしか？ ハルヒは何かやってみせるよう要求したが、キヨソ子はサポート役がないから、と首を縦に振らなかつた。ハルヒは長門に話を振り、サポート役ができないかと問うた。長門答えて曰わく、

「できなくはないが、推奨はしない。」

そこでハルヒも不承不承実演見学は諦め、演劇のエピソードを聞くほうに回った。この話にはキヨソ子も乗ってきて、演劇部時代のエピソードのあれこれを面白おかしく語り、俺たちを大いに楽しませた。

そのうちに下校時間となり、俺たちはいつの間にか戻ってきていたキヨコも連れ立って家路をたどった。いつもの曲がり角を過ぎ、俺たち兄妹だけになると、キヨコはおもむろに切り出した。

「情報、集めてきたよ。」

聞こう。

「まず、あの部長さんは、半端でなく体が弱い。朝必ず遅れてくるのもそのせい。朝6時半くらいに目が覚めるらしいけれど、低血圧低体温低血糖の三重苦で8時近くまで動けない。ようよう起き出して登校する段になる。すると大抵、予鈴より若干遅れた時間にか着けない。彼女は朝のうちは走れない。貧血で倒れちゃうから。教師連が気を回して、車での送迎を申し出たことがあったけど、彼女、特別扱いなんかお断りと断っちゃったから、やむを得ず、事実上遅刻締め切り時刻繰り下げの暫定措置つてわけだ。さすがに、生真面目で一本気な病弱少女からは遅刻をとるのも気が引けるらしいあと、いろいろと持病もあって、定期的に病院に通ってる。普通とは逆に、カロリーの高い食事や糖分をきちんとするように指導されてるらしい。でも、甘い物が好きでないし、好物は低カロリー食品ばかりだし、もともとすごく少食のたちだし、思うに任せないみたい。」

全般的にみて好調とは言い難いな。

「そう。以前は公演が終わると無理が祟って一週間ばかり倒れた。いまでは二週間。しかも段々伸びていく一方。医者には入院を勧められているけれど、いったん入院したら多分数ヶ月は出てこないのは彼女自身よく知ってる。」

そうか。大変なんだな。しかしよくそこまで調べたな。

「なあに、どうってことないさ。一番知ってそんな演劇部の人間

とっ捕まえて、『ぶつちやけおたくの部長ってどうよ？』ってインタビューして回っただけさ。悪口言う奴はいなかったな。憎まれてはいないみたいだ。それどころかみんな心配そうだった。愛されるね、あの子。」

それはわかる。手がかかるだろうに、演劇部の面々はあまりそういうことは苦にしていみたいだしな。・・・それにしても、よくみんなそんな失敬な質問に普通に答えてくれたもんだな。すまんなキヨコ、それでもいいぶ分かったよ。

「どういたしまして。これくらいは軽いもんよ。」

「すごいわね、キヨコ。あんたのそういうところには、あたしはかなわないわ。」

キヨコ、お前がそういうことを言うтусごく意外な気がしてならん。心理解析に催眠術。できないことはないみたいなのに。

「そんなこと全然ないわ。あたしは、一介の高校生。特技が変わってるだけ。苦手なことなんか、それこそ山のよう。たとえばね、・・・あたし、友達がほとんどいないのよ。SOS団を除いちゃうと、普段話す人なんて本当に少ないのよ。」

そうなのか？ そりゃ気がつかなかった。それだけ人の心理に通じてたら、たいていのことに苦労はなさそうだけどな。

「逆なのよ。裏目に出ちゃうの。先読みを無意識にやっちゃって気味悪がられたり、ね。・・・中学の頃は『魔女』って呼ばれてたわ。いつの間にか全校に名前が知れ渡ってるし、同級生どころか上級生にまで敬語で話しかけられるし、・・・演劇になんて関わるんじゃないかった。小学生の頃からの情性で演劇部に入ったけれど、あ

たし、ある時気がついたのよ。気がついてしまったという方がいいのかしら、人間、一挙手一投足にすべて理由があつて、その理由を探っていけば、動機、即ち心理を究明することができるんじゃないか、つて。・・・あたしそのときね、ある役がどうしてもうまくできなかつたの。心理がつかめなくてね。でね、その頃から、周りの人間を集中して観察するようになったの。逆説的かも知れないけれど、周囲の人々を理解すれば、役の理解も簡単になるかと思つてね。しばらくするといろいろ見えてきたわ。」

「忘れもしないわ。中一の文化祭。演劇部はいろいろあってそのとき公演をやらなかったから、あたしクラスで占いをやったのよ。返す返すも軽率だったわ。観察の成果を活かす機会だと張り切っちゃってね、結果を全部正直にしゃべっちゃったのよ。だれそれはあの子と付き合ってるけどもうすぐ破局だから告白はその後で、とかあの子は容姿は申し分ないけど性格に少し問題があるからおつきあいはお薦めしないと、そんなことをいろいろね。そしたらそれが全部その通り・・・それ以来よ。あたしのあだ名が『魔女』になったのは。」

そりゃ、そうもなるだろう。俺だってそう呼ぶほうに回るかも知れん。

「演劇部のみんなもそれ以来すっかり変わっちゃったわ。何だかもう、下にも置かぬ扱い。お客さんみたい。いたたまれなかったわ。あたしは普通にみんなの手伝いをしたいのに、・・・。人生相談をやたらに持ちかけられるのもうんざりしたわ。引きも切らずに押しかけて来るの。でね、あたしついにある日、キレて言っちゃったのよ。『今度からあたしに相談があるのなら一人3千円貰うわ!』ってね。・・・翌朝登校したら、3千円握りしめた連中が行列してるのよ。目眩がしたわ。すぐに5千円に釣り上げたけど、却って行列の人数が増えただけだったわ。・・・でも、そんなこと言いながら、結局あたし調子に乗ってたのね。・・・で、あの中二のおわり、『催眠術事件』で散々に凹まされることになるのね。・・・詳しくはもう思い出さなくてもないけど、そのときには本当にいろいろあったわ・・・おかげでひとの見方がシニカルになっちゃってね、そして、ますますよく見えるようになってしまったわ。」

あまり自分を責めないほうがいいぞ。あと、やっぱりお前の観察眼の鋭さには、天性のものがある。普通はどう気づきがあるうが、そこまで見えるようにはならん。それにしても、それじゃあ人間関係に臆病になるのも無理はない。・・・しかしうまくいかんもんだな。普通は人がわからなくて苦労する。こいつの場合はわかりすぎて苦労してる。悩みを誰とも共有できないぶん、いつそう苦悩は深い、ってところなんだろうな、たぶん。

「その通りよ、キヨンくん。・・・あたしは人に近づきたいのに、頑張れば頑張るほど、人はあたしから離れていく・・・疲れるわ・・・とても・・・。」

そう言つとキヨン子は静かに泣き出した。キヨコはキヨン子の肩を優しくさすってやっている。言い遅れたが、俺たちはもうとつくに家に帰ってきていて、ここは俺の部屋。俺は椅子に、キヨコはベッドに腰掛け、キヨン子はベッドを背に三角座りでうずくまっている、というのが今の状況だ。

「最近になつても、人との距離感がうまくつかめない、というよりは、・・・そうね、この際正直に言うわ。・・・判るばかりにわざとかわどいところを攻めて反応を見ようとするというか・・・あたし結構イヤなところがあるのよ。でも、ついやってしまうの。ダメね。しくじってばかり・・・この前もしてかしてしまったわ。」

それは直した方がいい。そんなじゃ人が離れていくばかりだ。

「・・・そうね。やっぱり、自業自得なのね。」

まあまあ。とりあえず、それは誰だ。俺の知ってる奴か？

「古泉君。」

ああ、そういやこの間ものすごい顔色になってたな。

「あれ以来、口をきいてくれないのよ。もともと彼、女性不信の傾向があるみたいだけど、話しかけても聞こえないふりをされるし、電話には出てくれないし、メールを送ってもなしのつぶて……。本当にあたしってバカだね。こんなふうになるのは判ってた筈なのに……。」

キヨン子ちゃん28

ずいぶん極端な反応だな。

「かなり危ないラインだとは思ってたのだけれど、・・・どうやらど真ん中だったみたい。」

お前の見立てを聞いておこうじゃないか。古泉というのはどういう奴だ？

「一言で言ってしまうえば、コンプレックスの塊。自信に欠ける男。彼と話していて苛立たされるのは、自信ありげな様子の陰にある自信の欠落を人に見透かされるせいだとも言えるわ。彼の言動はいちいち非常に防御的。服装がきっちりし過ぎているのもそう。あれは一種の鎧なのよ。彼は誰とも距離があり、また、距離をとりたい。自分に自信がないから、自分の正体が見えてしまうような距離に近づかれることには耐えられない。だから常に過剰に防御的に、つまり無意識のうちに攻撃的になり、言葉の端々にトゲがでて人を苛立たせる。常に自分の正体を隠すために逃げ回っているとも言えるわ。SOS団の中ですら、心を許しているのはキヨンくんだけじゃないかしら。それですら、彼一流の防衛機制は揺るぎもしてないのだけれど。彼、常に必死なのよ。ある意味、『白鳥主義』とも言えるわ。うまくいってるとは言い難いけど。効果的に人をたばかるためにはもっとスマートにやらなければだめ。そうね、例えば朝倉のように・・・でもね、彼、孤独なのよ。だから、本当は自分の正体を見破ってほしい筈なの。本来の自分を生きたい筈。だから、キヨンくんにはたびたび言ってる筈よ。『僕のこの姿は仮のものです』というような意味のことを。それはつまり、キヨンくんが、心理的に彼に一番近いところにいることを意味しているの。」

大して嬉しくはないな。

「キヨソくんはいろんな人の一番近いところにいるわよ。」

と、それまで黙って聞いていたキヨコが口を挟んだ。

「よかつたら、あたしが話しようか？」

いいのか、キヨコ？

「まかshといて。こういうの、あたし得意。」

二カっ、と笑うとキヨコは携帯を取り出して電話をかけた。

「もしもし、いつちゃん？ あたしあたし。」

古泉をあだ名で呼ぶ奴もおおよそ珍しい。少なくとも俺は初めて見た。キヨコはしばらく電話すると、

「今からちよつと話してくらあ。・・・2人も来る？」

そういう訳で、俺たちは制服姿のままお馴染みの駅前にやってきた。古泉はすでに来ていて、背の高いシルエツトが見えている。奴はまだ俺たちに気づいていない様子だ。不意にキヨコが言った。

「ちよつと2人、ここで待ってて。」

キヨコは一人で古泉に近づいた。そして奴を花壇のすぐ横に連れてゆき、自分は花壇の縁に上って古泉を見おろすポジションに立ち、

やおら左腕を古泉の首に回して強引にやつの頭を引き寄せ、そのまま何か小声で話しているふうだった。その間に、俺はキヨ子に問う。なれなれしさについてはどう説明される？

「人との距離感が掴めてないのよ。だから『妙に近い』か『変に遠い』か、要するに不自然な距離になってしまつて、それがまた人を苛立たせるといわけ。」

なるほど。しかしさつきから聞いていたところでは、やはり、第一の責めはお前に帰せられることになりそうだな。そこまで判つてたならなおのこと、お前は変な好奇心を抑えて、自分をコントロールしなけりやならなかつたはず。キヨ子はどうとも答えなかつた。そんなことは、俺なんかが言うまでもなく、こいつの明晰な頭には百も承知だつたはずだ。無言のうち、こいつは好奇心の誘惑に勝てなかつた自分自身を反省しているらしかつた。俯いて、目をしきりにしばたかせていたのだ。ふと見ると、キヨコが手を振つて合図していた。話が終わつたらしい。近づいていくと、古泉とキヨコが低い声で話していた。何の話かは判らなかつたが、古泉の、「あなたに言われると毒気を抜かれますね。」という一言は妙にはつきりと耳に残つた。俺たち2人の姿を認めると、古泉は言つた。

「やあ、これはこれはキヨ子さん。こんな時間に。おやおや、あなたまで。こんな場所で。奇遇ですね。」

奇遇じゃねえだろ、と思つてみると、古泉は自分からキヨ子に右手を差し出し、

「キヨ子さん、このたびは、大人気ない態度をとつてしまつて、申し訳ありませんでした。なにせ、心の一番微妙な部分に突然触れたものですから。こちらといたしましても、心の準備をする余

裕ぐらいは、頂きたかったところではあるのですけれど。」

「いいえ、ごめんなさい、古泉君。あたしが悪かったわ。」

「それでは、もう二度とこんな真似はしないと、お約束いただけますか？」

「もちろん。」

「では、そういって。」

2人は握手し、この話はこれですっかり終わった。何はともあれ、仲直り成立。めでたいことだ。

キヨン子ちゃん29

「ごめんね、いつちゃん。こんな時間に呼び出して。」

「いえいえ、僕としても、気になつてはいたのですけれど・・・。」

「んじゃまた明日。おやすみ！」

「おやすみなさい、キヨコさん。キヨン子さん。あなたも。」

おう。

「おやすみなさい、古泉君。」

古泉はこころもちゆつくりと、宵闇のなかに姿を消した。俺たちも家に戻らなければ。夕飯に遅れると母親に怒られる。

帰りの道々、つれづれに俺は質問した。朝比奈さんはどう見立てる？

「あのまんまよ。素直でピュア。単純素朴。でも、逆にそれが不自然なのよね。あの容貌とスタイルであるピュアさをこの年齢まで維持できるというのは、よほどのお嬢様育ちでもなければ難しいわ。実際そうなのかも知れないけれど。あと、あんなに無防備で詰めが甘いのに、なぜいまだに目立った被害を被っていないのかも、不自然といえば不自然。・・・彼女については、突き詰めて考えるほど、不自然さが際立ってくるわ。でも、あの性格に嘘はないわ。あれは本来の彼女自身そのもの。あれがツクリだとしたら、彼女は本物のプロフェツシヨナルだわ。人間を超えてしまったプロフェツシヨナル。どんな人間にでも自由自在に変わることができる、誰の手にも負えない女。悪魔に魂を売ったエージェント。・・・でも心

配は要らないわ。その兆候はないから。」

そりゃそうだろう。もしそれが本当なら、もう俺は何も信用できない。．．．不自然さといえば、長門あたりが該当しそうな気がするがな。

「そうでもないわ。表面上そう見えるかも知れないけれど、彼女は意外に自然体なのよ。不自然といえば、あたしは断然朝倉の名を挙げないわけにはいかないわ。彼女未だに人気があるけれど、たしかにそれも無理ないのよ。彼女は完璧だったわ。比類なく完璧だったわ。完璧過ぎて、あたしにとっては、少なからず不気味だったわ。本当のいい人にしても、ツクリでいい人を演じてる人にしても、振る舞いや仕草には、ゆらぎ、ぶれ、ためらい、なんらかのノイズがあるものよ。彼女の場合、それが一切なかったの。この上なく滑らかな、迷いのない、自分のすべきことの全てを最初から最後まで残らず知っているような動きだった。．．．たぶん、人間を超えてしまったプロフェッショナルというのは、ああいう動きで特徴付けられるのだから。でもね、彼女はたぶん、恋愛問題で波風をたてることを期待されてたはず。ポジションからみても、容姿からみてもね。．．．でも、彼女は一気に殺人にはなった。．．．死の概念が理解できないくらいだもの、恋愛の概念なんかは単なるノイズ、とるに足らないものかしらと思えなかったのじゃないかしら。そんな迂遠な行動は時間の無駄、と。」

キヨン子ちゃん30

「人間をだまくらかすためには、そんなに手の込んだまねをする必要はないのだから。偽善の親切、偽りの笑顔、うつろな優しさ、空っぽの尊敬、口先だけの約束。そんなもので充分。」

・・・お前は本当に俺と同じ年なんだろうな！ なんなんだ、その厭世的な見解は。

「朝倉を見ていればわかるわ。少なくとも、あたしにはそう見えただから。もちろん、あたしは朝倉が大嫌いだし、そのせいで評価が歪んでいるのかも知れない。・・・キヨンくんを殺そうとするだなんて、許せないわ。」

実際に刺されもしたしな。

「あの世界での彼女の行動こそ、彼女が空虚な人間であったことの証明になるの。宇宙人でなくなつた以上、彼女に残るのは、『有希ちゃんのバックアップ』という、もはや無意味な目的意識だけ。かくして、彼女は『有希ちゃんのためにキヨンくんを殺そうとする』真性の、見事に倒錯した、立派な『ヤンデレ』に堕することができたというわけ。」

朝倉の評価が最悪なのは俺とて同じだが、お前は俺よりもずっと辛辣だな。

「肉親を殺しかけた人間に評価の余地を認めるのは難しいわ。・・・ところで、キヨンくんは、ハルちゃんについては聞かないのね？」

「

ハルヒについて聞いてもなあ。今更なにか聞くことあったかな？

「さすがねキョンくん。ハルちゃんのことは何でも知ってるのね。」

「いやいや、そうじゃないぞ。なんだその悪戯っぽい笑みは。キョコまでなんだ。微笑みながら腕を組んで頷くんじゃない。なんなんだ2人してその「あたしたちなんでもお見通し」ってな空気は。勘弁しろよ。」

「ひとつ教えてあげるわキョンくん。」

なんだ。

「SOS団には序列があるわよね？」

俺が最下位だがな。

「その序列はね、ハルちゃんとの精神的な距離を表現してるの。」

「古泉が一番近いってか。」

「違うわ。ハルちゃんを除いて、逆比例の関係にあるのよ。地位が高いほど遠いの。各人の名前の呼び方にそれが表れてるわ。『副団長・古泉君・名字君付け』『副々団長・みくるちゃん・名前ちゃん付け』『団員・有希・名前呼び捨て』『団員その一・キョン・あだ名呼び捨て』。ほら、ちゃんと秩序立ってるのよ。ハルちゃんの間関係のセンスは実際たいしたものだわ。まず古泉君。以前彼が言っていたことを思い出して。彼、『僕は涼宮さんに心に土足で踏み込まれるようなことをされたことがあります』というようなこ

とを言っていたはずよ。コンプレックスの塊で、常に内心小心翼翼々としている彼、人との距離感が掴めない彼に、ハルちゃんはきちんと適正距離をとっているのよ。もし人間関係に路上教習があつて、あたしが試験官なら、『適正車間距離合格』で太鼓判を押すわ。したがって、彼の地位はハルちゃんに次ぐ序列第二番、なかばお客さん扱いで、雑用は免除。」

お前なら立派な試験官になれそうだが、合格できる人間はそう多くなさそうだな。

「でも、ちょっと待てよ。」

俺は問う。

「なにかしら、キョンくん。」

ハルヒが古泉には適正車間距離なのは理解した。じゃあ、朝比奈さんに対してはどうなるんだ？ 追突接触しまくりで全然謝りもしない悪質ドライバーにしか見えないがな。

「それはその通りね。でもね、キョンくん、みくるちゃんてね、あれで案外立ち直りは早い子なのよ。順応も早い。でなきゃとつくに姿を消してるわ。ハルちゃんはね、唯一、みくるちゃんを女性としてのライバルとして見ている。だから、ことさらにおもちゃにしたがるのよ。でも、ある程度は遠慮もある。だから序列第三番。」

残るは長門と俺か。

「そうね。有希ちゃんはね、ハルちゃんにとってはむしろ保護対象って感じね。キョンくん前、言ってたでしょ。有希ちゃんを傷つ

ける人間は、ハルちゃんが決して許さない、って。要するにそういうことなのよ。みくるちゃんが嫌がつてるのに言い寄る人間がもしいたとして、ハルちゃんはもちろん激怒して、啖呵もきるだろうし、場合によっては腕力も振るうと思うわ。でもね、有希ちゃんに同じことをする人間がいたら、まず、ハイキックや右ストレートが飛んでくるでしょうね。突然警告なしで投げ飛ばされて舗装道路に叩きつけられるかも知れないわ。で、気が済むまでぶん殴ってから、気が向いたら言い訳を聞いてやらないこともなくはない、ってところかしら。もちろん、あたしも参加するわよ。非力とはいえ、そんな奴ばらには鉄拳制裁を見舞わずにはおかない。キョンくんもそうよね？」

当然だ。人間としての誇りにかけて、それだけはやらずにすませるわけにはいかない。

キヨン子ちゃん31

さて、今、俺たちはとつくの昔に家に帰ってきて、夕食をとり、それぞれ入浴を済ませ、なんとなく俺の部屋に集まって懸案事項について討議を続けている、という格好だ。

「つまり、そういうこと。有希ちゃんはハルちゃんにとって、危なっかしくて目が離せない、親類の子の距離感。序列第四番。」

長門が危なっかしいというのはあたらないう気がするが。

「ハルちゃんはね、多分、有希ちゃんの本質を直感的に察しているのだと思うわ。で、最後はキヨンくんね。序列第五番、団員その一。」

下っ端の使いっばしりともいうな。

「そうね。でも、キヨンくん、キヨンくんはいつも扱いがひどい、って嘆いてるけど、なぜだかわかる?」

俺が下っ端だからだろう。

「なぜ下っ端なの?」

知るか。ハルヒが決めたんだろう。

「なぜ、ハルちゃんはそう決めたのかしら?」

俺にわかるわけないだろう。

「ねえ、キヨンくん、思い出して。ハルちゃんは決して、人の不可侵な部分を侵略はしない子よ。他人である限りは。」

つまり？

「キヨンくんはね、ハルちゃんにとってはね、すでに身内なのよ。だから、必要以上に気を遣うことをしないの。」

人を勝手に身内にカウントしないで欲しいもんだ。キヨンは微笑を浮かべて黙った。

「ねえキヨンくん、ハルちゃんはある日突然、思い立ってSOS団を作ったんだよね？」

えらく懐かしいことを思い出させるじゃないか。あれから長い年月経ったような気がするぜ。忘れもしない、あの時のハルヒの熱帯の花のような笑顔……。

「それよ、キヨンくん。」

それ、とは？

「ハルちゃん、たぶん、そのとき久しぶりに笑ったはずよ。」

……そうか？

「4年以上の間、ずっとふさぎ込んでいたハルちゃんが、久しぶりに笑いかけた相手がキヨンくん。……このことの意味、もう少し考えてみてほしいわ。」

しばらく、沈黙があつた。

俺はふと思ひ出し、ハルヒから聞いた話を二人に聞かせた。野球場と、日本の人口と、ハルヒの幻滅の話を。

話が終わると、再び沈黙があつた。キヨ子はキヨコを見、キヨコはキヨン子を見た。そして、キヨン子の口から思いがけない言葉が飛び出した。

「あたし、その話、知らないわ。」

キヨン子はおそろしく真剣な表情で言った。

「キヨンくん、その話、他の誰かにしたことはある？」

「いや。」

「そう。この話は誰にもしないほうがいいわ。なぜなら、これはハルちゃんの心の秘密。神聖な秘密。理解されないことを理解しているがゆえに、誰にも語られなかった、自我の芽生えの物語。あたし、認識を改めなきゃいけないわ。・・・キヨンくん、あたし、ひとつ確実に断言できるわ。」

「なんだ。」

「キヨンくんは、いま、心理的に、誰よりもハルちゃんに近いところにいる。そう、両親よりもね。ハルちゃん、その話は両親にもしてないはず。両親にしてない話をキヨンくんにはする。つまり、心理的に親よりもキヨンくんの方が近いところにいるということ。あと、ハルちゃんはキヨンくんをとて信頼してる。そんな秘密を

打ち明けるということは即ち、キヨンくんが当然秘密を守ってくれるとの信用がなければできない。」

・・・それを知って、俺はどうすればいいんだ。

三度、沈黙があつた。ふいに、ここまで黙つて聴衆役に徹していたキヨコが言った。

「もうこんな時間だよ。あとは明日でいいよ。」

キヨンは容疑者を追求しきれなかつた刑事、とでも表現したいような表情で立ち上がり、

「おやすみ、キヨンくん。」

と、立ち去つていった。キヨコも、

「お休みキヨン。」

と、去つた。

独りになつて、俺は考えた。理解できない話じゃない。ハルヒは俺を信頼してる。俺は？ ハルヒを信頼しているか？ していないとはいえない。とりあえず、見失つて一番心細くなる人間はハルヒだ。あの12月の事件。ハルヒのいない世界は、俺にとっては、見慣れているのに見知らぬ世界だった。ハルヒの不在は、大いなる喪失だった。あんな経験はもうごめんだ。そして、あつちの世界のハルヒは、非常識な特性のない、単なる社会性に若干の問題があるだけ、要するに普通に非常に非常識な女子高校生で、古泉はニヤケながらも警戒心の強い高校生、朝比奈さんはただの萌えキャラ、長門にい

たつてはすっかり変貌していた・・・長門がやったのだから当然ともいえるか。・・・しかし相変わらず長門に頼ることが多いな。あんまり頼らないようにしようとは思っただが・・・。

そんなことを考えながら、俺は眠りの中に沈んだ。

キヨン子ちゃん32

「キヨンくん、朝ー！ 起つきろー！」

「キヨンー！ グーテンモルゲン！ とりゃー！」

天地がひっくり返ったような騒動で俺の睡眠は打ち切りとなった。妹と思しき小さな手が俺の手を掴んで引っ張り、毛布がひっ剥がされて俺は床に転がり落ちる。なんだなんだ世界の終焉か？ あとなんでドイツ語。

起き上がってみると、妹といっしょにキヨコがおり、俺からひっ剥がした毛布を手に、満面の笑みを浮かべていた。さすがにこう楽しそうだと、怒る気も失せる。

「たまにはダブル攻撃も楽しかる？ キヨン。」

キヨコが言う。

正直言おう。楽しくない。ぜんぜん楽しくない。でも、言ったところで誰の耳にも届かないなら、言わぬが花というものさ。

さて、その同じ日も夕方近くになり、ふたたびSOS団一同は部屋に集合していた。ハルヒだけは掃除当番と日直に当たっており、まだ来ていない。各人がお馴染みの位置に落ち着くか落ち着かないうちに、ドアが勢いよく開き、演劇部長が登場した。

「キヨン子さん、今日こそは心を決めてもらおうわ！」

「あ、……こんにちは、部長さん。」

キヨン子はいささか辟易気味の表情で応える。

「キヨン子さん、あたし、あなたについてはいろいろ調べてるのよ！ 中学の頃、『魔女』とか呼ばれてたそうじゃない！」

「それはそうですけど。」

「あと、『人の心を折る女』とも！」

「……やなこと思い出させてくれますね、部長さん。」

そのとき、俺はキヨン子の顔つきが変わったこと、ふだん漂わせている、春先の早朝のような空気が、より冷たく鋭い、厳冬の深夜のような雰囲気に変化したことを感じた。……どうやら部長さんはこいつの逆鱗に触れてしまったらしい。

「素晴らしいわ！ それこそ真の役者というものよ！ あたしにはわかるわ！ あなた、そうして人の反応をみていたのね！ あなたは役者としてしか、……」

「ねえ、部長さん。あたし、前から言わしてもらおうと思っただけのことがあるんですけど。」

いい調子で喋り続けようとする部長を遮って、キヨン子は静かに部長の過誤を指摘しはじめた。

「第一、部長さん、そんなに体が弱いのに、何故無理をし続けるの？ あなたが無理をし続けるのは自分自身のためだけじゃないの？ 演劇が自分の生きがいとよく言ったものだわ。その無理がどれだけ周囲の人間を苦しめているか、どれだけ人に気を遣わせているか、考えたことがいっただいあるの？ たいした利己主義者だわ。あなたは。独善家と言ってもいいわ。自分だけがよければそれでいい。」

いのね。第二に、その無理する生き方が、演劇の評判を下げるだけの役割しか果たしていないことに気がつかないの？ そんな無理をしなければ演劇はできないのか、という誤解を広めるだけであることに？ あと、あなたのそのキャラクターはツクリね。不自然極まりないわ。部長さん、結論を言つとね、あなたは自己憐憫に酔っているだけのからっぽな女よ。鼻持ちならないうたらないわ。」

キョン子は淡々と言い放った。その声たるや、例えて言うならば、冬のさなかに彼女に屋外に呼び出され、もう決めてしまった別れの言葉を顔を背けたまま告げられているごとく、虚ろに、寂しく響くものだった。俺にはもとよりそんな経験はないけれども、そんな感じでいたい間違いはないと思う。実際、俺はなんだか肌寒く感じた。朝比奈さんも同じようで、腕で体を抱くようにしている。古泉は、俯いて、どこことなく、苦い薬を含んだまま我慢しているふうである。長門ですら、目前で演じられている一幕に興味を惹かれたように、顔をあげてこちらを見ている。キョコは苦笑いを浮かべて腕組みしている。そして、当の部長さんとはいうと、キョン子の言葉を聞いているうちにみるみる真っ赤になり、ついで青くなり、いまや土気色、目はつるみ、唇は震えて何か言いたげだが言葉にはならず、よろよろと後ずさって壁にぶつかり、そのまま壁にすがって体を支えながら、消えるように立ち去った。演劇部員たちの声が聞こえる。

「部長！ 部長！ いったいどうしたんです？ しっかりして下さいー。」

キヨ子ちゃん33

喧騒が遠ざかって聞こえなくなると、キヨ子は俯いて、どこか苦しげに言った。

「あたし、また、折っちゃったかしら？」

「うん、折れたね。」

キヨコがこともなげに答える。

「でも、この際仕方ないよ。あの部長さんの無闇な頑張りぶり和我慢ぶりが周囲の負担になってるのは実際その通りだし、前話聞いたときも、演劇部員全員がもういつそ入院してほしいと漏らしてたしね。痛々しくて見てられない、ってね……。ああいう人は気力で体をもたせてるから、気力が尽きるまで頑張り続ける。決定的な悲劇を避けようと思うなら、いつそ一度心を折ってあげたほうがいいんだ……。それにしても賭けではあるけれど。」

「キヨ子さんの諫言はこたえませす。」

不意にニヤケ野郎が、珍しくニヤケないで口を挟んだ。

「ほんの少しでも心当たりがあると、そこをとっかかりにして骨身に響きます。」

「部長さん、大丈夫でしょうか……。」

「心配いらぬよみくるん。心が折れたただだから。このまま無理させてたら命が折れるかも知れない。それに比べりゃ……。」

朝比奈さんはなんと答えず、

「お茶、淹れますね。」

と言い、俺が行ってきます、と口を挿む間もなく、やかんを持って出ていった。朝比奈さんが戻ってくるのとほぼ同時にハルヒがやってきた。演劇部員たちとは完全に行き違いになっただけ、彼女らに対する言及はなかった。ハルヒはキヨ子に話を振り、演劇部時代のエピソードの続きを求めた。キヨ子は気を取り直して話しはじめた。そして、ゴキブリ嫌いの下級生がゴキブリ出現にパニックたあげく、殺虫剤と間違って先輩の私物である制汗剤を一本まるごとそこいらに撒き散らし、ゴキブリは死なないわ、あたりには制汗剤の香料臭が充満するわ、先輩とその子は険悪になるわ、といった話をしている最中、救急車のサイレンが近づいてきて、近くでやんだ。しばらくするとまた聞こえはじめ、遠ざかっていった。ハルヒは、

「かなり近いわね。」

と呟いたが、それ以上は注意を向けなかった。話が一段落したところで、キヨコがたまにはおやつでもどうだろうと提案し、各人に注文を聞き回って、

「言い出しっぺが行ってくらあ。」

と、出ていった。30分くらい経って戻ってきたが、それっきり、さっきの件については特に何も言わなかった。だが、俺にはわかっていた。こいつはまた情報を集めに行っていたのだ。

今日はハルヒはキヨ子と二人で帰って行き、残りのSOS団のめんめんは固まって家路をたどる。俺は報告を促す。

「。UJIC」

キヨ子ちゃん34

「部長さんは突如高熱をだして、救急車で搬送された。とりあえずの診断は過労、睡眠不足、自律神経失調症、栄養失調。」

キヨコが報告する。

「あと、持病の悪化の兆候あり。緊急入院。面会謝絶。・・・心を折られたんで、一気にきたんだろうな。たぶん。・・・あのあと、部長さんは放心状態みたいに、誰の質問にも答えずにふらふらと歩き続けて、一階のフロアにたどり着いたところで崩れ落ちた。いつも通り搬送しようとする、体が異様に熱い。発熱はあまりしない人だったから、これはただ事じゃないと、副部長が119番通報、救急車に付き添いで乗っていった、そうだ。」

そうか。

「余波を受けただけの僕でも相当こたえるのですから、照準を合わせてこられたらひとたまりもありませんね。正直、僕はキヨ子さんに照準をあわされたら一撃で崩壊です。・・・そうなる、もう、ここにはいられないでしょうね。・・・実際、この前、幾つか遠回りな指摘をされた時点で相当危なかつたのです。彼女にとって、ほんの威嚇射撃だったのでしょうけれど。・・・彼女の言葉には、ミサイルのような破壊力があります。」

「あなたを折るつもりは毛頭ないから安心していいわ、古泉君。」

いつの間にか合流していたキヨ子が言う。

「これはこれはキヨ子さん。では、この際真つ向からお尋ねしますよ。僕を折るのにどれくらいかかりますか？ 参考までにお見立てを伺いましょう。」

「ずいぶん正直な質問ね、古泉君。では、あたしも、真つ向から正直に答えなければね。そうね・・・30分もあれば、たぶん、存在基盤を完全に粉碎できるわ。」

「おやおや・・・お見立ては30分ですか・・・では、僕はたぶん、15分ももたないでしょうね。」

「人の心を折るだの折らないだの、そんなお話はもうやめてください！」

意外にも、朝比奈さんが声をあげる。

「みんな変です！ そんなお話をこともなげに・・・。キヨ子さん！ あんなに頑張ってる部長さんにあんな酷い言葉を投げつけるなんて！ 酷すぎます！ もっとほかに言い方があるはずです！ あたしは納得できません！ そんなことをさも当然みたいに！ キヨンくんもキヨンくんですよ！ お兄ちゃんとして、何か言ってあげるべきです！ でないと・・・でないと、キヨ子ちゃんは、完全に駄目になっちゃいます！ こんなに賢いのに、人間として駄目になっちゃいます！」

朝比奈さんはそう言つと泣きだした。

心優しい朝比奈さんには、この一連の話題は耐え難かったものようだった。見ると、キヨ子も泣いていた。キヨ子は、朝比奈さんを抱きしめて、

「ごめんね、ごめんね、みくるちゃん。」

と泣いていた。朝比奈さんは両手を可愛いげんこつにしてキヨ
子をばこぼこ殴りながら、

「キヨン子さんのばか！ キヨン子さんのばか！ 心なんて、そ
んなに簡単に折っていいものじゃないはずです！ 大事にしてあげ
なきゃだめです！」

と、泣いていた。

俺には、キヨン子が人に対して冷淡になり、心を折り、氣力を挫
き、希望を砕いてきた理由が解るような気がしていた。長らく孤独
だったせいだろう。その点ではハルヒと同じと言えなくもないが、
自らすすんで孤立の道を歩み、孤高の高みから天下を睥睨していた
ハルヒと、うかうかと自分の隠された能力を目覚めさせてしまった
ばかりにいつの間にか孤立し、気がつくとも孤独な高みに上り詰め
てしまっていて、周囲には誰もいなくなってしまっていたこいつと
は、その孤独の質が異なる。

キヨン子ちゃん35

しばらくして落ち着いた朝比奈さんは、恥ずかしそうに、しきりにキヨン子に詫びながら、いつもの曲がり角で去っていった。

「朝比奈さん技あり、と、いったところでしょうか？」

古泉はそう言って、答えを待つわけでもなく去っていった。長門はとつくに姿を消しており、いつもの道にはるかに遠く、去っていく後ろ姿がみとめられた。

「なあ、キヨン子よ。」

「なに、キヨンくん。」

「俺が言うまでもないかも知れんが、この話は、朝比奈さんに無理ありだ。・・・少なくとも、俺はそう感じた。」

「そうね。その通りだね。・・・それにしてもみくるちゃん、なんて純な子。癒されるわ・・・。」

その後、兄妹3人の帰宅の道々、キヨン子は語った。

「催眠術の失敗があつたのが二年の終わり。いろいろあつて、あまりすぎて、三年に上がったときには、あたしちよつとやさぐれたような状態だったのよ。いろんなものが苛立たしくて仕方がないの。それで、気に障った連中を次々と・・・。」

「キヨン子ちゃんは嫌みな優等生、不良グループ、クラスの嫌われ者の押し付けがましい女生徒なんかをどんどん撃破して回った。その結果、優等生は引きこもりに、不良グループは勢いを失って解体、女生徒はしばらく学校に出てこなかった。」

言いにくそうに黙ってしまったキヨソ子、キヨコが引き継ぐ。

舌鋒をもって進撃するキヨソ子は誰にも止められなかった。むしろ、キヨソ子が撃破した連中は、誰かが止めないだろうか、と思われていたような人々だったために、あえて誰も止めなかったのかも知れない。とにかく、優等生は泣きながら学校を走って立ち去っていくのを見られたのが最後だった。不良グループの場合、目撃者の話ではすべてが終わったあとのようだったが、リーダーが地面に突っ伏しておいおい泣き崩れているまわりで仲間全員がうなだれて立ち尽くしていた。その日以来、彼らはつとに勢いを失い、やがてグループが瓦解して一巻の終わりとなった。女生徒はしばらくして登校するようになったが、すっかりしおらしくなってしまって、以前の面影はまったくなかったという。しかし、真に決定的な事件は6月に起こった。いまだに語り草になっている、例の『化学教師狂乱事件』である。当時、誰からも嫌われている化学教師がいた。キヨソ子はこの教師に対決し、その高慢ちきなプライドを木っ端微塵に粉碎、ありとあらゆる誤謬、ありとあらゆる失敗を残らず指摘し、教師としてどころか人間として生きる資格に欠ける、と難詰した、らしい。・・・やさぐれたキヨソ子がどんな恐ろしい舌鋒を振るうか、俺は想像もしたくないね。・・・その結果、教師は狂乱状態に陥り、とっさに逃げ出したキヨソ子は無傷に済んだが、大ハンマーを振るって暴れまわり、化学準備室と化学実験室が文字通りめっちゃめちゃに破壊され、長年かかって買い貯めた高価な実験器材が全部台無しになり、しまいには火災が発生してなにもかも燃やしてしまい、被害額は実に一千万円を軽く上回るという事態になった。破壊されたガス管からもれたガスに、電気火花が引火したとのことだった。教師は火災の前に救出されてはいたが、粉碎状態の薬品棚のそばで、全身に薬品火傷を負いながら転げ回って泣き叫んでいるという尋常ならざる状態であったという。彼は直ちに停職となり、ほどなくして退院を待たずに懲戒免職となって、学校から永久に姿を消

した。賠償金の請求で破産し、奥さんと子供は逃げて一家は離散、のちに離婚となり、じつにわかりやすく、この男は破滅したわけだ。
・・・やさぐれキョん子の舌鋒、恐るべし。

キヨン子ちゃん36

「それにしても、中学三年生に撃破される五十男というのもどうかと思うな。」

「普通はそう思うかも知れない。でも、キヨン子ちゃんの実力は知ってるはずさ。ほかの人ならたぶんこうはいかない。」

キヨン子は黙ってしまい、家に着くと部屋に引っ込んでしまった。

「あの事件はキヨン子ちゃんにとっては決定的な事件だったのさ。それまでもキヨン子ちゃんは孤立してた。でも、これ以降はその孤立がいよいよ深いものになっちゃった。悪口言う人間すらいなくなつた。怖がられるか、尊敬されるか、無視されるか。周囲のみんながこの3つのどれかに分類される状態。もう、キヨン子ちゃんも耐えられなかった。彼女私立に行つて、エスカレーターで大学まで行けたんだけど、中学卒業でその学校をやめて公立に移つた。」

俺は想像した。中学の卒業式、どうせ高校でも会えるからとみんなが笑いさんざめく中、もうどの人の輪にも入れないあいつが、誰に別れを告げるわけでもなく、誰に別れを告げられるわけでもなく、独り寂しく、二度とはくぐらぬ校門を後に、静かに去っていく。あいつの性格からして、高校第一日目になって初めて、不在が知られたことだろう。

「でも、どうだろうね？　ここまではキヨン子ちゃんの話をもとにしてきたけど、そんなに嫌われてたんだろうか？　あたしはそんなはずないと思うんだけどな。キヨン子ちゃんの撃破した連中は誰一人とっても周囲の脅威になつて人間ばっかりだった。」

ここは俺の部屋、俺は勉強机に、キヨコは俺のベッドで足を投げ出し、壁にもたれて、実にリラックスした様子である。

「あたし、こんな話聞いたことがある。卒業前のある日、個人写真を撮影したときのことだ。一応卒業アルバムを作るからそのためのもんさ。キヨン子ちゃんの番、彼女すごく表情が固かった。そこで写真屋が一言。『ちよつと笑ってみてくれませんか。』そのとたん、『おーい！ 魔女が笑うつてよ！』と、クラスの男子の誰かの声がかかり、クラス全員が彼女の前に集まってきた。そのときキヨン子ちゃん、照れたように、はにかんだ微笑みを浮かべた。クラス全員に注目を浴びたんだから、まあ照れもするさ。その瞬間フラッシュがたかれた。どっかに卒業アルバムがあるはずだから見てみるといいよ。で、クラス全員がどよめいた。男女とわず声が上がった。『可愛いじゃん！』『いつもそうだといいのに！』みんなが賞賛する中、キヨン子ちゃんは恥ずかしくて出て行っちゃった。・この話はね、キヨン子ちゃんからはあたし聞いたことがない。たぶん彼女、好意的な視線はスルーしちゃってるんだ。結論を言っとね、彼女けっこう人気者だったはず。後悔で心を閉じてしまったから、結局彼女はその人気を享受できなかった。もともとは気の優しいたちだから、人の心を折りまくった自分自身を許せなかったんだろつな。」

「それにしても、」

俺は問う。

「よく問題にならないもんだな？」

「あたし、追跡調査したことがあるんだよね。あたしも気になつたもんだから。さっき話にでてきた連中についてだと、まず優等生

はそれつきり学校には行っていないけど、大検目指して独学中のとことだ。不良どもは完全に更正して普通の高校生になってる。女生徒はそれこそ普通の女子高生として、普通に青春を謳歌してる。そして例の教師は、田舎に帰って実家の工場を手伝ってる。学校をクビになって帰ってきたら却って真人間になってたというわけで不思議がられてるそうだよ。奥さんと子供は奥さんの方の実家にいるけど、割と裕福な家だし、特に不自由はないらしい。ついでに言うと、学校への賠償金は実家の方で用立てたらしいね。結局。」

「つまり、なにか。結果的に、実害はほとんどなし、というわけか。」

「そうだね。あと、キヨン子ちゃんの諫言を受けた人間はみんな、あとで彼女に感謝を感じるようになるらしい。こういうものもある。」

そう言ってキヨコは手紙を一通取り出してきた。宛先はキヨン子の名前になっている。封筒に差出人の記入はない。

「前キヨン子ちゃんが通ってた学校に届いてきたのさ。読んでみ例の教師からさ。」

中の便箋には、一連の感謝の言葉が綴られ、立ち直りへの決意が述べられ、最近になってようやく、元妻子と連絡をとることができるようになりました、と結ばれていた。

「刑事が元受刑者から受け取る手紙、といった感じだな。」

「的確な例えだ。その通り、キヨン子ちゃんは刑事になればいい仕事するだろうね。」

俺はふと考える。この2人は、互いに補綴しあういいコンビだ。もし、こいつらが車の両輪のように協力しあいながら警察界を闊歩

し始めるようなことになったら、犯罪者どもにとってはちょっと困ることになりそうだと。

「だからあたしの見たところ、部長さんもそうなる公算が大きい。たぶん、今頃は自分を見つめ直す段階に入ってることだろうさ。」

「そうだといいがな。相当強烈なショックだったみたいだからな。」

「これまでのパターンからみてまず間違いなし。大丈夫だよ。」

こいつの保証は妙に心強いな。今はそれが有り難いが。

キヨン子ちゃん37

で、その次の放課後。部室にみんなが集まっていると、副部長さんがやってきた。

「キヨン子さんはいますか？」

「ここよ。・・・部長さん、容態はいかが？」

「今のところ落ち着いています。で、あおう、そのことで話があるんですが。」

「・・・言い種が酷すぎるといふ批判なら、受けないわけにはいかないわ。」

「いいえ、そうじゃないんです。むしろ、部長に代わってお礼を言いに来ました。キヨン子さん、部長はあなたに言われたことについて、言われても仕方がないこと、要するに受け入れるほかない現実だと、納得したんだそうです。本人がそう言っていました。」

「面会謝絶だつて聞いたけど。」

「容態が安定して解除になりました。部長はぜひ、あなたにお見舞いに来てほしいと。」

「必ず行く。行かせてもらうわ。」

「よかった。部長、喜びますよ。あなたのファンですもの。」

「まだ、あたしのファンなの？ あれだけ言われたのに。」

「むしろ、あなたに言われたので、却って心に響いたようなんです。惚れ直した、つて言っていました。あと、演劇部員一同からも、お礼を言わせて下さい。あなたでなければ、部長にああは言えませんでした。言ってもたぶん、心に届かなかつたでしょう。あの通りの人ですが、あたしたちにとっては、ほかに代わりのいない部長なんです。ありがとうございました。」

副部長は深々と一礼して立ち去った。

「人の心を折ってお礼を言われのは変な気分だわ。」

キヨンは苦笑いを浮かべて言う。キヨコはニコニコ笑いながら、
「ま、万事丸く収まったってことで、結果オーライでいいんじゃないか？」

などと言っている。

「ところでキヨ子ちゃん、例の件はどうなってるの？」

ハルヒが口を挟んだ。例の件？

「OKよ、ハルちゃん。先方の了解も取り付け済み。」

「わかったわ。はい、みんな注目！ 重大発表を行います！」

やれやれ、今度は何だ？

「次の日曜日、朝9時、いつもの駅前に全員集合！ 以上！」

・・・それだけか？ 趣旨は？

「キヨン、当日にやらなければ明かすことのできない企画というものもあるのよ、この世には。今回の場合まさにそうだわ。いい、キヨン。当日になれば判ることなんだから、話を急いじゃだめ。いわね！」

いつこうに要領を得ない発表ののち、SOS団は帰宅の途につい

た。ハルヒが朝比奈さんと先頭をいき、長門がその後、古泉、俺、キヨコとキヨソンの順番で続く。

「涼宮さんは何かしら、涼宮さん自身にとっては思い切った企画を立案しておられるようですよ。キヨソさんの協力を得ながらね。」

スマイル超能力者が解説する。

「ハルヒが思い切るだなんて、大層な企画なんだろうな？」

「そうですね。少なくとも、涼宮さんにとっては。」

内容を教えて欲しいもんだね。

「いやあ、実を言うんですけどね、僕もよくは知らないですよ。涼宮さんが教えてくださらないもので。」

なんだ、それっぽいことを言うから知ってると思うじゃないか。紛らわしい。

「知ってるのはあなた、涼宮さんだけですよ。あとキヨソさんだね。」

もういい。黙ってる。

人畜無害スマイル野郎はいつもの曲がり角で去っていった。朝比奈さんも帰っていった。しかし、いつもと違って、長門がそのまま俺達についてくる。ん？ なんだ？ どうかしたのか長門？

「ハルちゃんはいよいよ打って出るわよ。」

出し抜けにキヨ子と言った。

「日曜日、佐々木ちゃんとその仲間たちと、合同ミーティングと
いうか、顔合わせをしようってわけさ。」

キヨコがその後を引き継ぐ。

「天蓋領域の所謂『人型イントルダー』であるところの、『周
防九曜』なる個体も参加することになる。かかる状況において、
天蓋領域側がどのような行動を起こすか、あるいは起こさないかは
不明瞭であるが、何らかの行動にでてくる可能性はかなり大きい。
以前のように、私の行動不能を謀る可能性をも否定しがたい。」

長門が気になること言う。俺はふと、思いついたことを口にした。

「なあ、長門よ。」

「なに。」

「九曜とはコミュニケーションが可能なのか？」

「かかる個体との意思疎通は不可能ではないと推測される。試行
したことはないが。」

「長門は統合思念体の代表。九曜は天蓋領域の代表。お互いに、
例えて言うなら外交官として、親玉同士の意思疎通を図ってみたら
どうだろう。いわば、宇宙大使とでもいうかな。」

長門はふつと黙り込んだ。そのまましばらく黙っていた。俺がさ
すがの長門も気を悪くしたんじゃないかと気になりだした頃、長門
は出し抜けに口を開いた。

「それは・・・とても新しい発想。極めてユニークな意見。現在、統合思念体に上申し、検討中。協議が少し長引いている。・・・協議終了。直ちに実施段階に移行せよとの指示。」

「ようし、善は急げだ！ まかせとけ！」

キヨコはそう言つと、携帯を取り出した。

「あ、もしもし、新川さんですか？ お久しぶりです。今、お車空いてます？ ちょっとお願いしたいんですが。」

え？

数分後、新川さんのタクシーが颯爽と登場した。

「新川さん、お世話かけます。そんじゃちよつくら、ユキリンをキューちゃんのとこに送つてくらあ。」

運転席から新川さんが会釈する。助手席にはなぜだか笑顔で挨拶する森さんの姿もある。

「お久しぶりです。お変わりありませんか？」

返事をする間があるかないかのうちに、キヨコは長門を後部座席に押し込んで自分も乗り込み、

「じゃあ行つてくらあ。キヨ子ちゃんと先に帰つておくれ。

んじゃっ！ 新川さん、お願いします！」

車はあっという間に走り去り、俺はキヨ子と二人でその場に残された。それにしても・・・いろんなものを駆使してるなあ、キヨ



キヨン子ちゃん38

キヨン子と二人して取り残された俺は、言われた通り、先に帰っているより仕方がなかった。道々俺は質問した。佐々木たちについてはどう見立てる？

「逆に質問するわキヨンくん。キヨンくんはどう思ってるの？」

そうだな・・・まず佐々木だが、風変わりではあるな。で、頭脳優秀であることは確かだ。あとは・・・そうだな、なぜいきなり俺を親友呼ばわりしただしたのかがよくわからないな。橘京子についてはいい印象をもてないな。誘拐犯の一党であることは大減点項目だ。見かけ普通なのが余計不気味だ。藤原とかいう態度の悪い未来人については問題外だな。不愉快極まりない。朝比奈さんは「悪い人には見えない」と言ってたがそれこそ「騙されちゃいけません、朝比奈さん！」と、声を大にして忠告したいね、俺は。で、九曜とかいう、『天蓋領域』の『人型イントルダー』にいたっては、もうなにがなんだかさっぱりわからん。あの館の件の首謀者の手先らしいから、はじめからあまりいい印象はないな。控えめに言っても

「九曜ちゃんについては確かに情報が少なすぎてよくわからないからひとまず置いておきましょう。そうね、まずは藤原君から。まず、彼の派遣元はあまり厳密に作戦を立案してるわけでもなければ、人員の訓練も不行き届き。でなければあんな態度はとらないはず。あんまり大規模な組織じゃないし、命令系統もあまり行き届いてないみたい。悪い人に見えないのもある意味当然で、彼、素なのよ。ツクリがないから、自分の感情をそのまま出してるから、そう見えるの。彼の原則は基本的に単純で、組織論理よりは自分の感情に重きを置いている。みくるちゃんとは対称的だわね。みくるちゃんは

みくるちゃんなりに組織論理の歯車の中で苦勞して、任務のためにいるんなものを犠牲にしてるんだから。彼は自由人と言ってもいいわね。大成するタイプじゃないけど。」

ふうむ。

「で、次は橘京子ちゃんね。彼女は普通の子よ。基本的にはね。善良無垢、単純素朴、純正標準な、そこいらの女子高校生だわ。ただ一つ、佐々木ちゃんに対する態度を除いてはね。彼女、心酔者なのよ。この点が彼女のとても厄介な特徴なの。佐々木ちゃんとその能力と全人格とに完全に信賴依存している。佐々木ちゃん自身がたじろぐほどの強さでね。でもね、橘ちゃんは、佐々木ちゃんの真実が見えてない。そこでキョンくんに聞くわ。佐々木ちゃんの内面世界は、どんな場所だった？ あたしは見たことないのよ。」

そうだな、セピア色があった、神人もいない、とても静かな世界だった。

「なにか気にかかる点は？」

特にない・・・そうだな、静か過ぎて落ち着かなかった、くらいかな。

「・・・キョンくん、それは重要な点よ。たぶんそれは、嵐の前の静けさ。・・・佐々木ちゃんはね、努力家の秀才で、とてもタフな子なのよ。努力している限り、結果が出るの。結果が出てしまうの。自分の限界を超えても。彼女が部長さんみたいに、努力の果てに体をこわしてしまう人だったらとつくに倒れてるわ。彼女は努力の果てに自分の限界を超えてしまっても、自分では気がつくことができないのよ。でもはたから見たらわかるわ。いつの頃からかし

ら、たまに会うと決まって『大学に入ったらいかに遊びほうけるか』という話をするようになったのは。最近じゃそれ以外の話があまりないくらい。彼女とつくにオーバーフローしてるわ。彼女は完璧な白鳥主義者。努力を人に悟らせない。でも、人知れず、彼女の心は悲鳴をあげているの。キョンくん、もうすぐよ。もうすぐ、彼女のセピア色の世界で、何かが暴れはじめるわ。神人よりもつとやばい何か。橘ちゃんはそんなことを予想すらしてない。ハルちゃんみたいにかす抜きの手段に事欠かない子とは違うわ。彼女は八方塞がりの牢獄の中で、ただ勉強するだけの日々を送っているのよ。そのフラストレーションたるや、・・・あたしでも寒気がするわ。そして、橘ちゃん達は、恐らく、そのやばい存在に対処できない。そんなことを考える機会がこれまで一切なかったから。橘ちゃんは佐々木ちゃんを完璧な人間だと信じている。そうでないことは、佐々木ちゃん自身がよく知ってる。佐々木ちゃんはタフだから、確かに、そのへんの人よりは我慢強い。でも、もう限界は超えてしまってる。すでに、いつ崩れても不思議じゃないくらい。でも、橘ちゃんはたぶん、言って聞かせても信じてくれない。彼女は自分の観察を絶対化してしまっているから。佐々木ちゃんがただの女の子で、普通の欠点の持ち主だなんて、彼女には信じられないはず。」

そういえば、橘には新興宗教の信者じみたものを感じたな。

「まさしくその通りなのよ。橘ちゃんにとっては、佐々木ちゃんは理想化された絶対存在。すなわち神。そして、佐々木ちゃん自身の反論すらもはや受け付けない状態にある。彼女にとっては佐々木ちゃんが神であることはもはやすでに自明なこと。佐々木ちゃんが迷惑がったところで、その信念は揺るぎもしない。佐々木ちゃん本人の意向なんかは、彼女にとってはもはや問題でない。神が動かないなら、信者のほうで自分たちが崇め奉るに不足のない存在に仕上げてしまおうというわけ。だから、橘ちゃんは佐々木ちゃんの意志

は一切顧みず、ハルちゃんと佐々木ちゃんの入れ替え作戦に奔走している。」

ハルヒと佐々木を入れ替えることがそんなにも大層なことなのか？

「恐らくだけどね、キョンくん、佐々木ちゃんの意識世界は、入れ替えが成功して以後、決定的に危機的な状況におちいるわ。セピア色の世界で、やばいものが暴れはじめ。どうなるかはわからない。でも、あたしはそんな予感がして仕方がない。キョンくん、カエルの王様の話は知ってる？」

「いや。」

「たしかイソップ童話だったかしら。簡単に言つとね、昔々、あるところに池があり、カエルがたくさん住んでいました。あるとき、カエルたちは神様に、自分たちに王様をくれるよう望みました。神様はカエルたちに丸太を一本与えました。しばらくはカエルたちもそれで満足していましたが、やがて『丸太の王様ってどうよ？』ということになり、再び神様に、もっと立派な王様を下さい、と願いました。度重なる願いに神様はム力が入り、カエルたちのもとに鶴を一羽差し向けました。カエルたちは立派な王様がやってきて喜びましたが、その王様は臣下であるカエルたちを捕食しはじめました。カエルたちは後悔し、神様に許しを乞いましたが、ム力ついている神様は返事をしてくれません。やがてついに、カエルは一匹残らず食べられてしまい、あとには、なにもいない池だけが残りまして。おしまい。」

えらく勝手な神様がいたもんだ。

「えてしてそういうものよ。でね、あたしはこの童話みたいな結

末が待っているような気がして仕方ないのよ。池は佐々木ちゃんの世界、カエルは橘ちゃん達、丸太は現状の佐々木ちゃん、鶴は『その後の』佐々木ちゃんに相当するわけ。・・・佐々木ちゃんの『やばいもの』は、もう出現条件が成立しつつある。あたしの直感でしかないけど。ゲームの言い方を借りるなら、必要なフラグはあと最低で一つ、最高に多く見積もっても三つより多くはない。そのフラグはなんとしても立てないようになきゃ。・・・さっきのお話はね、思い上がりを諫めたもの。橘ちゃん達は明らかに思い上がってるわ。自分たちの判断だけがすべて正しいと思込んでる。彼女たちを表現しようとするなら、『真心と思い上がり』になるでしょうね。橘ちゃん達は、動機は純粹だし、善意に満ち満ちている。少なくとも彼女は間違いなくそう。だから余計に厄介なのよね。論破もしにくいし、撃破もしづらい。信仰者というか、善意の塊はどうも苦手だわ。」

キヨン子ちゃん39

こんなことを言うのは正直気が進まないんだが・・・、最終的な非常手段として、橘を『折って』しまおうわけにはいかないのか？

「いよいよとなればそれも考慮するわ。でも、あまりやりたくはないわね。理由は二つ。橘ちゃんは純な子だから、あまり折るような真似はしたくない。それから、基本的に、信心をしてる人間は折りにくい。」

そんなにもか？

「まず、魂が地上にない。だから天上の世界をたゆたっている魂をまず一度地上に引きずりおろさなきゃならない。これがまた、えらい手間なのよ。そしてその後で、ウナギみたいな心相手の格闘が始まる。根性のすわった相手なら、それこそへびを相手にするに等しい。場合によっては大蛇や毒蛇を相手に闘うはめになるから、準備不足はこっちの致命傷になりかねない。だからね、事実上の信心家である彼女を折らなきゃならないような事態はなるべく避けたいの。」

そう言ってキヨン子は、以前信心家を折ったときの話をしてくれた。中学2年のとき、やさぐれついでにへし折った嫌われ者の同級生の話だった。彼女は新興宗教の信者で、ことあるごとにそれを広めようとするため、ことさらに嫌われていた。キヨン子は例に漏れずこの女生徒につかまり、意味不明な宗教話の長口舌に付き合わされた。彼女は話の中でやたらに母親を持ち上げた。しかし、聞けば聞くほど、その母親というのはろくでもない女でしかないようだった。浪費家で家庭を顧みず、外に男を作って遊び呆け、夫に逃げら

れ、そのくせ恩着せがましく、娘にすべてを押しつける。キヨ子
は、彼女が心の奥底に深く秘めた母親への非常に強い憎しみを見抜
いた。そうなれば、もう話は簡単だ。キヨ子はその憎しみを活性
化すべく、すこしづつ、会話を通して、彼女の心に燃料を注ぎ、導
火線を仕込み、機を見て、小さな火を、導火線の一端に点火した。
そして、短くなつていく導火線をただ傍観していた。

「ここまで仕込むのに並大抵でない手間が要つたわ。いい、彼女
が嫌われている根本的原因是、この強烈な憎しみの抑圧。宗教少女
なんてのはついみたいなもの。憎しみが強烈過ぎて、抑えても溢
れ出てしまう。それが人に伝わって嫌われる。単純なことよ。だか
らあたしは、憎しみを表面化させることにしたのよ。そうすれば、
少なくとも、今よりは鬱陶しくなくなるはずだから。」

とはキヨ子の弁である。・・・兄としては、お前の敵に回る機
会が永遠に來ないことを祈るよ……。さて、そして遂に、導火線
が燃え尽きる日がやってきた。学校からの帰り道、彼女と一緒に歩
きながら、キヨ子は最後の一押しを、仕上げをしようとしていた。
決定的な一言が語られる。『じゃあ、あなたは結局、お母さんの奴
隷じゃないの。』その瞬間、導火線が燃え尽きた。彼女の顔にはみ
るみるうちに真っ赤になり、ついで白くなった。表情というものが
完全に消え失せ、瀬戸物のように蒼白な顔色で、彼女は自宅の中に
消えていった。そのときにはもう彼女の家に到着していたのだから。
しばらくすると家の中からただならぬ騒音が聞こえた。彼女は
手斧をどこから取り出し、家の中にある宗教的な品々を粉砕して
いた。祭壇が真っ二つになり、仏壇が粉々に砕け散った。宗教書は
庭に彼女が熾した巨大な焚き火の火口になった。彼女はその中に粉
砕したありとあらゆるものを放り込み、ついで縁側に腰掛けて茫然
と、ただ、涙を流していた。母親は留守のようだった。時折彼女は
家の中に消え、玄關に置いてあつたと思しき風水グッズなどを持ち

出してきた焚き火に補充した。ついで意を決したように立ち上がり、母親のものと思しき衣装戸棚を叩き壊し、化粧台を木っ端微塵に砕き、ふたたび焚き火にすべてを投げこんだ。服やら化粧品やらも一緒くたに。そして、家の奥から山のようなアルバムを出してきて、すべてを火中に投じた。最後に彼女は手斧を勢いよく振り上げて燃え盛る火の中に投じ、地面に突っ伏して号泣し始めた。そこまで見届けると、キヨ子はその場を離れた。

「あたしにできることはもうなかったから。彼女は抑圧された憎しみを解放し、心理的な母親との決別の儀を完了させた。そして次には、現実の母親との対決が待っている。それはもう、あたしが介入すべきことじゃないわ。・・・宗教関係の品々は母親から与えられたものの象徴、衣装戸棚と化粧台は母親そのものの象徴、アルバムは母親との思い出の象徴、そして手斧は、彼女自身の憎悪の象徴。それらはすべて火の中に投じられ、浄化された。母親が留守でよかったわ。手斧が母親自身に振り下ろされることなんてことは、いくらなんでもあってはいけないことだから。もつとも、母親はほとんど家にいないということだったけれどね。」

で、結局どうなったんだ。

「母親は結局、帰ってこないまま離縁されてしまい、唯一の頼りだった兄に見離され、親には勘当され、今では生死不明、彼女に聞いても、もう何年も姿を見ていないということだったわ。でも、それが一番いいのかもしれないわ。わざわざ直接対決しなくてもね。さて、この話はこれくらいにして、いよいよ、佐々木ちゃんの話に移るわね。問題の中心である佐々木ちゃんは、実を言つと、今のところ、誰よりも折れやすい。忘れないで。彼女は常に過大な期待をかけられ続け、それらをすべて達成しながら生きてきたのよ。自分自身を犠牲にしてね。彼女は完全に、もはやいっぱいいっぱいのとこ

るに在る。従つて折るのは誰より簡単。心のバランスが危なっかしくなつてゐるから、適当な誘惑をあたえてバランスを崩してしまえばあとは自重で折れるわ。」

そうは見えないが。

「そう見えないようにしているからよ。彼女は白鳥主義者。完璧な白鳥主義者。それも、求められたことの一つ。彼女は未だかつて彼女自身の人生を生きたことがない。彼女の人生はすべて、求められたことを達成するためだけに費やされてきた。」

それが本当なら、恐るべきことだ。俺なら正気でいられない。

「佐々木ちゃんはタフで有能で勤勉。絵に描いたような秀才。彼女が男子相手に一人称で語るときに男言葉なのは、それだけは指定されていないことだから。そこだけは、個性を發揮できるから。身ぎれいで明朗快活な普段の姿は、求められたことを体現しているに過ぎない。・・・佐々木ちゃんは窒息しかかつてる。神経が完全に参つてしまふ寸前。崩れたら信じられないほどぐずぐずになつてしまふわ。佐々木ちゃんが壊れてしまふのを座視しているわけにはいかない。何としても食い止めなきゃ。ねえ、キョンくん、キョンくんだって、佐々木ちゃんが駄目になつてしまふのなんか、見たくないわよね?」

当然だ。俺にできることがあるか? 何をすればいい?

「今の所はとくにないわ。その意味でも、日曜日の会合は、何としても成功させなきゃ。目指すところは、佐々木ちゃんとハルちゃんとの和解。少なくとも、休戦。」

あの二人は仲が悪かったっけか？ キヨンは非難がましい視線を一瞬俺に向けた。なんだなんだ。

「キヨンくん、日曜日の会合は、キヨンは来てはだめ。」

キヨン子ちゃん40

無茶言うな。ハルヒが許すもんか。

「いいえ、許すわ。確実にね。会合にキヨンくんを連れて行くかどうか、ハルちゃんはまだ迷ってる。そこでね、キヨンくん、キヨンくんは体調が優れないから日曜日は行けないという断りの電話をすること。なるべく直前にね。」

当日の朝とかにか？

「それじゃ直前すぎるわ。そうね、」

キヨン子は少し考え、

「土曜日の夜がいいわ。土曜日は一日中、ハルちゃんはそのことで悩んでいるはず。動員も何もかからないわ。ハルちゃんのジレンマが頂点に達するのは土曜日の夜。時間を指定しておくわ。夜の9時3分から15分までの間に、携帯からかけること。理由は任せるわ。その時間には、ハルちゃんは電話をかけようかかけまいか迷って、携帯を手に取ったりまた置いたりを繰り返しているから。」

まるで見てきたような言い方だな。

「ハルちゃんの性格からして間違いないわ。」

それにしても、なぜハルヒはそこまで悩むんだ？ キヨン子はそれには答えてくれず、必ず忘れずに電話すること、と俺に釘を刺して、自分の部屋に戻っていった。

家に帰り着いてから、もうかなりの時間が経っているが、キヨコはなかなか帰ってこない。結局、夜の10時を過ぎるかという時間になってから、新川さんのタクシーに乗って帰ってきた。少し疲れの様子だったが、どこかしら満足げにも見えた。お帰りキヨコ。遅かったな。

「まとまったよ。もう安心だ。」

キヨコはそれだけ言うつと部屋に引っ込んでしまった。しばらくすると着替えて出てきたが、言葉少なに食事をとると、再び部屋に戻ってしまった。キヨコが食事している間俺は幾度か水を向けてみたが、

「正式発表まではノーコメントだよ。・・・正直言うと、話が込み入ってるんで、話はもう少し元気なときがいいな。」

との回答が得られただけだった。とにかく、心配はいらないようだ。俺は詮索を打ち切って、自分も寝ちまうことにした。

翌日は金曜日だった。放課後、部室に行くと、いつもの通りの長門がいた。俺もお馴染みのパイプ椅子に腰を落ち着ける。と、気配を感じた。振り向くと、長門がそばに立っている。長門はじっとそのまま立っていた。どうしたというんだ？

「昨日、真に、歴史的に重大な意義をもつ協定が樹立された。」

長門は言葉を切った。俺は何のことかわからない。

「昨日、あなたの発意になる提案に基づき、天蓋領域と統合思念
体との平和的共存を基調とする協定が、双方の完全なる合意のもと、
円満に成立した。今後我々は涼宮ハルヒの観測において、相互に協
力し、成果を共有し、共同して、お互いに自律進化の道を模索して
いくことになる。」

「これは、すべて、あなたのおかげ。あなたと、あなたの姉のおかげ。あなたはアイデアを提供、あなたの姉は実際の交渉をサポートしてくれた。しかし、あなたの発想がなければ、交渉も、その成立もあり得なかった。我々だけでもその発想に到達できていたかも知れないが、相当の期間を要したであろう。あなたのおかげで、貴重な時間を空費することが避けられ、余計な対立関係が発生することも避けられた。ついては、」

長門は言葉を継いだ。

「あなたにお礼がしたい。我々として、私個人として。」

長門は言葉を切り、俺をじっと見つめている。長門が俺にお礼だと？ 俺はただなんの気なしに、ただの思いつきを口に出したただだ。俺は困ってしまった。俺が長門に被った恩義は、一生かかっても返しきれるかという巨大なものだ。文字通り命の恩人でもある。長門がいなければ、俺たちは、とりわけ俺自身は、ここにこうして安穩とはしていられなかつたろう。その長門が恩返しだと！ よほど断ってしまおうかとも思った。しかし、長門の瞳は、あくまで澄み切った深い眼差しは、俺に真っ直ぐに、射通すように向けられている。この純真なる文学的宇宙人の意向を無碍にってしまうことは躊躇われた。かといって、軽々しいことは言えない。例えば、『百億円くれ』などと言ってしまおうものなら、こいつは疑いもなく、明日には札束の一杯詰まったジェルミンのトランクといっしょに登場することだろう。どんなに無茶な希望を述べようとも、万難を排して、いかなる苦難を乗り越えても、達成してしまうだろう。そんな苦勞をこいつにかけさせるわけにはいかない。俺は慎重に言葉

を選んだ。なあ、長門。

「なに。」

とりあえず、すぐには思いつかないから、一時保留させてもらっていいか。

「わかった。」

何か思いついたらそのときお願いするよ。

「そう。」

長門。

「なに。」

世界が平和なら、別に言うことはないからな。

「・・・そう。」

最後のフレーズに特に意味はない。本音が口から出ただけだ。まったくの話、他に望むべくもないことだろう？ ハルヒのそばなんぞにいたら、誰だって同じ感想をいだくはずさ。

キヨン子ちゃん42

翌日は土曜日だった。

キヨン子の言葉に嘘はなかった。

ハルヒからの電話などはなく、俺は俺以外の家族全員が出かけてしまった家で、久しぶりに、のうのうとした怠惰な休日を満喫した。適当に食事をし、なんとなく漫画雑誌など開いてみたり、ときおりゲームなどしてみたり、惰眠に耽ったりしていた。そして幾度目かのうつらうつらとしたまどろみから目覚めると、携帯の画面には20時58分が表示されていた。眠気は一気に吹き飛んだ。本日唯一のミッション。その実行時間が到来した。俺はそのまま待っていた。59分・・・21時ちょうど・・・01分・・・02分・・・30秒・・・40秒・・・50秒・・・6、7、8、9、ゼロ。俺は携帯の履歴を呼び出し、3秒とは経たないうちにハルヒの携帯を鳴らしていた。ハルヒはすぐに出た。ワンコールもかからなかった。

「なによ。」

悪い、ハルヒ。どうも夕方から熱っぽくてな・・・風邪でもひいたのかも知れん。俺はなるべくしんどそうに聞こえるように話した。・・・それで、明日はどうも行けそうにない。本当にすまんが、・・・欠席させてくれんか・・・。

「あら、そう。相変わらずたるんでるわね。」

そうは言っているが、俺はどことなく安堵したような空気を感じた。

「いいわ。あたしだって鬼じゃないから、特別の配慮をもって、

明日は欠席させたい。その代わりに、明日1日で完治させなさいよ。月曜日学校を欠席したり、風邪を持ってきてみるちゃんや有希にうつしでもしたら、特大号の罰ゲームに処すからね。明日は1日、暖かくして寝ていなさい。風邪薬もちゃんと飲んどくのよ。水分は欠かさずとること。できる限り食事をすることもね。わかった？」

ああ。

「じゃ、また月曜に。おやすみ。」

俺の返事を待たず、電話は切れた。とりあえず、これで俺はミッション・コンプリート。お役御免というわけだ。俺はキヨンジの部屋に行き、ノックしてみた。

「どうぞ。」

帰ってきているようだ。部屋に入ってみた俺は驚いた。見知らぬ少女がキヨンジの椅子に座って、携帯を操作している。茶色い髪の毛二本おさげ。だ、誰だ？少女はゆっくりと振り向き、突然吹き出した。いかにも可笑しそうに笑いながら、おさげのかつらを取り、眼鏡を外した。キヨンジだった。いや、キヨンジによく似ていた。

「ちょっと待っててね。」

少女は出て行き、暫くして、さっぱりした様子のキヨンジが戻ってきた。

「ああ、可笑しかった。キヨンくんが引つかかるとは思わなかったわ。」

また、趣味の変装散歩か？ キョン子よ。

「まあね。ところでキョンくん、首尾は？」

明日は家で寝てろ、とよ。

「でかしたわ。でもね、キョンくん、本当に家で寝てもらっちゃ困るのよね。明日はね、SOS団のキョンくんは欠席だけでもキョンくんには現場に立ち会ってもらおうわ。いい、明日は朝7時起床！ 朝食を終えたらあたしの部屋に来なさい。遅くとも8時頃から準備にかからなきゃいけないから。じゃあ、キョンくん、おやすみ。」

キョン子はさっさと横になるとあっという間に寝息をたてはじめた。俺はどういうことなのかさっぱりわからなかったが、とりあえず部屋に戻り、横になって考えごとをしているうちにいつか眠りになかに落ちていった。

キヨン子ちゃん43

翌朝。

俺は午前6時にキヨン子に叩き起こされた。やれやれ、まだお役御免とは、どうやらいかないうだ。なんなんだ。7時起床じゃないのか？

「早めに準備にかかることにしたの！ キヨンくん、そこに座りなさい！」

欠伸をしながらベッドに座ると、キヨン子は何やらチューブを取り出し、変な臭いのするどろどろした液体を俺の頭にぶちまけ、わしゃわしゃとかき混ぜ始めた。なんだなんだ。

「脱色するわ。キヨンくんには変装してもらおうから。」

何だつて！ おいおい、起き抜けにいきなり変装なんてどういう展開だよ。というか、生徒指導に引つかかるじゃないか！

「あとで染め直してあげるからそのへんは安心して。」

言つとキヨン子は俺の頭をラップでくるみ、

「しばらくそのまま！」

と、言い残して立ち去った。仕方がないので雑誌などはらばらと拾い読みしていたが、なかなか戻ってこない。かなり待たされて、ようやく戻ってきたキヨン子の手にはバスタオルがあった。

「シャンプーして薬剤を流してきて！ ついでにお風呂に！」

へいへい。

風呂から上がってみると、鏡の中に、ほとんど金髪に近い頭の、それが全然似合っていない、途方にくれたような表情の男子がいた。要するに俺だ。ああ、このままだと間違いなく校門で立番に捕まっつて生徒指導室へ直行だな。伝説によれば、一昔前なら、頭から墨汁をぶっかけられたそうだが……。何にせよ、立番に捕まるところから激しく遠慮したいね。俺は。

で、やれやれと風呂場を出たところで妹と鉢合わせた。

「なーに、キョンくん、その頭。」

妹は思う存分けらけらと笑い転げ、俺はというと、反対にあまり愉快からぬ心境だった。

部屋に戻ると、キョン子は開口一番、

「朝食をとってきて！」

朝早くから急かされ通しで、なんだか落ち着けない気分ですトなど手早くかじり、俺はそそくさと部屋に戻った。……。朝食の間中、妹が笑い死にしそうになっていたせいでもある。笑い過ぎで窒息寸前の有り様だった。……。そんなに変か？

部屋ではキョン子が待ち構えていた。

「仕上げをするわ。座って。目を閉じて。」

へいへい。存分にどうぞ。

塗り付けたり、描いたり、こすりつけたりが暫く続き、

「終わったわ。」

やれやれ、どんな風体にされたことやら。・・・あつ？！

鏡を覗いて俺は驚いた。見知らぬ男が鏡の中から俺を見返している。俺だと気付くのにちよつと時間が要った。大したもんだ！・・・キョン子、正直、お前は大したもんだ！

「ふふふ、キョンくん、人を見分けるときに注目する特徴というのは実のところそんなに多くないわ。それを悉く外してしまえばいいのよ。わりと簡単なことよ。骨格だけで人を見分ける訓練を受けてるとか、そういう特別な技量のある人が相手だとまた話が変わってくるけどね。さあ、時間もちよつどいいわ。キョコちゃんは先に行ってから、さあ、あたしたちも行きましょう！」

キョン子は薄い茶色の小さなレンズのサングラスを取り出し、俺に手渡した。

「さあ、これが最後の仕上げ。これをかけてれば、大概気が付かないわ。」

キョン子よ、お前は変装しないのか？

「あたしは普通に参加するからよ。それを忘れちゃ困るわー!」

キヨン子ちゃん44

ふと気が付くと、なんてことだ、もう8時半じゃないか！

「まずいぞキヨン子。」

「なにが？」

「これじゃ間に合わん。」

「平気よ。車で行くから。」

こともなげにキヨン子は言う。はて、タクシーでも拾うつもりなのか？ 玄関から表へ出ると、はたしてタクシーが待っていた。・新川さんの車が。キヨン子にせき立てられて乗りこむと、助手席には森さんもいた。後部座席にはすでにキヨコが収まっていた。満員のタクシーが発進すると、森さんが俺に声をかけた。

「おはようございます。．．．ずいぶんとステキなお姿ですね。」

やっぱり森さんにも変に見えますか。

「いえ、そういうわけでは。今日はよくいらして下さいました。お二人は集合場所に向かわれますので、あなたは私と行動していただくことになります。よろしくお願いいたしますね。」

それは、と口を開こうとしたちようどそのとき、タクシーが停車した。駅のすぐ近くだが、駅前からは見通せない場所である。

「じゃあキヨンくん、あたしたちは行ってくるわね。」

「んじゃなキヨン。のちほど。森さん、よろしく願いします。」

言い残して2人は降りていった。車は再び発進し、踏切で線路を横断して駅の反対側に到着した。

「では、行きましょう。」

「お気をつけて、行ってらっしゃいませ。」

森さんに促され、新川さんに見送られて、俺はふだんめつたに利用しない改札口のほうに歩いていった。ふいに、森さんが髪をほどこいた。ずいぶん印象が変わるもんだ。と、見知らぬ女の人が近づいてきた。すらりと背が高く、そして非常な美人だった。とっさに誰かの変装なのかと思ったが、その可能性はないことにすぐに気付かされた。こんなに背の高い女の人は俺の周囲にいない。どうやら森さんの知人のようだ。驚いたことに、件の女性は俺にこんなふうな声をかけた。

「あなたがキヨンさんですね。お噂はかねがね。」

そして右手を差し出してきたので、とりあえず握り返した。どこかで会ったことがありましたっけ？

「いいえ。まあ、話は後にして、今はとりあえず急ぎましょう。時間がありません。」

森さんが俺に切符を差し出した。電車に乗るのですか？

「入場券です。」

これで駅構内を通り抜けて、降車客を装う、と。

「その通りです。」

ずいぶん凝ったまねをするんですね。

「初歩的な手ですけれどもね。用心に越したことはありません。」

駅構内は乗り換え客でごった返していた。本線のホームから階段を上がってきた乗客がぞろぞろと支線ホームへの階段を降りていく。そういえば競馬が開催中なのか？ よく知らんが。

「これを。」

森さんが俺の手に何かを押し付けた。競馬新聞だった。

「顔を隠すときにでも使ってください。」

やれやれ、金髪にサングラスに競馬新聞か！ どこからどう見ても、ろくでもないアンちゃんの一丁あがりだ！ 見破られたらさぞかし弁解に苦勞するだろうな。・・・特にハルヒには。くわばらくわばら。

「涼宮さんの目にはなるべくふれないほうがよいでしょう。」

俺もまったく同感です。

「さあ、急ぎます。」

改札を出ていつもの喫茶店へ向かう。おなじみの集合場所には、

ハルヒの後ろ姿が見えた。俺たちは早足に店内へと進んだ。

キヨン子ちゃん45

喫茶店に腰を落ち着ける。いつもより奥の席で、壁際の俺の席からは右斜め前方にふだんの席が見える。俺の正面には森さんが座り、俺の隣りには森さんの知人が座った。時計は9時少し過ぎを指している。店員が注文をとりやってきたが、俺は上の空で、森さんの「じゃあ、それでいいですね。」という言葉に生返事を返すことができただけだった。バレないとは思うがハルヒのことだ、一瞬で見破られて詰問されたらどうしたらいいんだ?・・・来た。ハルヒたちだ。俺はとっさに競馬新聞を読んでいるふりをした。で、新聞の陰から様子をうかがっていた。ハルヒ・・・橘・・・佐々木・・・キヨン子・・・キヨコ・・・藤原・・・九曜・・・長門・・・古泉朝比奈さんがいない。欠席かな?一団はぞろぞろとこつちへ向かってくる。ハルヒは若干緊張きみにも見え、一度もこちらを見なかった。橘も緊張しているようだった。しきりにあたりを見回している。俺の方にも幾度か視線を向けたが、俺にはまったく気が付かない様子だった。佐々木はいつも通りに見えたが、僅かに困惑しているふうである。キヨン子とキヨコの二人といえやはりいささか緊張きみで、ここが正念場と心の中で踏ん張っているようだった。態度の悪い未来人は相変わらずふてくされてるようで、残りの面々は概ね通常運転のようだ。と、この集団にちよつとしたハプニングが起こった。不機嫌そうにあたりを見回していた藤原がこちらに視線を向けたとたんギョツとした表情を浮かべた。俺に気づいたのかと思ったがそうではなかった。奴の視線は俺の隣の人物に向けられている。次の瞬間、当の知人女性氏が藤原にじろりと鋭い一瞥を飛ばした。藤原は明らかにひどく取り乱し、「急用を思い出した!」とかなり大きな声で言い、後ろに続いていた3人をかき分けるといつか、ほとんど突き飛ばすようにして、大慌てで店から飛び出して行った。橘があわてて後を追う。取り残されて啞然とした一団の中

で、キヨン子とキヨコの2人が素早く動いた。あらかじめ打ち合わせしていたしか思えない。2人は分担して、皆を、おそらくは計画に従って、席につけた。ハルヒはいつも通りの場所、佐々木はその正面、ハルヒの隣りがキヨコ、キヨコの対面、つまり佐々木の隣りがキヨン子。通路の反対側には俺に背を向けて壁際に長門、長門の隣りに古泉、長門の対面に九曜。皆が腰を落ち着けたところで、橘がひとりで戻ってきた。逃げられたようだ。無念そうである。そして、帰ってきたところで、またしても困惑のていだった。唯一空いているのは古泉の対面だけである。橘は落ち着かない様子で座った。実に居心地が悪そうであった。

それにしてもな、藤原よ。九曜はまあギリギリ仕方ないとしてもいい。古泉はどうでもいい。だが長門を突き飛ばしたことは決して許されんぞ！ お前にたいする詰問の種がひとつ増えたわけだ！

キヨ子ちゃん46

俺がひとり憤慨していると、注文が供されてきた。モーニングだった。朝食は済ませてきたんだがな、などと思いながら手をつけようとしていると、突然、

「ええっ?!」

と、大きな声が店中に響き渡った。橘だった。椅子をはじいて果然と立ち尽くしている。後ろ姿の古泉が軽く肩をすくめて見せている。なんとなくわかる。橘は俺の欠席を今はじめて知ったのだ。以前会ったときもずいぶん俺をあてこんでいたようだから、さしずめ「決定的な計算違い」というところか。橘は困惑しきった表情であったりを見回し、いつそ帰ってしまいたいような様子だった。しかし、彼女のいわば「ご本尊」である佐々木は、わが姉妹がガツチリキープしてしまっている。橘としては、佐々木を単独で残しておくことなど、到底できない相談であることは明らかだった。結局彼女は店中の注目を集めてしまっていることにも気が付いたようで、決まり悪そうに再び座り込んだ。佐々木が橘に声をかけた。

「橘さん、大丈夫? 気分が悪いの? 先に帰っていていいよ?」

「いいえ、なんでもないんです。ただちょっと、その、うん、いいえ、そう、その・・・平気です。大丈夫です。そう・・・大丈夫です。」

橘はあまり大丈夫でなさそうな様子で、無理に作っているとはつきりわかる笑顔で答え、そのままうずくまるように下を向いてしまった。

「無理しないようにね。」

佐々木の言葉も聞こえていない様子だった。ハルヒのいる窓際のテーブルでは話し合いが始まった。

キヨ子ちゃん47

話し合いといっても、そもそもの目的はこの2人を融和すること、ぶつちやけた話友達にしてしまうこと、ということになるんだろうか。最初話の主導権はキヨコが握っているようだった。やがてハルヒと佐々木は直接話しはじめ、普通の会話から打ち解けたおしゃべりへ、熱心な議論へと進んでいった。俺は話し合いが始まったあたりからあまり状況を注視していなかったが、2人が仲良くなつてゆくのは手に取るようにわかった。窓際のテーブルはおりから差し込む日光のように、明るく楽しげだった。反対に壁際のテーブルはいつそ無残とでもいいたいような状態だった。2人が打ち解けてゆくにつれ、橘は打ちひしがれてどんどん暗くなつてゆき、お通夜のよくな暗澹とした空気が立ちこめていた。石像のような九曜、不動の長門、スマイル大安売り野郎に囲まれ、橘はいまや孤立無援のていだった。唯一のこる味方は九曜ということになるのだろうが、九曜はすでに長門と協定していて、いわばこちらの味方、少なくとも中立とみることができる。もっとも、最初からあまり橘の意向に関心がありそうには見えなかったが。やがてハルヒと佐々木は立ち上がり、キヨコとキヨ子を伴って元気よく店を出て行った。去り際に佐々木は、

「橘さん、場所を変えてもう少し話したいから、これで。」

と言い残し、もう橘にはあまり関心なさげな様子で、振り向きもせず去っていった。ハルヒは、

「今日はこれにて解散！ 古泉くん、あとはよろしく！」

と言って去った。キヨコが古泉に残りの会計を託し、断る古泉に

幾らかを押し付けて出て行った。4人がいなくなると長門も九曜もほぼ同時に立ち上がり、驚くほど静かに、どこか仲良さげにも見える雰囲気、立ち去っていった。あとには古泉と橘だけが残った。古泉が何事か話しかけたようだが、どうやら返答は得られなかったらしい。古泉は肩をすくめ、会計を済ませて帰ってしまった。不意に森さんが言った。

「私たちも行きましょう。」

立ち去り際、俺はちらりと橘を見やった。橘は体をかたくして、じっと座ったままだった。もう昼近くにもなるうというのに、橘の前には手付かずのモーニングがそのまま置かれていた。冷めて固くなった目玉焼きが、寂しげに乾いて、皿に貼りついていていた。

キヨ子ちゃん48

店を出た俺たちは駅前広場をゆっくりと一周した。はて、どこに行く気なのかな？ その時、知人女性氏が無気ない感じで言った。

「尾行がついてますね。」

「やっぱり。」

森さんが答える。

「目標は？」

「恐らく私でしょう。あなたも彼も彼らは知ってるはず。見慣れない私の正体を究明する気とみえます。」

「どうします？」

「二手に別れましょう。奴は必ず私についてきますから、ちょっとまいてから合流します。」

そう言つと知人氏は急に方向を変えて立ち去つた。俺と森さんはなお暫くそのまま歩いていた。不意に森さんが言った。

「私達もつけられていますね。」

なんでまた。

「橘さんのお仲間です。見覚えがあります。顔を知られている人間を尾行につけるとは。あるいは知られていないつもりか……。」

俺や森さんを尾行してどうしようというんでしょう？

「彼らは自分たちの目論見がいまや崩壊しつつあることに気づいたようです。ちょっと失礼……。」

森さんは携帯を取り出してしばらく操作していたがやがて、

「ただいま入った情報によると、彼らのいわゆる『組織』上層部から、関係者全員に尾行をつけよとの指示が出たようです。あと、一貫性に欠ける一連の指示が次々と出されています。おや、これは……『朝比奈みくる再誘拐準備』と『涼宮ハルヒ襲撃準備』の指示も出ました……。たった今出ました。彼らの焦燥感はただならぬものがあるようです。上層部が暴走し始めています。もう長くはもたないでしょう。さあ、忙しくなります。我々の方でも『重大緊急総動員態勢』の指令が入りました。急がねばなりません。とりあえず尾行をまきます。しっかりとついてきて下さい！」

そう言うとき森さんは小走りに走りはじめた。歩道橋を駆け上がり、駆け降り、駅構内に飛び込んだ。森さんは俺の手にどこからか取り出した切符を押しつけた。俺たちは改札を通り、西行きの本線ホームに降り、すぐさま素早く反対側の階段を駆け上がった。そして何食わぬ顔を装って支線のホームに降り、発車間際の電車に飛び乗った。電車が動きだすと森さんが言った。

「うまくまきました。」

俺はもう心臓バクバクのヘトヘトだった。……よかったですね。何はともあれ。森さんはまた携帯を取り出した。

「『朝比奈みくる再誘拐』は実行指示が出ました。」

なんだって！　なんて奴らだ！！

「でも安心して下さい。朝比奈みくるさんには指一本触れさせません。」

是非ともそうあつてほしいもんです！

「大丈夫です。第一、実行部隊は朝比奈さんの所在を確認できていません。自宅にはいません。現在彼女の土地勘があると思われる場所を捜索中のようですが、まあ、空振りでしょうね。」

というと？

「とりあえず降りましょう。」

電車は競馬場の最寄り駅に到着していた。電車から大急ぎして降りてゆく乗客たちに俺たちも混ざり、改札を出、ただし競馬場には行かないで通りに出た。そこには新川さんの車が待っており、知人氏がすでに後部座席にいて、新聞に目を通していた。

「お待ちしておりました。」

「やあ、来ましたね。」

森さんは助手席に、俺は後部座席に乗りこむ。

「新川、センターへ。」

「承知いたしました。」

森さんの短い指示を受けて、車は走り出した。

車はしばらく走りつづけて、とある高層ビルの地下駐車場に滑り込んだ。車を降り、エレベーターに乗り、かなり上層の階まで登る。エレベーターを降りてすぐのところに喫茶店があった。明るい店内にほかに客の姿はない。席につくと森さんは、

「申し訳ありませんが、報告書をあげないといけませんので、暫く失礼します。ここはわれわれ『機関』の人間専用の喫茶室です。従って、さしあたって話題に制限はありません。」

と言い、携帯を取り出してメールを打ち出した。俺は知人氏に問う。

「未来人のかたですか？」

「なぜ、そう思うのですか？」

「藤原を怯えさせたところからみて、未来の・・・警察の人ですか？」

「警察とは違いますけどね。ある種の取り締まりをしているのは確かです。彼は恐らく、この記章を見て、逮捕されると勘違いしたのでしょうか。」

確かに、知人氏の服には風変わりなデザインのバッジがついていた。

「でも、そういうバッジをつけたままにしておくのは禁則事項なのでは？」

「厳密にはたしかにその通りですね。しかし、この記章の意味はこの時代の皆さんにはわからないでしょう。ついでに言っておくと、

彼の容疑は『脱走』です。」

「あいつは犯罪者なんですか?!」

「いいえ。いわば軍人としての脱走者です。帰着指定時間に、所定の集合場所に現れず、その後復命もしていない。だから脱走です。あなたがたのほうでは『脱柵』という言い方もすると聞いています。」

未来人らしい女性はそう言うとコーヒーカップを傾けた。俺は質問を続ける。

「あなたは朝比奈さん側の人ですか？」

「まあ、そうですね。」

「ひよつとして、上司ですか？」

「いいえ。わたしはいわば同僚にあたります。」

「朝比奈さんについて、聞いてもらいたいことがあるんですが！」

俺は思わずかなり大きな声で言い、続いて朝比奈さんの窮状を訴えた。なぜ、なにも知らせないままで、あんな危なっかしい人を一人にしておくのか？ 複数の人間を周囲に配置しておいたほうがいいのでは？ なぜ、あんなにも不自由な立場に留めておくのか？俺は思いつく限り訴えた。知人氏は黙って聞いていた。俺が話し終えてとりあえず黙ると、彼女はゆっくりと答えた。

「いろいろとご存知ですね。ちよつと失礼。・・・『タイムプレインデストロイデバイス』。・・・ふむ、これが言えるということ、あなたにかかった禁制はかなり弱いようです。ではお話ししましょう。結論から言って、彼女の待遇はあらかじめ決定済みのものです。私が抗弁したからといって、変化することは決してないですよ。」

「なぜです！」

「先ほど私は『いわば同僚』と申し上げました。実際のところ、それは書類上、階級が同じだというだけのことです。仮に、私が自分の上司に今の言葉を伝えたとして、『そうか。わかった。この話は私が預かる。以後気にするな。』とか言われて、まあそれで終わりです。それというのも、彼女の地位は非常に独特で、我々の職場のトップであっても手が出せないのです。ちなみに、私の上司がそのトップですが、彼女は、なんとというか、最上層部直属とでもいうべき人間なのです。それに、われわれは彼女に直接接触してはならないと命令されているのです。・・・いま、『われわれ』と言いましたが、複数の人間がこの時代には配置されています。・・・これ以上は言えません。以後このことに関しての質問はお断りします。」

「禁則事項にかかるからですか？」

「……ご納得いくように解釈していただいて結構です。」

「……では別の質問を。藤原を追わなくていいんですか？」

「追っ手がかからない理由は、彼は先刻承知のほうです。取り締まり官が追跡せずに敢えて取り逃がす。つまり、逮捕はいつでもできる、ということですよ。ま、自首の勧めですね。回りくどいですけど。いつでもできる逮捕をなぜ今しないか。答えは明白でしょう。自首する気があるのなら逮捕は勘弁してもらえるかもしれないよ、ということですよ。彼はうまく立ち回って追跡をかわしているつもりでしたから、突然取り締まり官が目の前に現れたのは相当なショックだったでしょうね。しかし実際のところ、彼の動向はある理由から完全に筒抜けでしたが。」

「じゃあ、今までわざと泳がせていた、と。」

「結果としてはそうなりますね。脱走者発見の事実はずぐに通報したんですが、逮捕命令が来なかったのですよ。何かの理由で通報が黙殺されたのでしょうか思えません。詳細はわかりませんが。」

そのとき、森さんが顔を上げた。

「ちよつとしたニュースが入りました。朝比奈さん再誘拐作戦は中止される模様です。本人の所在が不明なことでも勿論ですが、誘拐に使用する予定の自動車、例のワンボックスはわれわれが接收してしまつたので盗難車をどこからか調達したらいいんですが、その車が検問に引っかかって面倒なことになっているということですよ。」

「俺としては、ザマミロというところですね。正直な話。」

「奇遇ですね、私もそうです。」

森さんのほうを見ると、実に面白そうな顔をしていた。たぶん、俺も同じような表情だったことだろう。

「現在朝比奈さんの身柄はわれわれがしっかり押さえていますから、たとえ発見されても手出しはできなかつたはずですからね。」

「朝比奈さんはどこにいるんですか？」

「彼女はかなり遠方の、とあるシティホテルの一室で指示待ちの状態です。ちなみにそのホテルは『機関』の人間の常宿でもありません。さて、残るは涼宮さん襲撃作戦ですが・・・どうも変ですね、上層部が支離滅裂な命令を乱発しているようです。準備指示を出したり、それを撤回したり、かと思うと実行指示を出したり、部隊集結を指示したり・・・」

「たぶん、上層部が仲間割れして、勝手な命令をそれぞれに出しまくっているんじゃないかな。」

知人氏が言う。

「おそらく、責任のなすりつけあいから決裂したんだろう。これじゃ現場は大混乱だ。」

そのとき、見慣れない男性が二人、俺たちの席にやってきた。

「報告いたします。涼宮嬢襲撃作戦はすべて未然に阻止されました。」

彼らの報告を聞く限りでは、襲撃作戦なるものはなんら具体化した状態ではなく、襲撃部隊なる連中はハルヒの居場所すらわからずに、あてどもなくそこいらを、2・3人でうろついているか、途方にくれて座りこんでいるかであったという。昼近くになって突然入

った『尾行指示』からこのかた、わけのわからない指示が矢継ぎ早に殺到した結果、現場の実行部隊は全面的な混乱に陥り、もはや誰かどの指示に従って活動しているか、そもそもどの指示が有効なのか、把握できていないらしい、とのことだった。知人氏が分析する。

「彼らの上層部は若い連中が多い。有能だが、経験が圧倒的に不足している。目論見が崩れはじめて焦るあまり、とにかくなにかせすにはおれなくて、必要のない指示を乱発したり、特に必要のない会議を開いて責任のなすりつけあいをしたりせずにはいられなかつたんだろう。」

「佐々木ちゃんが危ないわ。」

突然、キヨン子が現れて口を挟んだ。

「この慌てようは並大抵のことじゃないわ。おそらく・・・佐々木ちゃんの力は、今まさに消えていこうとしている。彼らはそれを察して、なお余計に、怯え慌てているわけ。神がいままさに、彼らの前から消え去ろうとしているのだから。」

で、それでなぜ、佐々木が危ないんだ？

「わからない？ 熱心な人が特に危ないのよ。神が自分を見捨てようとしていると解釈して、佐々木ちゃんを、つまり神自身を、自分の不幸に巻き添えにしようとする。心酔者の比率が高い『組織』の構成員の中には、そんな人も混ざっているはず。その可能性は無視できない。佐々木ちゃんは今、ハルちゃんといっしょに図書館にいるわ。念のため、守りを固めたほうが。」

「それは困りました。」

森さんがつかない顔で言う。

「非常態勢のため、現在図書館周辺にはわれわれの同志がいません。」

「ご心配なく。」

知人氏が言う。

「おりよく、われわれの仲間が図書館におります。必要な訓令は既に発しました。」

「ありがとうございます。協力に感謝します。」

はて、いつのまに。知人氏はずっと呑気そうにコーヒーを嗜んでいるばかりだと思っていたが。森さんはすっかり安心した様子である。それにしても、未来人たちと『機関』はずいぶん緊密な協力関係にあるようだ。・・・そういえばキヨ子、いつのまにここに？

「ハルちゃんたちが二人して話し込んでいるから、あたしたちは先に帰らせてもらったのよ。」

何をそんなに話し込んでいたんだ？

「数学の話みたいだったけど、あたしたちにはちんぷんかんぷんだったわ。だからお先に失礼して、新川さんに駅前まで送ってもらったのよ。そしたら橘ちゃんが・・・。」

「橘がどうしたって？」

聞けば、なんと驚いたことに、橘は俺たちが立ち去ったときそのままの姿で喫茶店で固まったままだったという。キヨ子はキヨ子と二人で店員に平謝りしながら橘を引っ張り出し、完全に放心状態

の橋をとりあえず新川さんの車に押し込んでいっしょに連れてきた、
そうだ。そのとき、キヨコにかかえられて、橋が登場した。さぞか
し落ち着かないことだろう。ここはいわば敵地のご真ん中だからな
しかし、当の橋はそれどころではないようで、放心状態絶賛継続中
の有り様だった。キヨコは橋を俺のそばの椅子に座らせた。知人氏
が突然口を開いた。

「図書館のトイレ付近で、ナイフを持って潜んでいた不審者を発
見、制圧して警察官に引き渡しました。」

「それはお手柄ですね。」

「念のため、警戒を継続します。」

「よろしく願います。．．．しかし、もはや組織的な抵抗は
ないでしょう。彼らの指令系統はもはや用をなしていません。組織
瓦解が進行しています。指令そのものがもはやほとんど出ていませ
ん。」

そのとき、誰かの携帯が鳴った。橋が幽霊のように立ち上がる。
顔色は真っ青で、見開かれた目は暗く、まさしく幽霊そのものだ。
どうしたんだ？

「指令が．．．。」

そう言うと橋はふらふらと歩きはじめる。橋よ、もうそんな指令
に義理立てする必要はないんじゃないのか！ 橋は一瞬体をぴくっ
とさせたが、ゆらゆらと去っていきこうとする。どう言ったものかと
思っていると、森さんが低い声で言った。

「行かせておあげなさい！ 彼女は彼女なりに、自分の持ち場を
守ろうとしているのですから。．．．資金護送指令が出ました。お
そらく最後の指令です。彼女は経理担当ですから、この指令には直

接関係があります。」

森さんがそう言うのなら……。しかし、よく『組織』の動向が筒抜けに分かるもんですね。

「なに、簡単なことですよ。以前『組織』のメンバーが集団でのビルに侵入を謀ったことがありました。中の一人がそのおり、携帯を落としていったのです。その人は失態を隠したかったのでしょう、携帯をなくしたことを仲間たちには明かさなかつたようです。携帯の請求書が来なくなつたので、落としたときに壊れたとも思つたのでしょう。しかし、ひとつ言えることは、携帯の暗証番号を誕生日に設定しておくのはお勧めしない、ということです。あと、そんな携帯といっしょに運転免許証と印鑑の入つた財布を落としていくのもね。そうそう、財布のほうはあとでちゃんとお返ししましたよ？ お手紙を添えて。それ以来、『組織』のかたは夜半に無断で見えになつたことは一度もありません。」

ちなみに、その手紙というのは次のようなものだったそうである。

『拝啓 先日は充分なおもてなしもできず、大変失礼いたしました。お財布をお忘れでしたので、謹んでお返しいたします。以後は私共も突然のご訪問に於いてもご満足いただけるおもてなしができませんよう重々精進してまいりますので、お気軽にお立ち寄り下さいませ。お待ちしております。 敬具』

・・・なるほど、これはコワイ。侵入者の連中は侵入直後の夜1時ごろから朝の5時くらいまで、迷路のようなこの建物の中を上は22階から下は地下5階まで、散々に追い回されたそうである。一時の休みもなく、死ぬほど走り回らされて・・・それが『充分でない』となると・・・うわわわ。でも、そんなに追い回したら、脱落者も出るんじゃないですか？

「そうですね、4人脱落しました。」

その人たちは？

「別に？ そのまま放免です。一晚中逃げ回った人たちと同じです。ただ、結果としてその分業をしていますから、後の仲間割れの遠因を作ったかもしれませんね。」

・・・追い回す方も大変でしょうね。

「それほどでも。時折多少休ませるようにはしてましたから。た

だ、緊張が切れないようには注意していました。だから、むしろ精神的な面で疲れきったことでしょうかね。」

会話はそこでしばらく途切れ、しばらく無言の時間があった。それはまるで、何かの知らせを待っているかのようにも思われた。果たして知らせはやってきた。森さんがぼつりと言った。

「終わりました。」

森さんは黙って携帯の画面を俺の方に向けた。そこにはメールが表示されていた。

『件名：最終指示』

諸般の事情により組織の活動はその最終目的を喪失したものと判断されるため当面全活動を凍結し一時解散とします。全作戦、全工程は中断打ち切りとする。組織における任務役職のすべてはこれをもって解消とします。組織関係の連絡先、メール、履歴のすべてを直ちに消去して下さい。文書類は可能ならば焼却、最低限裁断して破棄して下さい。資金については返却の必要なし。なるべく早期にすべての処理を完了させること。このメールそのものも忘れず削除されたい。今日にいたるまでのご協力に感謝します。これで全面撤回とする。以降の連絡は無用。指導部』

キヨン子ちゃん52

意外にも、その場の雰囲気は実に冷静で、どこことなく白けたような空気すら感じるほどだった。森さんが携帯を見ながら言う。

「非常動員解除。全員センターに集合、・・・緊急大会。・・・申し訳ありません。お宅までお送りするつもりでしたが、全体緊急会議が急遽開かれることになりました。会議終了までお待ちいただくか、個別にお帰りいただくかということになります。私も新川も、必ず出席しなければなりませんので・・・。会議終了はいつになるか分かりませんが、」

いや、大丈夫です。帰れます。

「・・・それでは、大通りに出るとバス停があります。本数は結構あったと思います。ご不便かけますが。」

いやいや、気にしないで下さい。お世話になりました。・・・そのとき、俺はふと、知人氏の名前を聞いていないことに思い当たった。あの、失礼ですがお名前は・・・？

「私ですか。私の名前は・・・『ホシ ノゾミ』と申します。名刺をお渡ししておきましょう。」

受け取った名刺には『星 臨』とあり、携帯番号が記されていた。

「朝比奈みくるに関係して何か変わった事がありましたら、どうぞ、いつ何時でもすぐにお知らせ下さい。」

知人氏は、いや、星さんはつと立ち上がり、俺のそばにやってきて、俺の手を驚くほど強い力で握りしめた。

「朝比奈みくるのそば近くで、直接彼女の力になってあげられるのは、事実上あなたただ一人です。・・・どうぞ、私たちの朝比奈みくるを、よろしくお願いします。」

俺がさて、何を言ったものかと思っていると、森さんが、

「では、こちらへ。」

森さんは俺たち3人を玄関まで送ってくれ、車を出せないことをしきりに気にしながら、別れを告げた。俺たちも挨拶を返し、表通りに向かった。角を曲がったちようどそのとき、バスが発車していくのが見えた。やれやれ。・・・時間表によると、次までは30分近くある。仕方ないなと手持ち無沙汰にしていると、不意に、黒塗りの高級車が目の前に止まった。窓が開き、鶴屋さんが顔を出した。

「やあっ！ きょうだい三人お揃いでどうしたい？ バスを待ってるようだけど、駅前まででよければ送ってあげるよ！」

俺たちは素直に好意に甘えさせてもらうことにし、何分か後には駅前に降り立っていた。ありがとうございました。鶴屋さん。

「あっはっはっ！ 気にしないでいっさ！ あの路線は昔から比べると本数はだいぶ減ってるし、遠回りだしね。困ったときはお互い様っさ！ ・・・ところで・・・、」

鶴屋さんは俺の顔を穴があくほどしげしげと見つめた。あ、あの、鶴屋さん？

「キヨン君、だよな？」

はあ、そうですね。．．．あの、俺の顔に何かついてますか？するとふいに、大爆笑が始まった。な、なんだなんだ。鶴屋さんはひとしきり笑い転げると、笑いすぎで涙を浮かべながら、

「キヨ、キヨン君！ その格好、全然似合っていないよー！」

そうだった！ すっかり忘れてた。俺は変装してたんだ。．．．鶴屋さんは朝方の妹のように、思う存分笑い転げ、ようやく落ち着くと言った。

「キヨン君、キヨン君はね、いつものスタイルが結局一番似合っていると、お姉さんは思うによる。」

言い残し、鶴屋さんは高級車といっしょに風のように去った。．．．
・そうか、そんなにも似合っていないか．．．。

キヨ子ちゃん53

まあそんなことはいい。よく考えると、昼食がまだだった。俺はキヨ子とキヨコにハンバーガーでも食べていかないか、と誘った。2人は承諾し、俺たちはおなじみのハンバーガーショップに腰を落ち着けた。さて、これからどうなるんだ？

「なにが？」

なにつて、・・・ハルヒや佐々木についてさ。あと、橘は？

「ハルちゃんについては心配いらないわ。もう佐々木ちゃんとの対立は、その可能性は、なくなつたから。」

どうやってあの2人を、こんなに早く友人関係にできたんだ？

「なに、なんでもないことさ。あたしは2人を引き合わせるにあつて、共通の話題や趣味についてリサーチした。その結果、数学に関して並々ならぬ関心を、共通して持っていることがわかつた。だからあたしは、導入として、文芸部会報にハルちゃんが寄稿した理論をあげて、佐々木ちゃんに意見を求めた。佐々木ちゃんは強く興味を惹かれたみたいだった。あとはまさしく、一瀉千里というところ。あつという間に意気投合さ。図書館に行ったのも、そのへんの調べもののためだよ。」

そのリサーチ能力に、俺はまず感心させられることしきりだ。

「まあね。」

「それにしても、橘ちゃんには気の毒なことになつちやつたわね。」

仕方がないのだけれど。」

「半死半生に見えたぞ。精神的に。」

「いまや神は消え失せ、教団は消滅。彼女の人生からは、目的が失われてしまった。精神的に半死半生になってしまっても仕方ない状況なのは確かだね。」

おい、大丈夫なんだろうな。折れちまったりしないだろうな。

「こういう場合、判断を急ぐべきではないのだけれど、」

キヨ子子は珍しく前置きし、

「たぶん、大丈夫。彼女はまだ若いから。青春はまだ半ば。今ならまだ、そんなに深い傷にはならないはず。確かに、三年もの時間を結果として空費してしまっただけで、まだ、モラトリアムには残りがある。まだ、十分取り返せる。彼女は彼女で、比較的タフな子だから、時間はかかるかも知れないけれど、立ち直れる。その余地は十分ある。」

・・・お前には珍しく断定を避けるじゃないか。

「さすがに宗教家が神と教団を同時に失うなんて事象はあたしも今まで一度も見たことないもの。どちらか片方というなら、別に珍しくもないけど。」

情報不足、か。未知数ってわけだ。

「とりあえず、現状としては、ひどいショックを受けて落ち込ん

でいるのは確か。しばらくは放心状態が続く。今は重圧で心がたわんでいる。たわみが解消して立ち直るか、たわんだまま固まってしまつか、折れてしまつか、今の時点で確たる予想をたてることはできない。」

「・・・そうか・・・。」

「・・・あたしの個人的な予想としては、」

「どうなる？」

「立ち直るわ。彼女、基本的には楽道家だから。今回のことは確かに手ひどい痛手だけれども、いつまでもくよくよとはしていない。あくまでも予想だけど・・・あくまでも・・・。」

希望的観測。だな？

「そうよ。・・・避けられないことだったとはいえ、・・・心が痛むわ。」

「・・・俺はすぐには返事できなかった。こいつはこいつなりに、形としては橋を陥れてしまったことに後悔を覚えているようだった。しかし、キヨン子よ、率直に言うが、それは偽善的な態度とは言えないか。キヨン子は俯いていた顔を上げた。泣いていた。」

「そうね。確かに。」

キヨコはキヨン子の涙を黙って拭ってやっていた。・・・言い過ぎたかな。なにかいたたまれない気分になっていたところに、まさしく天使のvoiceが降ってきた。

「あれ？ 三人揃ってお食事ですか？」

キヨン子ちゃん54

俺は声のした方に向き直った。すると、当の声の主、angel
朝比奈さんは急に慌てだした。

「あ、あれ？ キヨコさんキヨン子さんといっしょだからつきりキヨンくんだと。え？ あれ？ あ、あの、ごめんなさい、どなたですか？」

キヨン子がにやりと笑い、鞆からアルコールお手拭きを取り出して俺の顔を拭いた。朝比奈さんはさらに仰天した。

「あ、あれ？ キヨンくん！ あ、なんだ、キヨンくんだったんですね！ あ、そうか、変装ですね！ お見事です！」

キヨン子の作品ですがね。

「へえ、さすがはキヨン子さんですね。でも、キヨンくん、その頭は、」

そこで朝比奈さんは言い澀んだ。そのまま黙ってしまったが、俺は朝比奈さんの口の端が微かに震えたのを見逃さなかった。・・・この変装は二度としないからな！！・・・俺は気を取り直して朝比奈さんに尋ねた。朝比奈さんはよくここに食事に来るんですか？朝比奈さんは空いていた俺の隣に座りながら、

「たまにです。キヨンくん、今日の会合ですけど、出席できなくてごめんなさい。」

俺も欠席でしたよ。・・・そうか、朝比奈さんは知らないんだ。

「みくるん、今日はどうしたい？」

「ええとですね・・・、」

朝比奈さんによると、朝の5時くらいに非常呼出でたたき起こされ、最寄りの駅から電車に乗るように指示されて、あちらこちらと普通では辿らないようなルートで乗り換え乗り継ぎを繰り返し、そして更に、とある駅の近くにあるシティホテルのフロントで名前を告げるように、とのことだった。その通りにすると、

「朝比奈様、お待ちしております。」

と、一室に通され、そのまま何事もなく数時間経過、なにがなんだからわからないうちに、「フロントにて料金を精算、任地に帰着せよ。」との指示が入り、電車の路線を調べ調べしながらなんとか帰り着き、くたびれたので夕食を外食して帰ろうとここにやってきたとのことだった。ちなみに、ハルヒへの連絡は、9時を過ぎてから任意の時点で、急用を理由に、とあらかじめ指定があったそうである。

キヨン子ちゃん55

その後、キヨン子とキヨコが、会合の首尾についてかいつまんで話した。といつても、ハルヒと佐々木が意気投合、万事順調、今後心配すべき事項は特になしといった、当たり障りのない事項に限ってであったが。今日一日にあったその他のごたごた、俺の会合秘密偵察、朝比奈さん誘拐計画の再試行とその頓挫、「組織」の混乱と崩壊、橘の絶望、なかんずく、星さんのことについては、すべて伏せられた。とりわけ星さんがらみのすべてのことについては、絶対話すわけにはいかない。そんなわけで、朝比奈さんのこの件に関する認識はいささか皮相なものにとどまることになったがそれはやむを得ない。そういうわけで朝比奈さんはすっかり安心し、新しい友誼の締結をわがごとくのように喜んだ。涼宮さんに新しい友達ができるのはとてもよいことです、と、朝比奈さんは言った。その後はこれといった話は出ず、他愛ないおしゃべりが大半俺に関係なく進み、朝比奈さんとわが姉妹はまことに仲良さげに過ごしていた。食事が終わると朝比奈さんは別れを告げて去り、さて、俺達も帰ろうか、ということになった。その時、俺は少々思うところがあつて、いつものSOS団の集合場所に立ち寄る気になった。キヨン子も同じ印象を抱いたらしく、キヨコも有り得る可能性に反対はしない様子だった。俺達は揃って、そちらに足を向けた。

果たして、いつもの集合場所には人影があつた。花壇の縁に、橘が腰掛けていた。暮れ模様の空の下、夕暮れの薄明かりに照らされて、まったく途方にくれて、精根つきはてた様子で。俺たちが近づいても、まったく気づいた様子もなかった。膨らんだ革製の鞆が傍らにあり、橘はその肩紐を手に握っている。おそらく引きずってき

たのだろう、鞆は少し汚れていた。俺たちがそばで立ち止まると、橘は顔を上げ、ゆっくりと俺たちを見た。虚ろな眼差しだった。網膜に俺たちが投影されているのか疑わしくなるくらいだった。橘はよろりと立ち上がり、ゆらゆらと歩きはじめた。手の中から肩紐が滑り落ちた。そのまま去っていこうとする。おい、橘！ 荷物は！

「そんなものいりません。」

意外にはつきりした声が返ってきた。

「あげます。」

橘は言い残して去った。しかし、そんなわけにもいくまいが。とりあえず預かっておこうと持ち上げようとしてみて驚いた。滅茶苦茶重たいのである。さあどうしよう。とりあえず三人がかりでも持ち歩くのはつらそうだ。引きずっていくほかないな。・・・その前に、これ、中身は何だ？ なにかがぎっしり詰まっているのは確かだ。隙間がないくらいに。鞆の口には鍵がかかっている。鍵はない。鞆は意外に頑丈で、破ったり鍵を壊したりするのは無理そうだった。仕方がない。ここは長門を頼るほかないな。で、歩きだそうすると、人目につかない隅のほうで、もう一人、落ち込んでいる人物を発見した。

キヨ子ちゃん56

それは藤原だった。頭をかかえ、憔悴し、進退窮まったふうで、悩みに悩んでいるようだった。俺の姿を認めると藤原は言った。

「・・・どうした。バカみたいな頭して。本物のバカみたいだぞ。」

「・・・お前だつて人のことは言えなかつた。」

「む、・・・なるほど、ああ、そうだ。そうだったな。」

藤原は頭に触りながら言う。俺はおや、と思った。嫌みな調子なんだからトーンダウンしている感じた。だいぶ弱つてるようだ。そのとき、誰かがすつと俺の横に立った。振り向くとそれは星さんだった。

「『藤原君』、今の気分はどう?」

藤原は力なく答える。

「離陸直前にエンジンを2ついかれたような気分ですよ。」

「そう。」

「僕を逮捕しに来たんですか?」

「どうか。」

「・・・いいですよ、逮捕してください。」

「それはまたどうして?」

「・・・僕はもう、なにもやることがないんです。」

「そう?」

次の瞬間、思いがけないことが起こった。

・・・俺は航空機の操縦席にいる。副操縦士だ。機長、現在の天候は快晴、風向風速は210の3ノット。

「旅客は定員いっぱい、貨物は満載、燃料は満タン。限界重量ほぼいっぱい。滑走路長さはぎりぎり、滑走路を外れると人口密集地

」

後ろの航空機関係士席からキョコの声がする。

「ミラクル航空333ヘビー、滑走路22左より離陸を許可します。」

キョン子管制官が告げる。了解、ミラクル航空333、22左より離陸。離陸前チェックリスト完了。

「よし。エンジンを離陸出力に。」

藤原機長がエンジンレバーを操作する。エンジン出力加増、現在85パーセント、まもなく最大出力。現在最大出力です。V1・・・第3エンジン出力低下！ 第4もです！ 火災発生！

「ロテイト！ もうV1だ！ とりあえず上がる！」

了解、ロテイト・・・V2・・・ポジティブ・レイト。第3エンジン、第4エンジンが停止しました。ギア・アップします。ギア・

アップ。ギア、上がりました。

「緊急事態を宣言！ 戻るぞ！」

了解、メーデー、メーデー、メーデー、こちらはミラクル航空333、緊急事態発生。第3、第4エンジンが火災により停止、緊急着陸を要請します。

「ミラクル航空333ヘビー、緊急事態宣言を了解しました。121・5で空港空域管制と交信してください。」

空港空域管制、こちらはミラクル航空333、第3第4エンジン火災停止、緊急事態を宣言します。緊急着陸を要請します。

「ミラクル航空333ヘビー、緊急事態宣言を了解しました。可能ならば旋回してヘディング220度で飛行してください。」

ミラクル333、ヘディング220了解。

「燃料を投棄！」

「了解、燃料投棄！」

「なるべく急いで。」

「OK。・・・投棄開始。現在投棄中。」

「ミラクル航空333ヘビー、どの滑走路を要求しますか？ 現在もっとも近いのは12右です。」

ええと、現在燃料投棄中です。投棄が完了しだい、滑走路を要求します。

「了解。それではお好きな滑走路へどうぞ。ミラクル航空333

へビー、すべての滑走路において、着陸を許可します。」

「ご搭乗の皆様には、機長よりお知らせします。……」

藤原機長の緊急放送の間に、エンジンの様子を見に行っていたキヨコが戻ってきた。

「第3第4とも、見たところ大きな故障は見えない。煙も吹いてないし、火がでてるわけでもない。ただ、再起動を何度も試しているけどどうんともすんともいわない。再起動はどうやら無理だ。」

「よし、では第3第4なしでいく。推力が偏るが、この際仕方ない。燃料投棄打ち切れ。降りるぞ。」

「了解。」

「12右でいく。管制、こちらミラクル航空333、12右に着陸します。緊急用機材の準備を要請します。機体が停止しだい、緊急脱出します。」

「ミラクル航空333へビー、12右を了解しました。ローカライザーに乗ってください。緊急用機材はすぐに用意します。」

現在降下中・・・ギア・ダウン、フラップ、5度。・・・まもなく接地・・・接地。フラップ40度、スポイラー展張、第1第2、逆噴射。ブレーキ。・・・停止しました。

「よし、エンジン消火レバーを引け。」

引きました。

「よし、出よう。緊急脱出！」

俺は操縦席から立ち上がった。どこからか声が聞こえる。

「事故原因はマルチプル・バードストライク。乗客乗員は全員生還。負傷者なし。貨物損害なし。機体の損傷は最低限。総合的な損失は最小限に抑えられた。」

キヨン子ちゃん57

気が付くと、俺はもとの駅前にいた。藤原、星さん、俺、キヨコ、キヨン子、全員がもとの場所にいる。長い時間経ったような気がしたが、暮れていく日の光の具合はさつきと変わりなく、すべてはほんの一瞬に起こったかのようにだった。・・・今のは何だったんだ？

「みごとな決断です。『藤原君』。」

「・・・なかなか懐かしいものを見せてくれるじゃないですか。」

藤原が言う。

星さんが答える。

「あなたの果敢な決断と的確な操縦あったらばこそですよ。」

「持ち上げてくれますね。あれは運がよかったですよ。クルーのみんなも、本当によくやってくれましたし。・・・ああ、それにしても懐かしいな。空を飛ぶのは嫌いじゃない。久しぶりに見せられてみると、パイロットが天職だったような気がしてきますよ。」

「あなたのパイロットとしての能力は決して隅に置けないものだったと聞いていますよ。」

「よして下さい。今更そんな・・・。それより、僕を逮捕しに来たんでしょう？ この上は逃げも隠れもしませんよ。お縄を頂戴しますよ。」

「『藤原君』、いい覚悟ですよ。でもね、逮捕命令が来てないんです。だから逮捕はできない。出頭しなさい。逮捕される気になったのなら、そつちを勧めますね。」

「そうですね・・・。」

しばらく、沈黙があつた。

「・・・もう少し、考えさせてもらつていいですか？」

「構わないけれど、あんまり時間がないかもしれませんよ。」

「・・・わかつてます。でも、もう少し、もう少しだけ・・・。」

「・・・いいですよ。でもね、そろそろ、あの果敢な決断を、人生の選択においても、発揮してみたらどうかとも思いますね。」

藤原はなんと答えず、立ち上がると、うなだれて、ゆっくり立ち去つていった。星さん、あの、さっきのは何だったんですか？

「航空シミュレーターですよ。さっきのは彼のパイロット時代の、もつとも真価を発揮したフライトの再現です。ただ、再現とはいつても、あくまでシミュレーターですから、判断を誤ると墜落の可能性もあつたんですが。彼一人に見せれば事足りるんですが、せつかくお三方がおられますから、ちょっと混ぜてもらいました。彼の技量も能力も、決断力も、鈍つてはいないようですね。」

知りもしないことをしたり喋つたりするのは変な感じでした。

「あなた方は『オートシナリオ』設定でしたから。必要なデータはすべてシステムが提供してくれますからね。半径5メートルくらいの中に居れば、シミュレートシステムに巻き込むことができるですよ。未来式の流儀を、ちょっとだけ、ご披露してみただけです。何せ頭の中だけで起こっていることですから、例えて言うなら、みんな同じ夢をみているようなものです。このとおり、ほとんど時間もかかりません。あ、大丈夫ですよ。禁則事項にはかかりません。禁則にかかるなら、そもそもシステムに巻き込めませんからね。」

とりあえず、謎の荷物をどうにかせねば。俺たちは鞆を苦勞して引きずり、どうにか長門のマンションまで運んできた。わけのわからない預かり物は、気は進まないが、長門に託すほかない。万一中身が爆弾でも長門なら大丈夫だからな。しかし念の為、俺はノゾミさんに尋ねた。まさかこれは爆弾じゃないでしょうね。ノゾミさんは小型の拡大鏡のような器具を取り出し、目に当ててしばらくじつと鞆を眺め、

「簡易検査器で見た限りでは、少なくとも時限装置や信管の兆候はありません。ただ、金属の占める比率がかなり大きいですね。」

と言った。そのままノゾミさんは長門の家の玄関までは手伝ってくれ、

「都合上私どもは長門さんに対面するわけにはいきませんので、申し訳ないのですが、ここまでで失礼させていただきます。」

と言い残し、長門が出てくる前に姿を消した。俺は長門に、この鞆の中身は何か、と質問した。

「硬貨と紙幣、合計で総額三百四十七万三千三十一円。内訳は一円硬貨一千七百二十六枚、五円硬貨・・・、」

いや、もういい。ありがとう長門。・・・しかし、現金だと？
しかも大金だ。何の金だ？ 出所はどこだ？ 気味の悪い話だ。いよいよ貰ってしまうわけにはいけなくなつた。長門よ、悪いがしばらくの間預かっておいてくれるかい？

「了解した。」

増やしといてくれてもいいんだぞ、と軽口をたたきかけて、俺はすんでのところで思いとどまった。長門にそんなことを言おうものなら、何日もしないうちに、こいつの家は金で埋まってしまうことだろう。しかし道理で重いわけだ。長門によれば鞆の中身は大部分硬貨で、札は総計で三百六十枚あまりしかないとのことだった。しかし橋はなんだってこんな妙な荷物を？

「『組織』の運営資金の一部ではないかと思われる。」

そういえば資金護送命令がどうか言っていたな。命令実行中に『組織』が崩壊してしまつたわけか。・・・じゃあどうしようもないな。『資金については返却の必要なし』だそうだからな。

キヨ子ちゃん59

いろいろなことのあるすぎた激動の日曜日は既に暮れ果て、謎の現金を長門に託して俺たちは辞去した。とりあえずは一安心。長門の自宅なら、銀行の大金庫よりも安全だ。さて帰ろうかと思っていると、キヨコが言い出した。

「どうも気がかりなことが一つある。戻ろう。」

現金鞆を引きずってきた経路をそのまま逆に辿り、俺たちはもとの駅に舞い戻った。いつもの集合場所に通じる改札を通る。と、キヨコが呟いた。

「やつぱり。」

切符の自動販売機の設置されている通路に、とつくに帰ったとばかり思っていた橋がいた。料金表を見上げ、ぼんやりと突っ立っている。やがてふらふらと販売機の前に立ち、ポケットから財布を取り出した拍子にパスケースを落とし、全く気がつかずに千円札を販売機に投入、切符を取ってお釣りを取らずに去り、改札口では左手に持った切符を隣の改札機に投入、そのまま通ろうとして通路を塞がれて茫然と立ち尽くし、おりからそれを見ていた駅員に改札を通して貰えたものの、駅員の差し出す切符に目もくれずに立ち去ろうとしたため呼び止められ、渡された切符を持ってホームに降りたところをやってきた列車にふらふらと乗り込んだが、ホームの放送はこの列車はこの駅が終点であることを告げ、乗客全員の速やかな下車を促している。さてその間キヨ子はといえば、橋のパスケースを拾い上げ、お釣りを取り、俺たちの分の切符を買い直すと忙しく立ち回り、一方キヨコは橋をじつと観察、俺と同じ感想を述べた。

「いかな。完全にへ口へ口だ。」

キヨコは橋を回送列車から連れ出すと、

「家まで送って行くよ。」

ぼんやりしていた橋が反応を示す。

「大丈夫です。あたし大丈夫です。大丈夫ですから。大丈夫なんです。大丈夫です。」

テープレコーダーのような虚ろな響き。目の焦点が合っていない。どう見ても大丈夫ではない。キヨコは橋の右腕を抱えた。橋はふにやふにやと力弱く暴れて逃れようとする。

「キヨン子ちゃん、手伝ってくれ。反対側を押さえて。そう。キヨン、悪いが先に帰っててくれ。」

キヨコがてきぱきと言う。なあキヨコ、お前、橋の家、知ってるのか？

「いんにゃ、知らないよ。」

どうする気だ？ 今の状態じゃ橋に聞こうにもまともな返事は期待できないぞ。

「心配い無用。」

やおらキヨコは携帯を取り出し、

「森さんですか？ どうも、こんばんは。会議は終わりました？ 無事終わった。そうですね。いまお時間よろしいですか？ ありがとうございます。実はですね、例の橋さんがシヨックでふらふらになってまして、家まで連れて帰ったげようと思うんですが。はい。駅。そこから？ あ、徒歩だと距離がある。そうですね。どうしようかな。え？ 本当ですか？ それはありがとうございます。よろしくお願いします。はい。了解です。では後ほど。」

と、森さんから聞き出すというウルトラCを決めた。

「森さんが 駅まで車を出してくれるそうだ。ひとつ走り京子ちゃんを送ってくらあ。じゃあキヨン、後ほど。」

そう言うとキヨコは橋とキヨン子ともども、あらたにやってきた列車に乗って去った。2人に両脇を抱えられた橋の姿は、支えられているというよりは、むしろ連行されていると表現したほうが相応しいようにも見えた。橋はぶつぶつと呟きつつ、弱々しくもがきながら連れられて行った。

「あたしは大丈夫です。大丈夫なんです。しっかり、きっちり、元気に、きちんと、間違いなく、十分、本当に、ちゃんと、この通り、大丈夫です。大丈夫です。大丈夫です。・・・」

キヨン子ちゃん60

ひとりでぶらぶらと家路を辿る道すがら、誰かに声をかけられた。振り向いてみるとそれはノゾミさんだった。

「こんばんは。」

「こんばんはノゾミさん。また何かあったんですか？」

「そう大したことではありませんが、藤原があなた方を悩ませることはもうないと思われまので、一応それだけ、お伝えしておきます。・・・彼とは以前少し話しました。もう時間の問題です。彼は既に、自分の抱いていた夢と希望が、もはや果たされるべくもなくなつたことを理解していましたから。」

それだけ言つてノゾミさんは立ち去り、そこから少しで、俺は自宅に帰還した。なんといろいろなことあつた1日だろう！ 1人部屋でぼんやりしていると、キヨン子とキヨコが帰ってきた。橘は無事ご両親に引き渡したとのこと。ご苦労さまだつたな。二人とも。

「キヨンくんもご苦労さま。じゃあ、お休み。」

お休み、と言いかけて俺は大変なことに思い当たつた。おい、キヨン子！

「なに？」

俺は頭を指差す。脱色したままだ！

「あ、ごめん、ごめんね。すっかり忘れてた。」

キヨンは眠い目をこすりこすり、欠伸をしながら、俺の頭を黒く染め直す。俺も眠いのはやまやまだが、これをゆるがせにすると朝っぱらから生徒指導室に連行される運命が待っている。それはいくらなんでも勘弁だ。ハルヒがなんて言うか。

「みんなキヨンの金色頭が似合わないって言ってたけど、あたしはそうでもないと思うわ。」

キヨンが言う。

「ま、キャラに合っていない、っていうのかな。それに尽きるわね。」

入浴を促され、風呂に入りながら、俺は今日、途方もなく中身の濃い一日を思い返していた。「組織」瓦解！ なんといてもそれにつきる。風呂からあがると何か目がさえてしまい、俺はしばらく居間でぼんやりしていた。どれくらい時間が経つたろう、風呂上がりのキヨンがやってきた。俺は尋ねる。キヨンよ、今更ながら、俺は大丈夫なんだろうか。キヨンはだいぶ間をおいて答えた。

「キヨンくん、橘ちゃんが佐々木さんについて語るとき、どんな様子だった？」

高揚してたな。・・・俺は思い起こす。甲高い震える声で、佐々木の素晴らしき世界の到来を、幸福そのものの表情でうっとりとする橘の姿を。

「鬱陶しかつたでしょう。」

うん、そうだな、鬱陶しかつたな。確かに。石ころでも飲みこんで、それが胃に溜まつてるような感じだった。

「わりと強めのうんざり感ね。あの子のその態度こそが、あの子の足元の危なっかしさの傍証というわけ。足元が危ないからすがりつく。この場合は佐々木ちゃんにね。そしてその価値をひたすらに盲信し、純然たる善意ひとすじに、その素晴らしさを語る。・・・価値観が共有されていないことはお構いなしにね。構う余裕がないのだもの。彼女、余裕があるように見えても実は必死なのよ。ただひたすらに、佐々木ちゃんにすがりつくことに汲々としている。杖にすぎるようにね。でもその結果、当の佐々木ちゃんにすら鬱陶しがられる始末。彼女が見ているのは佐々木ちゃん本人でなく、理想化された神的な人間像。すなわち、佐々木ちゃんに神たることを強要しているにひとしい。そんな凶々しい態度を、しかも無自覚にとっている人たちに同意できないのは、多分、誰の気持ちも同じはず。もちろん佐々木ちゃんもね。現在、彼女はその頼みの杖がいきなり取り払われてしまって、地面に転んでしまったようなもの。立ち上がれるかどうかの問題。あとは彼女ひとりの戦いだから、あたしたちはどうすることもできない。以前言つた通り、あたしにもどうなるかわからない。」

「心理的杖にすぎる人たちは、実はその杖のことをそんなに信じていない。だから、自己正当化のために、賞賛の度合いが不自然に高く、激しいものになる。そして、すべては正論。ご趣旨まことにごもつとも。でもね、キヨンくん、彼ら彼女らは人に向かって話していても、実は独り言を言っているだけ。反論など、はなから聞く耳がない。彼らが聞きたいものはただ一つ。自分の声のこだま。彼らが得るもの、それは限りない自己満足感。善を行っているという確信による快い酩酊。つまり、話している相手に、自分自身への奉仕を強要しているのと同じ。彼ら彼女らの発する独特の鬱陶しさの原因は即ち、それ。奉仕を強要されて愉快からぬ気分になるのはごく当たり前のこと。」

なるほど、解ったよキヨン子。どうして橘が鬱陶しく感じるか。自分では説明がつけられなくて困っていたんだ。ありがとうよ。

「どういたしましてキヨンくん。じゃ、おやすみ。」

ああ、おやすみ。キヨン子は自室に退いた。・・・しかし身も蓋もない見解であることだ。シニカルと言ってもいいくらいだ。あいつは俺と同じ年・・・だよな。このところ当たり前のようにそばにいるからつい忘れそうになるが・・・キヨン子。

お前はいつたい、誰だ。

俺はしばらくつらつらと考え事の後、自室のベッドにもぐりこんだ。目がさえているような気がしていたのだが、正真正銘気のせいだったらしい。横になるとほぼ同時に、俺は眠りの中に落ちていた。

翌朝。俺はまたしても目覚ましの鳴る前に叩き起こされた。なんなんだいったい。俺の惰眠を妨げた張本人キヨン子は、俺の頭を矯めつ眇めつし、呟いた。

「やっぱり……染めむらになっちゃったわ。」

そして何かを俺の頭の何ヶ所かに塗りつけ始めた。なんだそれは。

「白髪染めよ。」

やれやれ。白髪染めのお世話になるのはまだ当分先の話だと思っ
ていたんだがな。

キヨン子ちゃん62

登校すると早速ハルヒに見咎められた。

「なによその頭。斑じゃないの。」

なんて目のいい奴だ。キヨン子が白髪染めで殆ど目立たないように直してくれたんだが。と、その当のキヨン子が俺に変わって弁明する。

「ハルちゃんごめん！ 昨日なんだけどね、キヨンくん風邪でお休みだったでしょ？ 朝には結構治ってたみたいだったのね。あたし気紛れをおこしてね、ちよつとね、キヨンくんの頭を脱色してみたのね。イメチェン狙いで。そしたらそれが全然似合わないじゃないの。あたし慌てちゃって、夜家に帰ってから急いで染め直したんだけどむらになっちゃって・・・ほんとゴメン、ハルちゃん。」

大筋嘘は言っていないな。少なくとも時間経過的にはな。間の過程をこつそり差し引きしてるが。ハルヒ答えて曰わく、

「脱色？ キヨンが？」

そして俺を一瞥、

「本当に全然似合いそうにないわね。バカそうなのと間抜けそうなのが割り増しに見えるだけだからやめたほうがいいわ。」

などと失敬な感想を述べた。・・・否定はしないが。

「キヨ子ちゃん、別にあたしに謝らなくてもいいのよ。むしろ謝らなきゃいけないのはキヨよ。」

おい待てよ。なんで俺が謝るんだ。どういう趣旨で。誰にだ。

「キヨ子ちゃんによ！ なに、あなたは可愛い妹に自分のイメチェンの心配までさせておいて、何ら疚しい点がないと言い張る気なの？ まったく弛んでるわ！ 気概に欠けるとはまさにこのことね！ そんな体たらくじゃ全然駄目よ。自分を変えていく努力は自分自身でしなきゃ！」

・・・俺は特に自己の変革を求めてはいないんだが。現状の自分が結構気に入ってるしな。

「ハルちゃん違うの。ほんとにあたしの気紛れ一つのことなの。キヨくんを責めないであげて。」

「キヨ子ちゃんはぜんぜん悪くないわ。ここで責められるべきはまさにキヨンの現状への怠惰な安住ぶりなのよ。いい、キヨン。世の中は日に日に変わり続けているのよ。現状をそれでよしとして安心しきっていると、そのうちに世の中に追い越されてしっぺ返しをうけることになるの。要は心構えよ。変化することへの柔軟さなのよ。わかる？」

それと頭の脱色に失敗することとの関係がわからん。ハルヒは大袈裟に溜め息をつくと肩をわざとらしくすくめて見せ、

「だいいち！ 上席団員たるキヨ子ちゃんにそんな無用の心労をかけるのは一介の平団員としてどうなの、って言いたいわけよあたしは！」

そついやそつだったな。すっかり忘れてたよ。古泉の副団長職とはどっちが上位なのかな。

「副団長は副団長よ。上席団員よりは上位だわ。」

上席団員のほうが副団長よりもよほど重用されているような気がするがそれは俺の気のせいなんだろうかな。

「キョン、あんたもたいがい細かいことにこだわるやつね。しようがないじゃないの。キョン子ちゃんは古泉君よりいつも近くにいるし、頼みごともし易いんだもん。」

なにか言い返そうとした瞬間本鈴が鳴り、俺は学級委員の朝の職務につくことを余儀無くされた。またキョン子に教卓まで引きずられてはかなわんからな。

キヨ子ちゃん63

2、3日は何の動きもなく、基本的に平穩そのものだった。しかしまだ物語はその展開を残していたらしい。ある夕方、SOS団の皆と別れて一人家路を辿る途中、

「おや、こんばんは。」

と、にこやかに声をかけられた。憑き物が落ちたように微笑む、そいつは藤原だった。

「あなたに出会えるとはお誂え向きです。・・・しばらく一緒にしてよろしいですか？」

俺は戸惑うことしきりだ。この態度の変化はなんだ。

「気味悪く思われるのはごもつともです。・・・しかしあなたにお会いできて本当に良かった。他の方々ではすこし手間取りそうですから。」

何が言いたいんだ？

「まずは謝罪を。いろいろとご無礼をはたらきました。どうぞひらにご容赦を。」

藤原は深々と一礼した。おい藤原よ、謝罪しなきゃならん相手はほかにいるだろう。

「確かにそうです。そこで、お願いがあります。朝比奈みくるさ

んに、どうぞ、僕に代わって、謝罪の言葉をお伝えください。」

なんで俺が。自分で言えよ。

「・・・僕はもう、行かねばなりません。ただちに、行かねばならないのです。・・・それで、心苦しいのですが、あなたにお願いするほかないのです。どうか・・・。」

藤原は懇願する。奴の・・・いや、彼の態度は悪ぶった以前ではなく、きちんとした常識人のものだった。そういや元はパイロットだったんだっけ。しかしいつたいたいどうしたってんだ。なぜ突然。

「漸く決心がついたんです。僕は未来へ帰らなければ。決心が揺らぐ前に。」

随分勝手じゃないか。

「それに・・・帰還命令があつたんです。たぶんこれが、最後のチャンスなんです。あと、白状しますと、恥ずかしながら、僕は里心づいてしまつたんです。ホームシックなんです。両親のもとに帰りたい。会うことが許されないかもしれない。それでもいいんです。せめて、両親と同じ空の下にいたいんです。勝手ばかりして家出同然に飛び出してきてしまいました・・・母には苦労ばかり・・・父にも、・・・。」

藤原は泣きだしてしまい、例によって俺は対応に困る。ポケットを探ると使いさしのポケットティッシュ。ほら、涙をふけ！ みつともないぞ、しっかりするんだ！ しゃんとしろ、さあ！ 藤原はしきりに詫びながら涙をふき、

「あなたは本当によい人です。」

と言った。そして、

「どうぞその気持ちをいつまでも忘れないでください。それも合わせて、僕からのお願いです。．．．さあ、行かねばなりません。僕は未来に帰ります。．．．捕まりに行くんです。もう二度と、帰っては来れません。従って、」

藤原はふいに俺の手をとってがっしと握りしめ、

「今の言葉は、僕からあなたへの遺言です。．．．きっと聞き届けていただけると信じています。」

そして名残惜しげに俺の手を離し、

「では、．．．いつまでも、いついつまでも、どうぞお達者で．．．愛する人々に囲まれる幸福が世々あなたと共にありますように．．．。」

言い残し、ふらりと路地裏に消えた。俺は路地裏を覗き込んだが、人影はない。やつは行ってしまったようだ。複雑な感情が俺の心をよぎる。

キヨ子ちゃん64

もの思いに耽りながら歩いていると今度は女性に呼び止められた。
ノゾミさんだった。

「藤原はもう行ったようですね。」

そうですね。なぜご存知ですか？

「帰還命令を伝達したのは私です。ほんの2時間ほど前のことです。彼はずいぶん急いだようですね。」

そついや長門への謝罪の言葉を預かるのを忘れましたよ。朝比奈さんのはありますけど。

「そうですね。それはもう一括代表預かりという形で、長門さんのものも一緒に預かったという線で如何。」

まあこの際それでも仕方ないですけど。

「ということは彼に会ったんですね。」

ええ。最期の挨拶をもらいましたよ。

「彼、何か言ってますでした？」

何のことですか？

「彼と、彼の預かったメッセージを預かっています。」

ややこしいですね。藤原のメッセージですか？

「私はつい先ほど、といつても30分くらい前ですが、彼と帰還にあたっての簡単な打ち合わせをしました。そのときに、とりあえずあなた宛てにとこのメッセージを。そして、預かったとのこと、こちらでも。」

ノゾミさんの手に封筒が2つ。片方は開封されている。誰からのものですか？

「橘さんからだとのことですよ。．．．あと、失礼ながら、彼からの封筒は開封して、中身を改めさせていただきました。『禁則事項点検』のために。どうぞご容赦を。」

．．．まあ仕方なしとしましょう。ところで、やつは橘にも挨拶していったんですね。そして、橘はメッセージが書ける程度には回復している、と。

「まだだいぶ弱っていたそうですが、とりあえず会話は成立したとのことでした。」

俺は橘のメッセージを開封した。メモ用紙が一枚。日時と場所が書かれているだけだ。．．．たぶんそこへ来るようにとのことなのだろう。土曜日に、いつもの集合場所へ、か。行ってみるほかなさそうだ。そして藤原のメッセージ。内容は要約するなら最期の挨拶だった。さつき会ったとき話していたほぼそのまま。ただ、後半にはつれづれに思い出話が綴られており、そこには幾つか目新しいことが書いてあった。そこで俺は、孤島旅行のとき、嵐の中でハルヒが発見した岩陰の人影の正体を知った。まさにそれは藤原であった。

暴風雨のなか偵察に出たところ見つかってしまい、泡食って隠れ家に逃げこんだところ、俺たちまで後から入ってきて非常に焦ったとのことだった。「・・・あと5メートルお進みになれば、洞窟のものと奥に続く、目立たない狭い通路の存在に気付かれたことでしょう。回り込んだすぐのところが開けた空間になっています。そこまですいらっしやれば、ずぶ濡れでがたがた震えながら息を殺していた僕と一足早いご会見となっていたかもしれません。・・・」それは何よりだった。ハルヒへの説明が困難過ぎるからな。手紙の続きには、とつくに機関の人々に存在を悟られていたためにはかばかしい活動はできなかつた、と記されていた。森さんにいたっては直接警告に訪れたらしい。「キャンパーのかたですか？ この島は全面私有地ですので基本的にご逗留はご遠慮いただいているのですが・・・。まあ、キャンパーの分を弁えた振る舞いに徹していただけなら、特に黙認いたしましょう。お分かりでしょうか？ お屋敷には近づかないでいただきます。私どもの大事なお客様がたを不安にさせてしまいますので、・・・あと、くれぐれも、滅多なまねは、ご遠慮いただきます。・・・なにせ孤島ですのでね、ここは。お分かりですか？・・・お分かりですよ？」藤原はある種の強い印象を受けたこの言葉を書きとめずにおれなかつたようだ。森さん・・・やはりただ者ではない。そしてノゾミさんからも思いがけない言葉が。

「孤島旅行の際には私も途中までご一緒しておりましたよ。」

キヨン子ちゃん65

・・・それは全然気がつきませんでした。

「藤原も同じフェリーに乗船しておりましたのでね。私が直接警護を担当させていただきました。そのせいばかりでもないでしょうが、彼は出る幕がなかったようで。・・・ちなみに私は白いワンピースに白い帽子といういでたちでした。」

・・・いや、藤原にもノゾミさんにも覚えがありません。

「まあ、そうでしょうね。」

ノゾミさんはそれきり黙ってしばらく歩いていたが、ぽつりと「んなことを言った。」

「たぶん、藤原は逮捕されに戻ったわけではありません。」

というと？

「おそらく、彼は何か使命を託されることになるでしょう。」

藤原は捕まる覚悟を決めていたようですが。

「逮捕するなら、警察執務資格のある私に逮捕命令を出した方が早道です。・・・ただ彼は私が逮捕命令なしで軍務反則者を取り締まれる軍事監察官だと勘違いして怯えていたようですがね。」

そのバッジですね。

「そのようですね。これは全然別のバッジなんですけど、正直なところ、『軍事監察官徽章』に大きさも色合いもデザインもよく似ているんです。」

じゃあ藤原はまた両親に会えるのでしょうか？

「問題はないと思いますが、なぜですか？」

あいつが、自分は里心づいた、両親に会いたい、としきりに言っていたもので。

「そうですか。・・・彼のお父さんは軍隊の中でも名だたる厳しい高級将校でしたがね、もう定年退職しておられますが、よく家の前を落ち着かない様子でうろろしているようです。家族が聞いても、『風に当たってるだけだ。』なんて言ってるようですが。どうも息子に厳しくし過ぎたのを後悔しているふしがある。息子の帰りを待っているんだろう、とみんな気がついていました。」

俺はノゾミさんを振り向いた。ノゾミさんは微笑んでいた。静かに、ただ、微笑んでいた。そのまま黙って歩くこと暫し。ノゾミさんはふいに、

「それでは。」

と言い、宵闇の中へと去っていった。・・・ノゾミさんも意外にいろんな活動してたんだな。ついでに藤原も。

さて、そうこうしているうちに土曜日が到来した。幸いSOS団の召集はなかった。やれやれ、言い訳の労力は省くことができたわ

けだ。呼び出しの所定時間にいつもの場所に行くと言った。顔色はあまりよくなり、さえない表情をしている。よう橋。大丈夫か。

「まあまあです。」

小声でぼつりといい、勝手に歩き始める。ついてこいということなのだろう。俺はゆるゆるとした歩みに従う。歩きながら、橋は話しはじめる。あの日の出来事を。

『機関』の『センター』から呼び戻された橋は、『組織』の事務所に行つて、全自動現金管理機を空にし、取り出した現金を後刻指示する行き先に輸送するよう指示された。橋は現金管理機の前に立つ。念願がなつてようやく導入なつた管理機。それから僅か一年にも満たない。橋は残高を確認する。第一のショック。残高が異様に低い。データを見ると、各々の「活動家」が自分の持ち出し限度いっぱいまで現金を引き出している。しかもほとんど全員。橋はこの時点では『組織』が事実上、すでに瓦解し始めていることに気づいていない。佐々木の力が弱まっていることは知覚していたが、まだ活動は続くものと思つていた。だいたい資金を無断で大量持ち出しするとは何たることか。沈没する船から逃げ出すみたいに。橋は管理機を操作する。いまは一時的に空にするだけだ。この管理機は橋が責任をもたされていた。全額出金モードの操作は橋にしかできない。まず札を全部引き出し、それを硬貨輸送靴の底に放り込んで、靴を硬貨大量払い出し口にセット。車輪のついた払い出し口ケースを機械から引き出し、靴を口を開けて固定、機械の中に押し込む。どがしゃつ！ 管理機に納められていた硬貨が全部靴に落とされ、作業は終わった。靴を機械から引き出し、口を閉じる。錠はバネ仕掛けで、口を閉じると勝手にかかる。開けるときには鍵が必要

だが、橋はまたここに戻ってくることになるだろうと思っており、保管場所から鍵を持ち出さなかった。どうせまた、ここで開けるのだ。事務室の隅でひそひそ話をしていた資金担当の同僚が二人、鞆を運ぶのを手伝ってくれ、車庫に用意されていた車のトランクに鞆を四苦八苦して積み込み・・・持ち上げるには運転手の手伝いも要った・・・車はスタートした。かといって行くあてはない。行き先の指示はまだ出ていないのだ。

あてどなく車を走らせているうちに・・・ああ、なんたること！
 ・佐々木の力はどんどん弱まり、霞み、ついには消えてしまった！
 橘の蒙ったシヨックは甚大なものだった。第二のシヨックである。橘はもはや何も手につかない。まともな判断など無理だ。と、そこで車は路肩に寄せて止まり、運転手が向き直って突如橘を難詰し始めた。要約するならばそれは、「なにもかもお前が悪い！」という言い分だった。御大・・・佐々木のこと・・・にすべてをばらしてしまったからこんなことになったのだ！ 御大とあの女・・・ハルヒのこと・・・を引き合わせるからこんなことになったのだ！ 御大の周りに変な連中を集めたりするからこんなことになったのだ！ 御大はただの人になってしまい、我々の存在目的は失われ、努力はすべて水泡に帰した！ これらのことを中心人物は常にお前だった！ よけいな真似をしやがって！ 出しゃばりの軽率女！ 經理担当の分を弁えずに越権した結果がこの始末だ！ お前が悪い！ お前がすべて悪い！ お前だけが、ひとりして、なにもかも悪い！ 第三のシヨックだった。自分なりに活動に貢献しようとして、一生懸命してきたことなのに、一方的に責め立てられて、橘はとても悲しい気持ちになった。運転手はほかの二人に向き直り、打って変わった冷静な口調で相談を始めた。それは業務上横領の謀議だった。もうやることもなくなつたし、自分たちの取り分を持つてずらかるう。橘は気がついた。あの難詰は、まともな相談したら絶対反対するに違いない自分を黙らせるために「かました」ものだったのだ。確かにもう橘は何も言えなかつた。難詰で蒙ったシヨックもさることながら、財物持ち逃げのためにそんなことをする仲間の姿も大シヨックだった。第四のシヨックであつた。自分はやりたくないとも我慢して、經理担当「締方」などという面倒な仕事をやってきたのだ。誰もやるうとしなかつたため、橘は立候補したのだ。佐々

木さんの平和な世界のために奉仕してきたのだ。給料も出さず、月々僅かながらの小遣い銭しかくれない中、バイトもしながら努力してきたのは、断じてこんないい加減な連中のためなどではない！ 悲しみに加え、橋はとても悔しく、情けない気持ちだった。まともな口がきけたなら、断固抗議しただろうに、なまじ内容に心当たりがあるばかりにそれもできず、結果橋は黙りこんだままだった。と、携帯がメール着信を告げる。それはあの『最終指示』だった。第五のショック。今や横領を企んだ彼らの立場の方が追認されてしまった！ もはや彼らに抗弁しようにも論拠がない。運転手は冷笑し、

「悪かったな。でも悪く思うなよ。タダ同然でここまで来たんだ。いくらかりターンをもらってもいいだろう。その2人は彼らの預かり金、俺は車を貰う。あんたの取り分はあの鞆だ。持って行くがいい。」

橋は何も言えずに黙っていた。運転手は車を駅前に回し、まず橋を車から引き出して花壇の縁に座らせ、残りの二人と鞆を引きずってきて橋の前に置き、肩紐を橋の手に握らせ、

「ここまでサービスだ。あとは自助努力でよろしく。」

と言い残し、彼らは皆立ち去った。橋はていよく見捨てられてしまった格好だった。第六のショック。そこに俺達がやってきたわけだ。

このあたりから度重なったショックのせいだろう、橘の記憶は途切れ途切れになり始める。自分で自分の行動が把握できなくなりだすのだ。忌まわしい鞆を俺たちにやってしまうと、いつの間にか橘は事務所に舞い戻っていた。資金事務室は修羅場と化していた。橘の存在には誰も気がつかないようだった。出遅れて金を取り損ねた連中が集まり、別保管されていた120枚ばかりの千円札をめぐって取っ組み合いの奪い合いをしていた。ガラス戸は割れ、キャビネットはへこみ、千円札は部屋中に飛び散りばらまかれ、その中で鼻や口から血を流した連中が際限ない殴り合いをしているという、この世のものとも思えぬ浅ましい光景が展開していた。世界平和のために集まったはずの仲間たちが、些少な金銭をめぐって文字通り血みどろの争いを繰り広げている救いようのない有り様は、橘の心に限らない軽蔑感と、根深い幻滅をもたらした。第七のショックだった。・・・気がつくとも橘は中庭にいた。そこでは年かさの事務員が焚き火をおこし、書類を焼却しているところだった。橘は燃え盛る炎と、痩せて骨ばった事務員の背中をぼんやり眺めていた。やるせない光景だった。この事務員は熱心な活動家でもあり、橘と同じく面倒を押しつけられてしまった、人の善い人物だった。話したことはほとんどなかったが、好感のもてる人だった。誰に言うともなく彼は呟く。

「どうしてこうなってしまうかなあ。頑張ったんだがなあ。」

一生懸命作成し、命の次に大事なものだった書類を火中に次々と投じながら。橘も同感だったが、何かひどい疲れを覚え、何も言うことはできなかった。彼の背中では時折細かく震える。きらきらと光る滴が焚き火の炎に照り映えて滴り落ちる。橘はその場を離れた。

見ていらなかったのだ。その後もしばらく、橘はあてどもなく建物の中をうろついた。食堂の食品庫も荒らされていた。食器棚もからになっていた。女の事務員がひとり、自分の車のトランクにダンボール入りの白菜を詰め込もうとして、トランクが閉まらず四苦八苦しているのを横目に、いつしか橘は再び資金事務室にいた。取っ組み合いは終わっており、もう人っ子一人いない。血だまりが数カ所、踏みにじられた千円札が数枚、あとなぜか、血まみれの一万円札が一枚残されていた。橘は札を拾い集め、手提げ金庫にしまった。反射的な行動だった。いつもそうしていたのだから。取りまとめた金銭は手提げ金庫に納めるものだ。現金管理機導入まではそうだった。手提げ金庫を所定の場所に置き、橘は考えた。この光景はどうしたことだろう。まさにそれは、終末の風景だった。泣することすら無意味に思える、すべてが終わりの、疎ましい眺めだった。あんなに頑張ったのに。あんなに頑張ったのに。あんなに頑張ったのに。

橘はふらふらと、最後の一人になるまで建物の中にいた。開けっ放しのキャビネット。散らかった書類。パソコンは持ち去られ、コピー機までもなくなっていた。現金管理機は残されていた。重たいし、第一使い道がない。中庭の焚き火は消えて、事務員もいなくなっていた。駐車場の車も全部消え失せていた。何もかもがほったらかしだった。後片付けなど、誰もしなかったのだ。もうその必要がないのだから。限らない脱力感を覚え、しかし橘は座り込むことを必死に我慢していた。崩れ落ちたらそれきり、自分が地面に同化してしまうような気がしたから。三年間、この建物に出入りしていた。愛着もあった。どうせ終わりになるのなら、もっと相応しい最期を迎えたかった。こんな強制終了同然の有り様ではなく。橘は疲れていた。非常に疲れていた。建物の中は暗く、肌寒かった。橘はぼんやり思う。帰ろう。うちにかえろう。ここで記憶は途切れる。そこからおよそ3日間、橘には記憶がない。わが姉妹に強制連行されたことも、なにもかも。そして水曜日の昼下がり、自室のベッドで横たわっている自分を、橘は「再発見」する。橘は起き上がり、記憶を辿り、そしてようやく、泣きだすことができた。号泣することができたのだ。ショックのあまり感情を解放することができなかつた当日とは違い、3日間の事実上の気絶を経て、初めて橘は状況に向き合えた。感情の解放が終わると、つまり泣きやむと、次に橘はこれからのことを考えた。なるほど、『組織』は失われ、努力は水泡に帰した。さて、これから自分は？

「座りませんか。」

橘が促す。俺たちは今、例の川沿いの公園をゆつくり歩いていたところだ。ベンチに腰を下ろす。橘も辛い思いをしたんだな。いろいろと許せないこともあるだろう。3日間の心の旅路で、いくらかシヨックが和らいでいればいいんだが。橘の話は終わったらしい。じつと黙っている。しかしその横顔は、なにか清々したものを感じさせ、顔色はいくらかましになってきていた。そうか、誰かに話さずにはいられなかったんだな。わだかまりをすっかり吐き出したわけだ。その程度のことなら、俺はいつでも、話くらいはいくらでも聞くぞ。橘は何も言わない。俺は「大変だったんだな。」と言い、それきり黙っていた。しばらくだんまりが続いた。何分間かが経ち、橘は何かしらそわそわし始めた。どうしたんだ？ やおら橘は地面に靴底を打ち付けるように、ばん！　そしてすつくと立ち上がり、俺に言った。

「あなたって人はいったい何なんですか！！」

なんだなんだ。

「女の子がこんなに弱っているというのに、いったい何ですか！
『大変だったんだな。』なんて、毒にも薬にもならない一言でお茶を濁すんですか！？」

どうした橘。落ち着け。大丈夫か？

「大丈夫に決まってるじゃないですか！　そんなことはどうでもいいんです！　女の子が弱ってるんですよ？　こんなに可愛い女の子が息も絶え絶え。優しく抱きしめて、『ボクがついてるから大丈夫！』くらいのことでは言ってみたらどうですか！」

落ち着け橘。俺にはそんなキザなまねは無理だ。それとちょっと
まてよ橘。お前、俺が好きなのか？

「？ いいえ？」

じゃあなんで俺にそんなことを求める。

「弱っている女の子を力づけなきゃいけないのは世界の常識です
！！ それに、そこからふたりの物語が始まるかも知れないじゃない
ですか！ あたしは3年間を空費しました。そのことはもういい
ですが、今から取り返さなきゃいけません！ 高校生らしく、青春
を謳歌するんです！ そのために絶対必要なもの、それは！」

・・・それは？ わかりきった答えのために、俺は相槌を打つ。

「愛です！！」

橘はじつとりと叫ぶ。

橘の顔色はすっかり元に戻り、キラキラした背景を背負わせたらぴったりしそうな表情をしている。・・・全然変わってないな。「なにかに夢見る少女」という一点はあくまでも不動か。しかしどうしたものか。つきあってしまうなどはむろんNGだ。ハルヒに露見したらどうなることか。古泉は多忙になるだろうし、朝比奈さんは（小）・（大）問わず頭を抱えてしまうだろう。そして、おそらく長門にも大変な迷惑をかけてしまう。それはいただけないにもほどがある。俺は困惑ついでに問う。なぜ俺を選んだ？ いい男なら他にいくらもいように。」

「佐々木さんがあなたに・・・多大な、関心を、払っていたからです！ 涼宮さんにしてもそうです！ あなたには何かあるに違いありません！」

何もありません。俺自身わけがわからんのだ。

「へえ？ まあいいです。」

俺はふと思いついて聞いてみた。なあ橘、正直なところ、お前、誰でもいいんじゃないのか？ 失礼な質問だとは思う。思うんだがな。

「ぶつちやけその通りなのです！ ぐずぐずしてはもらえません！ 時間はどんどん過ぎていくんです！ とりあえず付き合ってみて、好きか嫌いかはそれから決めればいいのです！ 省力化なのですー！」

革命的な見解だな。ただ、省力化にはならんと思うが。・・・山のように面倒が湧き出して、すみやかににもかもが泥沼化しそうだ。

「しゃらくさいことをごちゃごちゃとうるさいのです！　こんなに可愛い女の子が言い寄ってあげてるんですから、すみやかに付き合えばそれでいいのです！」

そうはいくかい。・・・あとな、自分で言うな。さあどうしよう。そのとき、俺にある考えが閃いた。・・・この暴れん坊のバッター相手には、あいつを抑えの投手に出そう。投手交代！　多分、すぐ近くにいるはずだ。俺は橋にちょっと待つようにと言い、電話をかけた。予想通り、ほんの数分で駆けつけるとのことだった。電話を切り、橋に向き直る。なあ橋、どうせなら俺みたいな平凡な奴じゃなく、イケメンに行ったらどうかと思うんだが、どうだ。知り合いにいてな。ツラのよさは保証するぞ。財力もな。性格は知ったことじゃないが。橋は明らかに、かなり興味を引かれた様子だった。

「な、なるほど！　一理あるのです！　もし、あなたが、どうしても、その人を、あえて、紹介して、自分は潔く身を引くというのなら、その話、乗ってあげなくもないのです！　で、どんな人なのですか？」

慌てるな橋。たまたますぐ近くにいらしいんだ。呼び寄せたから、もうすぐ現れるだろう。

「ふ、ふうん！　そうですね！　ぜんぜん興味ありませんけど、この際いいです！　どの程度のイケメンさんなのか、お手並み拝見なのです！」

言つわりには赤くなってそわそわの橘。そして、堤防の影から問題の人物が現れる。

キヨン子ちゃん70

俺は橋に求める。濟まんが立って川下側を向き、目を閉じてもらいたい。

「ふ、ふうん！なるほど、そうですね！あざとい演出です！」

言いながら言われた通りする橋。近寄ってきた問題の人物にも俺は有無を言わず、川上側を向いて目を閉じて立つように言う。これでふたりは、背中合わせで、3歩半あまりの距離で立っている形になった。俺は更に号令する。双方、目は閉じたまま、回れ、右！双方、一歩前へ！橋、もう半歩前へ。双方、右手を前にゆつくり差し伸べる！俺はふたりの手をとって握手させ、俺の手で包み込む。双方、目を開けてよし！橋京子君、および・・・古泉一樹君！この俺の名において、君らをカップルと認定する！カップル成立おめでとう！

電話するなり、俺は切り出す。ハルヒ流電話話法だ。おい古泉。お前、俺がどこにいるか知ってるな。近くにいるだろう。すぐ来い。いいから来るんだ。いいな。返事を待たずに電話を切る。絶対に来ずにはおれない筈だ。

橋と古泉は双方この宣言に仰天したらしく、ふたりして一瞬ぽかんとし、ついで橋が抗議の声をあげようとする。

「な・・・！」

だが言わせん！ 言わせはせん！ 何を言うかは分かっている！
「なんでこんな奴と！」だ！ わからんではない、だが橘、スト
ップ！ よく考えてみるんだ！ そのわだかまりはなんのためだ！
根拠はなんだ！ それは『組織』の人間としてのこだわりじゃないのか！ もう『組織』はないんだ！ それだからこそお前も、『組織』の活動家から「恋多き少女」へと転向することにしたんだろう、違うか？ いいか、これはチャンスなんだぞ！ まさにお前は今、新しい時代の先頭を、先陣きつて、駆けることができるんだ。今こそ、『機関』の人間と、『組織』の人間が融和すべきときなんだ。わだかまりを捨て去るときなんだ。ふたりがたまたま俺の知人であったという事実こそは、まさしく天啓、運命であると言っている。お前だって、今や普通の女の子だ。付き合う人間に自ら制限をかけてもつまらないだろうが。さつき自分でも言っていたら、『とりあえず付き合ってみて、好きか嫌いかはそれから決めればいい』って。それにこいつを見てみる。変なこだわりを抜きにすれば、どうだ、イケメンだろう。俺とて認めたくはないが、事実、こいつはツラだけはいんだ。さあ、とりあえずそうしてみたらどうだ。そんなに魅力のない話だとは思わんのだが、どうか。・・・わかっている。我ながら、よくもまあこんな出鱈目、無茶苦茶、支離滅裂、意味不明、論旨破綻、大袈裟、大風呂敷なことごとを並べたてたものだ。何故だか俺は必死だった。俺は、人間、自信がないと却って自信満々な態度をとり、たたみかけの説き伏せで主張を進めるものなのだ、実地に学んだ。最後に俺は付け加える。古泉は超能力者、橘は元超能力者。お前らは、似合いのふたりだ。悪いことは言わん！ 俺はふたりの手を包み込んで自分の手に力をこめる。お前ら！ これは運命だ！ ぐだぐだ言わず、いまここで、まとまっつけ！！ 俺は静かに手を離す。ふたりの手は握りあつたままだ。そ

うだ！ それでいい。お二人さん！・・・幸せにな。俺は背を向け、その場を去る。少し歩いて振り返ると、ふたりは手を握りあつたまま、じつと立ち尽くしていた。もう少し歩いて振り返ると、ふたりはゆっくりと、俺とは反対方向に、歩み去っていくところだった。肩を並べて、仲睦まじくも見える様子で。・・・お二人さん、あとは自分たちでどうにかしてくれよ。

キヨ子ちゃん71

帰宅した俺はキヨ子とキヨコに報告する。橘が復活したぞ。

「そう。よかったわ。どんな様子だった？」

俺は一部始終を語る。

「ふうん、つまり京子ちゃんはいっちゃんに片付いた、ってわけだ。」

「でも本当に彼女変わってないわね。」

余計なことをしちまったかな。

「いいえ、基本的にいい措置だと思うわ。よくやったわキヨくん。古泉くんはある程度なら、きちんと抑えてくれるだろうから。」

しかして二週間ほど後、残念な知らせが入った。キヨコが言う。

「あの二人、別れたらしいよ。」

「・・・そうか。それは残念。・・・やっぱり無理やりくっつけたんじゃない駄目か・・・。」

さらに二週間ほど後。キョコが苦笑いしながらニュースを持ち込んできた。

「どうもいろいろと話が入ってくるよ。」

・・・どんな話だ。

「x月x日、デート中に別の男とかち合う。男同士がいがみ合っている間に本人遁走。以後連絡とれず。従来男二人は友人同士だったがこの事件をもって絶交。x月x日、デート中にうっかり男の名前間違える。逆上した男に追い回されるが、撒いて逃走に成功。以後連絡とれず。x月x日、別れ話こじれ。男号泣。そのまま立ち去るが男泣きながら全速力で追跡。発車間際の電車に駆け込んで辛くも逃れる。男は『駆け込まないで下さい!』と駅員に乗車を阻止され、憤激して駅員に殴りかかり傷害の現行犯で付近警戒中の私服警官に逮捕され、停学処分。ちなみに、以後連絡とれず。x月x日、デート中に別の男二人とかち合う。男三人、いがみ合わず協議。付き合う男一人を選出したがその場にそのままいた本人にそのことを伝えたところ、『はあ?! ありえませんか!!』と何故か逆上そのまま遁走し以後連絡とれず。男三人、『全日本橋京子にふられた人々の会』結成。たまにカラオケに繰り出したりしている。x月x日、・・・」

いや、もういい。・・・とりあえず、会を結成した三人はちょっとそこらにいないくらいの実に変な奴らだ。

「その点はあたしもそう思う。とにかく、来るもの拒まずで片っ端から付き合ってるらしい。中学でのハルちゃんみたいだね。」

「ハルちゃんの場合はね、一人ひとり入れ替えだったからまだましだったのよ。男とかち合うにしても、元彼とならたいていなんてことないけど、現彼同士かち合ったら地獄よ。橘ちゃんたら・・・器用じゃないくせに器用ぶるから・・・。」

「二重に付き合うなとまでは言わんよ、あえて。ただ、苦労が無駄に多いぞ。例えば男の行動範囲を把握しなきゃならないし、行動範囲がかち合うならデートのときは口実を設けて残りの片方は追っ払っとくとかしないと。」

・・・兄としては、とりあえず、お前たちにそのへんの追及はないでおこうと思う。

「橘ちゃんはほんとに変わってないわ。橘ちゃんは自分になら何でもできると思ってる。無根拠にね。全能感がいまだに払拭できてないのね。」

とにかく、今の状況はよろしくない。実によろしくない。刺されてしまいかねん。

「男の嫉妬は醜いうえに往生際が悪いからな。」
「言つて聞くような状態じゃないし・・・。」

手をこまねいているうちに日曜日になった。SOS団の招集はなかったので、俺は街に買い物に出た。と、変なものを見かけた・・・橘と古泉が並んで歩いていやがる。遠目なので表情はわからないが、振る舞いはごく自然に見えた。どういうことだ。別れたんじゃないのか。帰宅後俺は再びキョン子とキョコに報告する。

「キヨンくんも見たのね。」

「あたしも見たぞ。」

どうなってるんだ？

「ははあ、わかってきたぞ。あの二人、本気でお互い惹かれだしたようだ。実はなキヨン、別れ話の噂はあの二人の周りにはしよっちゅう流れてるんだ。でも二、三日すると何事もなかったかのよう
に元の鞘に収まってる。その繰り返しらしい。どうも変だとは思ってた。」

人騒がせなカップルだなあ。古泉と付き合いながら、ほかも平行か。

「いつちゃんとの関係はどうやら別格というか、別枠というか。」

「とにかく、くつつけたのはキヨンくんなんだから、責任重大ね。」

いやなことを言わないでくれ。そこまで責任はもてん。

「冗談よ。でも本当に、あのお二人さん、お似合いだね。キヨンくん、いいことしたわね。グッジョブ。」

さて、以上のごとき他愛ない出来事にかまけている間に、事態は裏側で密かに継続して進行していた。予想もしないあらたなプロットの幕があがろうとしていた。しかし神ならぬこの身、そんなことは知る由もない。

キヨン子ちゃん72

とある土曜日の昼下がり。月曜日まで連休だ。キヨン子は佐々木と出かけているとのことだ。で、橘はどうなったんだ。

「いつちゃん以外とは全部切れたらしいよ、結局。」

大丈夫なのか？

「家は知られてないし、電話は男ごとに別の番号の端末を使ってたってことだし。」

電話代だけでえらいことだな。

「プリペイド携帯の大量契約ってわけだ。切れると解約だ。彼女いいとこのお嬢さんで、お小遣いには不自由してないからね。お小遣いもバイトの給料もほとんど全部突っ込んでた『組織』がなくなっちゃったから尚更だ。」

しかしそんな工作にも限度があるう。あんまり人を弄ぶとろくなことがないぞ。

「彼女相当懲りたらしいよ。この間あたし会ったけど、『もういや。もう懲り懲り。恋多き少女はもうやめ。』って言った。労多くして実り少なし、ってことを学習したらしいね。結局、愛を求めて付き合いを広げまくる、ってのは泥沼に足を突っ込むことだもんね。」

だよなあ。遠回りはしたようだが、古泉とまとまりそうで何より

だ。

「別れ話の噂は相変わらずあの二人につきまとってるけどね。」

そのとき電話が鳴った。キヨコが出る。

「ああキヨ子ちゃん、どうしたの・・・なにっ！ なにっ！？
いつ?! そうか、わかった!」

いつもはのんきなキヨコの声が緊迫感を漂わせる。これは・・・
ただ事ではない!

「通報したか? まだ? よし、ちよつと待つんだ。森さんの番号は判る? 判らない。わかった。いいか、そのまま待て!」

キヨコは電話をかけ直す。

「森さんっ! 緊急事態発生!」

その次の言葉は、信じられないようなものだった。

「佐々木さんが誘拐されました!」

なん・・・だと・・・! 言葉の意味がわからない。言葉の繋がりがわからない。佐々木? 誘拐? なにが起こった? なにがあったんだ? 俺を置いてきぼりに電話は続く。

「はい、はいそうです! キヨ子から連絡が。通報はまだ。はい。了解しました!」

キヨコは電話を切り、

「キヨン、聞いての通りだ！ 佐々木ちゃんがさらわれた！ もうすぐ森さんが来る。もし……、」

俺は居間から自室に駆け上がり、外出準備を一瞬で整える。階下からキヨコの鋭い声。

「キヨンッ！」

聞くなり俺は部屋を、家を飛び出し、森さんの運転する車の後部座席に飛び込む。すぐさま車は発進する。信号で停車して漸く、森さんが口を切る。

「申し訳ございません。我々のミスです。」

キヨコが付け足す。

「佐々木ちゃんはいまやハルちゃんの友達だから、『機関』の特別保護対象に指定されてるんだ。」

「その通りです。要員交代の際、連絡の行き違いから、後任者が配置につく前に前任者が持ち場を離脱してしまったのです。その隙をつかれました。返す返すも迂闊なことです。」

何者が、何の目的で？

「『組織』の残党です。目的は不明。」

森さんは停車する。奇しくもそこは、あの忌まわしい「朝比奈さん誘拐事件」の発生現場だった。そこにはキヨン子がいた。真つ青

になっている。助手席に乗り込むと絞り出すような声で言った。

「このあたしがついていながら・・・！」

俺はひとつ誤解していた。キヨン子が青くなっていたのは恐怖が原因ではなかった。憤激のあまりだった！

「お気になさいますな、キヨン子さん。我々の失態に比べればとるに足らないことです。」

キヨン子が事件発生の状況を語る。場所も同じなら、経緯も似たようなものだった。ほんのちよつと注意が逸れた、まさしく一瞬の出来事だったらしい。再び森さんがブレーキを踏む。それはある公園のそばだった。窓越しに森さんは鋭く叫ぶ。

「古泉ッ！」

キヨコが後部右側の扉を開ける。古泉が乗り込み、そしてなぜか橘も飛び込んできた！キヨコが扉を閉める。森さんは構わず発進する。古泉は橘を膝の上に乗せて、微かに苦笑している。

「ご覧の通りです。」

デート中だったな、さては。

「お察しの通りです。」

恋人連れで非常動員していいのか？

「いいえ。」

古泉は意外なことを言った。

「橘さんをお連れするのも指示の内容に含まれていました。」

キヨン子ちゃん73

自動車は見たような風景の中を突っ走る。アスファルト道路を外れて山道へ、あの忌々しいダークグリーンのワンボックス逃走車のたどった道だ。やがて抑止地点を通過、ほどなく開けた場所に出た。谷間だ。広い谷間。その底は広大な更地で、隅のほうにぼつんと比較的大きな建物がある。俺たちの車はまっしぐらにその建物に近づく。しかし乗り付けることはできない。建物の周囲にはバリケードが築かれている。森さんはブレーキを踏み、建物からかなりの距離をとって停車した。前方の地面に、建物から投げ落とされたコンクリートブロックが跳ね返る。

「車から出ないで下さい！」

言いおいて森さんは飛び出す。今まで気がつかなかったが、その衣装は警察官のものだ。・・・少なくとも、よく似ていた。そのとき、エンジン音が聞こえてきた。振り返ると、警察車両と思しき灰色、白、青等の塗装を施された一団の車列が登場した。ぞくぞくと周辺に配置されてゆく。

「高圧放水車、装甲警備車、多重無線車、広報車・・・あれはなにかしら？ 見覚えがないけど。」

「映画の撮影に使うクレーン車に似てるけどな。」

「壮観ですねえ。」

「佐々木さん・・・。」

4人がそれぞれの反応をしている中、広報車のスピーカーから声が流れます。

「旧町役場庁舎内の諸君に告げる。君たちは完全に包囲されている。逃走はもはや不可能である。人質を解放し、おとなしく外に出てください。」

返答はない。石がひとつ、飛んできて地面に跳ねる。広報は続く。

「庁舎内の諸君にかさねて告げる。無駄な抵抗はやめなさい。無駄な抵抗はやめなさい。佐々木さんを放してあげなさい。ご家族のもとに帰してあげなさい。」

なおも返答はない。今度は火のついた瓶が落ちてきたと思ったら地面に当たった瞬間破裂、大きな炎があがる。

「火炎瓶だわ。」

キヨン子が言う。広報はなおも続く。

「我々は皆、君たちの人間らしい、理性ある決断に期待している。人間らしい決断を待っている。人質を解放し、おとなしく外へ出てきなさい。」

また瓶が落ちてきた。火はついていないが、地面に当たって割れると何か液体が飛び散り、得体の知れない白煙があがる。

「硫酸瓶かしらね。でなくても何か劇物だわ。」

再びキヨン子が言う。相変わらず返答はない。広報は続いているが、どうも埒があかないようだ。佐々木は大丈夫なんだろうか。その時森さんがやってきて、俺たちを車から連れ出した。三人の警官

が、金属製の大きな盾を持って俺たちの警護にあたる。旧町役場庁舎とやらからは、おそらく屋上からだろう、石や各種のありがたかない中身を詰められた瓶が投げられはじめ、だんだん間断なくなりつつある。放水車が放水を始め、地面で燃える火炎瓶の火を消している。と、警官が話しかけてきた。

「大変なことになってしまいましたね。申し訳ありません。」

「まったく、このことは我々の不手際が原因です。」

「それにしても、またしてもご婦人を拐かすとは・・・断じて許せるものではありませんぞ。」

「・・・それは多丸さん兄弟と新川さんだった！ も、森さん！まさか！」

「はい。ここにいるのはすべて我々の同志です。本物の警察の出勤となると話が大きくなり過ぎますので。形式上、映画のロケということになっております。しかし・・・、」

森さんは建物をきつと睨みつけた。

「これからの戦いは本物というわけです。くれぐれも油断なされませんように・・・。」

キヨン子ちゃん74

建物に意味ありげな視線を向けている人間はもう二人いた。キヨン子と橘である。キヨン子は怒りに燃えた瞳で、橘はもの悲しげな瞳で。キヨン子はわかるが、橘、どうした？

「またここに来ることがあるとは思っていませんでした。」
というと？

「ここが、『組織』の本部……かつての、本部、です。」
事務所、か？

「そうです。私の……経理担当の事務室はあのへんでした。」
橘は建物の右翼中ほどを指差した。建物の外観は学校の校舎に少し似ていて、中央に時計塔、右と左に五階建てくらいの建物が張り出している。

「こちらへ。」

森さんが大型バスのような車両に俺たちを招き入れる。中は会議室になっていて、あの建物の平面図らしきものが机上に広げられていた。森さんが口を切る。

「正直なところ、我々の見通しが甘すぎたことは認めるほかございません。これほど性急に行動に移るとは全くの予想外でした。……あの建物の所有者はすでに我々となつてはいるのですが、入手直

後に屋内のざつとした検分をしたものの、この二週間ばかりはあまり目をかけておりませんでした。橘さんにお越し願ったのは、あの建物について、あらためてのご説明を願うためです。橘さん、皆さんもどうぞお座り下さい。」

さすがに橘は森さんへの苦手意識が払拭しきれていないらしく、名前を呼ばれるとびくっとなっておずおずと椅子に腰掛けた。俺たちも手近の椅子に座を占める。森さんが質問する。この建物について、建物内にあるものについて、経理上のこと、組織についてのこと、なんでもよいので、思いつく限り教えて下さい。橘が答える。

「もう1ヶ月以上たつのであまり詳しくは覚えていません。それに経理担当は自分たちの事務室をほとんど離れないので・・・。特に建物の向かって左側、なぜだか『病棟』と呼ばれていましたが、そこは宿泊施設や居住区域に使われていましたけれども、あたしはどんなに遅くなくても自宅に帰ることにしていましたので、ほとんど、というかまったく、入ったことがありません。そうですね・・・向かって右側、三階ほぼ中央が経理担当の事務室でした。両隣は倉庫です。経理担当事務室には締方の私、あとは受方と払方の2人が詰めていました。事務室の直上の四階は会議室、五階も会議室でした。五階には佐々木さんの部屋もありました。」

「佐々木さんがこの建物に以前来たことがあるということですか？」

「いいえ、そうじゃないです。佐々木さんはその部屋のことは知りません。あたしたちが勝手に決めていたんです。この建物は昔町役場だったとのことで、五階には町長さんの部屋がありました。あたしたちは、世界平和のために、佐々木さんが真にその力を使う為に、あたしたちのそばで活動を始める日がきつと来るに違いないと思つて、その日のために、町長さんの部屋を佐々木さんのために準備しておくことにしたんです。調度品をきちんと整え、毎日埃一

つ残さないように掃除していました。それだけを担当する、専門の掃除係がいたはずですよ。」

キヨン子ちゃん75

橘の説明は続く。

「下の方について言いますと、経理担当事務室のすぐ下、二階は総務担当の事務室でした。経理審査担当の事務室と書類庫に挟まれていて、さらにその下、一階は食料品庫、厨房、食堂、食器類保管庫、休憩室でした。地下は・・・駐車場と燃油庫でした。建物の左右どつちかがどちらかにあたりませんが、・・・もうよくわかりません。中央の時計塔は見たとおり正面玄関があります。あとはよく知りません。奥に続く棟は図書館、会議室、講堂が主なところだったと思います。」

「武器のたぐいなどは？」

「あたしはよく知りません。・・・ただ、『その他特殊用具類』というよくわからない名目での、かなり多額の支出がたまにありました。」

「ほかには？」

「ええと、・・・そういえば、あの日の3日ほど前だったと思います。『燃油費』の名目で多額の支出がありました。売掛金の支払いだっただのか、現物の購入だったのかよく覚えていませんけれど、・・・経理担当の『払方』がかなりルーズな人で、資金があるのに支払いを滞らせる常習犯だったもので・・・。」

「なるほど。では、彼らの目的は何だと思えますか？」

「見当もつきません。もうこんなことには何の意味もないはずですよ・・・。」

「彼らの人数、首謀者などについてはいかがでしょう。」

「・・・わかりません。ただ、かなり過激な発言をする幹部がいたのは確かですが。ええと・・・名前をよく覚えていません。あたしたちは役職で呼び合うことが多かったので・・・あたしにしても、

『経理締方』のほうがわかる筈です。とりあえず、その人は『組織委員会首席副委員長』でした。ナンバーツーにあたります。ナンバーワンにあたる『組織委員会委員長』はとにかく大人しい人で、こんな大それたことはできそうにありませんし……。あと、ナンバースリー以下はしばしば異動するのでよくわかりません。」

「その、ナンバーツーはどんな過激なことを言っていたのですか？」

「……白状しますが、聞き流していたのではつきりとは……。確か、成功あらずんば全滅あるのみ……。とか……。佐々木……さん、……。そんな、……。まさか……！」

橘は何か思い当たったらしく、みるみるうちに不安のあまり真っ青になった。キョン子も青くなった……。激怒のあまり！こいつも同じことに思い当たったようだ。

「あの人たち、……。」

「佐々木ちゃんを道連れにする気だわ!!！」

橘の答えをキョン子が横取りする。しかしそんなことを気にしている時ではない！

「他の人はどうか知らないけれど、そのナンバーツーについては間違いないわ！ 成功できなかった代償に、周囲のなるべく大勢を道連れに、自滅する気なのよ。……佐々木ちゃんまでも!!！」

キヨン子ちゃん76

「あたしも突入部隊に参加させて下さい！」

キヨン子が叫ぶ。森さんが制する。

「お気持ちだけで過分なほどです。ご自身のお立場についてよくお考えいただきたい。あなたは涼宮ハルヒさんの直接的な関係者であり、あなたに髪の毛一筋の傷でもつけようものなら我々の誰かが切腹しなきゃなりません。・・・現実にするか、政治的にそうなるか、いずれにせよ。どうぞ、ご自重ください。」

キヨン子は無念そうに腰掛ける。

「その代わり、」

森さんは少し考えると対案を出してきた。

「指揮官役をお願いします。私が補佐致しますゆえ。」

それを聞くとキヨン子はものも言わずに平面図の前に席を移した。その表情は真剣そのものである。森さんは続けて言う。

「これまで判明している点について説明します。あの建物はかつてこの地にあった小さな町の合同庁舎でした。右翼が官庁、左翼が町立病院、奥の棟が生涯学習センター。なお、鉄道駅も兼ねており、左翼部の屋上より小橋にて、高架線のプラットフォームにできることが可能です。現在鉄道線は路線休止中であるとのこと。建物全体は、我々から見ると逆丁字形になっておりまして、立てこもって

いるのは推定ですがおよそ60名から120名。鉄パイプ等で武装、火炎瓶、塩酸瓶、硫酸瓶、硝酸瓶、苛性ソーダ溶液瓶などの投擲を続けています。ヘリコプターからの観測によりますと、火炎瓶の燃料となるガソリン類と思われる石油缶ならびにドラム缶が建物屋上に大量に集積されているとのこと。投石用の石の山もあります。『弾切れ』を狙うには時間がかかりすぎるかと。」

「進入路は？」

「正面玄関、右翼及び左翼端の通用口、地下駐車場の出入り口はいずれも防火シャッターが下ろされ、バリケードが構築されており、火炎瓶等の投擲激しく、接近困難であります。」

「鉄道からは？」

「比較的手薄な模様ですが、接近を図ったところライフルと思しき銃器で射撃を受けました。現在部隊は後退し待機中であります。」

「ほかには？」

「先ほど鉄道会社に資料を借覧願ったところ、偶然にも興味深いものを発見したとのことです。町役場の地下を横切るトンネルの工事設計書と完工報告書です。何らかの理由でその後工事停止となった模様。」

「つまり、そのトンネルが使えるなら、突入路として、最適、と。」

「左様です。現在、調査中です。入り口が2キロ先の山の向こうというのが難点ですが・・・。橘さん、このトンネルのことは？」

「今、初めて知りました。誰も知らないと思います。」

「完工報告書によると、町役場には地下駅が設けられる予定だったらしい。現在燃油庫と地下駐車場に使われているスペースが相当するようです。」

「おそらく、完全にノーマークでしょうね。」

その時、ブザーが鳴った。通信機の呼び出しだ。

「はいこちら指令。」

「現在、トンネルがコンクリートで塞がれた部分に到達。コンクリート壁を破壊したところ、地下駐車場と思しき施設を発見、進入を果たしました！ 暴徒の姿はありません！」

森さんより早く、キョン子が応答する。

「よし、突入！」

「了解、突入します！」

キヨ子ちゃん77

「わあー！ お前らなんだ！ どっから入ってきた！！」

突入してきた警察官（実は「機動隊役エキストラ」の機関員）の姿を見て、元『組織』活動家の暴徒のひとりはその叫んだそうだ。それはそうだろう。出入り口を封鎖して完全ノーマークの地下から警察官がゴマンと湧き出してきたら誰だって驚く。彼らはたちまち全員が浮き足立ち、足並み乱れ、まったくの烏合の衆と化し、左翼部は突入30分にして五階まで占領、次の15分で中央後部の旧生涯学習センター部を占領、右翼部の一、二階を落とし、逃げ損ねた約70名を「検挙」した。あとは楽勝かと思われたが、ここからが頑強だった。残るは、左翼部と中央後部は屋上、右翼部は三階以上だが、階段は頑丈極まりないバリケードで完全に塞がれており、撤去作業をする「機動隊」の頭の上からは「当たったら人が死ぬもの」各種がなんの情け容赦もなく降り注いだ。石、大きなコンクリート片、火炎瓶や各種強酸類、強アルカリ類の瓶、大量のガソリンまでもが雨のように降り、火炎瓶で大火災になる。放水車からホースを引っ張って放水するが、火もガソリンも際限なく降ってくるためキリがない。機関の総力をあげた非常動員の大部隊はたちまち満身創痍となり、怪我人が次々と後送されていった、らしい。相変わらず交通は地下通路経由で、外から見たところあまり動きがあるようには見えない。時折大きな音が聞こえ、黒煙があがる。

さて、そんな中、新たなアプローチが試みられ始めた。説得あるいは呼びかけのための回路として、建物内の人間に連絡をつけるために電話をかけ続けているが、呼び出し音は鳴っているのに誰も出ないとのことだった。その報告に接しキヨ子は俺に向き直る。

「キヨンくん、佐々木ちゃんに電話してみてください。」

キヨンは青ざめている。これはどうやら不安からのようだ。しかし出るかな。

「とりあえずやってみて。」

森さんが俺の携帯に線を繋ぎ、スピーカーに接続する。通話内容を全員で共有するためだそう。俺は佐々木の携帯にかけてみる。意外にも、誰かが電話をとった。おい！ 佐々木！ 佐々木か？ 大丈夫か？

「や、やあ、キヨン。ぼ、僕だ。」

声は震えているが、誘拐のさなかにしては落ち着いた声が答える。大丈夫か？ ひどいことをされてないか？

「い、いいや、特には。大丈夫だ。傷一つないよ。今のところは。」

そうか、怪我はないんだ。やけに落ち着いてるな。誘拐されたというのに。

「いきなりさらわれたあとのことは薬で眠らされたらしくてよく覚えていない……。目が覚めたら、ここにいたんだ。」

眠らされて目が覚めたらそこに。どこだ。そこは。どんな場所だ。

「そ、そうだなあ、校長室にちょっと似てるかな。かなり上等の

机、革張りの椅子、応接セット、……机の上には『町長』の札がある。」

校長室に似ていて、机、革張りの椅子、応接セット、町長の札。周りに誰がいるか？

「いない。僕ひとりだ。」

どうだ、部屋のドアは開くか？

「開かない。びくともしない。」

他に変わったことはないか。

「さつきから騒音がひどい。爆発音がしょっちゅう聞こえる。あと、なんだかきな臭い。」

とりあえず、意外に元気そうです。まずはなによりだ。また電話する。

「ま、待ってくれ！ キョン、お願い、切らないで！ 本当は私、怖い。怖くて仕方がない。ひとりにしないで！ お願い！」

キヨン子ちゃん78

橘がほとんど泣きそうになりながら言う。

「間違いありません、旧町長室、『佐々木さんの部屋』です。」

電話からは佐々木の哀願が続く。

「お願い切らないで。心細くて死んじゃう。お願い……。」

佐々木は泣き出してしまった。無理もない。誘拐などされたらこうなるほうが当然だ。大丈夫だ佐々木！ もう少しの辛抱だ！ 必ず助ける！ 警察の人達がすぐそこまで行ってるから、頑張れ！

「なんだか変なの。焦げ臭くて……煙たい……。」

佐々木はしきりに咳き込む。

「なんだか暑い……。」

その瞬間、伝令が駆け込んできた。

「右翼部三階中央付近、火災発生ッ！ 延焼中！」

期せずして通信機からも同じ叫びがあがる。キヨン子が叫ぶ。

「検挙活動中止！ 救出ならびに消火活動に全力！ 展開中の部隊で振り向けられるものはすべて右翼部に！ 放水車はすべて消火にあたれ！」

「了解！」

伝令が飛び出してゆく。

「化学消防車は?!」

「到着まであと20分！」

携帯からは悲痛な泣き声が聞こえる。

「たぶんどこか火事なの。お願い助けて、まだ死にたくない、私にはまだ夢があるの、私は・・・」

佐々木は激しく咳き込む。俺は持ち合わせの知識を総動員する。

確か・・・、そうだ！ 床に這いつくばって息を殺せ！ 絶対煙を吸うな！ すぐに助ける！ 俺が行く！ 待つてる！

「私は、キヨン、」

再び咳き込む佐々木。もう何も言っな！ あとでゆっくり聞くら！

「あなた・・・」

声が途切れる。携帯を見ると通話は切れていた。アンテナは立ってるから、たぶん佐々木のほうの電池切れた。畜生、こんなときになんてことだ!!

「ああ、佐々木さん！ 佐々木さん！ 佐々木さん!!」

橋が絶叫し、泣き崩れる。いまは慰める暇がない。聞いての通り

です森さん！ 俺、行きます！ 森さんは一瞬考え、

「私も出ます。キョン子さん、キョコさん、あとはよろしく。」

「承知！」

「古泉！ お前を連絡役に指名します。変事があれば直ちに知らせよ！」

「わかりました！」

「では、行きましょう！」

俺は警察官の服に着替えるよう言われ、大急ぎで着替える。防燃加工してあるから、とのことだ。

「鉄道高架線の点検用の階段を上がり、待機中の部隊に合流して左翼部屋上を強行突破し、時計塔内部を突き抜け、右翼部屋上に突入、建物外側の非常階段を経て右翼部五階に突入を図ります。走ります。しっかりついてきて下さい！」

あとで聞いた話だ。キヨン子も森さんも、いよいよ佐々木道連れのための放火に取りかかったものと確信、『組織』側の自殺による死者やむなしと覚悟をかため、佐々木救出のために強行手段に出ることを決意した。しかし、検証の段階で発覚した事実は拍子抜けさせられるようなものだった。・・・原因はタバコの火の不始末だった。経緯はこうだ。三階中央の資金担当事務室は燃料一時集積所と位置付けられ、火災瓶製造の拠点でもあった。火災瓶製造を担当していた中にひとり喫煙者があり、仲間の度重なる注意にも関わらず、タバコを吸いながら火災瓶を製造するのをやめようとしなかった。・・・ガソリン、灯油、軽油などが 積み上げられた中で、である。さて、火災直前、その男はいつも通りタバコを吸いながら火災瓶を製造、見慣れない缶の中に吸い殻を放り込み、完成した火災瓶を運び出して立ち去った。その後しばらく、部屋は無人だった。電気が切られていたため火災報知器は動作せず、気がついたときにはすでに手のつけようがなかった。男は言った。「砂の入った缶があったので吸い殻を入れました。」と。実はそれは砂ではなく、砂粒状に加工された可燃性の樹脂であった。誰かが何かの役に立つかとどこからか運び込んだものらしい。この後どうなったかは説明の必要があるまい。さて、火災発生と同時に形勢が妙な逆転を示した。火災瓶攻撃がパツと止んだかと思うと、活動家たちが騒ぎ始めた。「わあー！ 大変だ！ 火事だ！ 火事だ！」「休戦だ！ 休戦だ！」「おーい、助けてくれえ！」「まだ死ぬのは嫌だ！」などという叫びが飛び交い、あつげにとられている「機動隊」の上から、火に巻かれた活動家たちが必死に助けを求めている。こうなると助けられないわけにはいかない。指令も「救出最優先」を告げている。「ようし、飛び降りてこい！」機動隊役の指揮員が叫ぶ。「受け止めてやる！」こうして、さっきまでの凶暴さはどこへやら、活動家たちは先を争

つて、素直に「機動隊」の腕の中へ飛び込んできた。この極端な逆転は随所で見られたとのことだ。

さて、話を元に戻そう。俺と森さんは高架線の階段を駆け上がり、錆びた線路を辿って、待機中の部隊と合流、小さなプラットフォームの階段を上がり、左翼部屋上に続く小さな橋を渡ったそこには第一関門が待ち構えていた。

「ここを通しなさい！ 右翼部側で大火災です！ このままでは佐々木さんも、お仲間も焼け死んでしまいます！」

パン！ スピーカーの広報への返事は銃声だった。

キヨ子ちゃん80

「撃つのをやめなさい！ 一刻を争うのです！ 撃つのをやめなさい！」

パン！ 聞き入れる気はどうかやらなさそうである。俺は気が気でない。こんなことをしている暇はないのに！ 佐々木！ 佐々木！ お願いだ、どうか無事でいてくれ！！

「嘘ではありません！ 人名救助第一です！」

「そんなこと嘘に決まったらあ、騙されないぞ！ なんだお前ら、人数を頼りやがって。俺はお前らなんか全然怖くないぞ、勇気があるからな！」

急に向こうから声が聞こえてきた。恐ろしく腹の立つことを言っている。

「仲間やら佐々木やら、そんな奴ら死んだって別に構うもんか。あいつらが俺に何をしてくれただってんだ。あいつらが俺にとつてなんだってんだ！ 俺はひとりぼっちも、死ぬのも全然怖くなんかないぞ。お前らなんかと違って勇敢だからな！」

その時ほど腹が立ったことはちょっと記憶にない。ハルヒの朝比奈さんへの狼藉なんか、余裕で笑って許せるね。も、森さん、あいつ、ぶち殺していいですか？

「逸つてはなりません。思う壺です。あまりこういう物を使ったくはありませんでしたが、やむを得ません。」

森さんは拳銃を取り出し、盾の間の細い隙間から慎重に狙いを定める。向こうはライフル銃で武装した一人だけのようだ。銃を振り回しながら、相変わらず好き勝手ほざいている。

「お前らは臆病者ばかりだ。サシでこいよ、サシでよ！ 頭数ばかりだよ、何の役にも立ちやしねえ。木偶の坊つてのは・・・、」

その瞬間、森さんが発砲した。パン！ パン！ パン！ しかし男は倒れない。森さんが狙ったのはライフルだった。ライフルは男の手からはじき飛ばされ、空中を二回転、屋上を囲む柵を越え、落っこちていった。男はいつそ面白いくらいにあっという間に真っ青になり、絶叫した。

「お、俺は怖くなんかないぞ！ 勇気があるから、勇敢だから、」
それきり声は途絶えた。3人ほどの隊員が飛びかかって制圧し・・・平たく言えば袋叩きにして・・・運び去って行った。余韻に耽る暇はない。森さんの鋭い声が響く。

「急げッ！ 前へっ！」

左翼部屋上は瞬く間に占拠され、時計塔の中を駆け抜けて右翼部屋上を窺う。煙がもうもうと立ち込め、非常にやばそうだ。森さんが顔を覆うマスクを差し出す。

「簡易酸素マスクです。10分間有効！ 非常階段はそこです！ さあ！」

俺は言われるままにマスクをかけ、煙の中に飛び込む。非常階段を駆け下り、バルコニーに沿って走る。いた！ 佐々木が床にぐったりと横たわっている。森さんが拳銃の台尻で窓ガラスを叩き割り、鍵を外して窓を開け、俺は踊り込んでぐったりとした佐々木を担いで運び出す。温かいのが救いだ。どうか、どうか！ 森さんが佐々木に酸素マスクを被せる。長居は無用！ 俺達は無我夢中で走り、キヨ子陣取る指令車の隣、医務車に駆け込んでいた。

キヨン子ちゃん 81

簡単な診察の後、医師が所見を述べる。

「ごく軽微な一酸化炭素中毒です。姿勢を低くしていたので、煙をほとんど吸わなかったことは幸いでした。呼吸も脈拍も正常、脳波にも異常は見受けられません。心配せずとも、もうすぐ目を覚ますでしょう。」

俺は佐々木の枕元に立つ。少しやつれているようだが、無理もあるまい。佐々木は身じろぎして、目を開けた。

「私は・・・もう死んでいるの？ あなたはお迎え？ そしたら随分気が利いているわね。私の・・・、」

しっかりとしろ佐々木！俺はお迎えじゃない！お前のよく知ってる、こつち側のキヨンだ！佐々木の目に涙が浮かぶ。

「キヨン、キヨン、君なのかい、本当に君なのかい？僕を助けてくれたんだね、本当に助けてくれたんだね！キヨン、君が僕を連れ出してくれたのをぼんやり覚えているよ。キヨン、・・・」

佐々木はまだ何か言いたそうだったが、俺はその時物凄い力で押しつけられた。俺は脇にすっ飛ばされ、橋が佐々木にしがみついて号泣する。

「佐々木さん、佐々木さん、ごめんなさい、ごめんなさい！！でも無事で本当に良かったです！佐々木さん！」

やれやれ。とりあえず一番の懸案事項は解決だ。しかしこの一連の事件はいつたいなんだろ。俺は指令車にとりあえず戻ろうと外に出た。化学消防車が到着して消火活動を継続している。指令車に入っていくとキヨ子と森さんが話し合っている。

「死者は？」

「ない模様です。少なくとも、当方の要員は全員生還しました。」

「よし・・・」

俺はしばらく手持ち無沙汰にしていた。と、キヨ子の声が飛んできた。なんだか険がある。

「キヨン！ 佐々木さんの容態は？」

意識回復したぞ。ごく軽い一酸化炭素中毒だと。心配はないようだ。

「そういつた重要な報告は即刻なすこと！」

相当気が立っているようなので、あまり近寄らないことにする。外に出るとキヨコがやってきた。

「キヨン、お疲れ。大活躍だね。」

俺の活躍じゃねえよ。必死こいてどうやらこの始末だ。それに森さんがいなかったらどうにもならなかっただろうしな。

「ふふ、謙遜だね。しかし危なかった。見てみ。」

キヨコは建物を指差す。見ると炎はあらかたおさまり、投光器の投げかける光の中、三階以上の全部が真っ黒になった惨状が窺える。

「結局、四階会議室にあった石油缶に引火したと。床下から熱せられたガソリンが発火したらしい。その火があつという間に五階に回って、三階以上全焼、だそうだ。・・・あの部屋も丸焼けだ。」

俺は心底ぞつとする。全くの話、危機一髪じゃないか！ まあ火事の原因はわからないじゃないが。燃料がそれだけあればな。ところで、ヤツらの目的は何だったんだ。佐々木を拐かした理由は。

「自滅のためよ。」

いつの間にかキヨコも出てきていた。

「彼らは、例えて言うならば、そうね、見ていた映画を途中で打ち切られたようなものかしら。大ざっぱに言うと。どんなにつまらない映画でも、最後まで見ないと納得はできないでしょう。きちんとエンドロールを流して、エンドマークを出して、電灯がついて、初めて映画は終わるものよ。彼らは、そうね、上映中の映画館から事情を説明されずに追い出されたようなもの、かしら？　あるいは、出来かけの映画を見せられて、場面の途中でブチ切れで終わってしまったとか。とにかく納得のいかない目にあわされてしまったの。だから、自分なりに、自分たちなりに、見ていた映画の終わりを作ろうとした。・・・『組織』という名の映画の。」

それにしちや出来が酷すぎる。やり方も非道すぎる。佐々木を巻き込んでどうするつもりだったんだ。

「佐々木ちゃんはヒロインだからよ。彼らの永遠のヒロイン。自分たちの映画の終わりには絶対必要と思って、配役を決めないまま連れてきたんじゃないかしら。意外にそんな理由な気がするわ。」

「なんとなく、わかります。・・・同意は決してできませんが。」

橘も登場だ。

「あたしも思いましたから。こんな終わりは嫌だ、って。」

これは自滅エンド、ってわけだ。

「そうね。・・・こんなことは一度でたくさん。・・・きちんと

終わらせないと……。自滅エンドも挫折したわけだから、映画はまだ、終わってはいない。早急に……。」

キヨ子は考えこみ、俺達は黙ってしまい、黙ったまま消火完了した建物の中を見せてもらった。一階と二階は水浸し、焦げ臭い匂いと酸類の臭気のまじった異様な悪臭が漂う。三階から上は何もかも真っ黒だった。火元の資金担当事務室は完全に焼け落ちており、黒こげの全自動現金管理機が橋の悲嘆を誘った。橋は耐火手提げ金庫と鍵束を探し出し、森さんに手渡していた。五階の旧町長室も焼け落ちていた。改めて俺は思う。危ないところだった！その後、俺たちは各々、車で自宅に送り返された。……。やはり、なんとなく納得がいかないまま。

キヨン子ちゃん83

翌月曜日、祝日。俺たち三人は呼び出されて再び『機関』の所謂『センター』にやってきた。いつぞやの喫茶室に通されると森さんがおり、俺たちが座るのを待って切り出した。

「昨日電話ではキヨコさん、キヨン子さんと討議しましたが、やはり、実務的アプローチにて『組織』なる組織体に決着をつける、という方向性も必要ではないか、という結論に達しました。これは、我々『機関』の内部からの意見でもあります。」

それは、つまり？

「今のところ、『組織』に『片を付けた』のは簡単なメール一通きりです。ある程度の規模と権威を誇った『組織』構成員としては、納得いかない人も中にはいるでしょう。」

確かに。昨日の暴発もそれが原因らしいですし。

「規則に則り、正当な事務手続きを経て、『組織』を解散してはどうか、というのが基本的な発想です。あと、加えて、これはキヨン子さんの発案なのですが、『総括書』を作成する、ということも含めて。」

「解散にあたって、『組織』の歴史を振り返り、存在意義、歴史的位置付けを明らかにし、その理想とするところを整理分析、必要ならばその誤謬を解き明かし、失敗を反省、運動の興隆とその挫折活動終了への経緯を解説し、『組織』内部の人間だけでなく、誰にとっても納得のいく、あるいは認めざるを得ない、事実と公平な判断に基づいた総括を行い、文書として後世に残すこと。」

キヨ子真面目な表情で言う。・・・それにしても、本当にお前、俺と同じ年だよな？

「形式的とおっしゃられるかもしれませんが、まず形式を整えておきませんと、いろいろとやりにくいものですから。」

森さんは俺たちを先導して、同じ階にある広い会議室に移動した。そこには橘があり、他にも多数の人々がいた。橘によると、みな旧『組織』の人々であるということだった。森さんが登壇し、会議の開始を宣し、概要の説明を開始する。

「本日、『組織』についての重要な手続きを開始するにあたって、お集まりの皆様のご足労に感謝申し上げます。早速ですが、議事に入らせていただきます。まず、例の『最終指示』につきましては、これ以降連絡のつかなくなった構成員が相当多数にのぼることから有効と認定されなければなりません。よって、『組織』は一時的に再結成された、という形式になります。従来の責任職務者に復職を願うのが筋かと存じますが、昨日の騒動に参加された方は除外いたします。なぜならば、かの佐々木譲が、彼らに対し同意を拒絶しておられるからであります。また、この場においてでない方も除外といたします。従いまして、この場におられない組織委員会委員長、騒動の参加者である組織委員会次席副委員長はともに職位失効となり、次位にあたる組織委員会次席副委員長に最高責任者の職責をお願い致すこととなり、列席の皆様の同意が得られましたら、それで権威継承は完了となるかと存じます。橘京子さん！」

「はい！」

橘が立ち上がる。が、なぜ呼ばれたのか理解できなかったらしい。

「あの・・・あたしが連絡をとって呼び寄せなければならぬ、とかですか？ あたしの知ってる人にそんな人はいなかったような・・・。」

「いいえ。よくご存知の筈です。」

森さんはあくまで冷静だった。

「あなたが組織委員会次席副委員長です。従って、本日只今より、あなたが『組織』の最高責任者です。」

キヨ子ちゃん84

橋は目を白黒させる。

「あ、いえ、でも、まさか、そんなはずは……。」「
間違いございません。」

そう言つて森さんは資料を壇上のスクリーンに映し出す。タイトルは『組織幹部序列表・××××年××月××日編制』。そこには確かに『第3位（組織委員会次席副委員長）：橋京子』とあった。日付はあの運命の日曜日の3日前である。

「ご納得いただけたことと存じます。」

森さんはそう言つて会場に向き直り、

「反対の方！」

と、呼ばわつた。会場から反応はない。

「それでは、この人事を追認致したいと存じます。賛同のかた、
どうぞ拍手を。」

会場からまばらな拍手が聞こえ、森さんが言う。

「最高責任者選定は無事完了致しました。従いまして私は降壇させていただきます、続く議事は、新たな最高責任者をお願い致しますよう。では、橋京子さん、よろしくお願い申し上げます。」

橘は肝を潰したふうであたふたとし、縋るような目を俺たち三きようだいに、森さんにとむける。森さんが橘を小声で励ます。

「恐がることはありません。打ち合わせ通りの提起をして、先程私がしていました通り、皆さんの同意を取り付けていただければそれで完了です。」

橘はおずおずと登壇、か細い声で話しはじめる。

「あ、あ、あの、ええと、・・・わたくし橘京子は、み、皆さんの同意のもと、本日、責任ある地位に就任、した、ということなのですが、あの、加えまして、その・・・あらたに選任されました最高責任者、つまり、この場合、わたしということになるんですが、」

橘は一瞬黙り、

「・・・そのかたに、ええと、つまりわたしに、『組織』の残務整理ならびに解散に関する全権限を付託、『整理解散臨時全権委員』として、その・・・推挙、したいと思います・・・。」

再び言いよどむ橘。

「・・・は、反対のかた。」

反応はない。橘はだいぶ長い時間黙っていたが、いつまで経ってもなんの声も上がらないため、困りきったような表情のち、再び口を開いた。

「・・・賛成のかたの拍手を求めます。」

再びまばらな拍手。橘は悲しげな表情で、消え入るような声で言う。

「……人事案は可決と決しました……。」

キヨン子ちゃん 85

演壇で俯いて黙ってしまった橋を、直ちに森さんが引き継ぐ。

「皆様ご協力ありがとうございました。議事は以上にて終わりでございます。情報採録インタビューの順番をお待ちのかたはもうしばらくそのままお待ちください。インタビューがお済みの方はどうぞお気をつけてお帰りください。重ねまして、本日はご協力ありがとうございました。感謝申し上げます。・・・」

ふと見ると、演壇の上から、橋はなんともいえない表情で、森さんを見つめていた。

「謀ったなと言いたいが、謀られたかどうか確信もてないといった感じね。」

キヨン子が言う。

「彼女、この役だけは避けたかった筈よ。・・・青春時代の三分の一くらいを捧げて、しかもその奉仕が無駄に終わった組織。それに自分が幕引きをしなきゃならなくなってしまったのだもの。それに彼女は昨日、自宅の次くらいに慣れ親しんでいた建物が無残に焼け落ちるのにあっただばかり・・・。」

言われてみりゃ気の毒だ。俺は手元を片付けて引き上げていく森さんを追いかけ、話しかけた。

「森さん、どういふ計画があるのか俺はよく知りませんが、これは橋にはいささか酷ではありませんか？」

「……結果としてそうなってしまっただけで、我々といたしましても、橘さんにお任せする気は本来毛頭ございませんでした。」
ついてきていたキヨ子にキヨコともども喫茶室に腰を落ち着けると、森さんは説明を続ける。

「先ほどの資料はごらんの通りですが、更に二週間ほど遡った日付のものは内容が違っております。」

森さんがあらたな序列表を取り出す。そこにも橘の名はあったが、序列は第8位であった。

「かなりの資料が焼き捨てられて失われておりますので、現在採録中のインタビューと突き合わせて、『組織』の活動史を目下究明中なのですが、あの日曜日の直前、大規模な失脚劇があつた模様です。幹部10名近くが一挙に組織委員会を辞任あるいは解任されたらしい。そこで橘さんが思いがけず浮き上がって3位になってしまったようなのです。……橘さんは多額の資金を扱う関係上、名目だけは組織委員でしたから、こんな奇妙なことになってしまったのです。」

やれやれ、橘！ 自分の預かり知らぬ場所での波風が、どうやらまともにお前に打ち寄せてきたらしいぞ！ ところで森さん、トップの組織委員長とやらはなぜここにいないのですか？

「彼は『もう組織は存在しない。従つて自分は一切関わりがない。』と言い張つて我々からのあらゆる要請を拒絶しました。かつての責任者として、活動を総括してほしい、とお願いしたのですが、『それは各々個人的にすべきことで自分には関係ない。』とのことでした。それでは個人的な総括を明らかにしてもらいたいと重ねてお

願いたところ、『個人的総括は自分の個人的なものだから、それはプライバシーの侵害だ。』とのことでした。もっともらしく聞こえますが私のみたところ、

「自分の見解を発表して、逆恨みを買う可能性に怯えているのよ。男らしくないにも程があるわ。卑怯未練、懦弱な振る舞いだわ。情けない男。殴ってやりたいわ。」

「わからんでもないけどね。自分の身は誰だって可愛い。程度があるが。」

森さんの発言をキヨ子引き継ぎ、キヨコが纏めた。佐々木はどう言うだろう？

「佐々木さんに組織の問題について助力願えないかと持ちかけたところ、『絶対にお断りする。』とのお返事でした。『もう組織とかいうものは、金輪際、断固、一切、断然、関わり合いになりたくない。』と。」

それはそうなるだろうな、やっぱり。わけのわからない理由で祭り上げられたり、誘拐されたり、焼き殺されかけたりしたら、関わり合いになるのが嫌になって当然だ。

「ここまでで判明した限りでは、橘さんはだいたい、12位から18位くらいを浮き沈みしていたようです。8位という位置がそもそも異例ですね。最大瞬間風速みたいなものではないかと。」

そこで悶着があったせいでうつかり出世してしまっただけだ。それにしても、橘の地位はやけに高いですね？

「・・・橘さんは地位のためではなく、純粹に組織の活動のために『経済的奉獻』に熱心に取り組んでおられたようです。が、なにせ額が多かったので、恩典的な意味合いで、組織委員の、それもかなり高位を与えられていたようです。組織委員の定数は50ですが、その25位くらい。・・・ちなみに奉獻額はほぼ月に十万円でした。・・・橘さんはあれでけっこういいところのお嬢さんですからね。で、経理締方に就任して、さらに序列が上昇してしまっただけです。」

そうなると、長門に預けたあの金はやはり橘のものということになりそうだ。三年間、月十方で単純計算で360万円。確かあれは350万円弱くらいはあったはず。若干目減りしてるがそれは仕方ないとして、これだけ取り返せれば上出来の部類だろう。ふと見るとそこには当の橘がいて、躊躇い逡巡をかなり続けたあげく、森さんに話しかけた。橘は後で言ったものだ。

「あたしは以前、森さんには二度と会いたくないと言いました。・・・このところ思いがけず話す機会があったせいで、そんなにコワイ人でもないのかな、と思いかけていたところでしたが・・・。」

それはともかく、橘は、勇気を振り絞って、森さんに抗議したのだった。自分は一介の高校生で、学業もあり、こんな大事業に関わるには能力がなさすぎ、また時間もなさすぎる。森さんは平然と返した。

「お手間は取らせません。あなたは全権委員なのですから、どうぞ私どもにご命令下さいませ。」

森さんは書類を取り出し、橘にサインを求めた。

『整理解散臨時全権委員命令第一号

整理機構設立命令

整理事業に専従する事務機構を設立せよ その主たる活動内容は以下の通り

1：活動史の取りまとめ並びに総括書作成

2：残務の結束

3：解散指揮

4：その他必要とされるあらゆる事務』

『整理解散臨時全権委員命令第二号

整理事業開始命令

整理事業機構は準備出来次第整理事業に着手せよ』

森さんはこの二枚の書類を示し、

「ご署名いただければあとは我々が片付けます。・・・どうしても必要なことは、『組織』の方が自ら幕引きをしていたただかなければならないということなのです。残務処理くらいは我々にお任せ下さい。総括書の作成につきましては、キヨコさんとキヨン子さんをブレーンにお迎えし、我々の作成する文案を検討していただく手筈になっております。これは最後には橘さん、あなたが承認し、あなたの名前で発布されるのです。・・・随分形式に拘るとお思いでしょう。しかし形式を蔑ろにすると、後々禍根を残します。我々が主導して『組織』を解体するのは実際の話雑作もないことです。しかしそれでは意味がない。我々は敵対者でしたから、『勝者の裁き』の烙印はずつとついて回ることでしょう。それでは『組織』の残党に暴走の口実を与えるようなものです。いかにも、これらのこと全ては形式そのものです。しかし人間、往々にして、本質的な意味合いよりは、形式的なことに執着するものです。従って、形式的に、『組織』活動家自身の手によって、『組織』を終焉させねばなりません。・・・どうぞ、こちらへ、サインを。」

橘はペンを取り上げ、黙ったままサインした。

「ご協力ありがとうございます。それでは、進めてゆきます。またご連絡差し上げますので。」

「よろしく願います。」

橘は森さんに握手の手を差し出す。あの森さんが、若干の驚きを含んだ表情で橘と握手する。橘は、俺から見ても、驚くほど大人びた態度を示していた。橘はどうやら腹を括ったようだ。最後の最高責任者として、『組織』にピリオドを打つ役割を自分の使命とわき

まえ、『解散命令に署名する』覚悟を、固め始めたようだった。

かくして、『整理事業』は開始された。キヨン子もキヨコも主要メンバー・・・森さんによれば「総括書編集事業部外参与特別委員」だとか・・・なので、俺も時折作業に参加、といつても原稿に目を通すくらいだが、したりしていた。主に俺達は放課後、SOS団活動の終わった後や、土日に作業していた。キヨン子とキヨコは日参、俺は時々付き合った。たまに橘も姿を現して、感慨深げに、言葉少なに、原稿を読んでいた。じつと、読み続けていた。活動史はかなり大部の書物になりそうな見込みだということだった。採集した書類や文書、採録したインタビューなどの一次資料がまず作文室に回されて文章に纏められ、それが編集室に送られて内容が検討され、取り纏められる、という流れらしい。キヨン子とキヨコは編集室に陣取り、上がってくる文章に逐一目を通して、機関の編集委員達とも話し合い、作業を着々と進めていた。3ヶ月も経つと、活動史はあらかた纏まった。次は総括書の作成だが、これはキヨン子とキヨコが二人ですることになっていた。「我々が書くと、どうしても我々寄りの解釈が混ざり込んでしまいますから。」と、森さんは言った。ともかくもある晩、キヨン子とキヨコは二人して俺の部屋にやってきて、総括書の原稿を差し出した。

「第一の読者として、忌憚ないところを聞かせてもらいたい。」

キヨコが言う。俺はかなり長い原稿に目を通す。全文挙げるのは長すぎるので、印象的な部分だけ挙げよう。最終結論、文末である。

『・・・かくして、柱石たる人物の突然の能力喪失という、我々には如何ともしかねる天災的な事情により、世界平和をめざす我々

の光栄ある活動の道程は突如として終焉のやむなきに至つたのである。我々は敗北したのだろうか？ 我々の理想は潰えたのであるうか？ 否、我々は何者に敗北したのでもない。我々の理想は潰えてはいない。我々の理想、それは全世界の、永久的な、平和の達成である。つねに変わらずそうであつた。我々が我々自身の手によつてその実現を図ることは見果てぬ夢と消えたが、なお我々はこの永遠の理想を目指し、個人の立場で、生活の中で、戦い続けることが可能である。気高い理想を胸に、崇高なる平和を目指す非暴力の戦闘を継続することは、我々の誰にもかかわらず、可能なことである。偉大な理想を目指す同朋諸君。かつて胸に抱いた心の火を、変わらず燃やし続けようではないか。その火があかあかと輝き続ける限り、我々はなお、理想への道の途上にあることができるのだから。』

この文章は少々理想主義的な傾向が強すぎないかな？

「この文書の目的は、単に活動の評価を定めることにとどまらず、将来にわたって元『組織』活動家の行動に制御をかけようとするものだから。」

「そう。だから理想の気高さと正当性を追認する一方、『非暴力』という枷をかけてあるわけだ。・・・もつとも、この文書を無視することにすればそもそも無意味だが、なかなかそれはできまい。いずれこの文書は権威者の裏付けがつかぬ。最高責任者のサインがね。京子ちゃん、橘京子さんといえば、アクティブな活動家として組織の中ではかなり顔が売れている存在だった。リーダーの一人だと思っっている人もいたくらいだ。この前の佐々木ちゃん誘拐騒動のときも、暴徒側からの召集メールが送られていた、らしい。リーダー役としての、ね。京子ちゃんは組織対応用の携帯を解約しちゃったからそのメールは届かなかったのだけだね。つまり、京子ちゃんは全『組織』的に、一定の信任を受けているわけだ。実際の話、全派的に権威を認められてるいちばんの適任者が、ちょうど都合よくこういう地位についたことは、奇跡的とも、運命的とも称していいと思っつて、さ。森さん曰わく。」

「橘ちゃんにサインを貰うのはこれからだけど、キヨンくん、どうかしら。この文章は？」

俺としちゃ特に文句はない。森さんと、橘が認めてくれれば問題ないと思う。で、次の日曜日。俺達きょうだい、橘、森さんは『センター』に集合、総括書の最終的な検討に移った。意外にも、森さんは目を通さなかった。

「まず橘さんに承認いただいた後、拝見させていただきます。」

そこで総括書の草稿は橘の手に渡り、橘は注意深く目を通した後、

「これでよいと思います。」

森さんが最終的な確認をする。

「決定でよいのですね？」

橘ははい、と答える。そこで草稿は清書に回されることになり、俺達はしばらく暇になった。キョン子がぼつりと言っ。

「うまくおさまってくるといいですが。」

森さんが話し出す。

「いわゆる『組織』の中でも、橘さんは特に熱心な、目立つ活動家でした。・・・少数派でした。そもそも、最初の『最終指示』メールで連絡のとれなくなった人々がかなりおります。三分の二、四分の三、もっと多いかもしれない。最初に名簿が焼き捨てられていた関係上、その人数を把握することはもう不可能です。インタビュー採録のために連絡がとれた人たちも、反乱を起こした人たちも、ほんの一握りに過ぎません。大部分の人たちは、無言のまま、組織を去っていきました。」

あの橋が、高校生の身空でそんな中枢にいるとは、『組織』というのはよほどの人手不足なんですか？

「いわゆる『組織』の構成員、活動家の皆さんはお若いかったです。以前朝比奈さん誘拐事件に関わった者たちをこらんなったでしょう。以前講堂に集まっていた人たちも。大部分が二十歳そこそこ、あるいは未成年の人々なのです。その中であつては橋さんは平均的な年齢層に属する一員で、幹部であつても特に不思議ではありません。年かさの人もいましたが、例外的です。」

『機関』の力をもつてしても、メンバーの総員数や素性はわからなかったのですか？

「この一連の活動の中では我々独自のデータは使用せず、採録されたデータのみで取り組んでおりました。・・・この活動においてはあくまでも、形式的な正当性を立証できなければなりませんから。」

それにしても『組織』というのは随分とゆるい組織体だったようですね？

「基本的に大部分が無償奉仕だったせいもあるのではないのでしょうか。人によっては信じられないほどこき使われたということですから。特に、暴動首謀者である組織委員会首席副委員長は、顎で人を使うと悪評が絶えませんでした。」

あの佐々木誘拐騒動はいつたい何だったのでしょうか？

「いまだよくわからない、というのが正直なところですよ。あの最期の日曜日の、『何をすべきなのかさっぱりわからないが、なにかせずにはおれない』という焦燥感の延長線上に位置する事件ではないか、と私どもの専門家は分析しております。参加者の全員、そのあたりの供述が全般的に曖昧で、要領を得ないのですよ。目的はないが、とにかく暴れずにいらなかったのではと。動員メールは『組織』活動家全員に発信されました。受信したのはかつての活動家のうちのごく一部、呼応したのはさらにそのうちの一部です。・・・今回の、理性的、ならびに形式的なアプローチが、今後の暴走の抑止になってくれることでしょう。」

「この一連の措置は、破裂しそうなボイラーの中の蒸気を安全弁で大気中に逃がしたり、シリンダーやタービンに誘導して動力や電力に変換することに似ている。要するに、噴出する方向に制御を加えるということなんだ。配管工事みたいなものといってもいい。圧を大気中に逃がして無害にしまつことができればよし、何らかの役に立つ方向に誘導できれば尚更素晴らしい。」

「あとはうまくいってくれることを祈るばかりというわけ。」

俺達きょうだいと森さんの問答の間、橘は静かに椅子に腰掛けて、じっと黙って、遠慮がちな様子だった。

キヨ子ちゃん90

しばらくすると、清書が出来上がってきた。

「印刷原版を兼ねておりますので、誤記せぬようお願い致します。

」

森さんは言つて、橋に万年筆を差し出し、サインすべき箇所を示す。右のいちばん下、『組織委員会次席副委員長 整理解散臨時全権委員』の肩書きが併記された部分である。橋は万年筆を取り上げ、しばらく物思うげにじっとしていたが、やがてペン先を紙にあて、一気に署名した。『橋 京子』。直ちに原版は印刷担当に手渡された。『総括書』は、組織活動史の書物の最終ページを飾ることになる、ということだった。続いての打ち合わせは、解散式典についてだった。森さんが橋に問う。『組織』を象徴するシンボルは何かありますか？ エンブレムとか、旗とか、歌とか？ 橋は知らないと答えた。すると森さんは『組織』の規則書なるものを取り出してきて、あるページを開いた。そこには『組織』の旗と歌が制定されていた。『組織旗』は青地に『S』と白く染め抜いたものであった。・佐々木のSだか組織のSだか知らんが。『組織歌』はなにかしら新興宗教団体じみたしるもので、その歌詞は以下の通りであった。

『われらは青少年

咲けよや花と

われらは明日の太陽

燃やせ命を

松明を

掲げ進みゆこう

壮麗なる事業

永久に受け継ぎゆこう

栄光のわが組織

栄光のわが組織

目覚めたる人のもと

つくろう 新世界!』

橘は本当にこれらのものは知らなかったとみえ、困惑しきりである。確かにそういうものかもしれない。俺にしたところで、北高の校章と校歌を示してみると言われると正直非常に困るからな。森さんは少し考えて言う。

「解散式典は必要ないかもしれません。」

森さんによると、『関心の稀薄化』が急速に進行中であるということだった。この前の会議の参加者からは、『白紙委任状』が大量に提出され、『もう組織は終わったのでどうでもよい』という態度をとる人間が大多数を占めた、とのことだった。

「我々のインタビューに包み隠さずすべて話す人間の多さが、関心の低下の程度を物語っています。」

「隠し立てを一切しないというのは、もはや心理的にこだわりが全くないということ。」

「その通りです。・・・そうですね？ 橘さん。あなたにしても？」

橘はひどくばつが悪そうな様子で、

「・・・このところ、どうも・・・自分でも不思議なくらい、どうでもよくなってきました。正直なところ・・・。」

「おそらく、佐々木ちゃんの方からきていた心理的影響が消滅していく過程にあるんじゃないかしら。」

キヨン子が分析する。

「佐々木ちゃんは無意識の中で、組織の人々にコントロールを加えていたと疑わしいふしが見受けられるわ。無論、佐々木ちゃん自身にはなんの自覚もないことだけでも。・・・暴徒たちまでもが、急速に関心を失いつつある以上・・・。」

『組織』の求心力は佐々木の無意識的な心理コントロールの結果だったと？

「仮説だけどね。そう考えるといろいろとはつきりするわ。」

キヨン子ちゃん91

そうなるよ、ハルヒのほうはどうなるんだ？ やっぱ『機関』の人たちはコントロールされているのか？ しかし俺はその問を飲み込んだ。当事者である森さんの面前では流石に憚られる。それきりその話題は打ち切りになり、話は式典のことに戻っていった。結局のところ、解散式典は開催の運びとなった。次の日曜日、正午、彼らの本部であった『旧町役場庁舎』にて。この日の日程はこれで終わりとなり、俺達は森さんの車に乗ってまず橋を家に送り、ついで俺達の家に着した。

「お疲れ様でした。これにて失礼を。」

森さんの車が走り去ると、キヨン子が俺の脇腹を肘で軽く小突いて、悪戯っぽく笑いながら言った。

「はたして、ハルちゃんは『機関』の人たちをコントロールしているのか、どうか？ ……キヨンくん、この質問が顔に書いてあるみたいだったわよ。」

久しぶりに「読まれて」いたが、もう俺は驚かん。キヨン子よ、お前の見立てを聞きたい。

「ではまず、キヨンくんはどう思ってるの？ 『機関』の人たちについて？」

……そうだな……。どうも、コントロールされているような感触はないな。皆自発的に、むしろ嬉々として、ハルヒに奉仕しているように見える。森さん、新川さん、多丸さんたち、……古泉

にしても。

「不思議なことに、あたしもそう思うのよね。・・・以前の橘ちゃんから感じられたような、『何かにとりつかれた感じ』が、古泉君や森さんからは感じ取れないから・・・。」

それに、森さんにしても、新川さんにしても、・・・一筋縄ではいかないような人たちばかりだ。やすやすと心理コントロールなどに屈するとは思えん。と、キヨコが口を開く。

「あたしには質問はなしかい？」

面白そうな表情である。どうした。お前には何か情報があるのか。心理関係の問題はキヨコ子に適任かと思ったんだが。よし、聞こうじゃないか。

「いかにも、『機関』の人々は心理コントロールの統制下にあるわけじゃない。彼らは自発的に、ハルちゃんへの奉仕に一身を捧げているのだよ。」

それはまたどういうわけだ？

「あたしの個人的なフィールドワークによると、『機関』の人々は皆、いずれ劣らぬ波瀾万丈の人生を送ってきた人たちばかりだ。彼ら彼女らはいずれも、ハルちゃんからの『招集』を受けて『機関』に身を投じた。名だたるプロフェッショナル、元有力者、その他の人々・・・決定的な共通点がひとつ。彼らは皆、人生における最大級の危機を、『機関』に参加することで乗り切ることができた。そして、彼らの大部分はもう、ほかに帰るところがない。すなわち、『機関』は彼らの『ホーム』であり、『最後の持ち場』。極端な話、ここを失うならば、最早死を選ぶのみ。『機関』の内部文書に頻出する用語に、『大家庭』というのがある。『機関』構成員の総体を指す言葉だ。実際の話、この言葉は形式の上だけでなく、より実質的な実感をもって受け止められているらしい。ここまで見てくると、『機関』の人々の一種得体の知れない明朗さの理由がわかる。」「・・・すでに覚悟を決めているから。『最後の持ち場』のために、命を懸けることを。」

「その通り。」

そうか？ 古泉はそうは見えないが？

「いつちゃんはまだ若いからな。なんだかんだ言っても。」

「若さゆえ、いまだ未来の可能性を信じており、従って覚悟がいくらか弱い。」

「そういうことだ。」

じゃあ森さんはどうなるんだ。まだ若く見えるが、見たところ覚

悟は相当だぞ。

「森さんはね、たぶん、そうならざるを得ないような経験を積んできたからよ。・・・おそらく、とてもつらい、身を切られるような、悲惨な経験を・・・。」

「森さんの口は固いぞ。なんとか過去を語らせようと水を向け続けてはみたが、全然口を割らない。ただ、こんなことは言っていた。『私は本来、ここにいる人間ではありません。』とね。『私は本来、今頃は冷たい土の下で、永遠の眠りについてはいるはずなのです。この世から追い払われるはずだったのです。』とね。『ここにこうしていることは、私にとり、奇跡以外のなにものでもありません。』」

「キョコちゃんすごいわ。あの森さんにそこまで語らせるなんて。」

「まあね。こうも言ってた。『私はすでに死線を越えました。失うものはありません。従って恐れるものもありません。』と。」

「・・・森さんという人は、心理的には一度『死んで』いるのね。これはよくよくのことよ。・・・白状するけど、森さんはね、あたしの手には負えない人なのよ。心に弱点がないから、少なくとも弱点を全く見せないから、弱点を突破口にするあたしには対処のしようがないのよね。もっと言っちゃうと、『機関』の人たちはたいがいそのあたりのとっかかりが弱い、つまり弱点が見えにくいのだけれど、彼女は群を抜いてるわ。・・・たぶん、凄まじいまでの、まさに修羅の道を、踏みこえてきてるのだわ。・・・心が一瞬ごとに碎け散りそうな試練の道を・・・。」

キヨ子ちゃん93

それは例えば、・・・この間橋があわされたような？

「あれがちょっととした冗談にしか思えないようなものだと思うわ。・・・」

「おそらく、凄まじさの桁が違う。森さんが試練に耐え抜くことができたのが一つの奇跡みたいなもんだ。」

・・・詳細は知らないほうが良さそうだな。

「だからこそ、森さんは何も言わないのかも知れないわ。」

しかし、森さんはじめ、よくもまあ、そんな一癖も二癖もある人々を束ねておけるもんだな？

「ハルちゃんの巧妙な点は、もちろん無意識的なことだけでも、『本人が進んで服従する』方向に巧妙に誘導しているということがあげられる。『本人が納得できる落ち着き先』がちゃんと用意してあるわけだ。『機関』はあたかも精緻に組み上げられた寄せ木細工みたいなもの。・・・ゆえなく失墜の逆境にあわされる才能ある人々が世の中には結構いる。ハルちゃんはそれらの人達を丹念に拾い集め、自分の名のもとに結集、組織化、そしてこれが独特な点なのだけれど、自分でコントロールするのではなく、彼ら自身が自律的に、自主独立して、自分に奉仕するようにもっていくわけだ。彼らをコントロールする面倒な仕事をせずにはむばかりでなく、無意識下とはいえ、奉仕の方向性を自分で決定しなければならない煩雑さとも無縁だ。なによりも、ハルちゃんは彼らの恩人であり、命までも失いかねなかった彼らにかけがえのない、安全な居場所を提供し

た本人。それだけではなく、『閉鎖空間と神人』という決定的な危険性をもって、自分に対する絶え間ない注意を担保し、自分自身の存在感を保証してもいる。もちろん、これらすべてが仕組まれものではない。このなかのあるものは自然発生的に現れたものだろう。しかしその合理性と自律性において、こういつちやなんだが、直接的で稚拙な佐々木ちゃん流儀とは一線を画している。それに佐々木ちゃん流儀では自分のなかのいわばリソースを支配のためだけに使い果たしてしまい、肝心な意思統一がろくに行き渡らないという事態が発生しうるし、現にそうなつてもいた。・・・『機関』の人たちの言葉を借りるなら、『神と神モドキの実力の差』ということになる。確かにそういう面も否定できない。これは自分に従う人々に対する圧倒的な信頼感のたまものでもあり、たくみな人間観察に基づいた操縦でもある。『居場所のない人間にはただ死あるのみ』。そうだろうか？ キョン。居場所があるからこそ、君は君でいられる。あたしだって同じさ。この世のどこにも居場所がないと悟った人間はどうなるか？ 答えは一つ。旅立つだけだ。行き先がどこであれ、な。

「そうして集められた人間の中には、超能力を与えられた人々も、そうでない人々もいる。超能力としてキヨくんも知ってるものとしてはまず『戦士』があるわな。要するにいつちゃんだ。ほかには『検知員』という人たちもいる。これはハルちゃんの『招集』を受けて、機関員に指名された人を迎えに行く担当者だ。幹部に多い。

『検知員』は『招集』を受けた人の出現、その正確な所在を知覚する。そして、『検知指導員』。最高幹部クラスだ。しかし『指導員』とはいっても、ハルちゃんの無意識からの直接的な指導を受けているというわけじゃない。彼らは『最初の集合をかけられた人々』であり、『検知員を検知する』能力の持ち主だ。『検知指導員』、『検知員』、『その他』の順に発見、集約、組織化の過程を辿るといわけ。あと、目立った能力のない人々としては、『実務家』といわれる人々がいる。『戦士』ではないが、『検知員』の知覚にかかる人たちだ。組織実務、その他の種々の活動に従事する。場合によってはこの人たちが重要な働きをすることもあるようだ。『機関』発足以来、『検知指導員』、『検知員』は人数に変化がない。『戦士』は微増、しかし『実務家』は顕著な増加を示している。」

キヨコはいったん言葉を切り、言い足した。

「とまあ、森さんに時おり鎌を掛けながら、ここまででは聞き出すことに成功したわけだ。・・・あたしはもう、森さんの過去を聞き出す努力については一時的に打ち切りしようと思う。心の治りきっていない傷に手をふれることになりそうだから。ここまで少し軽率だったな。気をつけないと・・・。」

キヨコ、森さんの試練とはどのようなものだと思う？

「周囲の人間全員に裏切られ、侮辱され、何もかも奪われ、放り出され、・・・たぶんそうだった、およそ人間の希望をすべて叩き潰すようなことが複合的に一度に襲いかかってきたような・・・人間疎外の極北、絶望感の佃煮。不用意に聞くようなものじゃない。あまりにも悲惨すぎる話は、聞いてるほうの神経もやられる。」

その日の話はそれで終わりとなった。・・・森さんの過去についてはやけに気になる形で打ち切りになってしまったが、これはやむを得まい。俺とて、そこまで辛い過去というなら、無理強いに触れることはもとより本意ではないからな。

そして日曜日。『組織』解散式典の朝がきた。端的に言って、惨憺たるありさまだった。動員に失敗したイベントさながら、『組織』側の出席者は橘込みでわずか8人。大量に並べられたパイプ椅子が虚しく広がるばかりだった。出席を予定されていた人々も当日無断で来ないという始末で、結果橘がひとりで式典を進行しなければならなかった。開会の辞、解散にあたっての挨拶、総括書朗読、解散宣言、『組織』旗降下。掲揚されるのも降下されるのもおそらく最初で最後であろう『組織旗』が、プラスバンドの吹奏する、意外に軽快な『組織歌』にあわせ、橘の手で旗竿から降ろされていく。そして、これもまた橘の『閉会の辞』をもって、式典は終わる。

「これをもちまして、解散式典はすべて終了いたしました。……皆さん、ごきげんよう。」

いい天気の日曜日。日光はさんさんと降り注ぎ、日陰のないだだっ広い『旧町役場庁舎』の前にはパイプ椅子が数百人分は並べられ、正面には演壇と、仮設の旗竿があった。俺たちきょうだいと森さんは『オブザーバー』なる立場で、前よりの隅の方の席を占めていた。すぐそばにはおよそ30人くらいの編成のプラスバンド、そして大に広がるパイプ椅子の野にはそこに散らばって、かろうじて出席した『組織』関係者たちが8人、お互いに他人同士とでもいいたげな、よそよそしい間隔をおいて座っていた。森さんによれば、

「橘さんのほかは異端論者、一匹狼、変人、物好き、暇人、野次馬、見物人……そんな感じですね。」

……要するにろくな奴がないということですね。異端論者と

いっなのは？

「『組織×機関』融和派です。」

なるほど。見ると橋は疲れた様子で、式典が終わるとすぐ、駅前までの唯一の交通機関である臨時連絡便バスに乗り込んで姿を消した。出席した元組織活動家たちもいっしよだった。パイプ椅子はすでに端から片付けが始まっており、プラスバンドも楽器をケースに仕舞って立ち去っていった。ぼんやり見ていると、プラスバンドの標旗に日本語で縫い取りがあるのに気づいた。『音色よ高く 奏でよ勝利を』とあった。皮肉なスローガンもあったものだ。森さんに聞いてみるとやはり『機関』のプラスバンドだということだった。楽団ごとにスローガンが違い、かなり多数のバンドがあるという話であった。午後の物憂さに流されてそんなどうでもよいことごとをつれづれに話し、そのあとしばらく会話は途切れた。会場の片付けは着々と進行している。ふいに森さんが口を開く。

「『組織』についてはこれで一区切りです。・・・長い道のりでした。」

お疲れ様です、森さん。

「恐れ入ります・・・しかし、実を申しますところといった作業で指導役を務めるのは初めてでございました。妙に気疲れがするものですね。」

それはそうですね。

「私はやはり、現業のほうが生分にあうようです。・・・ある意味、ゴキブリといっしよに下水道を泳ぎわたるほうが気が楽に思え

る瞬間が確かにありました。」

そういう経験がおりなんでしょうか？・・・俺は何の気なしに尋ねただけだが、その瞬間微妙に空気が乱れた。周囲の人間の表情に細かな動きが同時に表れたのだ。森さんは一瞬目を見開き、口の端が微かに震えた。まるで「しまった。」とでも言うかのように。キヨコの茶色い目は鋭く細められ、口許には僅かな笑みが浮かぶ。明らかに会心の笑みだ。キヨ子子はハルヒ色の目を大きく見開き、口許は動かさずに、なぜだか俺に視線を止めた。これらはほんの一瞬のことで、再び森さんが口を開く。

「愉快からぬたとえ話をしてしまいました。ご不愉快に謝罪申し上げます。失礼いたしました。何卒ご容赦を……。」

キヨ子ちゃん96

その後俺たちは森さんに「機関」の『センター』に招かれてお茶をご馳走になり、この一連の『「組織」結了作戦』の苦労談や思いつきなど四方山話にしばしふけた。組織の敷地はどうなるのでしよう？

「行政の長が入れ替わるたびに二転三転してきた建物です。最初はダムに沈む予定で、ついでダムは中止、工業団地を建設することになり、ついで再びダム計画再燃、・・・泥仕合の末結局両方頓挫今では我々の持ち物ですが・・・さあ、どうなりますか？」

総括書に目を通されてみて、どうですか？

「よいと思いますよ。キヨ子さんもキヨコさんも本当によくやって下さいました。あらためて、お疲れ様です。」

「どういたしまして。」

「森さんにお礼を言われると照れるな、なんだか。森さんも、取り纏め役、お疲れ様でした。」

「ありがとうございます。おかげさまをもちまして、ようやく肩の荷がおりました。」・・・

やがて当面の話題も尽き、森さんに家まで送られ、俺たちは帰宅した。なんとなく俺の部屋に集まると、キヨコが口を切る。

「ブラフをかけられた可能性も否定できないが・・・森さんが口を滑らせるとはね！一つ、ある程度ではあるが、高い可能性で指摘できることは、森さんは特殊作業員だったのではないかということ。下水道に縁のある人というのは決して少なくないが、下水その

ものに飛びこむ機会のある人間はそうはいない。森さんは明らかに、体系だった、正規の、しかも高度の軍事訓練を受けた人間だ。軍人で下水を泳ぎわたらなきゃいけない人間とは？ 特殊工作員に決まっている。」

キヨコは不意に、面白そうな表情で俺に視線を向ける。キヨン子も俺に視線を向けたが、その表情は対照的に厳しい。・・・頼むから、そんな責めるような目で見ないでくれ。ハルヒに追及を受けているみたいで神経によろしくない。キヨコは馴れ馴れしく俺の肩に手を置き、こんなことを宣った。

「色男じゃのう、おぬし。ええ？ しかしな、選択を誤っちゃい
かんぞ。」

そして不意に真面目な顔になり、

「遠からず、そのときが来る。」

会話はそれで終わり、キヨコもキヨン子も立ち去った。意味をはかりかねていると、突然俺の携帯が鳴った。

「やあ、親友。しばらくだね。元気かい？」

よう、どうした佐々木。

「・・・折り入って話があるんだが・・・、次の土曜日、時間はあるかい？」

電話じゃ駄目なのか？

「・・・直接話したい。」

・・・？ まあわかった。時間と場所を簡単に打ち合わせ、電話は切れた。何事だろう？ 急ぎではないようだが。

キヨ子ちゃん97

その後一週間、特段変わったことは起こらなかった。ただ、キヨ子もキヨコも思案気味の考え込んだ様子でいることがめつきり増え、おれの周辺は奇妙な静けさが漂った。家にいても、何か奇怪な緊張感が感じられた。木曜日だったか、キヨコがふいに言った。その顔色はすこぶる悪い。

「キヨン、きみは、いなくなつて不安になる人間、もつともいなくなつて困る人間が誰なのか、よく思い起こしてみたほうがいい。」

問い直そうにもキヨコはさつさと立ち去つてしまい、俺はひとり残された。この謎の問いかけは、おそらくキヨコ、そしておそらくはキヨ子も共有している心配事の本質をなしている部分に深く関わるものなのは間違いない。それがなんなのかは見当もつかなかったが。金曜日も夕方になると俺のきょうだい達の不安と焦燥感はずきりと肌身を感じられ、縋るような、悲しげな眼差しが俺を責め立てた。何事かと問うても2人とも言葉を濁し、目を逸らして何も教えてくれず、僅かにキヨコが一言、

「キヨン、選択のときは目前だ。」

と、上擦った、苦しげな声で言ったのみであった。

「選ぶのは君だから、あたしは何も言うことができぬ。」

それを最後に、二人とも部屋に引つ込んでしまい、俺は相談相手がなくなつてしまった。しばらく迷つたのち、俺はキヨコの部屋

のドアをノックした。キヨコはドアを開け、俺が何か言う前に言った。

「決断の瞬間、人間は絶対的に孤独だ。決断に伴う責任の重圧も、ときには耐え難いものだ。従って、決断せずにいることができるなら人はそうするだろう。しかし、決断しないことが却ってひどい状況を出来せしめんとするならば、決断は不可避であるといえよう。キヨン、あたしはいまは何も言えない。せいぜいこれで精一杯なんだ。許せ……。」

そして身振りで、「立ち去れ」と促す。わかったよキヨコ。無理には問わん。だがひとつだけ。お前たちには禁則事項でもかかっているのか？ キヨコは弱く微笑んで答えた。

「ある意味正解だ、キヨン。」

そしてドアは閉められ、再び俺は取り残された。キヨンの部屋もノックしてみる。しばらくはなんの反応もない。諦めて去ろうとしたそのとき、突然ドアが開き、キヨン子が飛びだしてきて俺にすがりつき、なんとということだろう、その顔をくしゃくしゃにして泣きだすではないか。

「キヨンくん忘れないで！ 私たちのこと、忘れないで！ お願い！ お願い！」

俺は面喰らう。この号泣はなんだ。なにがお前をこんなにも取り乱させているんだ。いつも冷静な、皮肉屋の、俺の妹よ。キヨン子よ、どうしたんだ。俺がお前たちのことを忘れるはずがないじゃないか。肉親を忘れ果てるほど、俺はヤキは回っていないつもりだ。

「キヨソくん！　ほんとね？　ほんとね？　キヨソくん……。」

しばらくの間、俺はしゃくりあげるキヨソ子を宥めていた。と、いつの間にやってきたのが、キヨソがキヨソ子の肩に優しく触れる。

「キヨソ子ちゃん……。」

「キヨソちゃん……。」

キヨソ子は今度はキヨソにすがりついて泣きだした。キヨソはキヨソ子を優しく宥めながら俺に苦い笑みを向け、再び身振りで、さつきよりも強い感じで、「立ち去れ」と命じた。今度は俺に問うべきことはない。逆らう理由もない。俺は自分の部屋に引き上げ、このことの意味について考えた。これはただ事ではない。まるで、存在の強烈な不安にとりつかれたような有り様ではないか。しかも、二人ともいだ。

突如として登場した、個性ゆたかな俺の姉と妹。僅かしか一緒にはいないはずだが、もうずっと前からともに暮らしてきたような気がするし、これからもずっと一緒なのだろうと思ひ、それはそれで悪くないと思つていた。じつにユニークな奴らだ！ それに頼もしい。ハルヒも気の利いた真似をする、と思ひ始めてすらいたところだ。ところがそのきょうだい達はここにきてすっかり取り乱してしまつている。おそらく『選択』、あるいは『決断』のときが近いからなのだろう。できることならば、俺はいささか愛着の生じてきた俺のきょうだい達の愁眉を開いてやりたい。しかし、正解がなんなのか解らない。多分、キヨン子もキヨコもそれを知っているのだろう。しかしそれは語られてはいない。あくまで俺の自由な選択にすべてを賭ける心積もりのようだ。・・・重圧だ。なんとなく解るが、選択を誤つたら、彼女らは二度と俺の前に現れてはくれないだろう。それどころか、最初からいなくなつたことになってしまうのかもしれない。それではあまりに酷すぎる。今では2人とも、俺の大事な家族だ。失いたくはない。いつも背筋をきりつと伸ばし、ハルヒ色の眼差しで世の中を眺め、シニカルな意見を連発しながらその反面涙もろいところのある優しいキヨン子、いつも猫背ぎみで豪放磊落大胆不敵、そこいらの男よりも余程頼りがいのあるキヨコ。俺の妹、そして俺の姉。妹、姉、・・・妹、姉、・・・おかしいな、もう少し発想を飛躍させれば何かかわかりそうなんだが、・・・だめだ。俺はそこで、役にも立たない考え事を打ち切つた。明日は佐々木と会うことになつている。遅れないように行かなければ。

キヨ子ちゃん99

さて、その土曜日。待ち合わせ場所に時間通り出向くと佐々木はすでに来ていて、俺をみとめて微笑んだ。

「おはよう、親友。」

おはよう佐々木。もうだいぶ調子はいいようだな。

「おかげさまでね。さて、ちょっと歩こうか。」

佐々木について俺も歩きだす。天気の良い、散歩にはうってつけの日だった。俺は「折り入ったの話」がなんなのか気になっていたが、案に相違して佐々木はなかなかそのことには触れず、俺たちは昼食を挟んで、博物館や動物園、公園やらを歩き回った。話といえは相変わらずの佐々木節が全開といったふうで、故意に重要な話題に触れまいとしているのではないかと勘ぐりたくなるほどだった。そのうちに夕方も遅い時間となりだし、俺は夕飯の時間が気になり始める。不意に俺は風景に既視感を覚える。このあたり、俺は確かに知っている。見たようなビルの前を通り過ぎて俺は思い出した。佐々木といっしょに通っていた学習塾だ。懐かしの塾は不景気のあおりを食って潰れたらしく、塾の窓には「テナント募集中」の看板が虚しく電話を待っていた。佐々木は気づいているのかいないのか、そのことには触れず、意を決したように話し始める。

「この間はあるがとう、キヨン。・・・君は僕の命の恩人だ。君がいなかったらどうなっていたことか。」

面と向かって言われると正直照れるが、俺自身、自分がお前の救

助に役立つたとは今でも信じがたい。多分、森さん・・・あの現場にいた案内役の人だが・・・の指導あったればこそのことだ。俺は言われた通り動いただけだからな。

「でも、来てくれたのが君なものには変わりない。僕はね、キヨン、君が来てくれて、どれだけ嬉しかったか知れない。ねえ、親友、君は僕にとってはかけがえのない人なんだよ。」

そして一瞬の間を置いて、

「キヨン、については、親友よりも先の段階に、僕達の間を進展させることを正式に申し入れたい。」

佐々木の爆弾発言に俺は戸惑うことしきり。そういうことだったのか。しかしそのとき、俺の脳裏にはまずキヨコの忠告が響き渡った。「・・・いなくなってもっとも不安な人間は誰か?・・・」そして幾つかの記憶が意識のなかを駆け抜け、あの12月の事件の決断が再び俺の中に蘇る。ほんの数瞬、心は決まった。俺は自分自身を落ち着かせ、言葉を選び、そしてその言葉を空中に放つ。心苦しみが、言うほかない言葉だ。許せ佐々木。ほんの少し、お前は遅すぎた。

「親友、佐々木よ。・・・俺としては、関係の進展については、いまだ時期尚早であると考えてる。」

佐々木はしばらく何も言わなかった。俺の言葉が届いたのか不安になるほどの時間が経過し、たった一言、低く呟くような答えが聞こえた。

「・・・そうかい。」

それきり会話は途切れた。懐かしの道、懐かしのバス停、時間が急に遅くなったようだ。佐々木はだんまり、俺もだんまり。やがてバスがやってきて、佐々木は去っていった。俺のほうを振り返ることなく去っていった。俺は遠ざかっていくバスを見えなくなるまで見送り、ついで自分の家へと足を転ずる。俺は間違っではない筈だ。にも関わらず、俺は何かにくじったような気分だった。わけの解らないうちに、なにかに失敗したような感じだった。

キヨ子ちゃん100

選択が誤っていなかったことは明白だ。それが証拠に、家に帰るとキヨ子もキヨコもいた。二人とも顔色はだいぶよくなっていた。いまだ言葉少なではあったが、それは表面上だけのことだったらしい。夕食をとり、入浴を済ませて自室に入ると、待ち構えていたようにきょうだい達が攻めこんできた。キヨコが言う。

「キヨン！ デートの首尾はどうだったんだ？ ええ、おい。」

デート？ そこいらをほつつき歩いていただけだが……。

「ほお！ カワイコちゃんと二人、日がな一日そぞろ歩いているのはデートではないと申すかおぬし。まあいいや。吐け。あらいざらい吐け。今日何があったか。」

……人をからかうくらいには余裕を取り戻しているようで何よりだ。俺は乞われるがままに、ありのままを、記憶のとおり、すべて語った。二人は注意深く耳を傾け、話し終わるまでは一言も発しなかった。口を切ったのは再びキヨコだった。

「時期尚早、か。うまいこと言うな、キヨン。」

佐々木を傷つけてしまったのではないかと心配だ。

「ああ、傷ついたろうね。」

正直なところ、友達をひとりなくした気分だ。

「ありえん。」

きつぱりと断言、キヨコはさらに付け足す。

「その可能性はない。よく考えるキヨン。君は断ったわけじゃない。先送りにしただけだ。遠からずリターンマッチがある。」

俺なんかのためにか？ そのとき、不意に破裂するような音がし、頬に熱い痛みが走った。それまで黙って聞いていたキヨン子が俺をひっぱらいたのだ。その表情は険しい。何かを叫び出しそうなキヨンをしかし、キヨコが制した。

「あたしもいまの発言はいただけないぞ、キヨン！ きみは自分が人からどう見られているか、たまには考えてみたほうがいい！」

す、すまん。

「謝ればいいというものじゃない！ 言葉というものはすべて、時機を誤れば心を深く抉る凶器となる。謝罪だって言葉だ！ 注意深くしなきゃだめだ！ いいな、キヨン！」

しばらく言葉は途切れ、キヨコは考えこみ、キヨンは憤然たる様子で俺を睨んでいる。・・・ハルヒ色の威圧感が再び俺にのしかかる。キヨコが再び話し出す。

「選択と決断の季節はまだ終わっちゃいない。とりあえず今のところはそのあたりの評価は謹んでおくとして、今し方の問題について判決しておこう。キヨン子ちゃんの今の一発は一理あるものと判定する。キヨン、反論は？」

・・・わけがわからんが、お前がそう言うなら理不尽とはいえないんだろっな。

「反論はなしということでもいいな。なあキヨン、君は自分で思っているよりずっと、ほかの人たちから大事に思われている。投げやりな発言は慎みたまえ。悲しくなってくるじゃないか。・・・以上、閉廷。」

きょうだい達は去り、俺は複雑な心境でぼつねんと取り残された。無言のまま俺をひっぱたいたキヨン子。なるほど憤然とした様子ではあった。しかし、同時に、ぼろぼろと涙を零し、悲しげな様子だった。その姿は俺に罪悪感を呼び起こした。それはいわば行き場のない罪悪感、誰に対して感じているのかわからない、据わりの悪い感情だった。俺はいろいろなことを考えながら横たわっていた。叩かれた頬の痛みはやがてひいていったが、心の中の鈍い痛みはいつまでも消えなかった。

キヨ子ちゃん101

翌朝。胸の隅に微かな疼きを残したまま目覚ましに起こされると、すぐさまキヨコが部屋に突入してきた。

「新しい朝がきた、希望の朝だ・・・」

なぜかラジオ体操の唄を歌いながら、

「とっっっ！」

俺から毛布を引っ剥がし、

「さあ、すぐさま身支度しろ！朝食が冷める！」

せき立てられながら用意一般を済ませてキッチンに降りていくと、すぐに朝食が出てきた。しかしその量たるや。丼飯、丼味噌汁、皿には山盛りの卵焼きとせんきゃべツ。

「さあ食うがいい！」

おいおい、朝っぱらからこんな・・・。誰が作ったんだ、ひよつとして・・・、

「いかにもあたしだが何か問題が？あたしの料理は食べんとでも？」

わかったわかった。そうツンケンするな。食うよ。ありがたきいただかせていただきますよ。・・・ただな、あの・・・この卵焼き

は一人分だよな？

「何が？」

見るとキヨコの前にはまったく同じメニューが。

「さあ、食べよう。取りかかるのが早すぎたかな。出来上がりかどうかにも早い時間になってしまった。うん、出来はいいはずだ。我ながらよくできた。」

自画自賛しながらキヨコは快調に大量の朝飯を片付けていく。俺も朝っぱらから腹を括って、山のような食事に挑みかかる。

「こら！ よく噛んで食べえ！」

キヨコの忠告を聞き流しながら、気がつく俺はすっかり食器を空にしてしまっていた。

「ようおあがり。」

言つとキヨコは食器の片付けにかかる。・・・そういえばほかの家族はどうした。両親もこの時間にはいるはずだし、妙に朝型の下妹も、キヨン子もない。しかしキヨコは断言する。

「気にするな。些末な問題だ。さあ、学校に行け。あたしは後から行く。」

言うが早いか、俺は家から放り出された。なんなんだいったい。仕方ない。行くほかないな。俺は自転車を漕ぎながらつらつらと考える。それにしても、キヨコの朝食はうまかった。素直にそう言う

と、キヨコは言ったものだ。

「当然だ。たとえ食べ。うまいものは腹への納まりもいいはずだ。」

「こんなことも言っていた。」

「不味い料理を作る奴の気が知れん。それなりの食材を適切に扱えば、必ずそれなりのものになるはずだ。なぜそれができんのかさっぱりわからん。」

・・・変だな。妙に人が少ない。人影がないのではなく、妙に少ない。いつも見かける人々が見当たらない。自転車置き場にチャリを突っ込み、おれはなんとなく携帯に目をやる。・・・や、や、や、や、や！ 何だこれは！ 携帯の示している時間は、普段よりはるかに早い時間だった！ およそ50分、いつもよりも早い。・・・何者かが、家中の時計、少なくとも俺の目覚まし時計とキッチンの掛け時計の2つに細工して、俺に時間を早めに誤認させたわけだ。家族がいなかったのも道理、そんなに早い時間ならば、漸く起きだそうというところだろう。・・・何者かが？ 犯人は明白だ。だが、目的はなんだ？ 俺に何をさせようというのか？ とにかくここまで来てしまったら仕方がない。学校に行くでしょう。歩きだして幾らもいかないうちにメールが入った。佐々木からだ。『件名：駅前より 本文：お早うキヨン。』とある。振り返るとまさにさっき通り過ぎてきた駅前に佐々木がおり、ニコニコと微笑みながら俺にひらひらと手を振って、改札の中に姿を消した。俺はとりあえず返事する。

『お早う佐々木。朝早いんだな。』

『朝練ならぬ早朝講義さ。鬱陶しいこと限りない。』

『相変わらず大変なんだな。』

『まあね。ところで昨日の件だが、一日中付き合ってくれて有難う。回答を先送りされたのは正直なところシヨックだったが、考えてみれば君に結論を急がせても意味がなかった。またいざれ話そう。さて、僕はこれから予習をしなければならん。従って返信は無用だ。またな親友。また電話する。』

佐々木とのやりとりは以上の通りで終わり、俺は歩きながら考える。おそらく、この一件は『合間の一幕』といったところで、時計に細工した何者か・・・つまりキヨコの思惑には関係ない筈だ。佐々木と出会ったのはまったくの偶然ということだ。それに、佐々木が『正解』でないことは確かだ。俺は再び自分の決意を反芻する。つまるどころ、俺はなぜ、『12月18日の世界』を見限ったのか？

その理由は様々ある。しかし究極的には、俺が「こちら側」に愛着を抱いているからだ。それもかなり強く。それは何故だろうか？

そこまで考えたところで、俺は何故だか朝のキヨコの振る舞いを思い出す。キヨン子とはまた違うが、やはりキヨコも涼宮ハルヒの系譜の正当後継者であった。あの朝の一連の振る舞いは、まさしくハルヒそのものだ。そんな考え事をしているうちに俺は学校に到着、教室に入っていくとハルヒはすでに来ていて自分の席でぼつねんと窓の外に目を向け、物思うげな様子であった。よう、などと声をかけながら席につくと、ハルヒは驚いたようだ。まあそうだろう。俺は大抵ギリギリに近い時間だからな。

「あんた、いったいどうしたっていうの？ どういう風の吹き回し？ 天気予報は雨じゃなかったと思うけど。」

失礼な。お前こそどうしたんだよ。なんだからしくない空気じゃないか。

「・・・あたしだって、そんな気分のこともあるわよ。」

そして再び、窓の外に目を向ける。暫くは無言の時間があった。風が渡ってゆく。木の葉がざわめく。ハルヒの髪が揺れる。その次の瞬間、驚くべき言葉が、俺の口から転がり落ちた。ハルヒ。

「なによ。」

俺たち、つきあわないか？

一陣の風が再び吹き渡る。ハルヒは大儀そうにうずくまる。しかし、その耳たぶは真っ赤だ。

「い、いいわよ。」

かすれた、恥ずかしげな、ハルヒらしからぬ返答。

「そ、そんなにあらたまって言われると、て、照れるじゃないの。バカ。もっとさり気なく言いなさいよ。」

うずくまっただまじや説得力ないぞ、ハルヒ。

「バ、バカ。」

ハルヒは顔を上げる。真っ赤な顔が膨れっ面をしている。俺たちはどちらからともなく、ごく自然に、唇を重ねていた。閉鎖空間以来の、温かく、柔らかい感触。再び、あのとき同様、俺は、ハルヒを離したくないと感じていた。

無言のひととき、俺は考えていた。いろいろな考えが頭の中を駆け巡った。そしてふっと、ハルヒをここで捕まえておかないと、こいつは永遠にどこかに行ってしまうのではないか、あの忌まわしい12月18日が、今度は解決不能な問題となつてあらわれるのではないか、それだけはごめんだ、俺は誰よりもハルヒを見失いたくない……。

唇が離れると俺たちはしばし見つめ合った。ハルヒは薄く微笑み、何かを言おうとした。その瞬間、軽薄な声が降ってきた！

「よう、ご両人！ 朝っぱらからお熱いこってー！」

た、谷口！

「いやあ、それにしてもめでたい！ お前ら、ようやくまとまったか！ うんうん、やっぱり涼宮をどうにかできるのはキヨンだけだよなあ。だいたい、・・・」

しかし快調な谷口節もここまでだった。鋭い声が谷口の更に後方から飛んできた。

「谷口君！」

キヨンの声だ。谷口は青くなってしどろもどろになる。

「あ、あ、あの、キヨン子お嬢様・・・。」

「ねえ、谷口君、『恋愛と空気』という問題について、あたしたちとあなたの間には認識の齟齬があるように思うのだけれど、どうかしら？ この機会によく話し合って、問題を明白にしておいたほうがいいと思うのよね。」

「全くだ。あたしもちよっと言うことがあるぞ。ちよっとな・・・。」

何故だか指を鳴らしながら、キヨコも登場だ。谷口は泣きそうな顔で、我がきょうだいに引きずられて姿を消した。たぶん二人がかりのお説教をたっぷり喰らわされることになるんだろう。ま、同情の余地はないがな。ハルヒは再びうずくまり、再び耳まで真っ赤になっていた。

「最悪だわ、谷口のアホに目撃を許すなんて。もっと周囲を確認しなさいよ。バカ。だいたい教室で告白だなんて。バカ。そのまま

キスだなんて。バカ。普通すぎるわ。バカ。・・・バカ。・・・バ
カ。・・・

その昼。朝、始業ギリギリにくたびれた風情で教室に戻ってきた谷口が、弁当を食いながら俺に苦言を呈する。いわく、

「前々からくつつきそうできつつかない、やきもきさせられる二人が意味ありげに見つめ合っていたら気になって当然じゃねえか。せつかく早起きしたのによ、その分30分まるまる説教されてよ。あとお前、もうちょっと手加減するように言っとけ。痛いところを連続でついてきやがって・・・」

よかつたな谷口。キヨン子は相当手加減してくれてたようだぞ。でなきゃ昼までに立ち直るのは無理だろうからな。俺はなおも続く谷口の不平を聞き流しながら、少し安心していた。どうやらキスシンを目撃されたわけではないらしい。それにしても我ながら、極端な心境の変化だとは思う。思うがしかし、ある意味、この転回は自然なもの、不可避なものだともいえよう。自分でもうまくは言えないが、俺自身の自覚としてはそんなに突飛なものではない。確かに俺自身、一瞬は自分自身の正気を疑ったが、すぐにそんなものはどうでもよくなってしまった。いざこうなってみると、却って何故今にいたるまでこうなっていたのかわかる不思議なくらいに感じる。・・・さて、時間はとんで放課後。ハルヒは掃除当番に当たっていたためひとりで部室に行くと、すでにそこには長門が来ており、相変わらずの長門流儀でだしぬけに話し始める。

「我々はあなたを支持する。私個人もまた、あなたを支持する。・・・あなたが周囲の人々と自分自身のために、自ら考え、決断し、行動した勇気を、高く評価する。」

『公式見解』ともいうべき重々しい長門の贅辞を受け終わると朝比奈さんが現れ、俺を見るなり泣き出した。あ、朝比奈さん？

「違うんです。嬉しいんです。やっと涼宮さんとキョンくんが・・・」

嬉し泣きに泣き崩れる朝比奈さん。しかし待てよ、朝比奈さんが知っているということは、どうやら話が広がっているらしい。．．．誰のしわざだ、などと問う間でもない。谷口以外に容疑者はいない。奴の口は軽い。「その口に戸を立てられない奴コンテスト」なぞあったなら、上位ランキング間違いなしだ。おそらく、谷口 国木田 女子 全校、という流れだろう。谷口はその言動から全く女子に信用がないから、奴から直接広がることはありえん。国木田はそこそこ信用がある。モテるのではないが、誰に対してもあの飄々とした態度で分け隔てなく接し、谷口は問題外としても、男子にありがちな過剰に女子を意識するようなこととは無縁なため、一定の信用をかちえている。進んでぺらぺら喋る男ではないが、問われれば気前よく答える奴だ。なんにせよ、やはり谷口が情報源だな、これは俺が口の軽い友人に思いを致して慥然としていて、意味もなくスマイル大安売りのイケメンが登場、俺は更に慥然としていくという展開だ。

「我々全員の総意を代表し、感謝申し上げます。よい決断を下して下さいました。」

そうかい。ついで我がきょうだいが登場、

「いよう、キョン。」

「谷口をへし折るのはあまりに哀れすぎるから15%くらいの減力運転で勘弁してやったわ。」

二人ともすっかり元の調子である。ハルヒは最後に現れた。表面上、普段と変わりはない。SOS団活動中も普段と変わったところはなく、下校するときも、キヨンを引き連れてさっさと帰ってしまった。俺は残りのメンバーと連れだって、帰宅するために昇降口までやってきた。すると、全く不意に物陰から、『ひよっこり』という表現にまさに相応しい感じで喜緑さんが現れ、

「あなたの考えに賛成します。」

とだけ告げて立ち去った。・・・どうやらお墨付きを得たと考えて良さそうだ。それもこれ以上ないくらい強烈な。

統合思念体一派が敵に回ったとして、間違いなく喜緑さんはラスボスであろう。ちなみに朝倉は中ボス、長門は大ボスだ。・・・途方もない無理ゲーだ。第一、長門なしに朝倉に勝利できるかどうか。よしんば朝倉を倒せたとしても、長門を倒すなど無理な相談だ。実力的にも、そして心情的にも。長門と戦うか、統合思念体の軍門に降るか。・・・もしそんな選択をしなければならなくなったら俺はどうするだろう。ひとつはつきりと言えるのは、俺は長門に刃を向けることはできないし、ましてや長門を倒して得られる勝利などにはなんの意味も見いだせない。長門に倒されるなら・・・ある意味それは本望といってもいいかもしれない。一度ならず長門に拾われた命だ。長門に奪われるなら、いつそ諦めもつこう。しかしもう一つはつきりと言えるのは、長門は俺たちを倒すことはできないだろうということだ。長門がああ長門である限り、俺たちの知る長門有希である限り、長門は俺たちに髪の毛一筋の傷も付けられない。・・・そう思う。そうは思いたいがしかし、相手は統合思念体である。そこまで考えたとき、ラスボスとしての喜緑さんの恐ろしさが際立ってくる。ここからは純粹に想像だが、喜緑さんは決して自ら手を下さない。俺たちと長門を対峙させたとすると、互いの嘆き、悲しみ、慟哭などをはるかに超越した高みからこの悲惨な戦いを見下ろし、どちらが勝利したところで、勝利の意味を自分に有利なものにしてしまうのだろう。自分は指先ひとつ動かさず、勝利の栄冠が勝手に自分の足下に転がり込んでくるよう工作する女。不戦、非戦、厭戦、それでいて常勝。それがおそらく、喜緑さん、ひいてはその喜緑さんなるインターフェースが代表する、穏健派なる派閥なのである。さて、思考実験はこのくらいしておこう。だんだん怖いほうに考えが転がる一方になってしまうからな。相手が相手だけに。現状長門は俺たちの仲間、喜緑さんはその長門のお目付役、と

りあえずそのような具合になっている。・・・永遠にそうあつてくれることを祈ろう・・・さて、その当の喜緑さんがお墨付きを出した。となると必然的に、これは統合思念体一派のかなり広範な、少なくとも暗黙の合意のもとでのことなのだろう。実は俺は、喜緑さんの言葉に、正確にはその言外に、ある印象を受けていた。喜緑さんはロツカーの陰からふいに現れ、右の人差し指で俺を指し、お馴染みの心から満足そうな微笑みのまま言ったのだ。「あなたの考えに賛成します。」つまり、「やりたいことはなんでもやりなさい」ということのようにあつた。「思い切つてやりなさい!」・・・何を思い切れればいいのかさっぱりわからんが。喜緑さんは喜緑さんで、表現に朦朧としたところがあつていま一つわかりにくいことがある。わかつたところで、なにかの大謀略の一端に知らず知らず加担させられる可能性がある。もつとも、謀略の一端であるとわかつてはいても、なおそうせずにはいられない方向に持つていかれかねないが。なんととっても喜緑さんは老獪だ。おそらく、全宇宙的規模の老獪さだ。つまりそれが、喜緑絵美里なる人物が、情報統合思念体穩健派の代理人であるということのなによりの実証なのだ。次のことひとつとっても、このことは明らかであろう。即ち、喜緑さんはトップたる生徒会会長ではない。しかしそのトップの至近にあつて、トップの行動や判断が常に目に入る要の位置を占めている。そして生徒会書記の元には生徒会のすべての情報と資金とが集中する。常にあらゆることに目を配ることができるのだ。特に、皆の関心事である予算については、喜緑さんが会長の完全な信任を得ていることが重要な要素としてクローズアップされる。あらゆる支出について会長の決裁が必要であり、緊急の支出についても会長の決裁は当然必須であり、どちらの場合にしても、会長は喜緑さんの同意がなければ決裁しないであろう。・・・こういう風に考えてみると、あらためて明白に理解できるだろう。事実上生徒会を掌握しているのは、実に、喜緑さんなのだ。見方によれば、県立北高校は得体の知れない宇宙人の手中にすでに落ち込んでいともいえよう。そし

て特記すべきは、この実は際立った存在である喜緑さんが相変わらず全く目立たない人物でありつつづけていることだ。従って、喜緑さんの真の役回りについても、知る者は殆どないということなのだ。

以上、現在のところ判明している情報を総合して導き出した喜緑さんの俺なりの分析である。とにかく、空恐ろしいお方だということだ。普通の物語だとこの後どうなるだろう。たぶん『ぼくらの学校を宇宙人の手から取り返そう!』とかいう展開が自然なのだろうかな。しかし俺はそうはしないのである。全く知らない人ではないし、長門の関係者ではあるし、従って現在のところ味方と見做して差し支えないことではあるし、第一面倒くさい。生徒会の実権の所在がどこであろうと、俺含め殆どの生徒たちにはあまり関係ないし、今のところ実害もないしな。わがきょうだいの見解はどうだろう? キヨコもキヨン子も、大筋では俺の独自の見解に賛成してくれた。キヨコいわく、

「喜緑さんか。喜緑さんね。そうだな・・・いわば『ひとり政治局』とでも言おうかな。とにかく裏側で暗躍している、黒幕だな。」

キヨン子が付け加える。

「喜緑さんもまた有希ちゃんと同じく、深すぎてよくわからない心の持ち主だけれど、有希ちゃんより奥行きがあつて、しかも奥の方が広がっているような感じ。そしてそこは、光の届かない深海のような暗闇。ビロードのような感触のあるがごとき、厚く垂れ込める真の闇。透き通ってはいるが、光がないゆえに何も見えない。そして、揺るぎない静寂。・・・喜緑さんは単に黒いわけじゃない。確かに行動には黒さと受け取れるものが見受けられるかもしれないけれど、それはあまりにも深すぎる心の所産。かといって喜緑さんは『悪』ではない。善悪の彼岸を、喜緑さんはすでに超越している、

というか、もともと関係がない。彼女はただ、彼女自身の目的を追求しているだけ。」

俺は昇降口での喜緑さんの言葉と、その印象について語り、意見を求めた。奇妙にも二人は一言も答えず、ややあつてキョコが突然口を切り、話題を変えた。

「佐々木ちゃんについて、いささか補足しておきたい。」

そしてこうも言った。

「キヨ子、いつでもあたしたちに判断を仰げるとは限らないよ。」

その言葉の意味を俺が理解する前に、再びキヨ子は言葉を継ぐ。

「なぜ、佐々木ちゃんは『組織』を完全否定するに至ったか？」

誘拐などされたら嫌になって当然だろう。キヨ子が補足する。

「それはねキヨ子くん、一面的な理解でしかないわ。『組織』はあの誘拐の一件で、佐々木ちゃんが世の男性たちには見せたくなかった自分の姿を、こともあるうにキヨ子くんに曝してしまうきっかけを作ってしまったからなのよ。」

佐々木のそんな変な姿を見た覚えはないが。

「佐々木ちゃん、ほんのちよつとだけど、女言葉で話してたでしょ？ 佐々木ちゃんが男性たちに見せず、従つてある意味キヨ子くんだけには絶対見せたくなかった姿がそれなの。」

佐々木はただ普通に話していただけだし、あの状況では多少の習慣の乱れは致し方あるまい。俺は気にしていないが。

「ところが佐々木ちゃんのほうはそうはいかない。佐々木ちゃんの生活史のすべては、強力な母親からのプレッシャーとそれに対す

る抵抗という主題で抜きがたく色づけられている。つまり『常に女の子らしさという記号性を殊更に強調する母親』への反抗を、『記号性への反逆』によって表現することになるわけで、ここに乱れを生じるならばそれはすなわち、

「『記号性への反逆』の乱れは母親に対する反抗の失敗を意味すること。だから、乱れを生じさせた原因に対して、信じられないくらい腹が立つことになる。母親にぶつけられない怒りがそつちに叩きつけられる結果になるというわけ。」

「佐々木ちゃんは基本的には親の言うことをよく聞かいい子だよ。しかし親に逆らえないことは深刻なジレンマとしてある。極端な話、誘拐だけのことだったなら、あそこまで拒絶的にはならなかっただろう。」

なるほどな。しかし佐々木はなぜ俺にはことさらにそういう姿を見られたくないというのかな？　するとキヨンは黙ってしまい、キヨコは、

「キヨン！　・・・基本的にお前はいい奴だが、たまに憎しみに近い感情をおぼえることがないでもないぞ。実際の話、ほぼ殺意に近いような・・・。」

物騒なことを言い、さらに語る。

「キヨン、きみはハルちゃんを選んだ。それは至当な選択だ。君自身、あたしたち、それに全世界にとって。」

そんな大層な。大袈裟だな。

「ここからは純粹にあたしたちの推察になる。もし佐々木ちゃんが選択された場合にどうなったか。最大限悪い方に想像力を働かせ

た結果というわけだ。正確さに欠けるのはもとより承知のうえだが、
よければ聞いてくれ。」

「この際だ。所見を承ろう。」

「さて、まずは『佐々木ちゃんの世界』の概要をあらためて確認しよう。キヨン、君の証言によれば、『佐々木ちゃんの世界』は明るいセピア色の、静かな場所だった。そうだね？」

そうだ。

「神人はいない。それどころかなにもいない。」

そう。

「そして『佐々木ちゃんの世界』にいる間、君も橘ちゃんもずっとそこに、元の場所にいた。」

そうだったらしいな。

「ハルちゃんの閉鎖空間とはその点で決定的に異なる。ハルちゃんの空間に突入したら基本的にその場から閉鎖空間に移行してしまうからだ。だが姿が完全に消えるというわけじゃない。『空像』と呼ばれている『仮の姿』がこちら側にも残っていて、閉鎖空間内部での動きに対応して移動していく。因みに『戦士』が『戦闘状態』に移行すると、『空像』はその地点に佇んだ状態になる。」

「根本的に異空間を構築しているハルちゃんとは違い、佐々木ちゃんの世界は精神内部に仮想されたものだったみたい。そして、完成状態ではなく、準備態勢にあったと思われるわね。」

「佐々木ちゃんが強いプレッシャーに曝されていることは前に述べた。そして彼女の超能力者たちを精神的に支配していたことも。あたしたちの予測はこれらを総合したもの。・・・さて、佐々木ち

やんは彼女の超能力者たちにある種の圧力をもつて君臨していたと推測される。佐々木ちゃんへのプレッシャーの解消に伴ってその支配が消滅したことから、この圧力は佐々木ちゃんの被っていた精神的重圧を重要な因子としていたことは疑うべくもない。この支配力が逆に強大化していったら果たしていかなる結果に至ったか。．．．おそらく、佐々木ちゃんはより直接的に彼らを支配することになったことだろう。人格の内部に直接食い込み、直に彼らをコントロールするということだ。佐々木ちゃんと彼女の超能力者たちは不可分に結びついて、恐るべき運命共同体を形成する。」

「佐々木ちゃんの絶対的君臨のもと、彼ら彼女らはもはや佐々木ちゃんの意を体すること以外のことには何の意味も感じることができない、佐々木ちゃんの絶対的奴隷となり果てるというわけ。そしておそらく、佐々木ちゃんの世界はここに至ってその真価を發揮し始める。」

「超能力者たちは佐々木ちゃんの世界内部に取り込まれ、外界と寸分違わぬその世界で、そうとは知らずに暮らし始める。外界の彼らの肉体も、佐々木ちゃんの世界内部の彼らの動きに合わせて動き、平常の状態では何ら支障は生じない。」

きょうだい達のかわりばんこでの説明は続く。

「問題は平常ではない場合。」

「・・・いずれ彼らは佐々木ちゃんの意識世界の内部で何らかのミッションを付託されることになったろう。」

「そのミッションが合法的なものとは限りは限らない。・・・誤解のないように特に強調しておきたいが、佐々木ちゃんは意識して触法行為を働こうとしているわけではない。神となった佐々木ちゃんの意向を体現するために、佐々木ちゃんの心の無意識の部分、自身ではコントロール不能の部分から、彼らにミッションが発せられる。そして、佐々木ちゃんの意識世界に住む彼らには、ミッションの遂行が容易なように、現実の姿を改変した『状況の仮の姿』が用意される。例えば・・・そうだな、資金調達を例にあげようか。それは『宝探しミッション』として彼らに提示されることになる。

そして彼らは街中のそこそこにある『宝』を回収するわけだ。・・・バトルありだね。宝のありかは街行く人のポケットだったり、商店のレジだったり、銀行だったりするから、バトルが発生するのは当然だろう。お巡りさんもやって来るしな。・・・どうなると思う？

たぶん、新聞の記事はこんなふうになるだろう。『恐るべき青少年強盗団現る！！ 同時多発的犯行、被害者多数。死亡者 名、重傷者 名。 本紙締切時刻寸前、恐るべきニュースが入った。同時多発的に市内で強盗事件が発生、犯人は多数の青少年で、被害者に言葉もかけずに突如として凄まじい暴力を振るい、金品を強奪。被害者の多くは即死した。なおその上、阻止しようとした警官2名も彼らの凶行の犠牲となった。目撃者の話によれば、彼らの暴力はまるで、人間を襲撃するのではなく、何か品物を壊すような感覚に思われたとのこと。事態を重くみた県警は直ちに捜査本部を設置・・・』てな具合だ。」

・・・リアルな。空想にしちゃディテールがこまかいな。

「わかりやすく言えば、橘ちゃんたちはみんな、朝倉のような、良心をもたないロボットとなり果てるわけね。」

お前はお前で、そのたとえは分かりやすすぎてイヤだ。・・・宇宙的力がなくてナイフだけでも、朝倉の軍団相手じゃ誰にも勝ち目があるわけない。

「とりあえず、この世界があらたな無惨な凶行の舞台になることは避けられた。佐々木ちゃんはもう、ただの女の子で、ハルちゃんの友達だ。・・・結局のところ、誰にとっても、このあたりが望ましい終わりというものだろう。」

キョコは微笑んでいる。キョン子も微笑んでいる。何はともあれ、当面の状況は無事解決を見た、ということのようだ。

ただ、ちょっと待ってくれ。俺は疑問を呈する。

「何かしら、キヨくん？」

さっきの展開だと、最初の「凶行」で『組織』が全滅して終わりにじゃないのか？

「いい質問ね。表向きは、確かにその通り。でもねキヨくん、そうなってしまうと、神としての佐々木ちゃんは暴走を始める。『組織』の人間に限らず、誰彼構わずその『意識支配』を発動させるようになるわ。つまり、そのあたりの普通の人たちが突然凶暴化して、無差別に凄まじい暴力をふるい、ありとあらゆる悪行を実行し始める。強盗、殺人、テロ、破壊行為……。そして逮捕されても彼らは自分の凶行を説明できない。捕まったらたいももう用済みだから、意識支配を打ち切るわけ。該当部分の記憶の封鎖も同時に」

「……ホラーのような、悪夢の世界だ。橘も気の毒に。使い捨てられてしまうなんて……」

「いいえキヨくん、橘ちゃんは例外的に、凶行には動員されないと思うわ。佐々木ちゃんの直接の知人であると同時に、キヨくんの知人でもあるから。でも、その範疇の外にいる人たちはみんな、佐々木ちゃんに『召集』される可能性がある。……恐るべき『召集』から、誰も逃げだすことはできない。……佐々木ちゃんが、『もう少し余分にお小遣いが欲しい』とか、『あの政治家は気に入らない』とか思うだけで、惨劇がこの世を覆う。摘発は不可能。佐

々木ちゃんと犯罪を結びつける証拠がないから。」

資金の入手なら、送金の証拠が残らないか？

「送金の必要なかわい。それこそそこいらの人たちを短期的に意識支配して、お金だけをリレーの要領で届けさせたらいいだけだもの。記憶を消してしまえば、すべてがおしまい。」

すべては、佐々木の無意識のなせる凶行か……。

「その通りよ。そして、佐々木ちゃんはそのことを知ることができないし、知ったところで止められはしない。……識域下のコントロールなんて、生半可なことではできないから。……かくして世界は全面的に混乱に陥る。佐々木ちゃんと、その周囲のごく限られた人たちだけが安泰で、あとは阿鼻叫喚の巷……。警察官を増やしても無駄なこと。意識支配されてしまったら、拳銃を使用できるぶん、余計にやっかいなだけ。」

俺は寒気がする。ここに提示されたすべてが真実なら、まったく恐懼すべきことだ。

「佐々木ちゃんも、橘ちゃんも、こんな結果は予測していなかったはず。特に橘ちゃんは。まったくの善意で、もう少しでパンドラの箱を開いてしまうところだったというわけ。……ある種の寄生虫にとりつかれた人間は、寄生虫に都合のいい振る舞いを始めるというわ。恐らく、それと似たような現象だったんじゃないかしら。」

さて、『組織』関連の一連の事件は一応の決着を迎え、再び日常が戻ってきた。そしてある日の下校の途中、きょうだい3人で歩きながら、俺はふと、以前から多少気になっていたあるエピソードについて、キヨン子に尋ねる。なあキヨン子、催眠術が解けなくなった事件の詳細について、よければ教えてくれないか？ 無理には言わんが……。キヨン子は困ったような表情を一瞬見せたものの、

「そうね、知ってもらっていたほうがいいかもね。」

と、話しはじめた。

「中二の夏休みのことだったわ……。」

……キヨン子はある日、学校に来てほしい、と、家にかかってきた電話で呼び出された。相手は暗い声の若い女性で、おそらく生徒の誰からしかったが、名乗らないまま電話は切れてしまった。当時は校内の「名流占い師」として名高かったキヨン子にとって、こういった呼び出しはとくに珍しいことではなかったため、キヨン子は特に疑問ももたずに出かけてゆき、校門のところまで待ち受けていたとある女生徒に呼び止められた。それがキヨン子呼び出した当人だった。キヨン子は語り続ける。

「うまく言えないんだけど、その子が誰だったか、今ひとつ確信がもてないのだけれど、だいたい見当はついているの。」

誰だったんだ？

「たぶん、鶴屋さん、で、間違いないと思うの。」

・・・？ 暗い感じの女生徒、だよな？

「暗いだけじゃないわ。ものすごく印象が薄かったの。存在感も目の前にいてもおぼろげに思えるくらい。・・・うつむいて、元気がなくて、生气に欠ける・・・、」

人違いじゃないのか？

「・・・でも、あとで鶴屋家に連れて行かれて、謝罪させられたのよね。髪がとても長い子だったし、鶴屋家は一人娘だということだったし・・・。」

そしてキヨ子は、この詳細に話を移す。その子の相談内容は要するに、ここ何年も引き続いて、まるで何事にもやる気が起こらない。元気も出ない。どうすればよいだろう？ ということだった。キヨ子はいろいろと質問してみたが、どうも埒があかない。何か大きな抑圧があるらしいが、それがなんなのかがはつきりしない。質問が核心に近づくと、話がそれてしまうのだ。筋違いな一般論や、まったく関係のない思い出話が飛び出してくる。

「今だったら、日を改めて仕切り直すところだけれど、・・・。」

キヨ子は催眠術の使用に踏み切った。抑圧をといて、問題の本質を語らせようとしたのだ。

「浅はかだったわ。返す返すも。」

キヨン子ちゃん 111

まずキヨン子はその子に抑制を取り除くための催眠を試みた。しかし、確かに催眠状態になつていながらも拘わらず、その口は固いままだった。ついでキヨン子は退行催眠に移行した。現在のままで話せないならば、子供になれば話すこともできるかと思つた、らしい。

「子供のほうが、たいてい口は軽いものだから。」

キヨン子はだんだん年齢を遡らせる。13・・・12・・・11・・・10・・・9・・・8・・・7・・・6・・・、その瞬間、突然、際立つた反応が現れた。

「5歳まで遡つたときよ。驚いたわ。あたしでも。」

暗い翳りに閉ざされていた瞳に突如光が宿り、見違えるように表情が明るくなつた。そして、立て続けにキヨン子に質問を浴びせかけたかと思うと、返事を聞かないうちに機関銃のように話しはじめるといつた具合で、表情は明るくて澆刺、さつきまでとはまるで別人である。キヨン子は言葉の弾幕をかくくぐつて質問を發したが、相手は完全にきよとんとしている。キヨン子は悟つた。

「戻しすぎちゃつたのよ。わかつたことは、抑圧が6歳の時点で現れたということ。」

しかし真の問題はここで発生した。催眠が解けないのだ。5歳児そのままの振る舞いを続ける同学年生を前に、さすがのキヨン子も

取り乱してしまった。

「施術中に術者が取り乱すのは、いちばんしてはいけないことなのよ。」

焦れば焦るほど、いよいよにつちもさつちもいかない。やむを得ずキヨンは救援を求めることにし、その結果大問題になってしまった。入れ替わり立ち替わりいろいろな人々がやってきて、問いただし、叱責し、追求し、意地悪な言葉を投げかけ、侮辱した。キヨンは耐えるほかなかった。責めは確かに自分にあるのだから。しかし中には、あまりに酷い暴言を吐く者もあった。特に、キヨンの『靈感』に殆ど媚びるような態度をとっていた一部の教師連は却って口を極めてキヨンを罵った。反対に、キヨんに普段から忠告をあたえ、日頃キヨ自身に疎んじられていた教師たちは味方に回ってくれ、それこそ身を挺してキヨを守ってくれたのだった。キヨはこの騒動の中で、媚びへつらう人間の変わり身の早さといいい加減さをつぶさに学ぶ機会を得た。絶望と幻滅の中で、キヨの人間観察の眼差しはいよいよ冴え渡る結果になった。しかしまず、謝罪の過程を経なければならぬ。キヨは鶴屋家に出向いた。催眠は専門の先生が解いてくれていたが、本人には会えなかった。催眠前後の記憶がとんでしまっているの、会ったところで謝罪の意味が理解できないだろう、ということだった。キヨは両親に謝罪し、あっさり許して貰えた。両親は鷹揚に、事情はどうあれ、再び元気になった娘を見て良かった、と言った。恐らくは多分に慰めを含んだこの言葉をキヨは恐縮しながら受け、催眠術を原則封印する決心をその場で固めたのだった。

キヨ子ちゃん112

キヨ子はそこで話をやめ、家に着くと部屋に引っ込んでしまった。あとをキヨコが受け継ぎ、補足の説明に移る。

「キヨ子ちゃんはあまりに叱られすぎて、相手の子がどんな子だったか、記憶がおぼろげになってしまってるんだ。まったくあれは危機だった。危うくキヨ子ちゃんのほうが折られてしまうところだった。・・・相手の子というのはな、キヨン、確かに鶴屋さんで間違いない。だがな、キヨ子ちゃんにはあえて教えずにおいたほうがいいと思う。キヨ子ちゃんの性格からして、鶴さんに激しく遠慮し始めるのは間違いないし、鶴さんにしてもそういう対応は心外だろうしな。しかしな、鶴さんはこの事件以降、だんだん明るさを取り戻していったらしい。『怖いもの知らずのお嬢様』時代を催眠で追体験したとき、彼女のなかで何か悟るものがあったのだと信じたいね、あたしは。」

キヨ子と鶴さんは結局、事件後一度も、高校に入るまでは会ってない、ということになるのか？

「鶴さんは事件後、私立中学を退学して公立に移った。それっきりだ。」

鶴さんに、6歳のころ、何があったんだ？

「鶴さんはな、6歳の時点で、人生の先行きがすっかり決まってしまうんだ。・・・鶴屋さんにはな、『継承権評議委員会』という組織があって、一定のルールに従って『継承権順位名簿』の編制を行っている。お家騒動予防のための措置だが、その名簿に鶴さん

んが載ったのは産まれてすぐだ。なんといつても、本家の直系だからな。そして年齢があがるにつれて、あるいは名簿に掲載されていた人物の死亡や失脚によって、だんだん順位があがり、6歳の誕生日の時点で後継者としての身分が事実上確定した。そのときの順位は名簿上は7位、今では5位だが、それよりも上の人たちは高齡過ぎたり、継承権を辞退することがはつきりしていたりして、事実上は彼女が1位なんだ。・・・鶴屋家の血筋には特徴がある。だいたいにおいて、女は女傑、男は学者バカだ。そして、彼女の上にいるのは4人とも大学教授、ご多分にもれず学者バカで、経営なんかとても無理だし、第一彼らはなにごあるうと、断固として研究室を離れないだろう。現当主である鶴屋さんのお父さんはわりと例外的な人なんだよ。・・・それにしてもな、こういう継承権の第一候補者になってしまうのは容易ならざることだぞ、キョン！ もう自由に恋愛することは許されないし、自分の好きなように振る舞うこともできない。6歳の身空で帝王学なんぞを教えこまれて、四角四面に身边を統制されたら、落ち込んでしまつて当たり前だ。」

キヨ子ちゃん113

「鶴屋さんが受容性の高い、わりあい深い心の持ち主であることには異存あるまい、キヨン？」

キヨコは続ける。そうだな、確かにその通りだ。

「心の深さというものは、そうそう簡単に手に入るものじゃない。代償が必要だ、当然。代償とはなにか？」 『心の旅路』だ。ただの旅じゃない。長く、孤独な、苦しい旅、行き先のわからない、寄る辺ない、いつ果てるとも知れぬ旅路だ。・・・多くの人々にとってこの苦行は理解できまい。端から見ている限り、鶴屋さんの人生は順風満帆、何の障害もない、羨むべき境遇だからだ。しかしな、キヨン！ 鶴屋さんには鶴屋さんの苦悩がある。それは、高度に責任ある地位の人間、少なくともその地位が約束されている人間に特有の、極めて少数の人間にしか理解できない悩みだ。鶴屋さんはすでに、自分自身の部下、自分自身の命令系統、自分自身の執行機関、自分自身の警備隊をもっている。これらの人々がいることがすでにやがて約束された最高権力、『株式会社鶴屋ホールディングス代表取締役社長』に将来鶴屋さんがつくことの証明であり、教育課程でもあり、試験でもあるんだ。指導者の地位に相応しいか、どうか？ もうひたすら自分に正直であることは許されない。部下たちの目を、常に念頭におかねばならない。ちよっとしたうっかりした仕草や、ふともらした軽率な感想が、とんでもないことに発展しかねないからだ。鶴屋グループ直系三十万、傍系関連含めると百万人以上の人々の雇用、すなわち暮らしに直接責任のある地位ともなれば、当然そういうことになる。鶴屋さんは、自己統御の絶え間ない訓練のさなかにあり、そしてかなりのレベルに到達している。例えばな、鶴屋さんは以前言っていたらう、『あたしは直接関わるのではなく、

見ているほうがいい』というような意味のことをな。・・・あれが本音だと素直に受け取るならば、君は鶴屋さんの苦悩の深さを理解することはできないというわけだ、キヨン！ 優秀な部下というものは、指示が下る前にすでにその準備を整えてしまうものだ。そして、優秀な部下を使いこなすためには、上司もまた、優秀でなければならぬ。幸いに、鶴屋さんは素養はある。あとは磨き上げるだけだ。しかしな、人の上に立つために心を磨くことは、魂を削ることだ。苦痛なことなんだ。そして、その苦痛は誰にも知られぬよう、秘めておかねばならぬ。心から血を流しながら、微笑んでいなければならぬ。心の痛みにのたうちながら、あくまで平静でなければならぬ。さあ、これでわかるだろう、権力者に心無い人間が多いわけが。心が無ければ、苦しまずに済むからだ！ 人の心を捨て去り、『権力の獣』、あるいは『権力の部品』と化してしまえば、どんなに楽なことか。しかし鶴屋さんは、あくまで人のまま、人間の心のままで、鶴屋家の最高権力につこうとしている。そうしようと、努力を続けている。」

キヨン子ちゃん 114

「とまあ、キヨン子ちゃんはそんなふうに言ってたな。」

キヨコは話し続ける。

「キヨン子ちゃんは鶴屋さんには気を遣っている。いまだに自分の軽率さを悔やんでいるようだ。しかしな、催眠術というのは、被験者のほうで術を解かれたくないと思いついてしまつと解けなくなつてしまつというし、この場合はおそらくそれに当たるんじゃないかな。それはそうだろう、重圧に打ちひしがれた境遇から突然恐いもの知らずの子ども時代に戻されたら、もとの状態に戻りたくなくて当然だ。」

なるほど、な……。俺は暫く黙っていた。と、ふいにキヨコが再び口を切る。

「キヨン子ちゃんも可哀想に……。頭が切れすぎるんだ……。それに、不器用だから自分の『能ある鷹の爪』を隠しきれない……。だからいつもひとりぼっちなんだ。」

俺はキヨン子の普段の様子を思い浮かべる。確かに、ハルヒをはじめとするSOS団の面々以外とは、あまり話している姿など見たことがない。キヨコが続ける。

「キヨン子ちゃんはな、いればいたで多少怖がられるし、煙たがられもする。しかし、いざいなくなつてみると惜しまれる……。うまいかんもんだよ……。」

数日後、日曜日。SOS団の集合に向かうため、「三つ子のきょうだい」揃って外出した際、俺はその実例を目にする機会を得た。駅近くを歩いていたところ、突然、「キヨコちゃん！キヨコちゃんじゃない？」と呼ばる者があり、他校の制服の女の子がひとり、駆け寄ってきた。女の子はキヨコの手を取ってしっかりと握りしめ、どうして同じ高校に来なかったの、黙っていなくなっちゃうなんて！元気にしてる？などとまくし立てるのだった。やがて気が済んだらしく、女の子は去っていった。キヨコは終始微笑んでいたが、女の子が姿を消すと、その笑みは苦笑いに変わった。

「……誰だったかしら……？」

キヨコは呟く。

「だめね……。全然人の顔が覚えられない……。」

「気にすることないよ、キヨコちゃん！　あーや同級生じゃない。先輩だ。知らなくても仕方ない。」

「キヨコちゃん、どうしてわかるの？」

「体操服の端が荷物からはみ出してたからね。ラインカラーでわかった。」

「そう。……さすがね、キヨコちゃん。」

なるほど、前の学校では、キヨコはかなりひろく顔が知られていたらしいから、そんなこともあるのかもしれない。しかし、その不在が却ってその存在感を保障するとは、不幸なことだ。さて、……今日は俺たちは集合場所に若干早めに着けそうだったのだが……、女の子に呼び止められている間に時間をオーバーしてしまい、なぜかまた俺だけが団長殿に責められ、いつものごとく、喫茶店の

勘定をひとりで払うはめになったのだった。7人分の支払いはさすがにキツイ。

その日の予定、「不思議探し市内探索」の班分けはくじ引きの結果、俺と長門の2人班、キヨン子とキヨコの2人班と、ハルヒ、朝比奈さん、古泉の3人班となり、いつものごとく俺たちは市内に散った。・・・相変わらず為すべきこともなく、図書館へと向かう道すがら、俺は長門に質問する。なあ長門、キヨン子たちの解析とやらはどうなったんだ？

「おおよそ完了した。」

長門はそう言い、暫く黙っていた。俺たちは川辺の公園を歩いている。俺は焦らず続きを待つ。晴れ渡った、気分のいい日。青い空、白い雲、川の水音。と、視界にもはや見慣れた二人組。俺のきょうだい達だ。よう。お前たちもこっちに来てたのか。2人はなにも返事せず、微笑んでいた。胸を締めつけるような予感で、俺は苦しくなる。そうか……。そうなのか……。俺の見立てに誤りはなく、2人はそれぞれ口を切る。

「キヨン、暫くの間お別れだ。」

「キヨンくん、・・・ハルちゃんと仲良くね。そうすれば、またきつと会えるわ。」

別れの言葉を受け、俺は寂しくてならない。行くのか。本当に行ってしまうのか？ どうしても行かなきゃならないのか？

「ま、そういうことだ。」

「そう、残念だけど・・・。」

「じゃな！ ぐずぐずしていると別れが辛くなるばかり。さらばだ

！」

2人は振り返り、立ち去りかける。と、キョコが振り向く。

「キョーン！」

コイントスの要領で、何かを放って寄越す。それは百円玉だった。

「百円、返すぜ！」

俺もすっかり忘れてた。登場当初に貸した百円だ！ と、また何かが相次いで飛んできた。五百円玉が二枚。

「コーヒー代、払っとくぜ。」

遠ざかる声が微かに聞こえ、顔をあげるともうそこには誰もいない。……あいつらは行ってしまったのだ。いやつらだったのに……俺の姉と……妹……。その瞬間である。ある確信が電撃のように全身を駆け抜け、俺はその場に呆然と立ち尽くした。そうだ！ まさしくそうなのだ！ なぜだ！ なぜ今の今まで、俺はこれに気付かない？！ 俺の頭は大丈夫か、本当に脳味噌が入ってるのか？ もし誰かが、「いや、お前の頭の中味は乾いた麦藁だ。」と言ったなら、その時の俺はその言葉を真に受けたかもしれない。そうとも、間違いない！ 『半分ハルヒ』！ まさしくその通り！ あれは、俺の娘たちだ！ 俺と、ハルヒの娘たちなんだ！ あまりにもニブチンのおとつあんに業を煮やして、娘たち自らが打って出てきたのだ！ おとつあんとお母さんの将来を確実にするために！ おお！ 娘たちよ！ 俺と、ハルヒの娘たち！ ……すまん、苦勞かけるな……。それも、生まれるずっと前から！ 娘たちよ！ ニブチンのおとつあんを、どうか許しておくれ！

キヨン子ちゃん 116

いわく名状しがたい不思議な感動にとらわれ、俺は暫くの間、がらにもなくすすり泣いているのだった。キヨン子・・・キヨコ！お前たちときたら！ ハルヒと俺をくつつけるだけではなく、それ以上、何倍ものこともやってのけたのだ！ 将来にわたる危険にいたるまで、相当まで片付けて行ってくれたわけだ。なんという・・・。

さて、人は疑問に思うかもしれないので、ここで念のため言うっておきたい。俺とハルヒはあの朝からずっと付き合っている。そのことに関する描写はあえて省いた。完全に俺の私的生活に属することに思えたからだ。生活のすべてを語らなければならない義務などはないはずだしな。ついでに言っとくと、「お付き合い」はけっこう順調だ。ご心配はご無用。また、無粋な詮索もノーサンキューということでよろしく。

俺が落ち着くのを待って、それまでずっと黙っていた白皙の万能宇宙人は語り始める。

「彼らの存在の設定を行い、実行したのは涼宮ハルヒである。彼女は、彼女自身とあなたとの娘たちのデータを未来の時間平面上から読み出し、当該時間平面上に『焼き付け』を行った。しかしその際、幾つか他では見られない特徴的な操作を実施している。」

俺は興味深く耳を傾ける。長門は続ける。

「まず、彼らは、外形上、われわれと同年代であるが、生涯における経験のかなりの部分が付与されている。経験と技量を評価するならば、彼女らの晩年のレベルに相当する。」

ふたりの妙にプロフェッショナルじみた振る舞いが思い出される。そういうことだったのか。長門の話は続く。

「ことに特徴的な点としては、『存在のオフ機構』の設定があげられる。これはまさにほかに例のない、涼宮ハルヒ独自のもの。『オフ機構』が発動すると、かかる存在は最初からいなかったことになる。彼女らが関わった事象もすべて、彼女らなしで一応の説明がつけられるようになる。・・・但し、涼宮ハルヒに十分に近い者はその限りではない。他の多くの現象と同じく、『オフ機構』が停止すると、彼女らは再び復活する。あたかもいなかったことなどなかったかのよう。・・・この『オフ機構』は最近、『渡橋泰水』として認識されている、涼宮ハルヒの『鏡像個体』で実験されていたもの。かかる試験運用において良好な成績をおさめたため、今回事象において本稼働となったものと推察される。」

つまり、キョン子も、キョコも、泰水も、再び復活する可能性がある、ということだな。

「然り。」

なんだか寂しいな。俺は思ったままを 口にする。そうか・・・ハルヒのしわざだったか・・・。でもなぜ、あいつらは今、退場しなけりやならなかったんだ？

「彼女らのデータの読み出しを時間平面上から実行した際、発現可能性がある未来を同時読み取りし、それらとともに『焼き付け』されている。未来がある程度の不確定さを保持している以上、これは不可避な現象ともいえる。幾つかの未来では彼女らは存在していないため、そちらの存在とは時間平面上での同時存在が非常に困難理論上は可能。しかし非常に綿密な設定が必要。それよりは『存在オフ機構』を応用し、いわば『入れ替え制』にしたほうがはるかに簡単で、合理的。」

そちらの存在？

「あなたの子どもたち。」

・・・ハルヒ以外との、か。

「そう。」

いつ現れるんだ。

「一人目はすでに発現している。ちなみに、彼らの当該時間平面上での存在時間は、未来における彼らの発現可能性と対応する。」

そのまま俺たちは、暫く黙って、川辺を歩き続けていた。もうす

ぐ図書館だ。と、見たような3人組の姿。朝比奈さん、古泉、そして・・・橘。おや？ ハルヒはどこに行った。長門が俺の心を読んだように言う。

「涼宮ハルヒは現在、新たに発現した『可能性存在』とともに図書館にいる。」

なるほどな。くだんの3人のそばに近寄る。彼らは何事か話し合っていたようだったが、やおら橘が朝比奈さんに向き直り、深々と頭を下げる。

「いつぞやは本当に申し訳なかったです。・・・私は間違っていました。あんなことはするべきではありませんでした。・・・改めて、許してほしいと言いません。でも、どうか、この謝罪だけでも受けてください。どうぞ、お願いします。」

俺たちは偶然にも、橘から朝比奈さんへの、つまり事実上「組織」から朝比奈さんへの、公式謝罪の場に行き合わせたわけだ。朝比奈さんは簡単に許してしまった。

「橘さん、もうそれくらいで。気持ちはよくわかりました。実害はなかったことだし、もう私は気にしてはいません。どうぞ、顔をあげてください。謝罪は確かにお受けしました。あなたを許します。・・・これからも仲良くしてくださいね。」

朝比奈さん！ あなたこそはまさに疑いなく、地上に降り立った天使です！ この『名誉ある謝罪』の一幕のあと、俺たちは並んで図書館へと向かった。ただ、古泉は途中で橘といっしょに離れていた。デートだなこの野郎！

図書館に着いてみると、ちょうどハルヒが誰かと一緒に出てくる
ところに出くわした。誰か・・・そう、『可能性存在』。俺の子ど
もたちの一人だ。・・・誰との子どもかは一目瞭然だった。母親に
そっくりだったからだ。佐々木！ 実際俺は、あれ、なぜ佐々木が
ここに、と一瞬思ったほどだった。『佐々木キヨン子（仮称）』は
背格好も容姿も、じつにその母親によく似ている。ハルヒが突如口
を切る。

「キヨン！ ちょっとはあんた、妹と張り合うくらいしなさい！
キヨン子ちゃんはこの間に勉強ができるのに、なんであんたは、
まったくもう！」

名前は変わりないようだ。『佐々木キヨン子』で一応名称は確定
でいこう。それにしても、学力まで母親似とはな。こいつのために
はその方がいいだろうが・・・。佐々木キヨン子は母親とは違い、
眼鏡をかけていた。そのくらいが、際立った違いだった。黒縁の、
野暮ったい眼鏡だ。佐々木キヨン子が発言する。気取った仕草で眼
鏡を持ち上げ、もったいぶった様子で。

「やあキヨン。思うに、古泉君はデートでいなくなったんだろう
？ 簡単な推理だ。彼が無断でいなくなる理由はそれくらいさ。」

言動まで母親似でいやがる。佐々木の変装じゃあるまいな。長門
と朝比奈さんはとくに図書館の中に消えている。この機に俺はハ
ルヒと2人、夕方までしばし消えようと思った、のだが・・・、佐
々木キヨン子なぜかくつついてくるので、デートとはならなかつ
た。気の利かない奴だ。母親の察しの良さは受け継いでないな。仕

方なく市内を適当にうるつき、夕方駅前にいったん集合、そして解散となった。皆長い影法師を引きずって、それぞれの方向へ帰っていく。最後には俺と佐々木キヨ子だけが残った。俺はぼんやりと突っ立っていた。佐々木キヨ子が立ち去るのを待っていたのだ。佐々木キヨ子が低く呟く。

「帰らないのかい？」

あ、そうか、立ち去らないも道理、こいつは俺の妹なんだった。あまり似ているから、佐々木本人と勘違いしてしまった。家を目指して2人歩く道々、佐々木キヨ子はぽつりとこんなことを言った。

「あのさ、キヨン、その・・・たまにはさ、あの、佐々木さんと
もさ、会ってあげるといいと思うよ。」

ああ、そうか。俺はこいつが、俺とハルヒが2人つきりになるのを妨害した理由を理解した。こいつは俺と佐々木の子どもで、俺とハルヒがくっついてしまうと、この世に登場できないのだ。・・・可哀想にな。それきり会話は途絶え、気詰まりなまま、俺たちは家に到着した。

キヨン子ちゃん 119

その翌日から、佐々木キヨン子との日々が始まった。佐々木キヨン子は純然たる優等生であった。折り目正しく高学力、親も教師も泣いて喜ぶ理想的高校生。しかも俺とは双子にあたることになっており、必然的に俺の肩身は狭い。双子の片割れだけ非常に優秀だと残りの片方は立場がない。俺は双子の妹に、いつも勉強を教えるもらう立場となってしまった。佐々木キヨン子は努力家だった。徹底的な努力家だった。おそらく、その点も母親似なのだろう。その努力家ぶりは秀才ぶりと並んで知れ渡っており、教師じきじきに、授業中賞賛の言葉をかけられるほどであった。「君たちは努力が足りない！ この人を見なさい！ 彼女こそが、努力においても、その他の点においても模範です！」といった具合に。こういう賞賛を受ける人間は必ず孤立する。従って、佐々木キヨン子も孤独であった。そのうえ、こいつにはキヨコはいないのだ。正調キヨン子にはフォロー役のキヨコがいて、その孤独を幾らかは慰めてくれたものを……。佐々木キヨン子は毎晩俺の家庭教師役を務めながら、孤独な心境を吐露し、嘆くのだった。

「僕はひとりぼっちだ。」

佐々木キヨン子は呻くように言う。

「僕とまともに会話してくれるのは君だけだ。キヨン。」

俺はふと、こんなところまで母親似なんじゃあるまいな、などとぼんやり考え、すんでのところでのその恐ろしい想念を打ち切った。なにかとんでもないことをしてしまいそうに思われたからだ。佐々木に直接会う、とかな……。俺は直感的に、佐々木キヨン子が顕

れている今現在は、佐々木と会ってはいけないと感じていた。佐々木キヨ子の未来での出現確率が一時的にせよ高まっているはずだからだ。俺は暗鬱な雰囲気を変えようと、力弱い努力をするほかなかった。・・・そうか・・・優等生も大変なんだな。・・・ところで、前からちよつと気になってたんだが、お前、目、悪かったか？すると、思いがけず佐々木キヨ子の顔に軽い笑いが浮かび、得意そうな光が眼鏡の奥の瞳に輝いた。まるでネタふりを待ちかねた芸人のように。気取った仕草で眼鏡を持ち上げ、もったいぶって言う。

「伊達眼鏡さ、キヨン。」

・・・言っちゃなんだが、せつかくの仕込みネタにしても・・・、そんなに言うほどは面白くないぞ。正直なところ。

「そうかい。」

佐々木キヨ子は気分を害したらしく、素っ気なく一言答えたり、ほとんど口をきかなくなってしまうた。俺は居辛くなり、早々に退散した。そんな悪いことを言っただつもりはなかったんだが・・・ああ、どうやら俺にもキヨコが必要なようだ。キヨコがいてくれたらこんな時、要点を押さえたたしかな指摘をしてくれるだろうに。

キヨン子ちゃん120

さて、SOS団員としては、佐々木キヨン子は「上席副団長」との役職で参加していた。してはいたが、事実上、完全に「お客様扱い」で、古泉よりも手持ち無沙汰そうな様子だった。たいてい長門よろしく本を読んでいるか、宿題課題予習復習にこれ努めていた。朝比奈さんは言う。

「（佐々木）キヨン子さんは熱心ですね。・・・あたしはとてまかないません。」

古泉は言う。

「教職員の皆さんからの覚えもたいそうめでたいご様子ですし、必ずや望むままの志望校にお進みになれるのでしょうか。」

ハルヒは言う。

「確かに勉強はよくできるようだけど・・・、うん、その点はね、キヨンよりずっと見どころがあるわ。でも、なんていうのかしら・・・（佐々木）キヨン子ちゃんを見ると、『勉強するために勉強している』感じなのよね。勉強なんて手段に過ぎないじゃない？（佐々木）キヨン子ちゃんの場合、勉強そのものが目的化してるような危惧を覚えるわ。あんなにしてたら、そのうち壊れてしまうんじゃないかしら・・・。その点、ちよっと心配だわ。・・・正直言うとな、（佐々木）キヨン子ちゃんは団員には不向きかと思ったの。はじめは。でも、キヨンの妹ではあるし、・・・ちよっとぐらいは気を抜く瞬間が、人間、必要なものじゃない？」

長門はいつも通り何も言わない。さて、俺はどうか？ おれの個人的な見解としては、ハルヒと似たようなもので、こいつは頑張りすぎだと思えた。佐々木キョン子はいつも必死だった。努力するために努力していた。悲壮といってもいいほどに。俺には佐々木が自分の娘に仮託して、自分の真実を表現しているのではないかと思えたほどだった。まあそれは考え過ぎだろうが……。兄貴としても十分心配だが、父親としてはどうだろう？ やっぱり心配だろうと俺は思う。まったく自分自身に対して情け容赦しない、過酷な努力家。息も抜かず、友達もおらず、ただ勉強、ただ努力あるのみ……。なんのための勉強、なんのための努力、なんのための人生なのだろう？ その先になにがあるのだろうか？ 名誉か？ 立身出世か？ 末は博士か大臣か？ だからなんだというのだろう。そうだ、確かに、そういったものがまったくくだらないものとまではいえない。栄達をとげて、人の上に立つ人間がいなければ、やはり世の中回るまい。でも、だからといって……。ううむ、割り切れん。どうにも割り切れん。

キヨン子ちゃん121

結局のところ、佐々木キヨン子との日々はそんなに長くは続かなかった。10日ほど経ったある日、他のSOS団メンバーはみんな先に帰ってしまった、俺は佐々木キヨン子と一緒に帰宅すべく、ひと気のない昇降口で靴を履き替えていた。と、佐々木キヨン子がやってくる。佐々木キヨン子は微笑んでいた。寂しそうに、いまにも泣きだしそうに微笑んでいた。もし俺に絵心があつて、『選択されなかつた未来の別れの挨拶』を表現せよ、と求められたら、今俺の目の前にいる佐々木キヨン子の表情を再現するように努めることだろう。そういうことなのだ、一目見てわかる表情だった。いわばこいつの当番が終わつたのだ。すまん、佐々木キヨン子よ、そして佐々木よ。佐々木キヨン子は努めて平静に振る舞おうとしているようだった。しかし、その体が震えているのは隠しようもない。佐々木キヨン子は伊達眼鏡を外す。大粒の涙が落ちる。震える声が告げる。

「じゃな、キヨン・・・元気で・・・。」

そして眼鏡を俺の手に押しつけると、振り向いて、去っていきこうとする。お、おい！ 佐々木キヨン子は一瞬振り向き、消え入るように再び微笑み、靴箱の向こう側に姿を隠す。囁くような声。少しだけ、悪戯っぽい調子の。

「君には眼鏡属性はないんだろう、キヨン？」

俺は靴箱の向こう側を覗きこむ。誰もいない。・・・行ってしまったか・・・。俺の手に残った、古臭いデザインの伊達眼鏡だけが、今やあいつの實在の唯一の証拠となつてしまつたわけだ。・・・ちよつと可哀想だつたかな・・・。俺は感傷的な気分にとらわれ、自

分が泣きそうになりながらふと振り向くと、……そこには別の『キヨン子』がいた。あらたな『当番』だ。しかしこいつは誰の子だ？ どうも見覚えのあるような……いや、わかっている。見間違えようななんかあるわけない。あまりに印象の強烈な『キヨン子』がそこにいた。大理石の彫像のように白い肌、表情筋の存在が疑わしいような、表情に欠ける整った顔立ち、漆黒の長い長い髪はポニーテールに結われて、ほとんどその先が地面につきそうになっている。地面についたところで、土埃の一粒たりともくっつきはしないのだろう。そして、太古の地層から今蘇ったような、永遠不変、千古不易の存在感……。『九曜キヨン子』の登場である。未来の俺！なにをとち狂った！！ 未来には、そこまで女性が少ないのか？！それともお前は、いやむしろ俺か、そんなにも嫁の来てがなかったのか？！

キヨン子ちゃん122

俺はしばらくぼかんとして、九曜キヨン子と向かい合っていた。と、九曜キヨン子の表情に動きが生じた。ニカッ、とでもいうような、魅力的な可愛らしい微笑み。そして、

「キヨンくん、いつしよに帰ろう!」

と明るい声。・・・最初のイメージとのギャップが激しすぎて、俺は対応できず、さらにポカんとするばかりだった。するとその明朗な表情はかき消え、有史始まって以来表情筋を動かしたことのないような無表情に戻る。そこで俺はやつと我に返った。そうだそうだ、なんといつてもこいつは俺の妹なのだ。じゃあ帰ろう。家に帰るとしよう。九曜キヨン子は一切動きだす素振りを見せない。しかし俺が少し歩きだして振り向くと、ほんの数センチ後方をくつついて歩いている。・・・もう少し離れたほうがお互いに歩きやすいと思うが・・・。しかしだからといって歩きにくいとか、足がからまるとかいうことはない。心配もしない。足音もしない。九曜キヨン子は完全に俺に歩調を合わせ、ほとんど密着するばかりに兄貴の後をついてくる。・・・困るなあ。人が見たらどう思うだろう。というか、警察官はどう解釈するだろうか。非行歴などかけらもない高校生の身空で、職務質問なぞはご勘弁願いたいものだ・・・。たまらず俺は話しかける。なあ、(九曜)キヨン子や、そんなにくつついて歩くなよ。人が見たら変に思うだろう? しばらくの間はなんの返答もなかった。聞こえてないのかな。そんなはずはないが・・・。すると突然、

「おかー・・・さんの、まね。」

と、妙なイントネーションの返答。おお、そうかそうか。お前さんのおかーさんは、つまり俺の母親でなく九曜さんは、未来の俺の後をそんなふうについて歩いてるのか。・・・頼むぞ、俺！！なにが悲しゅうてそんな奇妙な女とち狂ったんだ！わかったわかった（九曜）キョン子さんや。でもなんでこのタイミングでおかーさんの真似をせずにおれないんだ？すると九曜キョン子さん俺の服の裾を掴み、

「すぎ。」

なんだと？

「好意、・・・の、ひょう、・・・げん。」

この人たちにとって、好意の表現とはどうやら密着らしい。さあどうしよう。寛大な度量を示す優しい兄貴たるべきだろうか。それとも社会的常識を盾に厳しく叱責し、兄貴の威厳を余すところなく表現すべきか。・・・結論として俺は、いかに好意があるにせよ、密着して歩くのは表現としていささか不器用すぎるとは言えまいか、などという、うすらぼんやりしたことが言えただけだった。九曜キョン子はこの発言を取りあげるべき価値を有さないものと判断したらしく、なんの返事もせぬまま、自転車置き場まで俺にぴったり雁行していた。この時ならぬ密集隊形の行進が見咎められずに済んだのは僥倖と言わねばならぬ。

キヨン子ちゃん123

とにかく一事が万事そんな調子で、表現技法があらゆる面において独特なため、結果日々非常に疲れるということになる。例えばだ。その同じ日の帰り道の続きに話は戻る。俺は九曜キヨン子を自転車の荷台に乗つけて家までの道を走っていた。荷重を感じないのは気のせいだと思うことにしよう。・・・そして信号で止まったとき何気なく後ろを見やると・・・ええと、あれは、バレエでいうところの「アラベスク」っていうのかな・・・そういうポーズを、荷台の上でしている九曜キヨン子を見て、俺は危うくそのまま自転車ごとコケてしまうところだった。・・・あのう、（九曜）キヨン子さん、何してはるんですか？ 待つことしばし。

「うれ・・・しさ。」

なるほどな。俺はなんだか深く追及する気もなくし、そのまま走っていった。ちなみに、返答を待つ間青信号を2回分見逃している。家に帰り着くと、また別のポーズに変わっていた。・・・最初普通に座っていたはずだから、こいつは走行中に荷台の上に立ち上がり、・・・たぶんさまざまにポーズを変え続けていたのだろう。しかもその途中の重量変化を俺に気づかれもせずに。・・・たいしたバランス感覚だとは思いますが・・・なんで俺は学校帰りに曲乗りしているんだろう。期せずして。

九曜キヨン子はSOS団には参加しておらず、俺とはクラスも違った。したがって日中目にする機会はほとんどない。ただ、下校時に昇降口で見かけなくても、自転車置き場に着くときには必ず九曜キヨン子流密集隊形になっていた。どこからか合流してくるようだが、俺はいつもまったくそれに気づかなかった。気づくための機会

が限られていたこともある。ある夕暮れ、自転車で自宅に到着すると、九曜キヨ子の姿は消えていた。登場から約一週間。別れも告げずに去っていったわけだ。ある意味、いかにもあいつらしい。気疲れはしたが、いなくなってみると、あいつはあいつで、けっこういいやつだったのかもしれない。一度話したところによると・・・やたらに時間を要しはしたが・・・九曜キヨ子の「おかーさん」は、未来の俺のあとにくつついて歩いたり、俺の目が逸れている間にいろいろとポーズをとってみたり、ということを、かなり面白がってやっていた、らしい。・・・お前も、そういうの、面白いのか？

「たの、しい。」

そうか・・・見事な似たもの親子だ。それにしても、正調キヨ子姉妹を除き、どうして俺の娘たちはみんな母親にそっくりなんだろう。俺の遺伝子は薄いのかな。

キヨン子ちゃん124

やたらに髪の毛の豊かな九曜キヨン子にいくらか感傷的な気分を抱きながら家に入ると、

「橘さんに会って下さい！ 連絡はあたしがつけておきますから！」

などという者がいる。これまでのキヨン子と比べると段違いに普通人ばい、橘キヨン子の登場である。そしてまたしても母親似。さすがに今回はそっくりとまではいかないが、母親の面影ははっきりと見て取れる。それにしても未来の俺という奴は……。まあいいけど。で？ なんだった？

「都合はいつならつきますか？ 今日今から？ 明日？ 明後日？」

今から外出などはごめん被る。明日も明後日も学校だ。都合はつかんな。第一、どうして俺が橘と会わなきゃならん。あいつは古泉の彼女だし、知人ではあるが、友人とまではいえなしいな。無用にやつの不興をかうことは差し控えておきたい。

「そんな！ 後生です。お願いですから！ 頼みます、この通り！ お願い！」

橘キヨン子は必死である。おそらくこいつは、大して高くはない可能性の未来から俺の前に登場したのだ。実際の自分の出現可能性が限りなく低いことを知っているのだ。だから、無理にでも俺と橘を引き合わせ、どうにかしようとしているのだ。・・・その努力が

何ほどの役に立つにせよ。俺ははっきり返事せず、部屋にひっこんだが無駄だった。橘キヨ子は部屋に押しかけてきて、何遍でもその話を蒸し返した。うるさいことこの上ない。親の目のある間はさすがに静かだったが、風呂から上がって、さあ、漫画でも拾い読みして寝てしまおう、などと思っていると、またしても橘キヨ子の突入である。いいかげんにしてくれ。多少は考える時間をくれ！

「考えることなんかないのです！ とにかく橘さんに会ってくださいー！」

俺には会う理由がないと言ってるだろうが。

「キヨンさんの理由なんか知りません！ とにかく会えばいいんです！ そうしてくれないと、大変なことになるんです！ ねえ、お願い。助けると思って。」

俺はほとほと辟易し、それ以上は話を聞かず、課題をしなきゃならんから、と奴を部屋から追いだして、課題はやらずにベッドにぶっ倒れてしまった。とてつもなく疲れた。ああ、なんとという妹。俺は期せずして、新興宗教にハマってしまった妹のいる兄貴の悲哀を、共有してしまったわけだ。俺はすでにすっかり、橘に会う気をなくしていた。あまりしつこくされると、かえってその気は失せてしまうものだ。俺は考え事をしている間に、いつしか眠りの中に落ちこんでいった。

翌朝。起きるなり俺は橘キヨン子からの逃走を開始しなければならなかった。自身の存在がかかっていることもあり、その必死さしつこさは半端ではない。これまでのキヨン子たちも同じ運命を共有していた筈だが、この強引な態度はやはり一種の個性というべきものだろう。正調キヨン子姉妹は別格としても、運命に従順な佐々木キヨン子の姿や、運命という概念にすら無関係そうな九曜キヨン子の姿がしきりに思い出される。九曜キヨン子の「密集隊形」や「ポーズ」など、橘キヨン子の必死の宣教に比べればどれほど可愛らしかったことか。思えばあれは、純粹無垢な子どもらしさの発露とも言えるものであったろう。佐々木キヨン子のほとんど無謀な頑張りぶりも、ある意味においては可愛らしい特徴ともいえよう。・・・もし万が一、佐々木キヨン子に再び出会う機会があつたなら、父親として、抱きしめてやらねばなるまい。「娘や、そんなに頑張る必要はないんだよ、お父さんは、お前がいてさえくれればそれでいいんだ。それだけは覚えておくれ。お父さんは永遠にお前の味方だ。・・・さて、空想の中に逃避するのはこれくらいにして、俺は現実的な逃避をせねばならない。朝食もそこそこ家を飛び出し、自転車に飛び乗って全速力でかつ飛ばす。後ろから、橘キヨン子が何事か叫んでいるが、俺は気づかないふりを決め込み、一気に引き離す。息を切らしながら自転車置き場に突入、直ちにとつて返して登山開始。ああ、かなわん。橘キヨン子は結局追いついてこなかった。朝つぱらからくたくたになつてしまつたが、うんざりさせられる長口舌からは逃げられたからよしとしよう。

それにしても、俺がつくづく理解したことは、何かものを主張するにあたって、一生懸命に、必死に頑張つても、逆効果にしかならない場合がある、ということだつた。この場合はことにそうで、き

つい言い方かもしれないが、「頑張るのはお前の勝手。」ということにしかなくていい。それどころか、橘キヨ子が必要に言い募れば言い募るほど、俺はどんどん嫌な気分になり、奴の主張への同意の可能性もどんどん減ってゆく。それは何故かと言うなれば結局のところ、奴の主張は根本的に俺自身の都合というよりは、俺自身そのものを無視、あるいはとことん軽視しているからだろう。「自分の言っていることは正しい。だから自分の言うことを聞き、自分に従え。」要約するならばそういうことだ。「自分に屈服せよ。」ということなのだ。・・・そんな主張、誰が聞き入れるもんか。そんな鼻持ちならない態度に、誰が同意するもんか。主張の正しさなんかは二の次だ。人に聞いて貰いたいなら、聞いて貰えるように言わねばならん。結論としてはそういうことになる。

佐々木キヨン子の、いつそ奥ゆかしい態度が思い起こされる。佐々木キヨン子はただ一回、たった一言佐々木に言及しただけだが、発言のインパクトは橘キヨン子のそれをはるかに凌ぐ。

さて、当面俺は橘キヨン子に対策し続けなければならない。基本的に人目のあるところでは静かなので、俺は常に身边にひと気を絶やさないようにしなければならなかった。そんなわけで、俺はハルヒと一緒にいることが多かった。正直なんだか照れくさいので、学校ではあまり2人でいようとはそれまではあまり思わなかったのだが。・・・橘キヨン子にとって、俺とハルヒが2人で行くのは困る事態の筈だが、皮肉にも彼女は自分の主張を断固押し通そうと必死に努力するあまりに、俺をハルヒのほうに押しやってしまったことになる。結果としては。・・・なんとというみごとな空回りっぷりであろうか。しかしそれも数日のことであった。5日ほどだっただろうか？ 帰路ひとりで帰ることになってしまい、これは今日はあの強硬な説得を覚悟しなきゃならんか、などと思いつながら校門までやってくると、橘キヨン子が待ち構えていた。やれやれ・・・。橘キヨン子は近寄っては来ず、校門の外にじっと立ち尽くしている。その表情に乱れが生じ、俺は思わず立ち止まる。橘キヨン子は一声叫ぶ。

「橘さんに会ってください!!!・・・キヨンくんのばか! ばか! ばか!!! 嫌い! 大嫌い!!!」

そして泣きだすと走り去った。・・・思わず駆け寄ったが、校門の外には誰の姿もない。そんなに足は速くない筈だ。・・・行ってしまったか・・・。可哀想なことをしてしまったな・・・。思えば

橘キヨ子は純な少女であった。それは最大の長所であり、同時に最大の欠点だった。彼女の表現技法はあまりにも単純で、一生懸命で、そして一本調子で退屈だった。熱情はありあまるほどあったが、技量は圧倒的に不足していた。彼女は結局、宣教師としては未熟に過ぎた。・・・そしてそれは、母親の不幸にも通ずるものがある。もともと橘の場合、相手が悪すぎたということもあるかもしれない。佐々木は説得には苦勞する相手だ。俺はそのことをよく知っている。気に入らないことに関してはことに頑固だ。橘の不幸の原因はやはり、『佐々木の真実を見損なつた』ことがその根本的な原因としてある。佐々木が自分の中に通している筋、堅忍不拔の確固たる信念を見通せなかつたのだ。見ようともしていなかったのだ。橘は自分の主張の正当性に酔い、正当な主張はその正当性ゆえに無条件に受け入れられる筈だと信じる、初歩的な信仰者であつたのだ。そして、その純粹さは娘にも受け継がれた。・・・俺はここへきて初めて、橘キヨ子の悲劇を悟つた。橘キヨ子は俺を橘に会わせようと一生懸命だった。何故だろう？ この世に登場したかつたからだ。・・・俺の娘として。・・・橘キヨ子よ、お前は寂しかったんだな。気づくのがちよつと遅かつたが。・・・お前もまた、父親としての抱擁が必要な娘だったか。・・・。未来の俺よ、お前の教育にはいささか問題があつたようだぞ。・・・。

俺はぼんやりと校門のところへ突っ立ち、父親としての娘の教育の難しさに思いを致して、なんだか自信がなくなってくるような気がしていた。と、俺の服をつまんで引つ張る者がある。誰だと振り向くと、まずセーラー服の布地を押し上げるふたつの膨らみが見えた。それが俺の顔より若干下にある。つまり背丈が俺より高いのだ。見上げるとかすかに赤らんだ恥ずかしそうな表情。

「まだ、いたんだね、キヨンくん。．．．いつしよに、帰ろう？」

あらたな『当番』の登場らしい。ええと．．．、そうだ、ミヨキチだ！ なんとまあ、未来の俺はミヨキチとくつつく可能性すら留保していたか！ しかしまあ、なんと発育のいい。いろんな意味で背丈はすらりと高く、髪は黒くつやか、それがポニーテールに結われて長く垂れ下がる。ここまでのキヨン子たちは、どちらかというとお小柄か、まあ平均的な身長で（参考：『正調』キヨン子の身長が143.5センチ）、体格はスレンダー寄りだったのに比べ、「ミヨキチキヨン子」は背丈もそうだが、明らかにグラマー寄りの体型をしている。やはり母親の血が濃いのかな。ミヨキチも妹と同年齢にはとても見えないからな。

ミヨキチキヨン子は可愛いかった。とにかく可愛いかった。素直で、内気で、いつも少し恥ずかしそうで、．．．もうどう言ったらいいか．．．とにかく『激しく可愛かった』。俺はたぶん、近ごろ頻繁に耳にするようになってきた意味での『萌える』という言葉を、相当部分まで実体的に理解できたと思う。実の妹（そして実は娘）ではあるが．．．。そして、ミヨキチよろしく、ミヨキチキヨン子

もとても少食だった。よくもまあその食事量で、そんなにも育つことができたものだと感じするくらい。俺はしばしば、ミヨキチキヨ子の頭を撫でてやりたくなくなってしょうがなかったのだが、兄貴としてそれは自重した。SOS団にも参加しており、特に朝比奈さんに懐いていた。ハルヒは言う。

「キヨンなんかの妹にしちゃ、信じられないくらい可愛いわね。みくるちゃんとはまた違う方向性の萌えを感じるわ。」

古泉は言う。

「お綺麗ですねぇ、本当に。いや、涼宮さん、朝比奈さん、長門さんが(ミヨキチ)キヨ子さんに劣るなどと言うつもりは毛頭ないのですけれども、上背があって、プロポーシオン抜群、まさしくモデル顔負けですね。」

朝比奈さんは言う。

「(ミヨキチ)キヨ子さんは本当に可愛らしいですねえ。あたしなんか本当にかないません。背も低いし……。」

朝比奈さんはそのままで全然オツケーです!! む、しかし背丈だけでいえば確かに、ミヨキチキヨ子は朝比奈さん(大)をも凌ぐのは確かだが……。

残念ながら、ミヨキチキヨ子との日々もそう長くは続かなかった。5日ほど経って、家に帰っていると、ミヨキチキヨ子が家の玄関の前にいた。俺の姿をみとめると寂しげに一礼、家の中に入っ
てドアを閉めた。俺もすぐその後が続いたが、家の中には誰もいなかった。・・・その時ほど残念な気持ちになったことはちよっと思
い出せない。もう少しいてくれても良かったのに・・・。それにし
ても、妹なのが惜しいほどの可愛さだった。破壊力と言ってもいい。
俺は正直なところ、こんな可愛い娘をもてるなら、ミヨキチもアリ
かもしれない、などと一瞬でも考えなかったと言えば嘘になる。結
局ミヨキチキヨ子はただの一言も、その母親には言及しなかった。
しかし、俺はかつてなくミヨキチに傾いた。・・・宣伝としてはこ
っちのほうが正解だろう。橘キヨ子の稚拙な手法では成し遂げら
れなかった効果だ。それどころか、俺は橘キヨ子にあてられたせ
いで、橘自身に苦手意識を抱きつつある。しかし、日数的に橘と同
じということは、出現確率としては同率ということになる。とて
も信じられないが。・・・ミヨキチと俺は、「可能性はあるが縁は
薄い」ということのような。なんといっても、ハルヒとの子ども達
である「正調キヨ子姉妹」がいる。彼女らとは何ヶ月もいっしょ
だった。次点佐々木はたったの10日である。あとは推して知るべ
し。要するに、ほぼ確実に、「正調キヨ子姉妹」が俺の娘たちと
して、いずれ、世に現れてくるのだらう。ほかのキヨ子たちには
なんだか気の毒だが・・・。(なかんずく、特にミヨキチキヨ子
は、個人的に惜しくもある。)俺は部屋に戻り、ふたたび感傷的な
気分落ちこんで、考え事に耽っていた。と、ドアをノックする者
がある。深く考えずに俺は返答する。どうぞ！ ドアを開けて現れ
たのは・・・なんと、キヨコー!!

「いよう、キヨン！ しばらくぶり。早速だがな、5000円くらい貸してくれないか。」

この野郎、野郎じゃないが、再登場するなりそうくるか！ こいつめ！ そんなふうに思いながら、俺はキヨコに千円渡していた。なんだか泣いてしまいそうだ。キヨコは千円札を受け取って、

「お、豪気だのう。ありがたく借りとくよ。じゃ、あとでな。」

と、出て行った。・・・また会えたのは嬉しいが、どういうことだ？ ローテーション制なのか？ すると、キヨコが開けっ放しにして出て行った・・・閉めて行け！ 兄貴として言うが！・・・ドアのところには誰かがいる。振り向いてみるとそこには・・・なんと、佐々木キヨン子！！ どういうことだ？ 『同時存在は非常に困難』じゃなかったのか？

佐々木キヨン子はドアの枠にもたれ、腕を組んで、じつと俺を見つめていた。その唇には笑みが浮かんでいるが、視線は刺すように鋭い。沈黙がしばし。俺は落ち着かない気分になってくる。なにか俺は非違を犯したのか？ さしあたってさっぱり心当たりがないのだが。不意に、佐々木キヨン子が静かな声で言う。

「眼鏡、返してくれないか。」

渡されたきり、鞆の肥やしになっていた伊達眼鏡を、俺は佐々木キヨン子に返還する。なあ、（佐々木）キヨン子よ。なんで伊達眼鏡なんかかけているんだ？ お前は明らかに、眼鏡はないほうがいいぞ。すると佐々木キヨン子答えて曰わく、

「だからそうするのさ。」

そして眼鏡を鼻の上ののせると、さつさと立ち去ってしまった。この謎のような問答は、俺を考えさせた。思えば佐々木キヨン子は他のキヨン子たちとは毛色が違った。他のキヨン子たちはたいてい髪は長く、そして髪型はポニーテールだった。キヨコですらそうだ。・・・そこまで父親の好みに合わせてくれる必要はないように思うが・・・。しかし佐々木キヨン子に限ってはショートカットだった。眼鏡（しかも伊達眼鏡）をかけているのも佐々木キヨン子だけだ。・・・なにか理由がありそうだ。天の邪鬼なのかな？ 確かに、その母親である本家佐々木はだいぶ天の邪鬼な性格をしている。男言葉で喋ることは一例にすぎない。佐々木はこうと思いつめたことは決して曲げない。だから俺は佐々木のことを信用しているのだ。佐々木は決してぶれない。そのすらりとした体の奥にはしっかり通

つた、頑丈な芯がある。佐々木は信念の人なのだ。その体に通う血はあくまで熱いのだ。ハルヒとは若干種類が違うにせよ……。ゆえに俺は佐々木を信頼しており、佐々木のほうでも俺を信頼している……。その理由ははっきりしないが。佐々木の天の邪鬼さが一種のポーズでしかないことは、従って俺はよく知っている。佐々木は常に韜晦しているのだ。そうせずにはおれないのだ……。ここで俺の考えは途切れてしまう。すると不意に、声が降ってくる。

「佐々木ちゃんはね、自分にいわゆる『萌え要素』を付加することをよしとしないのよ。」

おお……。キョン子！（正調）キョン子！ ずいぶん久しぶりな気がするなあ……。キョン子は淡々と続ける。

「佐々木ちゃんはね、孤独な女の子だけど、プライドはとても高いの。『萌え要素』なんかで男の人を惹きつけるなんてことは、そのプライドが決して許さないのよ。……。佐々木ちゃんはね、純粋に、自分を愛してほしいの。あくまでも、自分単体を、好きになっ
てほしいの。」

キヨン子ちゃん130

「だからね、佐々木ちゃんは、自分が好意をもった相手の萌える要素を、却って自分からほとんど外してしまうの。その結果ほとんどハードルが上がってしまうというわけ。一種の『ツンデレ』といえるかもね。佐々木ちゃんはね、純粋に、愛が欲しいのよ。付加価値に対する萌えなど、排除してしまいたいのよ。・・・佐々木ちゃんはね、賢くて、冷静で、理屈っぽくて・・・そして、とても寂しい女の子。」

・・・そうだな、確かにその通りだ。キヨン子は一瞬黙り、なにかを言いあぐねる。しかしすぐに気持ちを定まらせ、言葉を継ぐ。

「そう、佐々木ちゃんはとても賢いの。・・・女性としての普通の感情を妥協させられる程度に。」

それは・・・どういう意味だ？

「キヨンくん、なぜ、佐々木ちゃんの娘と、ハルちゃんの娘たち、つまりあたしたちが一緒にいると思う？」

それは、・・・俺はただ一つの可能性に思い至る。まさか・・・キヨン子は真面目な顔で、ズバリと本質を突く。

「キヨンくんはね、ウワキしたのよ。本妻ハルちゃん、愛人佐々木ちゃん。しかも佐々木ちゃんは納得済みでね。ハルちゃんも黙認。」

・・・なぜ、そんなことに。・・・俺はそんなに器用ではないは

ずだが……。

「佐々木ちゃんは結婚に失敗したの。……どちらの意味でもあり得るわ。結婚生活に失敗したか、結婚そのものができなかったかそれでね、佐々木ちゃんは初恋の相手に立ち返るの。ずっと好きだった男の人の、『次点の女』、『二号』に甘んじる決心をしたのよ。佐々木ちゃんはその決心に耐えられるだけの、冷静な心の持ち主。」

まさか……。

「今こそ明かすわキヨンくん。『すでに事実上キヨンくんの手の内にある3人の女』。前、言ったわよね？ そのうちひとりには佐々木ちゃんだと。もう一人はもうわかってるわね、ハルちゃんよ。」

……あと一人は？

「時機がくれば明かすわ。もうじきよ。」

そこで、再びキヨコが登場した。

「まあそんなわけだ、キヨン！ ええ、色男めが！ 単独ハッピーエンドシリーズは終わり、ここからは『ハーレムエンドシリーズ』の開幕だ！ じゃんじゃんあたしらの『姉妹』が登場するぞ。乞うご期待、つてわけだ！」

……な、なんでそんなことに……。

「心配はいらんよ、キヨン！ 考えてもみる、ここから先はな、『正妻ハルちゃん』という線は不動なんだ。つまり、君の『愛人諸姉』は、ハルちゃんの黙認もしくは、半ば公認のもとにいるという

わけだ。」

・・・全然安心できん。

「世界の危機にはならんという意味ではこの上なく安心だ！」

キヨコは俺の肩口を思い切り張り飛ばす。いて！

「憎いよ、この……！」

妙に陽気なキヨコとは対照的に、キヨコ子の表情は険しい。・・・
やれやれ、心臓によろしくない日々が始まるようだぞ……。

置かれた状況がどれだけ異常だろうが、朝は必ずやってくる。俺は起き出すと、キヨ子、キヨコ、佐々木キヨ子、もともといる妹と合わせて5人きょうだいの一人となってしまうている自分自身を発見して、どう考えてもここいらが限界だろうと思う。とりあえず、佐々木キヨ子については『養子』の線で処理されているようだが、それにも限度がある。これからどんどん増加するらしい、いわば『キヨ子軍団』をこの広くはない自宅に収容できるわけがないのだが……。すでに今の時点で、食卓が非常に狭い。欠員1であるにも関わらず、である。ちなみにその欠員はキヨ子だ。キヨ子は回復して退院した演劇部長を毎日家まで迎えに行っており、従って俺が起き出す時分にはすでに出発しているのだった。階下に降りていくと佐々木キヨ子がすでにすっかり準備を整えて朝食をとっており、妹や両親は相前後して加わる。佐々木キヨ子が出て行ったあたりで大あくびしながらキヨコがやってくる。

「よお、おはよう色男君。」

「キヨくん、『イロオトコ』なの？ ふうん？ それなんのこ
と？」

「こら！ 無感覚にそういう言葉を妹の前で使うな！ 教育に悪い！」

「おお、すまんすまん。」

そう言ってキヨコは俺の背中をぶつ叩く。あいて！ ああ、こいつめ！ 花も恥じらう女子高生の筈が、なんなんだこの言動の男っぽさというか、ハッキリ言って「おっちゃん臭さ」は！ 佐々木キヨ子とはまた別の意味で異色だ。キヨコは母親の小言に生返事し

ている。明らかにろくすっぽ聞いてはいない。わからんものだ。こいつが佐々木キヨ子より成績がいいなんて。超努力家佐々木キヨ子が、この「おっちゃん的適当女子高生」キヨコに成績の点で一敗地にまみれるとは信じがたいが、まさに世は不条理の世の中。こいつは自分の自転車があるにもかかわらず、いつも俺の自転車に便乗している。じつにちゃっかりしているのだ。しかもその歩みは実にテレテレしており、つきあってゆっくり歩いていると遅刻してしまう。顔はそこそこ可愛いのに姿勢は常に猫背で、年上というよりは老けて見え、後ろ手に手を組んで歩く姿には年齢には不似合いの風格じみたものが漂う。服装にもあまり構わず、そこいらにあるものを適当に着ている感じた。休日忘れ物を思い出して私服で登校した際、教師に間違えられたというエピソードはけっこう有名だ。しかも三年生に。

とにかく、細かなことを一切気にかけない。ちなみにそのとき、キヨコは最後まで教師のふりを押し通し、くだんの三年生を煙に巻いたということである。誤解を訂正せず、むしろ相手の誤解に乗っかって教師役を演じきったわけだ。高等テクニクのイタズラといえよう。そして、最も特徴的なことはその『ネゴシエーション』である。キヨコはいろんなものや人、組織や勢力を繋ぎ、あるいは自分の目的のために利用し、あるいは共同戦線を組ませ、あるいは和解させる。キヨ子がしくじって古泉と関係がまなくなったときには仲直りさせ、演劇部員たちからはなんなく情報を集め、機関に話をつけて森さんと新川さんを出動させ、ついには長門一族と九曜一派との和解をも仲立ちした。ウルトラ交渉人といえよう。キヨコは言う。

「わけはない。実にわけはないことだ。双方の要求と利害得失。すべてはそれにつきる。ここいらの折衝はすべて、『涼宮ハルヒ』という根本的問題が根っこにある。それさえ理解しておけば、交渉はすでに成立したも同然だ。むしろ楽な事例だったかな。」

・・・宇宙的同盟関係の樹立とかもか？

「ああ！ あれか・・・あんなもの、一番簡単なほうだ。基本的要求はすでに一致しているから、『涼宮ハルヒ』という根本へのアプローチを交通整理するだけの話だったさ。」

・・・そうは言うが、俺は、キヨコはいささか謙遜しているのだと感じていた。よくもまあ、あんな意味不明な宇宙人と長門との交渉を妥結させられたものだ。やはり、こいつはただ者ではない。俺

は質問する。しかしキヨコ、九曜との交渉には骨が折れたろう。

「あたしはほとんど直接交渉してないもん。長門有希・周防九曜会談の、単なる立会人さ……。通訳として喜緑さんが臨席してくれたが、……。そうさな、あたしがしたことは、ちよつとした提案を幾つか提出しただけさ。……。それにしてもな、キヨン！ キューちゃんは君にずいぶんご執心だぞ！ 会談の席上、天蓋領域側からの提起として、君の身柄引き渡しの提案があったほどだ。むろんこれは廃案になったがな。」

「……。与り知らぬ場所で人の運命をあれこれしないでもらいたいな。」

「ただな、キヨン、キューちゃんが君にちよつかい出す分には歯止めはないからな、覚えといたほうがいいかもしれないよ。」

というど？

「キューちゃんの行動に制限を設けるか否かの交渉の段階で、『涼宮ハルヒ関係のすべての行動に関する容認さるべき自由行動の範囲の策定』、つまり『限定的行動制限協定』については簡単に妥結できた。ただそれ以外においては、『法律に抵触する事象は回避されるべきである。』という程度までしか詰められなかった。時間もなかったしな。そしてこれとても努力目標に過ぎない。どうもキューちゃんの世界理解は人間でいえばかなり幼児的な段階にとどまっています、基本的に善悪の区別がつく以前に、まず善悪の概念がないようだ。従って法律の概念の理解なんぞまったく期待できない。ただ、悪い子じゃないようだ。それはなんとなくわかるんだ。……。女子高生の肉体に、ようやくハイハイを覚えた幼児程度の、極めて未成熟な、それでも純なところのある精神が入っているような感じ

だ。そして、知識と能力は物凄い。部分的にはユキリンたちを凌駕するくらいにな。途方もないアンバランスというわけだ。」

「肉体と精神と知識と能力。キューちゃんはぜんぜんこれらがみ合っていない。だから行動体系が恐ろしくちぐはぐで、動きが読めないんだ。表情に借り物のような不自然さがつきまとうのもだいたい同じ理由だ。・・・幼児はテレビの真似をするものだからな。」

九曜がテレビばかり見ている、と？

「いや、そうじゃない。それはたとえ話さ。いまのところキューちゃんは『表情を学習する』段階で、いろんな機会に目にした表情を忠実に再生し、反応を観察して自分自身のものとしてストックする、ということを繰り返している。自分自身の感情を表現するための学習であることは当然だが、トレースと再生が完全すぎて、自身の感情があまり入ってない。だから作り物じみた不自然さがつきまとうんだ。多重人格じみて見えることもあるかもしれない。学習のために表情をトレースする相手はそれこそ千差万別だからな。・・・ことによると本当にテレビばかり見ているのかもしれない。・・・ぐっちゃんとデートするときも、映画鑑賞がことのほかお気に入りだったらしいし。」

ぐっちゃん？

「谷口。」

ああ。・・・なるほど、辻褄は合うようだ。

「以上は当然、キヨ子ちゃん分析を大いに下敷きにした見解だ。・・・キヨ子ちゃんは実際、大した子だ。でも、あまり周囲

の受けはよろしくない。有能すぎるんだ。常に周囲から浮き上がって、ひとりぼっちになってしまう。実は少なからず支持者もいるが、いろんな意味で、当人とは離れた場所にいることが多い。うまくいかんものだ、まったく……。」

キヨコは寂しげに黙ってしまい、一時的な陰鬱さが訪れる。俺は空気の打開のため、あらたな話題を繰り出す。なあキヨコ、それにしてはよくお前、機関の人たちを簡単に動かせたもんだな？ 森さんに新川さん。錚々たる面々じゃないか。

「要点さえわきまえておけばいいんだ。本当に簡単なことなんだ。『涼宮ハルヒの平和な世界のためになぜこれが必要なのか』をちゃんと説明できればいい。それさえできれば依頼する手間すら要らないくらいだ。向こうから、『なにかお手伝いさせて下さい。』『私どもにも一口噛ませて下さい。』『是非ともお役に立たせていただきたいのですが。』などと打診してくるよ。……実際、なんでもそうだ。交渉ごとを手っ取り早く片付けようと思うなら、相手の意向や事情に配慮するのがいちばんいい。キューちゃんあたりは意向も事情もよくわからないからちよつと難しいが……。」

キヨ子ちゃん134

話に引き込まれているうちに、俺は周囲の人影のなさに気付いて青くなる。や、やばいぞキヨコ。

「どつたの？」

遅刻だ。

「そうかね。」

校門にたどり着くと、いつかのようににこやかに、立ち番の教師に、キヨコ、朝のご挨拶。

「おはようございまーす！」

教師、ちっ、と露骨に舌打ち。

「また、お前か……。もういい。行け。」

「へへ。毎度毎度すいやせん。」

「うだうだ言っな！ 行け！ 早く！」

「どおもー。」

全然急ぐ様子もなく、相変わらずのテレテレ歩き。そのまま昇降口に到着、靴を履き替えながら俺は問う。キヨコお前、何の魔法だ？ なぜ、見逃して貰えるんだ？ もう演劇部長は遅れてこないというのに。

「さあ？ 知らないよ。たぶん、まともな相手なんかしてられん

とても思われてるのさ。それならそれでいいよ。」

そこにさっきの教師登場。

「お前たち、まだこんなところでぐずぐずしてたのか！ 早く行け、早く！ 本鈴はとつくに鳴ってるぞ！」

「へいへい、どうもどうも。」

「お前もお前だ！ 姉の面倒をちゃんとみてやれ！」

なぜか矛先は俺に向いてきた。すみません、気をつけます。．．．思わず言ってから気がつく。逆だろっ、逆！

「あたしの面倒をちゃんとみなきゃだめじゃないか、キヨン、ええ？」

乗っかるな！ ほんまにこの姉ちゃんはまったく．．．。

教室におずおず入って行くと、教師には睨まれたが、生徒は誰も振り向かない。キヨコの遅刻は日常の風景で、振り向く労力を使うまでもないのだ。ちなみに担任岡部は朝礼を終えてとつくに立ち去っており、俺たちはすでに一限に食い込んでいた。キヨコは堂々と俺はおずおずと、それぞれの席につく。「キヨン子軍団」のあらたなメンツが登場しているかどうか、席からではよくわからない。とりあえず、ハルヒの視線が背中に痛い。キヨコはというと、なんてやつだ、遅刻したうえにこっくりこっくり、舟を漕いでいやがる。当てられても知らんぞ。と、言ってる先から、教師、キヨコ指名。キヨコやおら立ち上がり、解答。教師、なぜか無念そう。

「む．．．、正解だ。．．．下調べが行き届いていて大変結構。」

キヨコ着席、再び白河夜船。教師への字口。まったく、なんとい
う姉！ 教師めげず、キヨコの熟睡を見計らってご指名を繰り出す
が、そのたびに、キヨコ、正解。こんなこともはや日常の光景。
生徒たち、極めて薄い反応。「またやってる。」「懲りないねえ。」
などとの囁きが聞こえたのみ。懲りないのがキヨコのほうなのかそ
れとも教師か。確かめるすべはなし。たぶん双方のことであるかと、
俺、ひとり納得。

キヨ子ちゃん135

一限が終わり、すっかりやりこめられた観のある教師が憮然として立ち去ると、背後から雷が落ちてきた。

「あんた、どういうつもり？！ あんなにのんきに遅刻してくるなんて！」

俺じゃない、キヨコが……。

「呆れた！ あんた、キヨコちゃんのせいにするつもり？ 言っとくけど、あんたとキヨコちゃんじゃ、それこそ雲泥の格差があるのよ、わかってる？」

わかってる。さっきみたいなの離れ技は俺にはできん。

「むしろあんたはね、キヨコちゃんが間に合うように、ちゃんとみてあげなきゃだめよ！」

いつの間にか、なぜか俺は姉のお守り役に任ぜられているらしい。待て待て！ なんで俺がキヨコの面倒をみにゃならん！ あいつの方がよっぽど俺よりしっかりしてるのに！

「そういえばその通りね。」

ハルヒはあっさり認め、そしてちよつと考え、言った。

「キヨコちゃんね、たぶんすっかりし過ぎというか、大胆不敵すぎて危なっかしく見えるんだと思うわ。」

理不尽な。

「キヨコちゃんを見てるとハラハラさせられる時があるわ。」

そんなまさか、と言いかけて俺は思い当たる。朝のキヨコの言動についてだ。言うまでもなく、全体的に実に小生意気な、人をなめた態度だ。しかしほとんどお咎めなし。今日の立ち番の教師はそんなに寛大なほうではなく、むしろ遅刻を正規に記録するという、事実上の懲戒処分を乱発して生徒に嫌われるタイプだ。（あとあと内申点にかなり響くらしい。）それがあの通り。キヨコの近くにいと、なんだかそれが当然のように感じられるから不思議だ。「どうでもいいじゃないの、そんなこまかしいことなんか。」だいたいそんな空気を、キヨコのそばでは感じる。なんとなくほんわかとして気が大きくなり、この世に怖いものなしという心境になってくる。そう、確かに、遠目に見ている限り、これほど危なっかしい人間もいるまい。すぐそばにいれば、それこそ自分自身が無敵だと錯覚しそうなほど心強いのだが。・・・こんな問答の間に二限に入ってしまった。その日は移動が妙に多かったのだ。俺たちは音楽室、視聴覚室、講堂、運動場などをそれこそ縦横無尽に行き交わねばならず、漸くすべての授業が終わって教室に戻ってきたら直ちに終礼、皆ばらばらに帰ってゆく。残っているのは掃除当番だけが、そのなかには見慣れない顔はない。やれやれ、新メンバー探しは明日に持ち越しか……。

いつものごとく、部室に向かう。俺は予想していてもよかった筈である。今にして思えば。昼間確認できなかった「新キヨ子」が部室に登場していることを。ノックし、返事がないことを確認、ドアを開ける。長門・・・、そして、そのすぐそばに、思いがけない人物。銀茶色の髪をポニーテールに結び長く垂らした、深く澄みきった焦げ茶色の瞳の・・・間違えようもない、長門キヨ子の姿。俺は極めて複雑な心情にとられる。長門キヨ子はその出現自体が驚きだった。まったく予想外だったのだ。そして、単独エピソードは現れなかったということも、俺のなんともいえない気分を倍加させた。嬉しいような淋しいような、泣きたくなってくるような情けないような、そしてそれらのどれにも定まらない気分。と、背後に人の気配。

「やあ、キヨ子。」

伊達眼鏡に気取って手を添える、佐々木キヨ子の登場だ。口元には微笑み、しかしその目元は刺すような鋭さ。続いて正調キヨ子登場。薄い微笑みと鋭い一瞥。

「いよう。」

面白そうな表情でキヨコ登場。

「こんにちは。」

朝比奈さん登場。ここで俺は一時退室。朝比奈さんの着替え待ちの間にハルヒ登場、ノックもせずに室内に突入、

「みつくるちゃん！」

「ひひゃあああ！」

と、お馴染みのやりとり。着替え後、部室で朝比奈さんの麗しいメイド姿を堪能していると、

「ご機嫌いかがですか。」

と、古泉登場。お前が来るまでは頗るよかったがな。笑い仮面、返事せずそのまま着席。さて、これで全員揃ったようだが、広くもない部室に人間が9人。狭い。実に手狭だ。移動しようとする誰かに遠慮しなければならん。朝比奈さんもお茶の配膳に苦勞している。ハルヒが呟く。

「狭いわねえ。」

妙に耳に残るその声を、俺はなんとなく聞き流した。さて、新登場の「長門キヨ子」。見たところ、髪の長さや色の他は「母親」と実によく似ている。趣味までもな。長門キヨ子も「母親」、つまり長門に並んで本を広げている。読んでいる本は小さな文庫本、タイトルは「相対性理論」とある。・・・あんまりものごとをつっこんで考えるのはやめておこう。なにか怖い考えに至ってしまいそうだ。どうやら本の好みは異なるようだ。あとは身長も体つきも似たり寄ったり。ただ一点、どうしても目立ってしまう相違点を除いては。ええと・・・どう言ったらいいか・・・要するにその、胸だ。朝比奈さんとはいかないまでも、かなり目立つ膨らみ。「母親」譲りの小柄で華奢な体つきとは明らかにアンバランス。・・・誰に似たんだ？ 長門・・・ではないよな。俺がそういう遺伝子を隠しもっているのか？ ひょっとして。でもここまでのキヨ子たちは・

・・・そのときふと、朝比奈さんの言葉が蘇る。「・・・長門さんは、あたしみたいになりたいんです。・・・」俺は無感動そのものの長門と、一見したところ無感動そうな長門キヨン子を見やる。長門にはなんの変化も見られないが、長門キヨン子は頬を赤らめて、恥ずかしそうに縮こまってしまった。俺はかぶりを振って、目を逸らす。まさか、な。

キヨン子ちゃん137

人間で充満した部室での平常通りの部活。人間の増加というどう考えても正常でない事実をノーカンとするならば、な。しかもその増加分の人々たるや、・・・いや、これ以上は言うまい。予習復習に余念のない佐々木キヨン子、「母親」同様の読書の虫・長門キヨン子、正調キヨン子は古泉とゲームで戦い、ボロボロに打ち負かしている。ま、古泉だからな。仕方あるまい。キヨコはそのへんにぼつんと腰掛けて、かといって退屈そうでもなく、面白そうな様子である。キヨコ、楽しそうだな？

「うん、おもしろいね。これだけ色彩ゆたかな面々を見てみると飽きないよ。」

キヨコはニコニコと笑っている。その様子たるや、同級生、しかも肉親にもかかわらずうつかり「先輩」と呼びかけてしまいそうだ。どちらかというの小柄なほうなのに、そばにいと俺よりも大柄に感じる。こいつは「許されるキャラクター」、即ち「大きな人間の器」の持ち主なのだ。平然と遅刻し、人をなめきつた口をきき、ときに見下すようなことを言ったりもする。それらすべてになんの嫌みも感じないことが、要するにこいつの特性だ。キヨコに見下した口をきかれても、普段なら怒り狂うようなことでも普通に耳に入ってくる。かつて古泉が言った言葉が帰ってくる。「あなたに言われると毒気を抜かれますね。」そう、まさにその通りなのだ。辛辣極まりない舌鋒がまともに人に刺さるキヨン子の相方として、これほど相応しい人間もそうはいるまい。キヨン子の言葉はときに重く、鋭い。真実だけが持ちうる力だ。真実の直言、まさしく直撃がキヨン子の武器だ。最終兵器と言ってもいい。言葉の剣、言葉の鉄槌、言葉の爆弾。キヨン子を漫画的な絵面で表現しようとするなら、キ

ヨン子の口から出た吹き出しが人の心にまともに突き刺さっていたり、叩き潰していたり、あるいは真つ二つに叩つ斬っていたり、場合によっては木っ端微塵に吹っ飛ばしていたりするものになるだろう。キヨコはその凶器のような言葉の穿った傷を癒やすことができる。これは普通の人間にはおよそ困難な仕事だ。およそ年齢には不釣り合いなほどの人間の器の持ち主、我が姉（そして実は娘）キヨコが、ほとんど唯一、その任にあたることができるというわけだ。そんな考えに耽りながら、俺はふと、長門キヨン子を見やる。長門キヨン子は再び目を逸らして縮こまる。その仕草は俺に、あの悪夢の冬の日の、「変化後の長門」を思い起こさせた。再び俺はかぶりを振り、雑念を追い払う。・・・そんなはずはない。何かの間違いだ。と、視線を感じて振り向くと、佐々木キヨン子の刺すような目。・・・なんだ、どうした？ 佐々木キヨン子が視線を逸らすと今度は正調キヨン子のそれこそ突き刺さるような鋭い眼差し。・・・なんだなんだ、俺、なにかしたか？ 俺は急に居所のない思いにとられる。「いろいろと緩和する才能の持ち主」キヨコがそばにいなかったら、口実を設けて帰ってしまっていたかもしれない。

キヨ子ちゃん138

その日の帰路。キヨコと並んで、他の団員たちとは少し離れて歩
きながら、俺は質問する。

「（正調）キヨ子と佐々木キヨ子から妙に厳しい視線を向け
られているようなんだが、俺はなにかしたんだろうか？」

キヨコは奇妙な表情で俺を見やり、大袈裟に溜め息をついてみせ
た。

「それは本気で言ってるのか、キヨ子？」

もちろん。するとキヨコは芝居がかった仕草で頭を振り、

「まったくなんという弟だ！ いったいどうしたことだ！ なに
も掴めていない！ わかっておらん。何一つわかっておらん！」

キヨコはかなりの力で俺の肩口を鷲掴みにし、怒気を含んだ声を
俺の耳に吹き込む。

「聞け、愚か者！ 前提を思い出すんだ！ 君が何をして、佐々
木キヨ子ちゃんや長門キヨ子ちゃんがいると思うんだ？ ウワ
キだぞ、ウ・ワ・キ！（正調）キヨ子ちゃんとあたしだけが正
妻の子、後はみんな愛人の子だ！ しかもその愛人たちはほとんど
みんな君に首つたけとくる。『愛人の子』として、母と同じ女であ
るあの子たちがどう思うか、考えてもみる！」

・・・許せない、とかかな？

「そうだ、それもある！　しかしだ、母親の心の支えである君を憎みきることはできない。なんといつても君は父親だ。浮気者とはいつても、それなりに優しい父親であったことは間違いない。従つて幼少の頃は別として、お年頃を迎えた愛人の娘たちの君に対する感情は、どうしても両価的なものにならざるをえない。彼女らの心は、優しい父親である君への好意と、母親を誑かした憎い男である君への嫌悪感に引き裂かれる。このあたりの折り合いは、なかなか簡単につけられるものではない。彼女らの心は、この相對する感情の間で常に揺れ動く。しかし基本的には、みんな母親の肩を持ちたい。従つて君は娘たちに睨みつけられることになる。そうだ、かくして君の人生も、君を愛する女たちの燃えるような眼差しと、君にアンビバレントな感情を抱く娘たちの、刺すような視線とに引き裂かれる！」

ええと、じゃあ正妻の子である（正調）キヨ子はどうして・・・、すると先程から俺の肩口を怪鳥の爪のように掴んでいるキヨコの手にさらに力が入る。

「きさま、殺されたいか！　1から10まで説明しなきゃわからないのか！　キヨ子ちゃんの気持ちにもなってみる！　自分と同じ年頃の、浮気相手の娘たちにどう接していいか、悩むとは思わんのか！　君の娘として、女の子たちにかえつて引け目を感じるくらいらいわからんか！　そしてだ、キヨ子ちゃんもまた、ママのサイドに立っている。素敵な母親、即ち妻がいるにもかかわらず、ウワキに走つたキヨ子、君に対する嫌悪感はいかばかりか！　そして、やはり、優しい父親としての君への好意！　この深刻なジレンマにまったく思いが至らないか、きさまという奴は！」

さすがのキヨコも俺の救いようのない鈍感ぶりをよほど腹に据えかねたと見える。乱暴な言葉で俺を叱りつけるキヨコは、だが、寂しそうでもあった。キヨン子に同情しているのだろう。確かに、そうと指摘されてみれば、キヨン子の心労は想像にあまりある。問題は、俺が指摘されないと気づかない程度に鈍感であることだ。・・・ああ、しかし俺よ、未来の俺よ！ お前は何をしでかしているんだ！ 一時の快楽に溺れたばかりに、お前は、つまり俺は、世界に心労の種をばらまいた！ なんていう・・・ん？ しかし、いや待てよ、俺はそんなに器用だったか？ 女心を弄べる程度の技量を持ち合わせているか？ 答えは否、否だ。少なくとも今のところは。解せない・・・。どうしてそうなった？

「キヨンくんにすべてを帰するわけにもいかないのよ。」

いつの間にか（正調）キヨン子が俺たちに並んでいる。

「『ハーレムコース』への分岐可能性はそう高くない。その中でも、さらに可能性の分岐が2つ。『個別に迫られるコース』と、『多重複合ウワキコース』。」

表情に厳しさを残したまま、（正調）キヨン子は語る。「個別コース」はなんとなくわからなくはない。相手の女の人に迫られて・・・、ということだろう。

「『個別コース』の場合、そんなに人数は現れないわ。鈍感なキヨンくんに迫っても、空振りに終わる可能性は低くない。・・・女のほうから迫って断られたら、ちよっと立ち直るのに苦労があるわ

よ。そんな危険を冒す女の人はそう多くはない。だから、現れるのはだいたい1人、多くても2人。・・・そっちのコースだったら、あたしもあんまり悩まずにすむのにな。」

で、もう一つのコースというのは？

「突如、忽然と、異分子的な女の子がキヨソンの周囲に現れる。そうだったら・・・。」

キヨソ子は口ごもって黙ってしまふ。キヨコも何も言わない。しかし、ニヤリと妙な笑み。眉根を寄せているキヨソ子とは対照的だ。いつの間にか他の面々は消えており、俺たち3人きょうだいはゆっくりと家路を辿る。キヨコがふいに口を開く。

「なあキヨソ、さつきはすまなかった。ついヒートアップしてしまつたな、あたしらしくもなく。でもなキヨソ、あたしの立場と、それから性別も忘れないでくれよ。あたしだってママの肩を持ってキヨソくんを断罪したい気持ちには正直なくはないんだ。・・・」
其方正妻有処不拘婦女多数與交際之段重々不屈至極（そのほうせいさいあるところにもかかわらずふじょたすうところさいのだんじゅうじゅうぶとどきしごく）！・・・デタラメだぞ、念のため。」

俺はキヨコの気遣いを悟った。キヨコは敢えて、俺のサイドについてくれたわけだ。こんな鈍感なおとつあんを支えるために。キヨコ・・・それにキヨソ子！ すまんな、すまんな、・・・苦労かけるな、本当に、お前たちは本来、生まれるずっと前だというのに。俺は不思議な感動で胸がいっぱいになり、『異分子的な女の子』というのが誰のことなのか、なにが起こるのか、などという基本的な疑問がまったく頭の中から吹っ飛んでしまった。俺は良い姉と妹（

娘)を持てた事実には静かに感激していた。3人並んだ帰り道。長く伸びる影法師。夕暮れの赤い光に照らされて、黙って歩く道々。それは平和なひとときだった。キヨコが微笑んでいる。キヨ子表情にも柔らかさが戻りつつあるようだ。キヨ子、キヨコ、再びの「ひとときの別れ」がいつ来ようとも、いつかきつと、また会おう。基本頼りないおとつあんだが、お前たちの父親になれる栄誉のためなら、もうちょっと頼りがいも出せるだろう。きつと、俺たちのもとに、生まれてきておくれ。ハルヒと一緒に、俺はその日を目指して生きていくだろう。そして、その先には、素晴らしい家族との日々が待っている。

俺がこのように、まるで物語の結末のような感慨に浸っている間にも、あらたな騒動が待ち受けていた。しかも、家だ。騒動も遂に、わが家に上陸をとげるわけだ。それはまさに、台風のようなものだった。普通台風は逃げ場である家の外で吹き荒れるものだろうが、家の中で台風が吹き荒れるなら、はてさて、どこに逃げればいいのか。

キヨン子ちゃん140

俺たちが家に帰り着き、各々の部屋に引き上げてしばらくしたあたりで、佐々木キヨン子が帰ってきた。図書館に立ち寄っていたということだ。俺は部屋に引っ込んで、ぼんやりとベッドに横たわり、考え事をしていた。玄関のドアが開け閉りする音がぼんやりと耳に入る。誰かが階段を駆け上ってくる。もともといたほうの妹かな？ それにしては音が重いようだが……。と、次の瞬間、俺の部屋のドアが開け放たれ、何者かが飛び込んできて、ベッドにダイブ、俺にのしかかる。ぐえ！ なんだなんだ！

「うふふふ、キヨンくんゲットお。」

甘ったるい、聞き慣れない声の囁き。あらたな「娘」の登場か？ それにしても、この……。なんとというか……。察して貰いたい。俺はいま、女の子にのしかかられているのだ。しかもその子の胸はかなりのポリウム。ふわふわぶよぶよした感触がまともに俺に。しかもぐいぐい押しつけてくる。つまりその、なんだ、ふにゆふにゆくにゆくにゆ。お、おい！ あたってる、あたってる！

「うふふふ、キヨンくん、おっぱいだよ、おっぱい。おっきなおっぱい、スキでしょう？ さわつていいんだよ、なにしてもいいんだよ。」

舌つ足らずの湿った甘え声。全身のまるく柔らかな感触、名状しがたいいい匂い。俺は野生に目覚めてしまいそうになるが、ここは厳に踏みとどまらねばならぬ。人としての最終防御線だ。ま、待て！ お前は俺の妹で、つまりは娘だろう！ なにをしているんだ！

「キヨンくんをお、ゆうわくしてるの。」

そんなあっさりと！ それは人としてダメだ！ タブーだ！ 絶対許されんぞ！

「ふふふ、キヨンくん、かわいい。タブーとか、超萌える。」

謎の「新キヨン子」はペロリと舌なめずり。

「こえちゃう？ い・っ・せ・ん。ふふふ。」

怖い子だ！ 本当に怖い子だ！ お前、自分が何をしてるか分かってるのか！？

「しってるよう。オトコとオンナなんてえ、けっきょくは相手としてマルかペケかってことだけ。キヨンくんはあ、あたしにとってはあ、さんじゅうまる。だからイイの。」

俺にとってお前はマルペケ以前だ！

「キヨンくんたらあ。すえせん、たべなきや、そんだよう。」

毒入りの据え膳など願い下げだ！

「んもう、キヨンくん、いけずう。」

と、そのとき、

「な、なにをしてるんだ！」

と大声が響く。声の主は佐々木キヨ子だ。佐々木キヨ子は激怒していた。顔を真っ赤にし、髪を逆立て、全身をぶるぶる震わせながら、腕をぶんぶん振り回し、金切り声で絶叫する。

「不潔！ 外道！ 人外！ 鬼！ けだもの！ 淫乱！ 売女！ 許せん！ もう絶対許せん！ 殺してやる！ 今ここで殺す！」

言つなり飛びかかってきて、『謎キヨ子』につかみかかるうとする。しかし『謎キヨ子』は素早くかわす。佐々木キヨ子はますます激昂して捕まえようと必死になるが、どうしても捕らえることができない。佐々木キヨ子の手をひらりひらりとかわしながら、『謎キヨ子』は憎まれ口をたたく。

「ああん、こわいこわい。欲求不満って本当に嫌ね。」

「なつ、こつ、おのれ！ なんの欲求不満か！ 嫌らしい！ 汚らしい！ 穢らわしい！」

「へへーんだ。あんただってオナナのくせに。悶々として眠れない夜……。」

「黙れ！！」

飛びかかる佐々木キヨ子の手をするりと逃れ、『謎キヨ子』はさっさと逃げていった。

「やあい、欲求不満、欲求不満！ ヒステリー！」

と、憎まれ口を残して。佐々木キヨ子はがっくりと膝をつき、悔し泣きに泣き崩れる。拳骨で床をどんどん叩きながら。俺はどう声をかけていいかわからない。と、ひとしきり泣いた佐々木キヨ子は、すつくと立ち上がると、憤激の表情もすさまじく、俺に向かってきた。

キヨン子ちゃん 141

「いつまでくっついてるつもりだったんだ!!」

そして、平手打ちが飛んでくる。

「なぜ、すぐに跳ね退けない!!」

再び平手打ち。

「女の体が、女の胸が、そんなに珍しいか!!」

もう一発。

「そんなんだから、流されるばかりなんだ!!」

こんどは拳骨。佐々木キヨン子はわなわなと体を震わせながら立ち尽くしていたがやがて、

「嫌いだ! 大嫌いだ! 不潔! 不潔! 不潔!! ばか! キヨン! 大ばか!」

そして号泣、そのまま立ち去る。入れ替わりに正調キヨン子姉妹登場。

「ついに現れたぞ、極めつけに面倒くさいのが。」

「佐々木キヨン子ちゃん、可哀想に。あの子、モラリストだから。『歩くモラルハザード』、『古泉キヨン子』ちゃんは手に余るわ。」

・・・誰キヨン子だと？

「『古泉キヨン子』ちゃんよ。」

古泉というのは、・・・ええと、あの古泉か？

「そうよ。」

・・・どういうことだ？

「キヨン、さっきの話は途中で終わってたっけな。だいたい半分話したところだったな。のこりの半分の話だ。まず、『ハーレムコース』の『多重複合ウワキコース』はまず、『古泉君女性化』という現象をもって開幕となる。」

古泉がなんだと？

「ある日突然、古泉君が女の子になってしまつたのさ。そこから、すべての歯車が変な方向に回り始める。歯車が狂つのでなく、正常に噛み合ったまま方向がおかしくなるのがミソだ。」

するとさっきの怖い子は、

「そう、女古泉君と君の娘さ。」

そんなバカな。確かに、古泉が女になったらさぞかし美女になるだろうが、・・・ありえん。その先はありえん。

「決定権が君にだけにかかってるなら、確かにないだろうと思うよ。」

とうとう？

「女性化した古泉君は、ほとんどすぐに、『オンナとして生きること』に目覚めてしまう。この意味は想像して貰うとしようかね。あとはさっきの娘の態度から察してくれ。」

つまり、その、・・・飛びかかってくる美女。胸の感触。女の体のまるさと柔らかさ。体の奥底に凶暴なざわめきが起こる、甘く薫るいい匂い。理性の飛びそうな甘ったるい声・・・まさか・・・。キヨン子もキヨコも黙っている。分かっただろっ、と言わんばかりだ。わからんではないがしかし・・・。俺は絶句する。キヨコが最後に一言。

「女性化古泉君はすでに登場している筈だ。明日から、十分注意のこと。ちなみに、今回の場合、男の古泉君と二重存在となっている。」

それだけ付け加え、きょうだい達は去る。・・・注意っていつてもなあ・・・。

小さな嵐は過ぎ去り、俺は再び横になって、考え事に戻ろうとする。とはいっても、なかなか落ち着いた気分には戻れない。ふにふにぷにぷにした例の「感触」がいまだ生々しく記憶に残る。柔らかさ、温かさ、重み、そして甘い匂いと、体の奥底に起こった、凶暴なざわめきの残渣。「女の体がそんなに珍しいか！」佐々木キヨンの非難。・・・今のところ、まったくその通りだということは否定できない。しかしいくら妹だ娘だとはいっても、なにせ初対面である。なんと始末の悪い。しかも悪質に強引な娘だ。佐々木キヨ子が登場しなかったら、非常にまずい展開になってしまったかもしれない。それにしても・・・俺はまたしても、娘の教育には失敗した模様である。しかもあんな悪い意味での意外性に満ちた・・・やりきれん。まったくやりきれん。佐々木キヨンに始まり・・・しかしそういえば、佐々木キヨンのあの激発的な反応も意外であった。佐々木本人のイメージが強いせいか、あんなに激情にかられることがあるとは思えなかったのだ。しかし考えてみれば、佐々木キヨンはあくまでも佐々木の娘であって本人ではない。佐々木とは性格が違って当たり前だ。佐々木本人だったらあんなときどうしたろう。たぶん、どんなにシヨックであろうとも絶対に取り乱した様子を見せようとはせず、平静を装って話を続けたことだろう。佐々木キヨンの反応は、それとは実に対照的だ。なぜだろう？ キヨンの言葉。「佐々木キヨン子ちゃんはモラリストだから・・・」モラリスト・・・。そうか、それならもしかすると・・・、「罪の子」、より端的に言ってしまうならば「不倫の子」である自分自身のことをも、佐々木キヨンは断罪してしまっているのかもしれない。常に、自分の出生についての引け目を毒の棘のように心に感じ続け、世界への贖罪の念に苛まれているのかもしれない。だとすれば、そのあたりどころか、人類はじめあらゆる動物に通有の恐るべき夕

ブーまでもすっ飛び越えて、「兄を襲う」古泉キヨン子のことなどは、まさに断固許し難いものだろう。俺はこの推測の真偽を確かめたくなり、キヨコを部屋に訪ね、披瀝してみた。キヨン子のほうがより適当かもしれないが、キヨン子は現在いささか複雑な心境らしく、なんとなく話しにくく思われたのだ。キヨコは黙って聞いていた。俺が話し終わると、引き続き暫く黙ったのち、真面目な顔で一言。

「いい線だ。」

俺は得意になりそうになるが付け加えて再び一言。

「方向は正しいが、速度が足りないな。」

ニヤリと笑うキヨコ。

「遅いな。まったく遅い。これは欠点だ。まさに赤点レベルだ。しかも多数のヒントを手にして漸くというわけだ。」

キヨコはぜんぜん容赦してくれない。

「しかし、上出来には違いない。だいたいその通りだ。あともうちょっと、補足が必要だが、それについては教えて進めよう。」

そう言うとキヨコは口をつぐみ、言葉を選ぶように虚空に視線を滑らせ、そして再び口を切る。

「佐々木キヨ子ちゃんには、淡いファザコン、現在の状況に当たってはむしろブラコンの傾向が見受けられる。本当にごく淡いもので、自分自身の恋愛を手に入れたらほとんど忘れ去られてしまう程度のものだ。しかし今のところそうではない。佐々木キヨ子ちゃんには恋人はいない。好きな人もさしあたりいない。つまり、佐々木キヨ子ちゃんは自身のこの傾向を比較的はつきり自覚している。これから予想されることは？ キヨン！」

キヨコは教師のような態度で俺を指名する。俺は思いついたことを口にする。恐らく、その傾向に反発を感じるのではないかな。

「それで？」

それで、・・・ええと、。。。そこで俺の答えは途切れてしまふ。何も出てこない。くそ、鈍感空気頭め！

「ふむ、まあよかろう。そこまでは正解だ。佐々木キヨ子ちゃんは自身の性向に反発を感じ、そして抑圧する。佐々木キヨ子ちゃんの中のモラルが、その性向を許さないからだ。しかし、抑圧された性向は消滅するわけではない。寧ろ抑圧された撓みによって、かえってエネルギーを蓄えてしまう。そこに古泉キヨ子ちゃんの登場だ。佐々木キヨ子ちゃんがモラルの面からだけではなく、女の嫉妬まで込みにして爆発したんだということがこれでわかるだろう。好きな男の子にどこの馬の骨とも知れぬ女が露骨にモーションをかけていたらどうなるか？ 要するにそういうことさ。ただ誤解してほしくないのは、佐々木キヨ子ちゃんの性向は珍しいものではないということだ。女子はかなりの割合で、淡いファザコンの傾向がある。『好きなタイプ』と父親のタイプが似通うのはよくあることだし、まったく違うように見える場合でも、裏焼きしたみたいに正確に逆のタイプ、ということがけっこう多い。まあ、これは極めて大雑把な話で、実際にはなかなか一概には言えないんだが・・・」

つまり、古泉キヨ子とは違う、と。

「あの子は問題外レベルだよ。ファザコンもブラコンも軽く飛び越えてるんだから。いやむしろ、躊躇いなくそういった性向に自己を同化することができているというべきか。佐々木キヨ子ちゃんの懊悩が無意味になってしまう態度だ。佐々木キヨ子ちゃんはタブーを簡単に踏みにじっている有り様と、自分の悩みを簡単に飛び越えてしまうその振る舞いに、侮辱を受けたように感じて、ますます激怒するというわけだ。そして、明らかに、古泉キヨ子ちゃんはそのあたりをわかってやっている。佐々木キヨ子ちゃんを挑発しているんだ。」

ますます、いろんな意味で恐ろしい子だ。そんなことをしてどう

しよつといつんだ？ 佐々木キヨ子を激怒させなきゃならん意味
はなんだ？

「自己確認のための行動なんだ。」

挑発がか？

「そうだ。この挑発の主題は要するに、『アナタよりワタシの方が、オンナとしてより優れている』、というものだ。たいていの女子にとって、この挑発は許し難い。多く見られる傾向として、女子は自身の『女子力』について、なんらかのコンプレックスを抱いているものだ。古泉キヨン子ちゃんはこのコンプレックスのど真ん中に向かつて極めてオフエンシブな態度を示すもので、物凄く『感じ悪い』。自分の・・・あえてこう言ってしまうが・・・『女性としての性能』を誇示することによって、自分自身の存在を確認せずにおれないことが、古泉キヨン子ちゃんの悲劇と言えなくもない。ただ、この子はそれをかなり面白がってやっているふしがある。女の子たちが不愉快を感じ、立腹し、激怒しているその反応が、面白くて仕方ないらしい。かなり幼児的な残忍性を残した、嗜虐的な傾向だ。平たく言えば、Sっ気が強い、ということになるのかな。無闇に波風をたてたがる困った子、とも言えるかな。小悪魔ともいうかもしれない。」

あいつは幼児どころか妖女、小悪魔というよりはまんま悪魔だと思いが。

「肉体的成熟と精神的成熟にはたいして関係がない。そして、この自身の女性性をことさらに強調するのは、母親、即ち『女古泉君』譲りの態度だ。」

俄には信じがたいが。

「さつきもちよつとだけ触れたが、古泉君は女性化したほぼその瞬間に、自分の新しい肉体を完全に受け入れて、同化を完了してしまふ。要するに、文字通り『オンナとして目覚めて』しまふわけだ。彼、というか彼女は二度と元に戻ろうとはしない。斯くして、女としての人生を全うするための、彼女の邁進が始まる。意味は分かるだろうね？」

・・・正直、今ひとつ掴めん。

「あのな・・・、まあいいや。つまりだ、女としての人生の完遂に当たつては何が必要か？ あるいは必要とされているか？ 彼・・・彼女は何か必要だと考えると思うか？」

結婚、とかか？

「若干惜しい。現代において、『結婚』というものは、制度上の意味以上のものをすでに失いつつある。」

それじゃあ、・・・ええと、あの、その、なんだ、

「なにを考えてるのか、丸わかりだ！ でもそれが正解！ そうだ！ 妊娠と、出産、そしてそれに付随するすべてだ！ そして、相手は最初から決まっている。君だ、キヨン！」

そんなまさか、

「だが、そうなんだ。いずれ女古泉君がきみに嫌というほど教えてくれると思うがな。予告というか、警告しとくぞ。女古泉君に気

をつける。・・・まあ、どうせ無駄だが。」

無駄、とは？

「少なくとも一度は、女古泉君の強烈さを知る機会がある筈だからだ。」

話はそれで終わり、俺はキョコの部屋を出る。と、声が追いかけてくる。

「そうだ、キョン！ 念のため言っとくが、女子のファザコン傾向については正面きって指摘しちゃいかんぞ！ それは女子の秘密だ。本人も知らないほどのな！ 間違いなく関係が不味くなるから気をつけるように！」

わかった。了解だ。・・・しかしそれにしても、女性化古泉の真相については、どうも掴めないことばかりだ。

キヨン子ちゃん145

部屋に戻ってくると、薄暗い室内に人影がある。俺は身構える。出たか？・・・違った。そっちではなかった。俺の机の椅子に腰掛けるその人影は、佐々木キヨン子だった。寂しげに、物思つふうである。どうした？

「さつきは済まなかったね、キヨン。痛かっただろうね？ 大丈夫かい？」

ああ、大丈夫だ。あんなもの、気にするな。

「寛大だね、キヨン。」

佐々木キヨン子はそのまま黙ってしまった。俺も何も言わず、ベッドに腰掛けた。そのまま暫し。不意に佐々木キヨン子が呟く。

「キヨン、僕は、」

声の上擦り、震える。苦しげな表情。佐々木キヨン子は自分の服の胸元を掴んで握り締める。まるで何かが胸につかえているように俺にはわかる。つかえているのは言葉だ。どうしても言えない言葉。許されざる、罪を含んだ言葉。俺は立ち上がると、佐々木キヨン子に歩み寄り、黙ってその頭を撫でるのだった。もうわかった。わかっているんだ。言い出せないなら、言わぬが花だ。もう何も、言わなくていいんだ。そんなにも無理して、伝えることじゃないさ。俺は、そう伝えたかった。伝わったかどうかは、わからない。とにかく、佐々木キヨン子は突然、俺にすがりついて泣き出した。それは号泣だった。まるで赤ん坊を思わせるような、全身を震わせる号泣

だった。俺は静かに、このあまりにも真面目すぎる、妹、そして娘の頭を撫で続けていた。可哀想な子だ！ 可哀想な子だ！ 俺は佐々木キヨンの体を両腕で優しく包む。俺ははじめて、父親として娘を抱擁する感覚をこのとき掴んだと思う。それは静かな、落ち着いていた、暖かなひとときであった。佐々木キヨンはいつしか泣き止み、俺の腕の中で心持ち恥ずかしそうにしている。目があった。お互いに何か言おうとした瞬間、

「あああああ。おふたりさんたらあ。あつつうい。」

と、舌つ足らずの下品な呼びかけ。いつの間にやら、古泉キヨン子が戻ってきていたのだ。

「んもう、キヨンくん、ずつるうい。その子ばかりい。あたしも抱っこしてよおう。抱っこ抱っこお。」

・・・お前は抱っこだけじゃ済まないだろうが。

「やだあキヨンくんたらあ。『抱っこだけじゃすまない』なんてえ。わかつてるう。」

佐々木キヨン子が細かく震えている。見ると泣きそうにも見える表情で、佐々木キヨンは再び激怒していた。なんてことをするんだ。せつかく落ち着いたというのに！

キヨン子ちゃん146

「キヨンくん……。」

甘ったるい囁き。真っ赤になっっている佐々木キヨン子の憤激にはなんの頓着もせず、古泉キヨンは俺にすり寄ってきてぴたりと密着。

「ねえん、キヨンくん……。こえちゃお？ い・っ・せ・ん。うふふ。こわくなんかないんだよお、そんなの、さいしょだけ。」

だから、胸を押しつけるなというのに！

「キヨンくんにげんきだしてほしいもん。」

部分的に元気になりそうでヤバいんだ！

「くふふ、キヨンくん、げんきになっちゃったら、どうするの？ いつもひとり？」

やめないか！

「そんなのもつたいないよう。ふたりで、ねえ……。」「

その瞬間、名状しがたい唸り声をあげて、佐々木キヨン子が腕を振り回した。怒りのボルテージが完全に振り切れてしまったらしく、突き飛ばされた俺が尻餅をついていることも、もはや目に入っていないようだ。佐々木キヨン子は古泉キヨン子につかみかかろうとする。しかしまたもや、捕まえることができない。再びますます激

昂する佐々木キヨンは何か怒鳴っているが、怒りのあまり言葉が潰れてよく聞き取れない。古泉キヨンは余裕綽々、またしても憎まれ口。

「やあん、こわいこわい。怒った怒った、ヒス女が怒った！ やーいやーい、欲求不満やーい！」

小学生か。しかし佐々木キヨンはもはや見境をなくして拳骨を振り回し、あたりのものを手当たり次第に投げつけ、なんとか捕まえようと奮闘する。・・・おおい、ここは俺の部屋だ！ よせばいいのに、古泉キヨンの挑発は続く。

「あんただってイヤラシい、普通のオンナのくせに！ 知ってるもんね、あたし知ってるもんね！ あんたがキヨンの・・・、」

佐々木キヨンは絶叫した。その先を言わすまいとするかのよう。そして古泉キヨんに飛びかかる。再び古泉キヨン子ひらりとかわし、佐々木キヨン子、躓き、もんどりうってベッドに。古泉キヨン子、佐々木キヨン子に、

「うふふ、キヨンのベッドの寝心地はいかが？ キヨンの匂い・・・、」

ときここに到って、俺は漸く決心に到達した。古泉キヨン子に歩み寄り、平手でその頬を打つ。いいかげんにしないか！ 古泉キヨン子、呆然と立ちすくむ。俺は早くも後悔する。やりすぎたかな・・・。しかし次の瞬間、想像を絶する反応。

「はう・・・。いい・・・。キヨンの平手打ち、びんびん響

く。。。」

とろんととろけた表情。叩かれた頬のみならず顔全体が赤らみ、目には異様な輝き。俺は心底ぞつとした。いかん。こいつに俺がなにをしても無駄だ。・・・俺がどんな振る舞いをしようが、こいつにはすべて「プレイ」なのだ！

キヨン子ちゃん147

「キヨンくん・熱い・熱いよう。しびれる……。おねがい、このからだ、しずめて……。」

よ、寄るな！

「キヨンくんがいけないんだよ、あんなに激しく……。」

平手打ちでそうなるとは誰も思わん！

「キヨンくんにならあ、どうされてもいいの。ぜんぶつけとめてあげれるの。だからおねがい。」

古泉キヨン子はじりじりと近寄ってくる。と、佐々木キヨン子、割ってはいる。

「キヨンに触るな！」

「なあに、欲求不満子ちゃん？ 邪魔しちゃ駄目よ、コドモのくせに。」

佐々木キヨン子、真っ赤になっってしまう。

「う、うるさい！ あんたなんかになにがわかる！」

「オトコとオンナのことならアンタよりずっとわかるもん。」

「そんなことが何だと言っただ！」

「ふふんだ。知らないふりなんかしちゃって。カマトトぶるのもいいかげんにしたら？ アンタだっってわかるくせに。」

「うるさい！」

「とにかく、そこ、どいて。邪魔。」

「退くもんか!」

「コドモは引っ込んでなさいって言ってるの。アタシとキョンくんはオトナのお話があるのよ。」

「話なんか今ここですればいい!」

「やあだ、アナタ、イヤラシいわねえ。そんなシユミがあるの?」

「な、なにがイヤラシいか!」

「オトナのお話しをそばで見てるおつもり? やあだもう、イヤラシいにもほどがあるわ。」

「な、なにを意味のわからない……、」

「ハイ、そこまで。」

そこに不意にキョコ登場。

「うるさいよ。いいかげんにしてくれ。」

そして古泉キョン子に向き直り、

「本日終了。OK?」

古泉キョン子、不満そうながら頷く。キョコ、号令。

「さあ、後片付けだ!」

部屋がすっかり片付き、古泉キョン子が姿を消し、佐々木キョン子が自室に引っ込むと、俺はキョコに礼を言う。済まないなキョコ。助かったよ。

「古泉キヨ子ちゃんは君には止められんからな。すでに理解できたと思つが。」

嫌ってほど理解できたよ。よくぞ止めに入ってくれた。

「正直最初はほつところかとも思ったが、あまりにうるさかったんでな。・・・言つとくが、母親はもう一つ強烈だぞ。」

そんなもの想像したくないし、俺は関わり合いになりたくない。

「ところがそうはいかん。君がどう思つていようが、必ず向こうから関わりに来るからな。それは間違いない。心の準備だけはしておくよつに。」

そう言つとキヨコは立ち去つた。やれやれ、登校拒否になりそう
だ。

キヨン子ちゃん148

夕食に降りていくと、(正調)キヨン子がエプロンをつけて台所に立っている。おや、今日はお前が料理してたのか。

「そうよ。たまには料理くらいしないとなまっちゃうから。」

そいつは感心だ。

「ところで、なにか騒がしかったようだけど何かあったの？ 様子を見に行きたかったけれども手が離せなくて。」

どうもこころもあるもんか。俺はキヨン子に夕方のひとときを滅茶苦茶にした大騒動について話す。超生真面目系佐々木キヨン子と超変態系古泉キヨン子の仁義なき闘い的一幕。まったく困ったものだ。

「で、最後はキヨコちゃんが締めたわけね。」

よくわかったな。その通りだ。

「キヨコちゃんがいてくれたから、あたしも安心して料理に専念できたわ。」

お前も来てくれたらもう一つ心強かったがな。

「実を言つとね、あたしも古泉キヨン子ちゃん、苦手なのよ。」

それはまたどうして。

「キヨくん！」

キヨンは顔を赤くして、俺を睨みつける。あ、そうか、すまん、わかったわかった。そうだそうだ、なにせ『超変態系』が相手なのだ。さすがのキヨン子もペースを乱されてしまうのだろう。そこにキヨコが現れる。

「キヨン子ちゃんもわりとお堅いほうだからな。『そういう意味での』反則攻撃を融通無碍に繰り出してくる古泉キヨン子ちゃん相手では分が悪い。」

いろいろ『変な話』を繰り出してきたり、とかか？

「それもあるし、あの子には『百合』のケもある。」

・・・あいつに見境はないのか？

「なにを今更。あるわけないじゃないか。年齢性別続柄いつさい関係なく、『相手としてマルかペケか』。それが古泉キヨン子ちゃんだ。」

・・・恐ろしい子！ まさに、恐ろしい子だ！

「そうとも。」

しかし、お前は普通に会話できてるようだな？ なぜだ？ お前にはそういう挑発を仕掛けてこなかったのか？

「いいや、最初はかなりしつこくやられた。」

それで？

「反応するのも面倒だったから全部スルーしてやったさ。そしてそのうちに仕掛けてこなくなった。それに、なんか知らんが普通に話しかけてくるようになったな。」

「わかったわ。そういう挑発や誘惑は全部、その人の人となりを見極めるための、古泉キヨ子ちゃん流儀のテストなのね。そういうことを全部スルーできる人、つまり、人間のいちばん微妙な部分にかなりのストレスをかけられてもなお、自然に振る舞える人だけを選びだすためのテスト。」

そのテストのリスクはあまりに高すぎないか？

「それがテストだというなら、もちろん、超高リスクのテストだ。人間関係がめっちゃめっちゃになるのみならず、誤解を受け、蔑まれ、貶められ、侮辱され、孤立するテストだ。」

「こんなテストを試みるのは、猛烈な寂しさを抱えた人間だけ。・
・あたし、古泉キヨ子ちゃんが今初めて、少しわかったわ。性的な高揚感で自分を支えないとどうしようもないくらい、あの子は寂しいのよ。」

キヨ子ちゃん149

素人考えで言っても・・・それは容易ならざることだぞ。

「もちろんだ。今の推定に従うならば、これは強力極まりない寂寞の産物だ。本人ですら気づきたくないほどのな。『超変態系』なのはむしろマシなのかもしれない。酒の味を覚えたらたちまちアール中になってしまっただろう。薬物にハマったら際限を知らないジャンキーになってしまっただろう。パチンコにハマったらどこまでも金を突っ込み続ける『上客』と化してしまっただろう。」

「キヨコちゃん、今のところ、あなただけが古泉キヨ子ちゃん
の『信頼ゾーン』に入っているみたい。気をつけてあげてね。」

「おう。」

そこに佐々木キヨ子が現れる。だいぶ落ち着いたようだ。妹も母親もやってくる。父親は仕事で遅くなっているようだ。テーブルの上には（正調）キヨ子の心尽くしが並んでいる。試みにその献立を書き出してみるとしようか。

筍ご飯（油揚げ入り）

味噌汁（豆腐 大根千六本 扇人参 絹さや）

揚げ物（天ぷら：茄子 椎茸 薩摩芋 獅子唐・ピーマンの崩し豆腐詰めフライ）

刺身蒟蒻とたぐり生湯葉盛り合わせ（辛子酢味噌別添え）

さや隠元胡麻和え

苺キウイ寒天流し

・・・なんともはや、渋い線でまとめたものだ。味はよかったが。この献立にすごい勢いで食いついたのが佐々木キヨン子だ。レシピの詳細などを（正調）キヨン子に根掘り葉掘り質問し始め、やがてキヨコも混ざり、最後には母親までも加わり、食卓には意味不明な用語がいろいろと飛びかうことになり、俺はまたしても完全に置いてきぼりを食った。妹はそんななかマイペースに食事を頬張っていた。たいていの料理は美味しくいただけただけだろうだが、辛子酢味噌だけに慣れない様子だった。

（キヨン子を指差して）「テンゾ」（何のことだ？）

（台所を指差して）「コウシヨコウヘイテイシヨテイヘイ」「ガンゼイナルジヨウジユウモツヲゴシヤクセヨ」（きちんと片付けられた台所用品が並んでいるだけだった。）

食卓を飛び交った、呪文じみた（たぶん）専門用語のごく一部である。まったく意味がわからない。日本語なのかどうか不明だ。豊富な知識を共有するのは結構だが、知識のない者が取り残されることも考慮したい。とにかく、繰り返しになるが、料理の味は結構なものだった。そしてどうも、それまではお互いに微妙な感情を抱いて遠慮しあっていた（正調）キヨン子と佐々木キヨン子は、この野菜ばかりの食卓を機縁に意気投合したらしい。わからんものだから、人間関係の円滑化に資することになったのなら、キヨン子調製になる野菜料理は、本人と同じく大したものだと見做すことができよう。

キヨン子ちゃん150

「まあ、作戦成功といったところね。」

キヨン子は得意そうである。というと？

「佐々木キヨン子ちゃんが精進料理、つまり禅寺由来の野菜料理に興味があるのはちょっと前から知ってたの。それで今日の食卓というわけ。」

なんでそんな年齢不相応な。

「佐々木キヨン子ちゃんはあまりにも悩み苦しみが多くて宗教に救いを求めた。とはいっても新宗教に入信とかいうわけではなく、精進料理の本を足掛かりに禅に傾倒するという風変わりな流れだ。」

確かに変わってるな。普通そつちには行かん。

「そしてさらに禅を足掛かりに仏教の知識を拡大し、ある仏教系の新宗教に勧誘されたときに、かれらの教理上の誤謬を指摘して言い負かしたことが、ちょっととした彼女の自慢だ。」

あいつはあいつで難儀な女子高生なんだな。そいつらだって、まさかあんな年端もいかぬ小娘にかまされるとは思ってたただるうに。

「だろうね。関係あるかどうか知らんが、その教団の事務所だったところは今じゃ空きテナントになってるらしい。」

「さもあろう。さて、食事のあと、俺、（正調）キヨ子、キヨコの3人は俺の部屋に集まったのおなじみの追加討議というわけだ。佐々木キヨ子は予習とかで自室に退いている。いつもながら熱心なことだ。さて、討議といっても特に切迫した議題があるわけではない。なあ、そういえばさつきはずいぶん熱心に話してたようだが、なんの話をしてたんだ？ さっぱり意味が掴めなかったんだが。例えば、「テンゾ」ってなんだ？」

「禅寺の台所係。」

「コウシヨコウヘイテイシヨテイヘイ」ってのは？

「『高所高平低所低平』、だな。片付けるべきところに片付けるべきものをきちんと片付けるように、てな意味だ」

ええと・・・「ガンゼイナルナントカカントカ」ってのは？

「『眼ぜいなる常住物をご借せよ。』台所用品は大事に使うこと。」

素直に言えば何てことないな。

「まあな。伝統的、というやつだな。」

なんてことない会話のうちに、俺はふと疑問を感じる。なあ、古泉キヨ子はどこに住んでるんだ？

「あの子は古泉君の家に同居、ということになってたはずだ。」

ふうん。そいつは古泉も苦勞なことだ。

「あと、女古泉君も同居だったと思うよ。」

苦勞の二乗だな。

「そうだな。いろんな意味でな。」

そこで軽く笑いが起こった。そういえばキョン子、お前、料理の腕は確かなようだな。

「ありがとう。作った甲斐があったわ。」

そんなところで散会となり、2人は自室にそれぞれ退く。さあ、今日のところは、あとはよく眠るだけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6456p/>

キョン子ちゃん

2011年10月28日02時17分発行